

ほんせきちょうこふんぐん  
**本関町古墳群**

国道 462 号道路改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2008

群馬県伊勢崎土木事務所  
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団





▲C区2号墳主体部と「赤玉」（古墳時代後期，46頁参照）

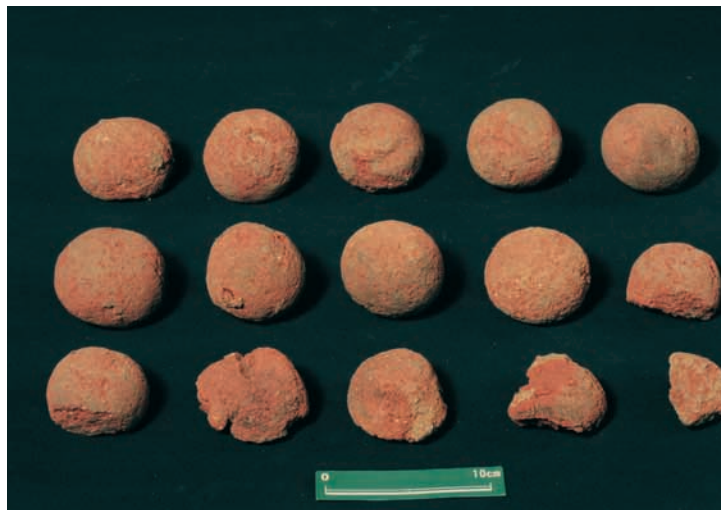
長軸 2.5m、短軸 1.3m、深さ 50cm の土坑内に、長軸 1.7m、短軸 30cm の石槨を設置する。石槨と土坑壁との間にある幅 20cm ほどの隙間には、南辺を中心に赤色球状未焼成土製品（「赤玉」）が点々と置かれ、東端部には集中する。

「赤玉」は直径 7cm ほどのテニスボール大で、特に何かを象ったような造作は見当たらず、わずかに底面が平たい。蛍光X線分析の結果 30% ほどの酸化鉄と砂粒を含み、溶解実験によって未焼成の泥団子であることが判明した。

しかし、これが例えば石室の内面を塗彩するための赤色顔料なのか、あるいは何かを象って赤くするために酸化鉄の成分を混ぜたのか、さらには素材の土壌そのものが赤かったのか、いまひとつ判然としない。これは、「赤玉」を副葬する意味とともに、この遺跡における課題のひとつとなった（76頁「本関町古墳群出土の「赤玉」について」）。



▼C区2号墳全景（北から）

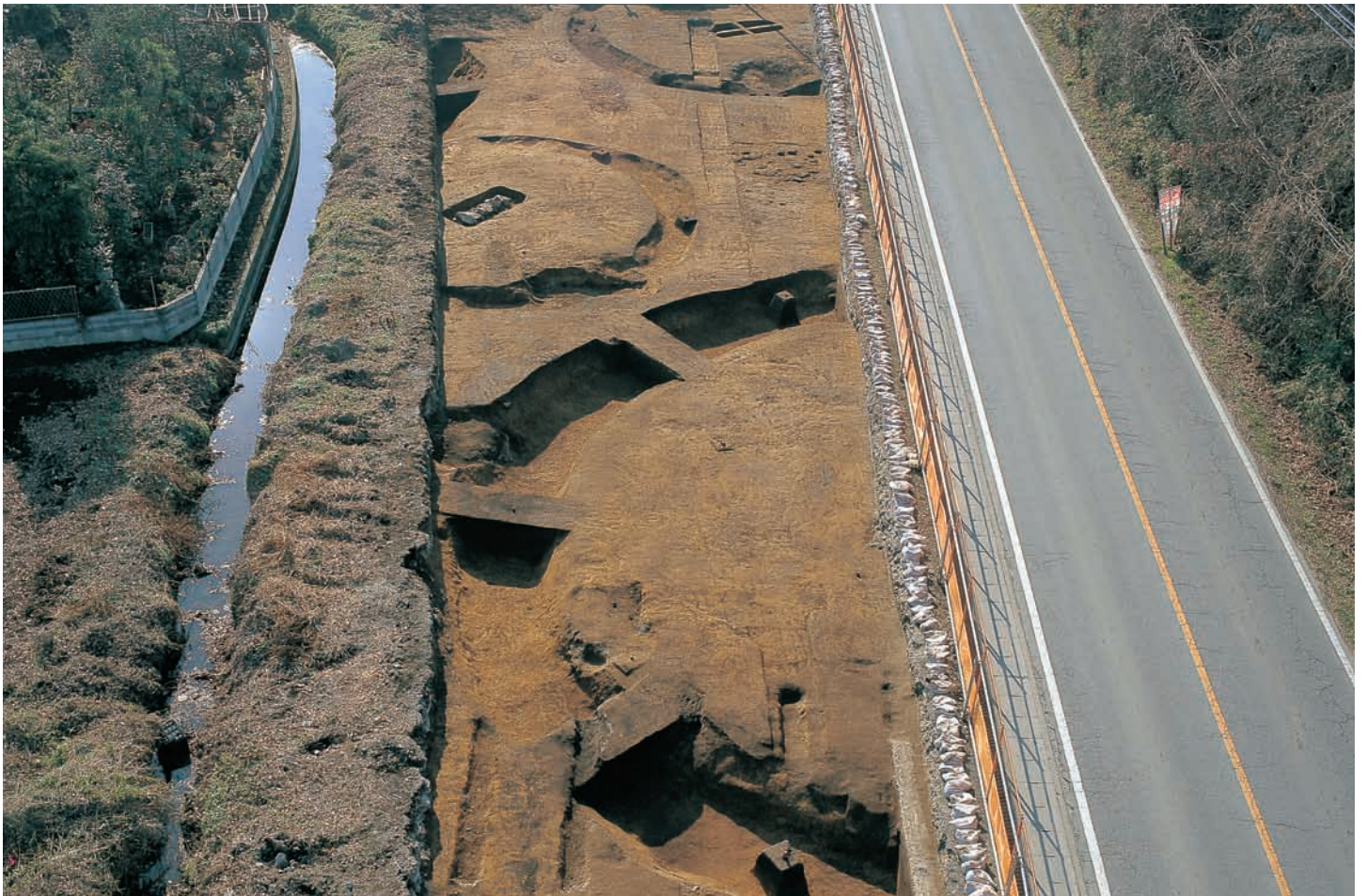






▲B区の古墳群(古墳時代後期, 北から, 手前から2号墳、3号墳、4号墳)

▼C区の古墳群(古墳時代後期, 北から, 手前から1号墳、2号墳、4号墳、3号墳)







▲一ノ関古墳と調査区域遠景(北から, 伊勢崎市教育委員会提供)



▼D区の方形周溝墓群(古墳時代前期, 北から)





▲C区1号住居出土遺物(縄文時代後期, 20頁参照)



▲D区4号方形周溝墓出土遺物(古墳時代前期, 65頁参照)



▲D区3号方形周溝墓出土遺物(古墳時代前期, 63頁参照)



C区1号墳出土遺物(古墳時代後期, 43頁参照)▶



## 序

本関町古墳群は、赤城山の南麓に形成された大間々扇状地の西端部に立地しています。この扇状地には、湧水点の周辺を中心に旧石器時代から中世に至る数多くの遺跡が立地しており、上武道路や北関東自動車道に伴う発掘調査が古くから行われていた地域です。

伊勢崎市と大間々町を結ぶ国道 462 号線と、これに接続する主要地方道伊勢崎大間々線は、扇状地の西端部に沿って通過するこの地域の主要な幹線道路であるとともに、上武道路及び北関東自動車道とのアクセス道として、その交通量の増加から拡幅工事が計画されました。

本関町古墳群は、国道 462 号道路改築事業に先立って、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が平成 15・16 年度の 2 年間にわたって発掘調査を実施した遺跡です。調査によって旧石器時代、縄文時代、古墳時代の先人の生活の痕跡が発見され、とりわけ遺跡の名称でもある古墳群については、事業予定地が帯状に長いことからその分布状況や特徴が明らかとなりました。

発掘調査から報告書の刊行に至るまで、群馬県中部県民部 伊勢崎土木事務所、群馬県教育委員会、伊勢崎市教育委員会、地元関係者の方々から格別のご指導とご高配を賜りました。今回、報告書を上梓するに際し、これら関係者の皆様に衷心より感謝の意を表し、併せて本報告書が群馬県の歴史を解明する上で、広く活用されることを願い序といたします。

平成20年12月

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長 高橋 勇 夫





# 例 言

- 1 本書は国道462号道路改築事業に伴う、本関町古墳群の発掘調査報告書である。本関町古墳群は、本報告書の他に上植木光仙房遺跡、光仙房遺跡、三和工業団地Ⅳ遺跡、及び一ノ関古墳(『上毛古墳綜覧』殖蓮村71号古墳)が位置する関山遺跡を含む範囲であるが、本報告書はこのうちの南半部に相当する。
- 2 遺跡所在地 群馬県伊勢崎市本関町
- 3 事業主体 群馬県県土整備部(中部県民局 伊勢崎土木事務所)
- 4 調査主体 財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 5 調査期間 平成15年11月1日～平成16年1月31日(平成15年度)  
平成16年9月1日～平成16年11月30日(平成16年度)
- 6 整理期間 平成20年4月1日～平成20年9月30日
- 7 発掘調査・整理組織  
管理指導 小野宇三郎 高橋勇夫  
事務担当 住谷永市 木村祐紀 神保侑史 右島和夫 津金沢吉茂 萩原利通 矢崎俊夫 相京建史  
埴原恒夫 丸岡道雄 竹内 宏 高橋房雄 石井 清 佐嶋芳明 大木紳一郎 齊藤恵利子  
須田朋子 吉田有光 森下弘美 阿久津玄洋 栗原幸代 佐藤聖行 田中賢一 矢島一美  
齋藤陽子 今井もと子 内山桂子 若田 誠 佐藤美佐子 本間久美子 北原かおり  
狩野真子 松下次男 吉田 茂 武藤秀典  
東毛調査事務所 平野進一 真下高幸 井川達雄 笠原秀樹 柳岡良宏 今泉大作 北野勝美 清水秀紀  
中沢恵子 金子三枝子  
調査担当 平成15年度 大澤 務(専門員) 川端俊介(専門員)  
平成16年度 坂口 一(専門員) 小高哲茂(主任調査研究員)  
整理担当 坂口 一(主任専門員(総括))  
整理補助 渡部あい子 戸神晴美 高田栄子 大勝桂子  
遺物写真 佐藤元彦  
デジタル図版作成 牧野裕美 酒井史恵 安藤美奈子 矢端真観 荒木絵美 市田武子 廣津真希子  
高梨由美子 横塚由香 下川陽子  
保存処理 関 邦一 小材浩一 津久井桂一 多田ひさ子  
器械実測 田所順子 岸 弘子 小池益美 田中精子 山口洋子
- 8 本書作成の担当者は次のとおりである。  
執 筆 I章4節(2) 右島和夫  
縄文土器観察 橋本 淳(主任調査研究員)  
上記以外 坂口 一(主任専門員(総括))  
調査の成果及び自然科学分析は本文中に執筆者名を記載。
- 9 出土遺物と記録資料の一切は、群馬県埋蔵文化財調査センターで保管している。
- 10 本書の作成にあたっては、次の方々に有益な指導と助言を賜った。記して感謝の意を表す次第である。  
赤塚次郎・浅間 陽・石井克己・板橋春夫・出浦 崇・入江文敏・小田富士雄・亀田修一・唐澤定市  
川道 亨・小高哲茂・西藤清秀・坂爪久純・里見立夫・須崎幸夫・須永光一・須長泰一・勢藤 力  
武末純一・田中清美・田辺芳昭・千賀 久・中村岳彦・南雲芳昭・橋本英俊・土生田純之・早川隆弘  
日沖剛史・深澤敦仁・北郷泰道・前田和昭・前原 豊・三浦京子・右島和夫・宮田 毅・吉村和昭  
若狭 徹・和久美緒・伊勢崎市教育委員会・中之条町歴史民俗資料館・宮崎県立西都原考古博物館(敬称略)

# 凡 例

- 1 調査区域には、国家座標の日本平面直角座標第Ⅸ系(日本測地系)に基づいて5m間隔のグリッドを設定し、X軸、Y軸のそれぞれを下3桁で示した。
- 2 遺物観察表の記載方法は次のとおりである。
  - (1) 胎土中の砂粒の大きさによる分類は、土壤物理研究会による基準に従い、細砂粒(<0.5mm)、粗砂粒(0.5~2.0mm)、細礫(2.0~5.0mm)、中礫(5.0mm>)とした。
  - (2) 色調は農林省水産技術会議事務局監修、(財)日本色彩研究所色標監修の新版標準土色帖に従った。
  - (3) 遺物の出土レベルは、遺構の底面から遺物までの垂直距離を示した。
- 3 本文中で使用したテフラ記号及びテフラを含む土壌の名称は以下の通りである。  
浅間B軽石(As-B)……………1108(天仁元)年 榛名ニッ岳渋川テフラ(Hr-FA)……6世紀初頭  
浅間C軽石(As-C)……………3世紀後半 As-C混土(As-Cを含む土壌)……3世紀後半以降

# 目 次

口絵	V	その他の遺構と遺物……………66
序	1	溝……………66
例言	2	遺構外出土遺物……………69
凡例	VI	遺物観察表……………71
I 発掘調査と遺跡の概要……………1	VII	調査の成果……………75
1 調査に至る経緯と経過……………2		本関町古墳群出土の「赤玉」について……………76
2 調査の方法……………2		群集墳における竪穴式から
3 遺跡の位置と地形……………4		横穴式への移行過程……………81
4 周辺の遺跡……………5		本関町古墳群と周辺集落の動向……………87
5 遺跡の基本層序……………10	付 篇	……………93
II 旧石器時代の遺物……………11		自然科学分析……………93
1 概要……………12		本関町古墳群の土層とテフラ……………93
2 出土遺物……………13		本関町古墳群における蛍光X線分析……………95
III 縄文時代の遺構と遺物……………17		赤玉の成分分析……………96
1 概要……………18		赤玉・埴輪・土師器胎土の材料分析……………98
2 竪穴住居……………19		赤玉の溶解及び焼成実験……………103
3 土坑……………23		遺構等索引表……………104
4 集石遺構……………26	写真図版	
IV 古墳時代の遺構と遺物……………27	報告書抄録	
1 概要……………28	付 図	
2 古墳……………29	付図1：本関町古墳群全体図(1:500)	
3 方形周溝墓……………60	付図2：本関町古墳群古墳分布図(1:1,200)	
	付図3：本関町古墳群全域古墳分布図(1:2,500)	



## I 発掘調査と遺跡の概要



遺跡遠景(南から、中央舗装道路の両側が調査区域、上方左端に粕川、遠く栃木県の足尾山地を望む)

遺跡は、大間々扇状地の西端部に位置する。この扇状地は、写真上方左端の粕川から、現在は大間々町から桐生市方面を流れる渡良瀬川にかけて形成された、広大な大地である(4頁図3参照)。

写真上方の足尾山地が、この扇状地を形成した渡良瀬川の源流となる。

## I 発掘調査と遺跡の概要

### 1 調査に至る経緯と経過

本関町古墳群の発掘調査に先立って、主要地方道伊勢崎大間々線の道路改良事業に伴う、上植木光仙房遺跡の発掘調査が、当事業団によって平成11年度から継続的に実施されていた。これに引き続いて、この道路に接続する国道462号線の道路改築事業地内における発掘調査の依頼が、平成15年7月に群馬県伊勢崎土木事務所から県教育委員会文化課(現文化財保護課)にあり、同課の調整を経て、当事業団が平成15年11月から事業地内に立地する本関町古墳群の発掘調査を実施するに至った。

同様に平成16年度は、前年度に未買収であった同事業地内の発掘調査の依頼が、平成16年7月に伊勢崎土木事務所から県教育委員会文化課にあり、同課の調整を経て、当事業団が平成16年9月から発掘調査を実施した。

なお、主要地方道伊勢崎大間々線の道路改良事業に伴う上植木光仙房遺跡の発掘調査は、平成16年度まで継続した。

**平成15年度の調査** 平成15年11月1日～平成16年1月31日にかけて発掘調査を実施した。調査対象地は、A区南半・B区・C区の合計2,800㎡である。

A区からC区にかけて、古墳時代後期に属する円墳10基、縄文時代の竪穴住居1軒・土坑7基、年代の不明な溝3条の他、基盤を形成するローム層中から旧石器16点を検出した。

**平成16年度の調査** 平成16年9月1日～平成16年11月30日にかけて発掘調査を実施した。調査対象地は、A区北半・D区・E区の合計2,050㎡である。

A・D・E区において、前年度と同様に古墳時代後期の円墳10基などを確認した他、古墳時代前期の方形周溝墓6基、旧石器6点を確認した。

なお、同事業地内に位置する一ノ関古墳(『上毛古墳総覧』殖蓮村第71号古墳)については、伊勢崎市教育委員会による発掘調査である。

### 2 調査の方法

調査区域は、その要因の事業が国道462号線の拡幅事業であることから、現国道462号線の両側約3～10mで、北端部の上武道路に接する部分から南西側に約300mの範囲である(図1)。

調査対象範囲が帯状に長いことと、一部に調査対象範囲が未確定な部分があったことから、調査時にはアルファベットと数字の組み合わせによるグリッド名を付すことなく、日本測地系の国家座標に基づいた5m間隔のグリッドを設定して、座標値の下3桁をその名称に用いた。

この古墳群は、かつて渡良瀬川が形成した大間々扇状地I面のローム台地上に立地し、調査区域のほとんどの部分が、ローム層の上面付近までの攪乱を受けていた。したがって、基本土層において古墳時代における浅間山及び榛名山に起源をもつテフラの一次堆積層は存在せず、一部の古墳周堀内などにおいて3世紀後半の浅間C軽石(As-C)、6世紀初頭の榛名二ツ岳渋川テフラ(Hr-FA)、天仁元年(1108)の浅間B軽石(As-B)を検出したが、いずれも二次堆積層である。

調査にあたっては、1面目がローム層の上面付近までの土壌の除去に大型掘削機(バックホー)を用い、その他は基本的に手作業による遺構・遺物の検出を行った。また、2面目はローム層の上面付近から、トレンチによる手作業の旧石器時代の試掘調査を行い(図8)、その下面は中央を通過する国道と調査の安全性を考慮しつつ、約3万年前に位置付けられる暗色帯までの発掘調査を実施した。

調査面の1面では古墳時代の方形周溝墓と古墳、縄文時代の竪穴住居・土坑などを確認した。大半の古墳と方形周溝墓は墳丘部が完全に削平されて、周堀及び周溝のみの検出であったが、一部の古墳には竪穴系の埋葬施設が遺存していた。また、2面においては、ローム層中から22点の旧石器を検出した。



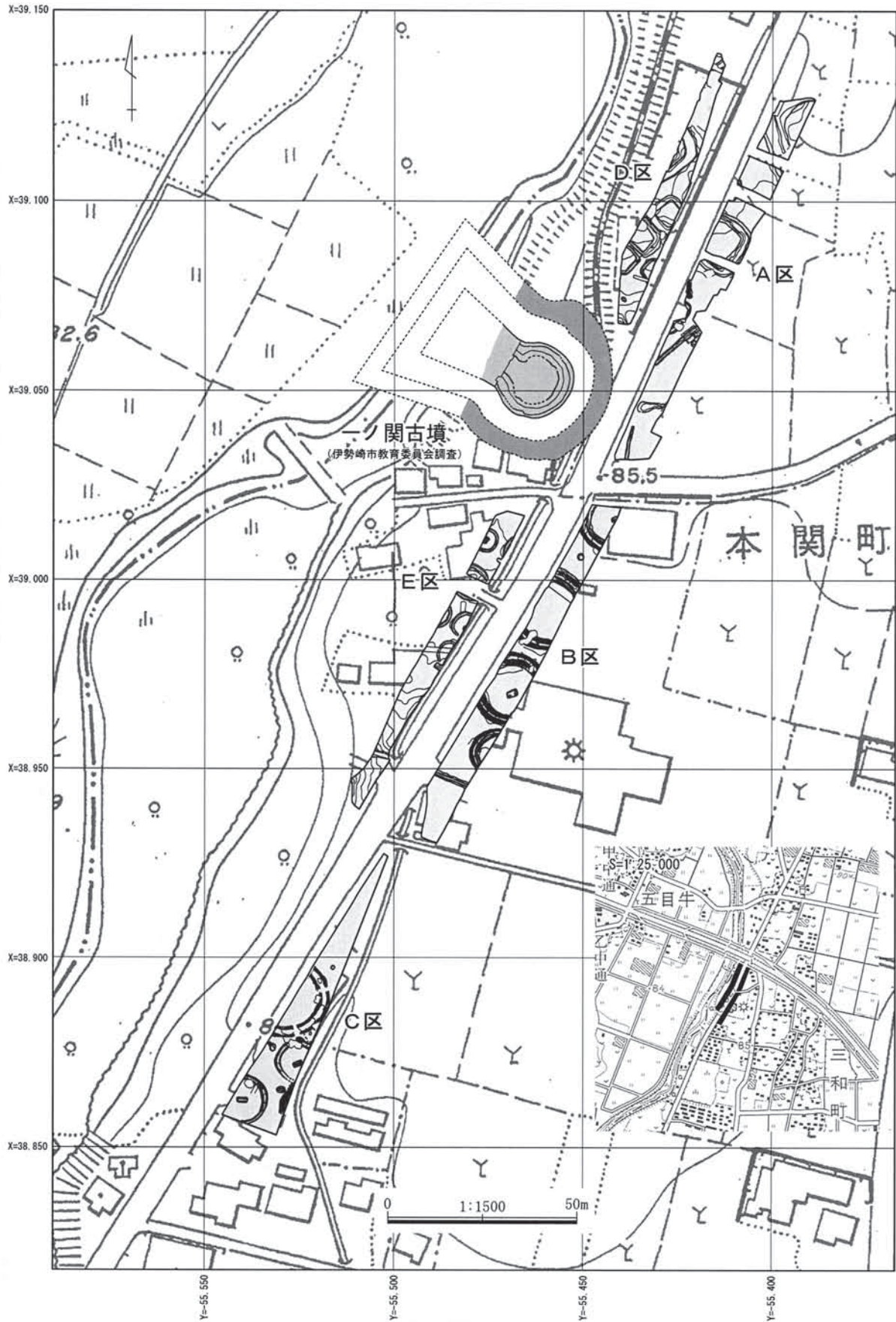


図1 発掘調査区域図

### 3 遺跡の位置と地形

本関町古墳群は伊勢崎市本関町に所在し、伊勢崎市街地の北東約4kmで、JR伊勢崎駅の北東約3kmに位置している。遺跡の北側は国道17号バイパスである上武道路に接し、さらにその北側50mを北関東自動車道が、それぞれほぼ東西方向に通過している。

この古墳群は、赤城山の南麓に接する大間々扇状地のI面に立地し、標高は約85mである。大間々扇状地は、赤城山の裾野を開析する形で、足尾山地に源流をもつ渡良瀬川が形成した扇状地で、大間々町を扇頂部として南に開け、南北約18km、扇端部の東西約13kmで、関東地方で3番目の規模をもつ。

この扇状地は、大きく形成時期の異なるI面(桐原面)とII面(藪塚面)の、二つの扇状地面で構成されている。I面は現在の粕川と早川に挟まれた範囲で、II面は早川と渡良瀬川に挟まれた範囲である。

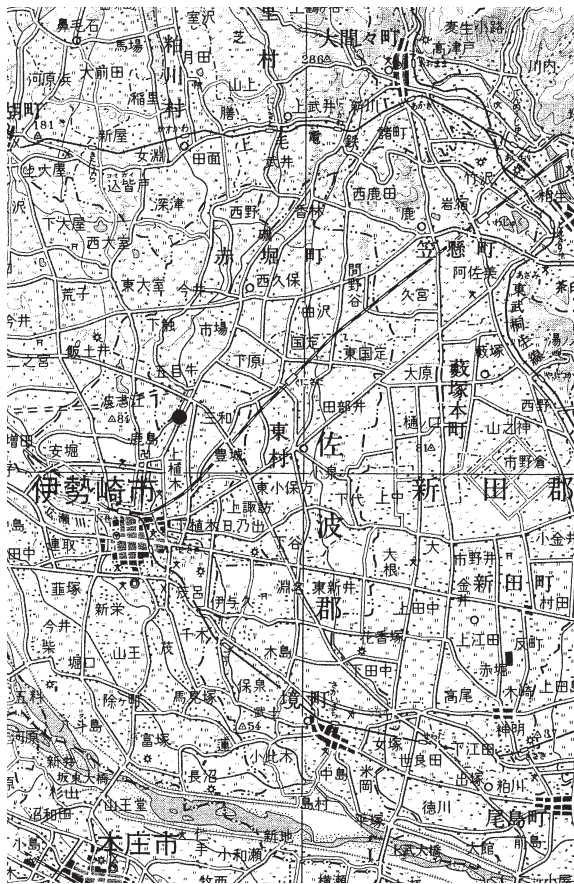


図2 遺跡周辺の地形図(S=1:20万)

扇状地礫層の上位にはローム層が厚く堆積しているが、扇状地礫層の直上に堆積したテフラの年代から、I面が約5万年前に、II面は2万数千年前にそれぞれ段丘化したと考えられており、主として沖積低地の開析の状況に大きな違いが認められている。この古墳群は、扇状地の西端部にあたるI面に立地しており、この扇状地I面には標高約90mの等高線に沿うようにかつては湧水点が存在し、これを谷頭とする谷によってローム台地にいく筋かの低地が存在する。現在、この低地部は水田として、ローム台地は畑としてそれぞれ利用されている。

本関町古墳群は、扇状地I面の西端部に位置するローム台地上で、遺跡のすぐ西側にはこの扇状地の西端を画す粕川が南流している。この扇状地の西端部は、その東側より僅かに高い自然堤防状の高まりが形成されているが、低地部は存在しないことから主として墳墓が立地し、古墳群の分布範囲にこれと同時期の竪穴住居は分布しない。

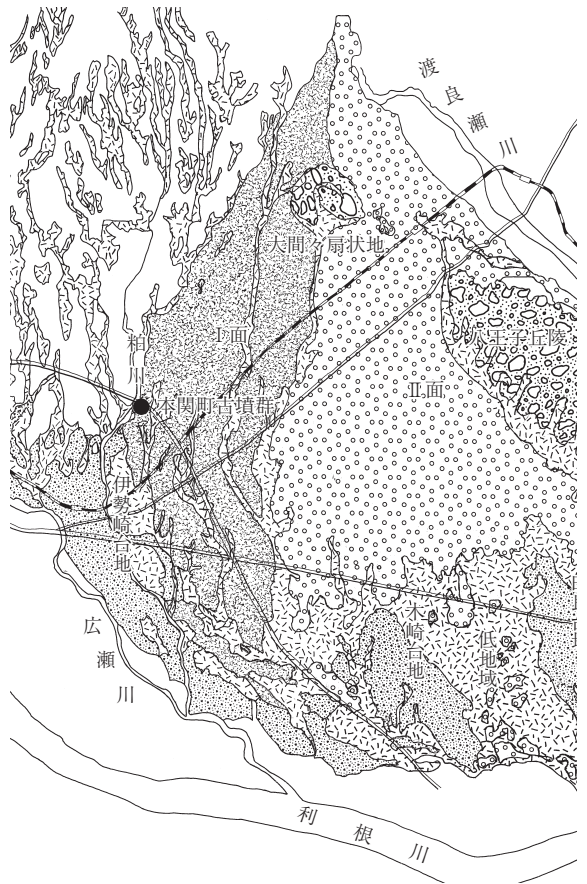


図3 遺跡周辺の地質図(S=1:20万)



## 4 周辺の遺跡

ここでは本関町古墳群の隣接地における遺跡と、広範囲な古墳及び古墳時代の遺跡に分けて記述する。

## (1) 隣接地の遺跡

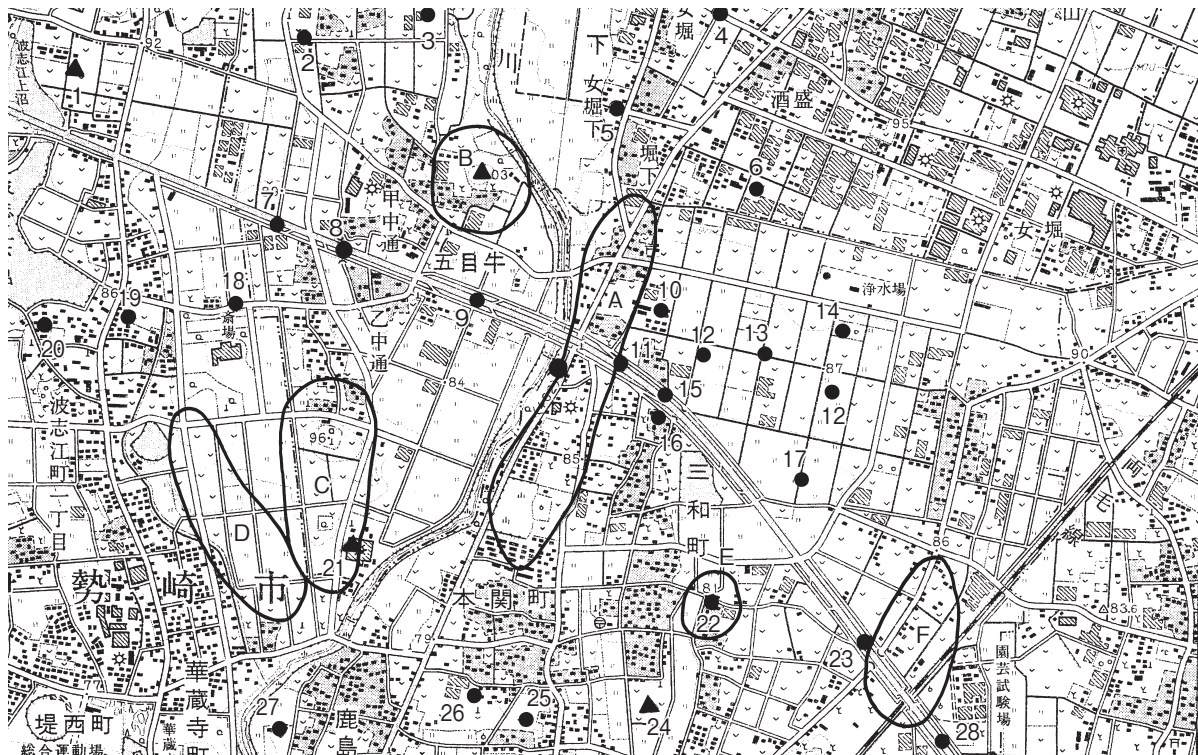
**旧石器時代** 遺跡の北東1kmの三和工業団地I～IV遺跡(12・14)、舞台遺跡(13)では、湧水点の周囲を中心に1.3～2.8万年前(y,B,P)の石器が検出され、なかでも三和工業団地I遺跡(14)では、始良Tn火山灰(AT)の下位から直径50mの環状ブロックが確認されている。

**縄文時代** 北東1kmの三和工業団地遺跡、舞台遺跡の周辺において、前期～後期の集落が確認されている。特に中期は広範囲に展開する一方で、後期～晩期にかけては一部に限定されて激減する。

**弥生時代** 本古墳群の南西4kmに中期後半の西太田遺跡、中組遺跡が立地するが、本古墳群に近接する地域には、同時代の遺跡はほとんど存在しない。

**古墳時代** 前期では北東1kmの三和工業団地遺跡、舞台遺跡、下植木壺町田遺跡(16)を中心に、集落、方形周溝墓群が広範囲に確認されている。なかでもこれらの遺跡群では、確認された竪穴住居が300軒近くにも及ぶ。中期では南東1kmに丸塚山古墳(24)が立地するが、集落は三和工業団地遺跡、上植木壺町田遺跡(15)などで僅かに確認されているに過ぎない。後期は本古墳群に含まれる前方後円墳の一ノ関古墳をはじめ、北1kmに洞山古墳群(B)、西500mに地蔵山古墳群(C)、西1kmに蟹沼東古墳群(D)などが立地する。一方集落遺跡では、三和工業団地遺跡、舞台遺跡を中心として、100軒以上の竪穴住居が展開する。

**飛鳥・奈良・平安時代** 南1kmに7世紀後半の上植木廃寺(25)、南2kmに佐位郡衙推定地の三軒屋遺跡が立地し、集落は三和工業団地遺跡、舞台遺跡、上植木光仙房遺跡(11)、光仙房遺跡(10)にかけて須恵器窯と500軒もの竪穴住居が広範囲に展開する。



A: 本関町古墳群 B: 洞山古墳群 C: 地蔵山古墳群 D: 蟹沼東古墳群 E: 高山古墳群 F: 書上古墳群 1: 祝堂古墳 2: 鷹巣遺跡 3: 北通遺跡 4: 女堀 5: 釜口遺跡 6: 酒盛遺跡 7: 堀下八幡遺跡 8: 五目牛南組遺跡 9: 五目牛清水田遺跡 10: 光仙房遺跡 11: 上植木光仙房遺跡 12: 三和工業団地II～IV遺跡 13: 舞台遺跡 14: 三和工業団地I遺跡 15: 上植木壺町田遺跡 16: 下植木壺町田遺跡 17: 鯉沼東遺跡 18: 東原遺跡 19: 波志江中宿遺跡 20: 波志江西宿遺跡 21: 五目牛二子山古墳 22: 高山遺跡 23: 書上本山遺跡 24: 丸塚山古墳 25: 上植木廃寺 26: 新屋敷遺跡 27: 上西根遺跡 28: 書上上原之城遺跡(※「周辺遺跡一覧表」の番号は図5の番号に対応し、この図の遺跡番号とは異なる)

図4 隣接地の遺跡位置図(S = 1 : 25,000)

## I 発掘調査と遺跡の概要

### (2) 本関町古墳群とその周辺の古墳時代

当古墳群は粕川左岸に沿うように帯状に分布し、古墳時代後期から終末期にかけて形成された古墳群であることが明らかになった。これまでの間、上武道路(国道17号バイパス)、国道462号線拡幅、北関東自動車道建設等に伴う発掘調査で都合33基の古墳が調査された。

また、伊勢崎市教育委員会では、終末期の代表的古墳の一つである上原古墳や6世紀後半の前方後円墳の一ノ関古墳(殖蓮71号墳)、さらには周辺一帯の小規模開発に伴い4基以上の古墳を調査している。

これらの調査の集積により、古墳分布域の範囲がほぼ確定しつつあり、古墳群のアウトラインが見えてきた。これまで調査された古墳で内容が明らかになっている35基を墳丘形式別に整理すると、前方後円墳3基(可能性のあるもの2基を含む)と円墳29基、墳丘不明のもの3基である。不明としたものは円墳の可能性が強い。

一方、時期別の傾向をみると、大きくは3つにグルーピングされる。その一は、6世紀前半に属し、主として竪穴式系の主体部形式を採用しており、23基ある(1類)。その二は、6世紀後半に属し、横穴式石室を主体部に採用する。5基ある(2類)。この中に、3基の前方後円墳も入っている。そして第三は、7世紀に属し、やはり横穴式石室を主体部としている。7基ある(3類)。

このように当古墳群は、6世紀から7世紀にかけて形成された。もちろん、これら一連の調査が、古墳群の全体を網羅してわけではないので、今後この時期以外の古墳も浮上してくる可能性はなくはない。ただし、大勢は変わらないだろう。

一連の発掘が及ばなかった隣接地の古墳を考えていく上で参考になるのは、昭和10年の県下一斉古墳分布調査の成果(『上毛古墳総覧』)である。該当するのは、旧殖蓮村第47号古墳～同第73号古墳の27基である。このうち、61・62号墳が前方後円墳と記載され、その後前方後円墳が明らかになった71号墳については、墳形不明と書かれている。この段階で数え

上げられたのは、フィールドワークの中で視認されたものに限られており、また分布調査の限界も踏まえる必要があるだろう。

上記27基のうち、今回の一連の発掘調査が及んだ可能性があるのは、6基である。ということは、調査された35基のうち29基は昭和10年の分布調査時には、存在が確認されていなかったわけである。これにはいくつかの理由がある。一つは、今回の調査古墳の大半が1類に属するからである。これは、5世紀後半から6世紀前半にかけて築造されたいわゆる「初期群集墳」の範疇に属するものである。その最大の特徴は、低墳丘の墳丘構造と竪穴式系の小規模埋葬施設にある。それゆえ、多くの場合、発掘調査によってはじめてその存在を知ることができるようになるわけである。

逆に考えると、昭和10年段階の発掘調査によらず古墳と認定できた諸古墳は、明確に視認できるような墳丘を有していたことになる。『上毛古墳総覧』に記載されている古墳の大半は、本稿での分類による、2・3類に属する横穴式古墳であったと考えていいたいだろう。

本関町古墳群の周辺を見渡すなら、その東側の一帯には、顕著な古墳は認められない。この地域が大間々扇状地の西端に当たっており、生産域、集落域ともこれより南方に展開するからである。当然、これに対応する古墳群も南方に中心を置いている。

本関町古墳群のごく近接地での古墳群の所在を探索してみると、粕川を挟んだ右岸に濃い分布傾向が見出せるところである。よく知られているものとしては、旧赤堀町の地藏山古墳群、洞山古墳群、八幡林古墳群と連なっており、さらに、伊勢崎市の旧三郷村地区の蟹沼東古墳群、宮貝戸古墳群へと連なっている。これらの諸古墳群の様相を概観するならば、いずれも、先の分類の1～3類に中心を置いていることが知られる。本関町古墳群もこれらの古墳群と密接な関係を持ちながら形成されたものとしていいだろう。すなわち、赤城山南麓の地域展開の中に位置づけることができるだろう。







図5 本関町古墳群とその周辺の古墳時代遺跡分布図(S=1:25,000)

伊勢崎市



## 周辺の遺跡一覧表

番号	遺跡名	文献
1	本岡町古墳群(関山古墳群含む)	本報告書
2	富田遺跡古墳群	『富田遺跡群・西大室遺跡群・清里南部遺跡群』前橋市教委 1980
3	柳久保遺跡古墳群	『柳久保遺跡古墳群』前橋市埋文調査団 1984
4	阿久山古墳群	『群馬県遺跡台帳Ⅰ(東毛編)』群馬県教委 1971
5	伊勢山古墳群	『阿弥陀井戸道上・伊勢山・大道・山王・明神山』群馬県教委 1990
6	上横俵古墳群	『横俵遺跡群・熊の穴・上横俵遺跡』前橋市埋文調査団 1993
7	横俵古墳群	『横俵古墳群Ⅲ』前橋市埋文調査団 1991
8	西原古墳群	『西原古墳群』粕川村教委 1985
9	峯岸山古墳群	『赤堀村峯岸山の古墳』2 赤堀村教委 1976
10	神社丘古墳群	『西野諏訪神社丘古墳群発掘調査概報』赤堀村教委 1975
11	吉沢峯・轟山古墳群(裏山古墳群含む)	『吉沢峯古墳群』赤堀町教委 1998
12	三騎堂古墳群	『多田山古墳群・今井三騎堂遺跡・今井見切塚遺跡』県埋文事業団 2004
13	多田山古墳群(見切塚・中里塚)	『多田山古墳群・今井三騎堂遺跡・今井見切塚遺跡』県埋文事業団 2004
14	北原古墳群	『今井北原古墳及び住居跡発掘調査概報』赤堀村教委 1980
15	田向古墳群	『昭和37・38年度における発掘調査』1輯 群大・教育・尾崎研究室調査報告 1966
16	天神山古墳群	『群馬県遺跡台帳Ⅰ(東毛編)』群馬県教委 1971
17	向井古墳群	『向井古墳群』赤堀町教委 1991
18	南原古墳群	『南原古墳群』赤堀町教委 1995
19	石山片田・庚塚古墳群	『下畑片田古墳群発掘調査概報』赤堀町教委 1989・『庚塚古墳群』1993
20	下触牛伏古墳群	『牛伏第1号古墳・祝堂古墳・大沼上遺跡』伊勢崎市教委 1982
21	波志江沼西古墳群(今宮・宮戸古墳群含む)	『宮戸古墳群・蟹沼東古墳群』伊勢崎市教委 1980
22	荒砥二之堰古墳群	『荒砥二之堰遺跡』県埋文事業団 1985
23	今井神社古墳群	『荒砥北原遺跡・今井神社古墳群・荒砥青柳遺跡』県埋文事業団 1986
24	八幡林古墳群	『八幡林古墳群及び縄文住居跡発掘調査概報』赤堀村教委 1982
25	洞山古墳群	『洞山古墳群及び北通・鷹巣遺跡発掘調査概報』赤堀村教委 1982
26	台所山古墳群	『伊勢崎市史 通史編1』伊勢崎市 1987
27	蟹沼東古墳群	『宮戸下遺跡・蟹沼東古墳群』伊勢崎市教委 1978
28	地蔵山古墳群	『赤堀村地蔵山古墳1・2』赤堀村教委 1978・1979
29	乙中通古墳群	『群馬県遺跡台帳Ⅰ(東毛編)』群馬県教委 1971
30	浅間山古墳群	『群馬県遺跡台帳Ⅰ(東毛編)』群馬県教委 1971
31	間之山古墳群	『伊勢崎市史 通史編1』伊勢崎市 1987
32	高山古墳群	『高山遺跡・天ヶ堤遺跡・天野沼遺跡・下書上遺跡』伊勢崎市教委 1977
33	書上古墳群	『書上下吉祥寺・書上上原之城遺跡・上植木寺町田遺跡』県埋文事業団 1988
34	恵下古墳群	『恵下遺跡』伊勢崎市教委 1979
35	御殿山古墳	『群馬県遺跡台帳Ⅰ(東毛編)』群馬県教委 1971
36	大塚古墳	『群馬県遺跡台帳Ⅰ(東毛編)』群馬県教委 1971
37	稲荷窪A地点遺跡	『茂木遺跡群・稲荷窪A地点遺跡』大胡町教委 1996
38	荒砥355号墳	『上毛古墳総覧』群馬県史蹟名勝天然記念物調査報告書第五輯 1938
39	谷津遺跡	『荒砥北部遺跡群発掘調査概報』群馬県教委 1986
40	丸山古墳	『群馬県遺跡台帳Ⅰ(東毛編)』群馬県教委 1971
41	小稲荷遺跡	『小稲荷遺跡』前橋市埋文調査団 1987
42	荒砥72号墳	『上毛古墳総覧』群馬県史蹟名勝天然記念物調査報告書第五輯 1938
43	荒砥70・74・76・78・80号墳	『上毛古墳総覧』群馬県史蹟名勝天然記念物調査報告書第五輯 1938
44	小稲荷6号墳	『上毛古墳総覧』群馬県史蹟名勝天然記念物調査報告書第五輯 1938
45	大稲荷2号墳(荒砥村91号墳)	『阿弥陀井戸道上・伊勢山・大道・山王・明神山』群馬県教委 1990
46	荒砥86・88・90号墳	『上毛古墳総覧』群馬県史蹟名勝天然記念物調査報告書第五輯 1938
47	大稲荷遺跡	『富田遺跡群・西大室遺跡群・清里南部遺跡群』前橋市教委 1980
48	雷電山古墳(荒砥92号墳)	『群馬県遺跡台帳Ⅰ(東毛編)』群馬県教委 1971
49	水口山遺跡	『阿弥陀井戸道上・伊勢山・大道・山王・明神山』群馬県教委 1990
50	中島遺跡	『阿弥陀井戸道上・伊勢山・大道・山王・明神山』群馬県教委 1990
51	鯉登塚古墳	『群馬県遺跡台帳Ⅰ(東毛編)』群馬県教委 1971
52	荒砥65・67・69・71号墳	『上毛古墳総覧』群馬県史蹟名勝天然記念物調査報告書第五輯 1938
53	上縄引遺跡	『内堀遺跡群Ⅱ・上縄引遺跡』前橋市埋文調査団 1989
54	内堀遺跡	『内堀遺跡群Ⅲ・Ⅴ・Ⅸ』前橋市教委 1990・1993・1996
55	小二子古墳	『後二子古墳・小二子古墳』前橋市教委 1992
56	後二子古墳	『後二子古墳・小二子古墳』前橋市教委 1992
57	中二子古墳	『中二子古墳』前橋市教委 1995
58	前二子古墳	『前二子古墳』前橋市教委 1993
59	赤堀茶臼山古墳(赤堀村260号墳)	『上毛古墳総覧』群馬県史蹟名勝天然記念物調査報告書第五輯 1938
60	おぼんぶち古墳	『おぼんぶち古墳群』赤堀町教委 1996
61	富田下大日遺跡	『富田漆田遺跡・富田下大日遺跡』県埋文事業団 2006
62	大塚古墳	『群馬県遺跡台帳Ⅰ(東毛編)』群馬県教委 1971
63	荒砥347・348号墳	『上毛古墳総覧』群馬県史蹟名勝天然記念物調査報告書第五輯 1938
64	第328号御殿山古墳	『群馬県遺跡台帳Ⅰ(東毛編)』群馬県教委 1971
65	北原遺跡	『荒砥北部遺跡群発掘調査概報』群馬県教委 1985
66	新山遺跡	『荒砥北部遺跡群発掘調査概報』群馬県教委 1985
67	向原遺跡	『荒砥北部遺跡群発掘調査報告』群馬県教委 1986
68	おとうか山古墳	『群馬県遺跡台帳Ⅰ(東毛編)』群馬県教委 1971
69	富田東原遺跡	『富田遺跡群・西大室遺跡群』前橋市教委 1982
70	東原遺跡	『富田遺跡群・西大室遺跡群』前橋市教委 1982
71	名称なし	『群馬県遺跡台帳Ⅰ(東毛編)』群馬県教委 1971
72	少将塚古墳	『上毛古墳総覧』群馬県史蹟名勝天然記念物調査報告書第五輯 1938
73	大道古墳	『群馬県遺跡台帳Ⅰ(東毛編)』群馬県教委 1971
74	第330号小塚古墳	『群馬県遺跡台帳Ⅰ(東毛編)』群馬県教委 1971
75	荒砥諏訪西遺跡	『荒砥荒子遺跡・荒砥宮田遺跡・荒砥諏訪西遺跡・荒砥諏訪遺跡』県埋文事業団 1984
76	第329号墳	『上毛古墳総覧』群馬県史蹟名勝天然記念物調査報告書第五輯 1938
77	荒砥宮田遺跡	『荒砥宮田遺跡』県埋文事業団 1984
78	第332号墳	『上毛古墳総覧』群馬県史蹟名勝天然記念物調査報告書 第五輯 1938
79	中鶴谷古墳B	『群馬県遺跡台帳Ⅰ(東毛編)』群馬県教委 1971
80	中鶴谷古墳A	『群馬県遺跡台帳Ⅰ(東毛編)』群馬県教委 1971
81	荒砥1号墳	『上毛古墳総覧』群馬県史蹟名勝天然記念物調査報告書 第五輯 1938
82	新宿古墳	『群馬県遺跡台帳Ⅰ(東毛編)』群馬県教委 1971
83	下境I遺跡	『下境I遺跡』群馬県教委 1990
84	荒砥富士山1号墳	『荒砥北部遺跡群』群馬県教委 1990
85	富士山I遺跡	『富士山I遺跡1号墳』群馬県教委 1992
86	地田栗Ⅲ遺跡	『地田栗Ⅲ遺跡』前橋市埋文調査団 1994
87	荒砥152号墳	『上毛古墳総覧』群馬県史蹟名勝天然記念物調査報告書第五輯 1938
88	牛島古墳	『群馬県遺跡台帳Ⅰ(東毛編)』群馬県教委 1971
89	デングリ山古墳	『群馬県遺跡台帳Ⅰ(東毛編)』群馬県教委 1971
90	荒砥11号墳	『上毛古墳総覧』群馬県史蹟名勝天然記念物調査報告書第五輯 1938
91	舞台西遺跡	『下境I・天神』群馬県教委 1990
92	荒砥10号墳	『上毛古墳総覧』群馬県史蹟名勝天然記念物調査報告書第五輯 1938
93	荒砥12号墳	『上毛古墳総覧』群馬県史蹟名勝天然記念物調査報告書第五輯 1938

番号	遺 跡 名	文 献
94	舞台遺跡	『舞台・西大室丸山』群馬県教委 1991
95	荒砥8号墳	『上毛古墳綜覧』群馬県史蹟名勝天然記念物調査報告書第五輯 1938
96	荒砥下押切Ⅱ遺跡	『荒砥下押切Ⅱ・荒砥中屋敷Ⅱ遺跡』県埋文事業団 1999
97	荒砥3・4・6号墳	『上毛古墳綜覧』群馬県史蹟名勝天然記念物調査報告書第五輯 1938
98	西大室丸山遺跡	『西大室丸山遺跡』群馬県教委 1997
99	上蛭沼遺跡	『舞台・西大室丸山』群馬県教委 1991
100	天神古墳	『群馬県遺跡台帳Ⅰ(東毛編)』群馬県教委 1971
101	大塚古墳(荒砥235号墳)	『群馬県遺跡台帳Ⅰ(東毛編)』群馬県教委 1971
102	石山温泉遺跡	『群馬県遺跡台帳Ⅰ(東毛編)』群馬県教委 1971
103	行人塚古墳	『群馬県遺跡台帳Ⅰ(東毛編)』群馬県教委 1971
104	荒砥292号墳	『上毛古墳綜覧』群馬県史蹟名勝天然記念物調査報告書第五輯 1938
105	荒砥231号墳	『上毛古墳綜覧』群馬県史蹟名勝天然記念物調査報告書第五輯 1938
106	荒砥245号墳	『上毛古墳綜覧』群馬県史蹟名勝天然記念物調査報告書第五輯 1938
107	荒砥250号墳	『上毛古墳綜覧』群馬県史蹟名勝天然記念物調査報告書第五輯 1938
108	見切塚1号墳	『埋蔵文化財調査概報』赤堀町教委 1990
109	名称なし	『群馬県遺跡台帳Ⅰ(東毛編)』群馬県教委 1971
110	今井学校遺跡	『町内遺跡発掘調査概報』赤堀町教委 1972
111	武泰遺跡	『群馬県遺跡台帳Ⅰ(東毛編)』群馬県教委 1971
112	大道古墳B	『群馬県遺跡台帳Ⅰ(東毛編)』群馬県教委 1971
113	大道古墳A	『群馬県遺跡台帳Ⅰ(東毛編)』群馬県教委 1971
114	峯上古墳	『群馬県遺跡台帳Ⅰ(東毛編)』群馬県教委 1971
115	第333号古墳	『上毛古墳綜覧』群馬県史蹟名勝天然記念物調査報告書第五輯 1938
116	荒砥北三木堂遺跡	『荒砥北三木堂遺跡Ⅰ・Ⅱ』県埋文事業団 1991・1992
117	第334号権現山古墳	『上毛古墳綜覧』群馬県史蹟名勝天然記念物調査報告書第五輯 1938
118	荒砥北原遺跡	『荒砥北原遺跡・今井神社古墳群・荒砥青柳遺跡』県埋文事業団 1986
119	小島田八日市遺跡	『小島田八日市遺跡』県埋文事業団 1994
120	木瀬6号墳	『上毛古墳綜覧』群馬県史蹟名勝天然記念物調査報告書第五輯 1938
121	木瀬7号墳	『上毛古墳綜覧』群馬県史蹟名勝天然記念物調査報告書第五輯 1938
122	筑井八日市遺跡	『筑井八日市遺跡』県埋文事業団 1994
123	荒砥宮川遺跡	『荒砥宮川・宮原遺跡』県埋文事業団 1993
124	宮本古墳	『群馬県遺跡台帳Ⅰ(東毛編)』群馬県教委 1971
125	つくば山古墳	『群馬県遺跡台帳Ⅰ(東毛編)』群馬県教委 1971
126	牛伏第1号墳	『牛伏第1号墳・祝堂古墳・大沼上遺跡』伊勢崎市教委 1982
127	祝堂古墳(三郷第73号墳)	『伊勢崎市史』通史編1 伊勢崎市 1987
128	釜口遺跡	『釜口遺跡』赤堀町教委 2000
129	東道上遺跡	『群馬県遺跡台帳Ⅰ(東毛編)』群馬県教委 1971
130	寺跡古墳	『群馬県史』資料編3 群馬県 1981
131	五日牛南組遺跡	『五日牛南組遺跡』県埋文事業団 1992
132	五日牛清水田遺跡	『五日牛清水田遺跡』県埋文事業団 1993
133	光仙房遺跡	『光仙房遺跡』県埋文事業団 2003
134	上植木光仙房遺跡	『上植木光仙房遺跡』県埋文事業団 1988
135	関山遺跡Ⅱ(一ノ関古墳・殖蓮村71号墳)	『関山遺跡Ⅱ』伊勢崎市教委 2005
136	華蔵寺1号墳	『伊勢崎市史』通史編1 伊勢崎市 1987
137	五日牛二子山古墳	『前方後円墳集成』関東・東北 山川出版 1994
138	波志江伊勢山古墳(三郷村71号墳)	『横穴式古墳の研究』尾崎喜左雄 1966
139	丸塚山古墳	『伊勢崎市史』通史編1 伊勢崎市 1987
140	御嶽山古墳	『群馬県遺跡台帳Ⅰ(東毛編)』群馬県教委 1971
141	華蔵寺裏山古墳	『伊勢崎市史』通史編1 伊勢崎市 1987
142	荒砥宮原遺跡	『荒砥宮川・宮原遺跡』県埋文事業団 1993
143	荒砥286号墳	『上毛古墳綜覧』群馬県史蹟名勝天然記念物調査報告書第五輯 1938
144	荒砥291号墳	『上毛古墳綜覧』群馬県史蹟名勝天然記念物調査報告書第五輯 1938
145	地獄塚古墳	『群馬県遺跡台帳Ⅰ(東毛編)』群馬県教委 1971
146	荒砥285号墳	『上毛古墳綜覧』群馬県史蹟名勝天然記念物調査報告書第五輯 1938
147	手長塚古墳	『群馬県遺跡台帳Ⅰ(東毛編)』群馬県教委 1971
148	荒砥281・282・283号墳	『上毛古墳綜覧』群馬県史蹟名勝天然記念物調査報告書第五輯 1938
149	ツボロ古墳	『群馬県遺跡台帳Ⅰ(東毛編)』群馬県教委 1971
150	萩原遺跡	『群馬県遺跡台帳Ⅰ(東毛編)』群馬県教委 1971
151	庚申塚古墳	『群馬県遺跡台帳Ⅰ(東毛編)』群馬県教委 1971
152	荒砥前原遺跡	『荒砥前原遺跡・赤石城址』県埋文事業団 1985
153	名称なし	『群馬県遺跡台帳Ⅰ(東毛編)』群馬県教委 1971
154	名称なし	『群馬県遺跡台帳Ⅰ(東毛編)』群馬県教委 1971
155	柳塚古墳	『群馬県遺跡台帳Ⅰ(東毛編)』群馬県教委 1971
156	お富士山古墳(三郷村100号墳)	『お富士山古墳』伊勢崎市教委 1990
157	東光寺古墳	『群馬県遺跡台帳Ⅰ(東毛編)』群馬県教委 1971

## 5 遺跡の基本層序

本関町古墳群ではローム層中に、上位から浅間板鼻黄色軽石(As-YP)、浅間大窪沢軽石(As-Ok)、浅間板鼻褐色軽石群(As-BPG)の軽石粒を視認できた他、分析によって始良Tn火山灰(AT)、赤城小沼ラピリ(Ag-KLP)、榛名箱田テフラ(Hr-HA)、赤城鹿沼テフラ(Ag-KP)を検出した。一方、ローム層の上位には縄文時代以降の黒・褐色土が堆積しているが、調査区域の大半はローム層の上面付近まで攪乱を受けており、一部に浅間C軽石(As-C)を含む黒色土が遺存する他は、示標テフラの一次堆積層は存在しない。

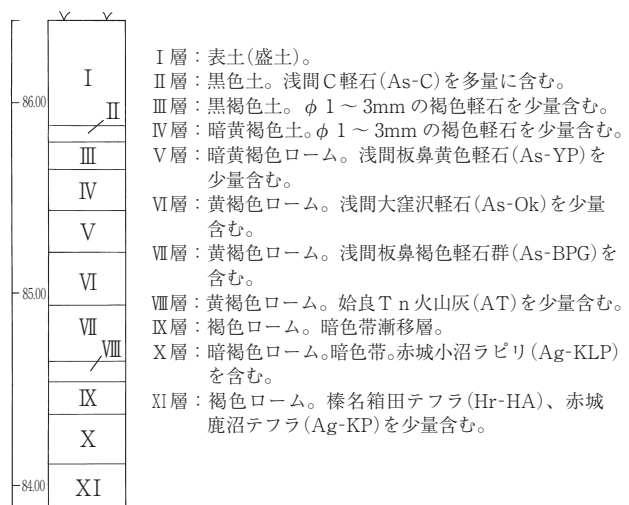


図6 基本土層柱状図(S = 1 : 40)



## Ⅱ 旧石器時代の遺物



調査区遠景(北から、写真向かって右が南流する粕川)

本関町古墳群は、大間々扇状地Ⅰ面(桐原面)の西端部を南流する、粕川左岸のローム台地上に立地する。この扇状地は、写真右の粕川を西限として渡良瀬川までの間に形成され、中央部の早川を境に西側のⅠ面が約5万年前に、東側のⅡ面(藪塚面)が約2万年前にそれぞれ段丘化したローム台地である(4頁図3参照)。

## II 旧石器時代の遺物

### 1 概要

旧石器時代の遺物は、全調査区域の中央部に位置するB・E区と、南側に位置するC区で出土した。B区は1点のみの出土であり、これは大きくは現道を挟んだE区のみと考えられることから、この遺跡では大きく二か所からの出土である。

遺跡は約5万年前に段丘化した、大間々扇状地I面(桐原面)西端部のローム台地上に立地している。この扇状地の西端部には、南北に連なる自然堤防状の高まりが形成されており、遺跡は西側を粕川に接した、周囲の台地よりやや小高い緩やかな南斜面に占地している。

ローム層中には暗色帯(X層)がよく発達する他、V層に浅間板鼻黄色軽石(As-YP)、VI層に浅間大窪沢軽石(As-Ok)、VII層に浅間板鼻褐色軽石群(As-BPG)、VIII層に始良Tn火山灰(AT)などのテフラが存在し、調査はほぼ暗色帯の下位に位置する褐色ローム層(XI層)まで実施した。

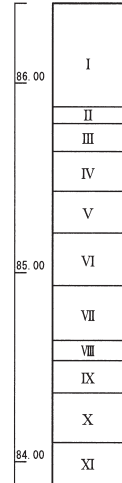


図7 基本土層柱状図 (S = 1:40)

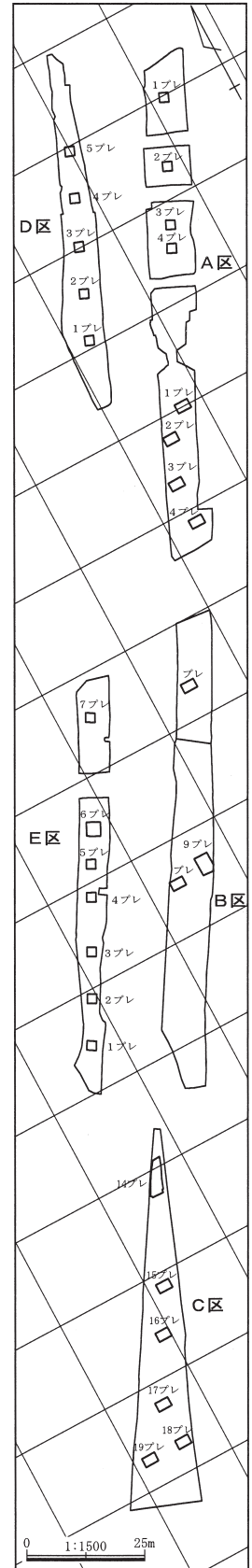


図8 トレンチ配置図

### 本関町古墳群 旧石器一覧表

区	No.	器種	石材	出土位置					
				層位	X(日本)	Y(日本)	X(世界)	Y(世界)	Z
B	1	尖頭器	黒曜石	VI層	38971.840	-55465.750	39326.515	-55758.135	83.720
C	1	尖頭器	黒曜石	VII層	38916.500	-55508.020	39271.172	-55800.405	82.821
C	2	二次加工有る剥片	黒色安山岩	VII層	38919.520	-55507.550	39274.192	-55799.934	83.315
C	3	槍先形尖頭器	黒曜石	倒木	38917.464	-55507.210	39272.136	-55799.595	82.900
C	4	剥片	黒色安山岩	VII層	38920.475	-55506.635	39275.147	-55799.019	82.635
C	5	ポイントフレイク	黒曜石	VII層	38920.785	-55506.380	39275.457	-55798.764	82.785
C	6	微細剥片	黒曜石	VII層	38921.090	-55506.220	39275.762	-55798.604	82.873
C	7	剥片	黒曜石	VII層	38920.775	-55506.075	39275.447	-55798.459	82.698
C	8	ポイントフレイク	黒色安山岩	VII層	38921.375	-55506.100	39276.047	-55798.484	82.598
C	9	微細剥片	黒曜石	VII層	38921.110	-55505.365	39275.783	-55797.750	82.530
C	10	微細剥片	黒曜石	VII層	38921.250	-55506.340	39275.922	-55798.724	82.827
C	11	微細剥離痕有る剥片	黒曜石	VII層	38921.320	-55505.600	39275.993	-55797.985	82.573
C	12	剥片	黒曜石	VII層	38920.860	-55506.430	39275.532	-55798.814	82.780
C	13	二次加工有る剥片	黒色安山岩	VII層	38920.925	-55506.490	39275.597	-55798.874	82.795
C	14	剥片	黒曜石	VII層	38920.610	-55506.700	39275.282	-55799.084	82.852
C	15	剥片	黒曜石	VII層	38921.060	-55506.380	39275.732	-55798.764	82.878
E	1	剥片	ぎょくずい	VI層	38990.353	-55483.178	39345.028	-55775.562	83.660
E	2	微細剥片	黒曜石	VI層	38990.361	-55484.241	39345.036	-55776.625	83.507
E	3	微細剥片	黒曜石	VI層	38990.324	-55483.525	39344.999	-55775.909	83.735
E	4	微細剥片	黒曜石	VII層	38989.410	-55482.909	39344.085	-55775.293	83.479
E	5	切り出し形石器	黒曜石	VII層	38988.968	-55483.630	39343.643	-55776.014	83.481
E	6	二次加工有る剥片	チャート	VIII層	38983.059	-55487.742	39337.734	-55780.126	83.002



## 2 出土遺物

## B区の旧石器(写真 PL.2・3・29)

位置 970・-465 グリッド。B区の中央部に位置する9号トレンチ。出土層位 ローム層の上面から約50cm下位に位置する、VI層の黄褐色ローム層内。出土遺物 黒曜石製の尖頭器1点。トレンチを3×

4mまで拡張して調査したが、検出したのはこの1点のみ。年代 VI層に約1.5~1.7万(y,B,P)の浅間大窪沢軽石(As-Ok)を含むことから、約1.5~1.7万年前の後期旧石器時代と推定。

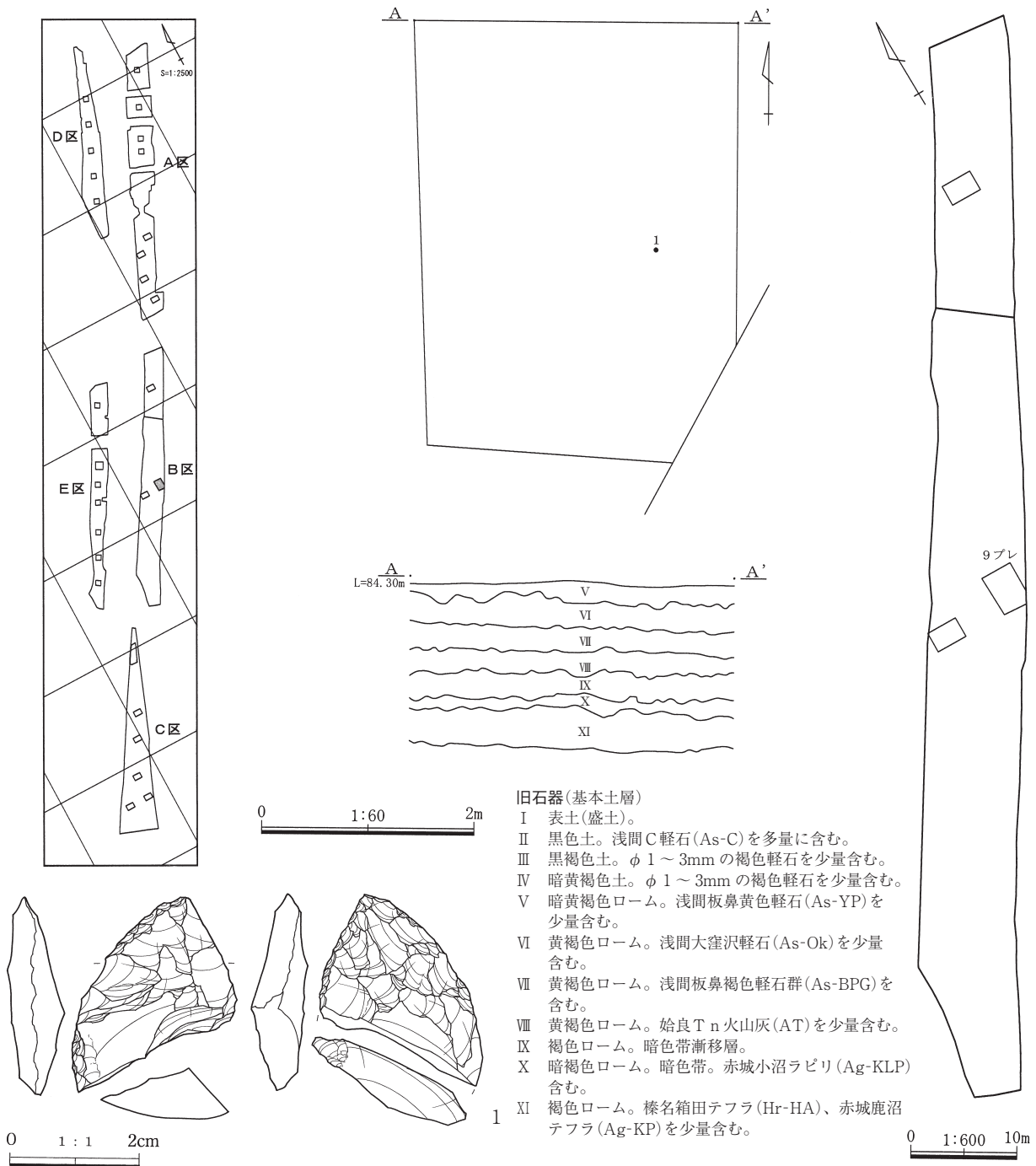


図9 B区旧石器出土状況・出土遺物

II 旧石器時代の遺物

C区の旧石器(写真 PL.2・3・29)

**位置** 915・-507グリッド。C区の北端部に位置する14号トレンチ。分布 トレンチ北端部の西側に集中的に分布する他、南半部にも散在。No.2は倒木内で、出土位置は原位置を留めない。北端部の西側では直径約1.0mほどの半円形状に分布するが、おそらくその中心は西側の調査区域外で、全体としては直径1~1.5mほどの円形ブロックを形成するも

のと推定。**出土層位** ローム層の上面から約80cm~1.2m下位の、Ⅶ層の黄褐色ローム層内。**出土遺物** 黒曜石製の尖頭器・槍先形尖頭器・ポイントフレイク・剥片、黒色安山岩製のポイントフレイク・剥片など合計16点が出土。**年代** Ⅶ層に約1.9~2.4万(y.B.P)の浅間板鼻褐色軽石群(As-BPG)を含むことから、約1.9~2.4万年前の後期旧石器時代と推定。

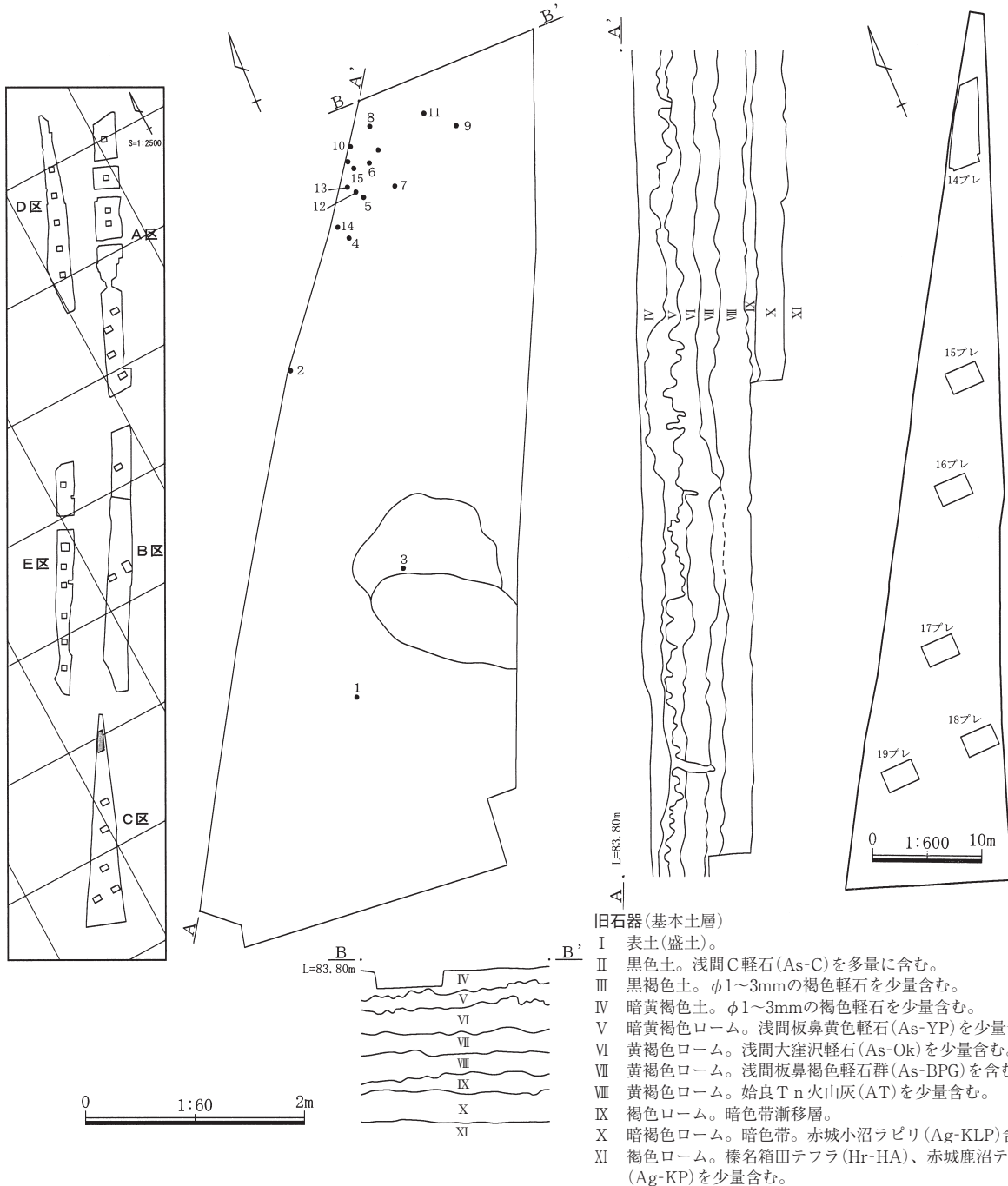


図10 C区旧石器出土状況



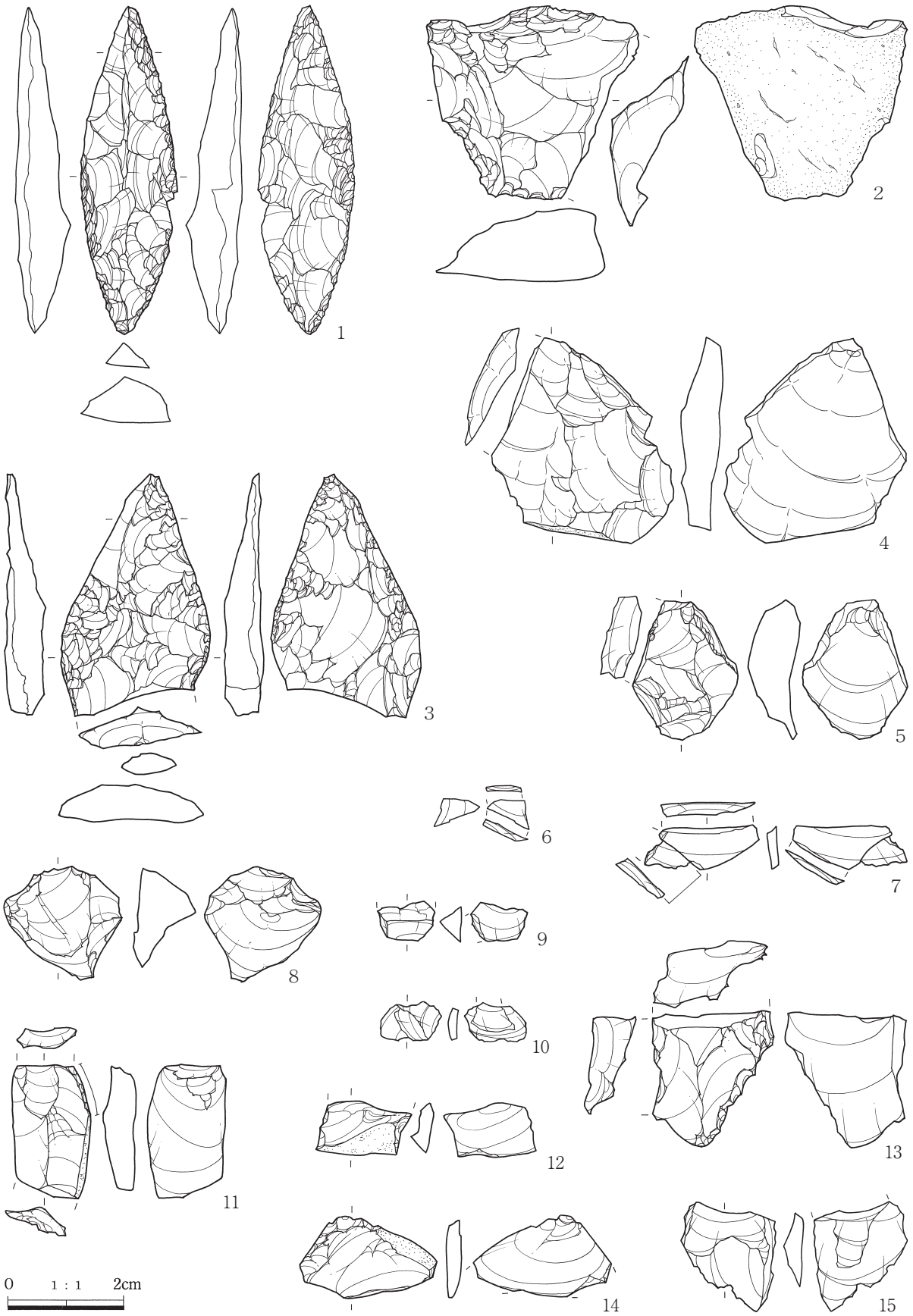


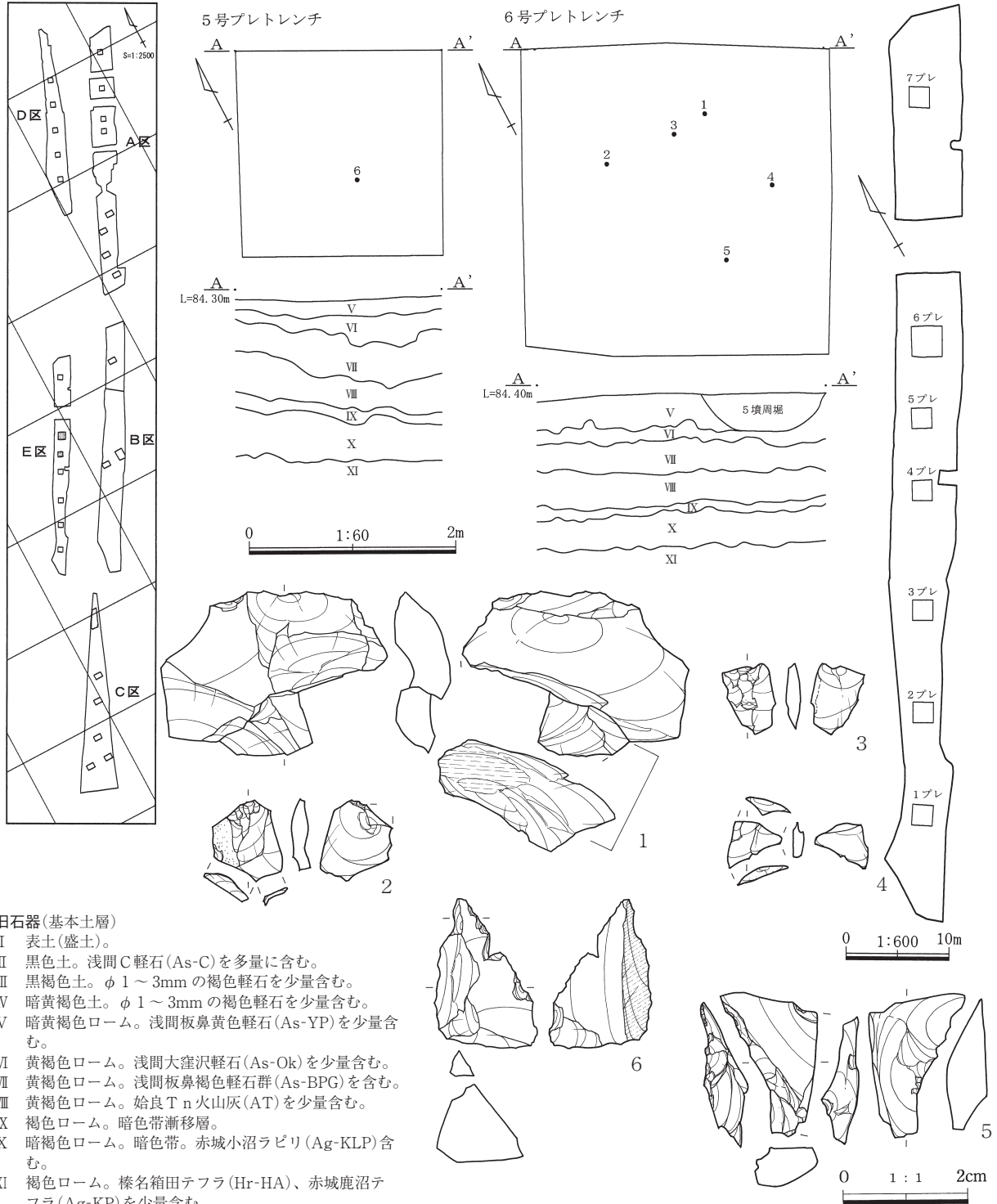
图 11 C区出土遺物

II 旧石器時代の遺物

E区の旧石器(写真 PL.4・29)

位置 983・-488グリッド。中央部に位置する5・6号トレンチ。出土層位 5号:Ⅷ層の黄褐色ローム層内。6号:Ⅵ・Ⅶ層内。出土遺物 5号:チャート製の剥片1点。6号:黒曜石製切り出し形石器・剥片、ぎょくずい製剥片。年代 Ⅵ層に1.5~1.7万

(y,B,P)の浅間大窪沢軽石(As-Ok)、Ⅶ層に1.9~2.4万(y,B,P)の浅間板鼻褐色軽石群(As-BPG)、Ⅷ層に2.4~2.5万(y,B,P)の始良Tn火山灰(AT)を含むことから、Ⅵ層は1.5~1.7万年前、Ⅶ層は1.9~2.4万年前、Ⅷ層は2.4~2.5万年前の後期旧石器時代と推定。



旧石器(基本土層)

- I 表土(盛土)。
- II 黒色土。浅間C軽石(As-C)を多量に含む。
- III 黒褐色土。φ1~3mmの褐色軽石を少量含む。
- IV 暗黄褐色土。φ1~3mmの褐色軽石を少量含む。
- V 暗黄褐色ローム。浅間板鼻黄色軽石(As-YP)を少量含む。
- VI 黄褐色ローム。浅間大窪沢軽石(As-Ok)を少量含む。
- VII 黄褐色ローム。浅間板鼻褐色軽石群(As-BPG)を含む。
- VIII 黄褐色ローム。始良Tn火山灰(AT)を少量含む。
- IX 褐色ローム。暗色帯漸移層。
- X 暗褐色ローム。暗色帯。赤城小沼ラピリ(Ag-KLP)含む。
- XI 褐色ローム。榛名箱田テフラ(Hr-HA)、赤城鹿沼テフラ(Ag-KP)を少量含む。

図12 E区旧石器出土状況・出土遺物



### Ⅲ 縄文時代の遺構と遺物



調査区遠景（A区，南西から，写真左上方の高架橋は手前が上武道路、奥が北関東自動車道、右上方に三和町の浄水タンクが見える。）

上武道路と北関東自動車道が通過するこの地域には、広い範囲に遺跡の発掘調査が及んでいる。隣接する上武道路の部分は上植木光仙房遺跡、北関東自動車道の部分は光仙房遺跡・舞台遺跡、浄水タンクの手前が縄文時代中期の集落が広く展開する三和工業団地遺跡。

### Ⅲ 縄文時代の遺構と遺物

#### 1 概 要

縄文時代の遺構は、竪穴住居1軒、土坑8基、集石遺構1か所を確認した。竪穴住居は、全調査区域の南端部に位置するC区のみ分布している。また、土坑は全調査区域の北端部に位置するA・D区に各1基、中央部のB区に1基、南端部のC区に5基がそれぞれ分布している。さらに、集石遺構は北端部のA区にのみ分布している。したがって、竪穴住居と5基の土坑が分布するC区がその分布の中心と考えられる。

この遺跡では、そのほぼ全域に古墳時代の方形周溝墓及び古墳が築造されることから、これらに壊された縄文時代の遺構があったものと考えられる。したがって、確認した縄文時代の分布状況は必ずしも実態を示すものとは言えない。しかし、方形周溝墓の周溝や古墳の周堀で壊される縄文時代の遺構の確率は、それらがほぼ全域に分布していることからほぼ同じと考えられ、縄文時代の遺構外出土遺物がC区に最も多いことを考慮すると、やはりC区がその中心であった可能性が高い。

C区で1軒のみを確認した竪穴住居は、平面形状を示す掘り込み、周溝及び柱穴列は一切確認できなかったが、炉、埋甕及び一部に残存した敷石の配置の状況から、柄鏡形の敷石住居と推定し、埋甕の土器型式から後期初頭と推定した。

土坑は、その平・断面の形状や規模から、一部に陥穴と考えられるものも含まれている。また、これらの時代は、出土遺物から中期に属するものと後期に属するものが存在する。竪穴住居が後期に属すことから、住居と同時存在したものがあつた可能性が高い一方で、周辺には中期の集落が存在する可能性も考えられる。

A区で確認した集石遺構は、その年代及び性格が不明だが、中期の遺物が伴出していることから、周辺には同期の遺構が存在する可能性も考えられる。

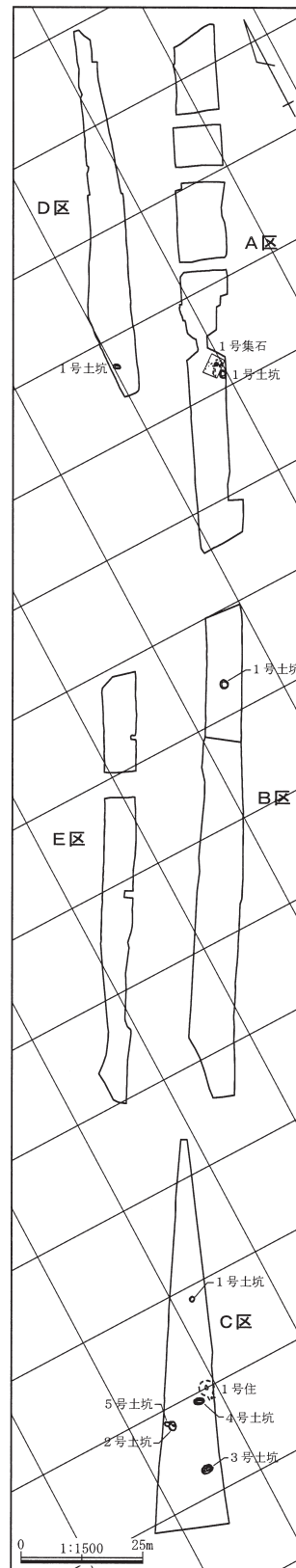


図 13 縄文時代の遺構分布図



2 竪穴住居

C区 1号住居(写真 PL.5・30・31、遺物観察 72頁)

位置 880・-525 グリッド。C区中央部の東端部に位置する。検出 ローム層の上面付近で検出。周溝及び柱穴列は未確認だが、炉、一部に残存した敷石、埋甕、及び遺物の分布状況から、柄鏡形の敷石住居と判断。規模・形状 住居部の直径約3.1m、柄部の幅約1.2mと推定。床面 未確認。一部に確認した敷石は短軸15~20cm、長軸20~35cmの河原

石を主体とするが、上面のレベルが不揃いであることから原位置を保っていない。柱穴 未確認。炉 住居の中央部に設置。直径60cm、深さ10cmの円形で、部分的に強く焼けた痕跡を確認。内部から散乱した状態で出土する5~20cm大の角礫は、おそらく石囲いを形成していたものと考えられるが、原位置を保っていない。埋甕 短軸30cm、長軸35cm、

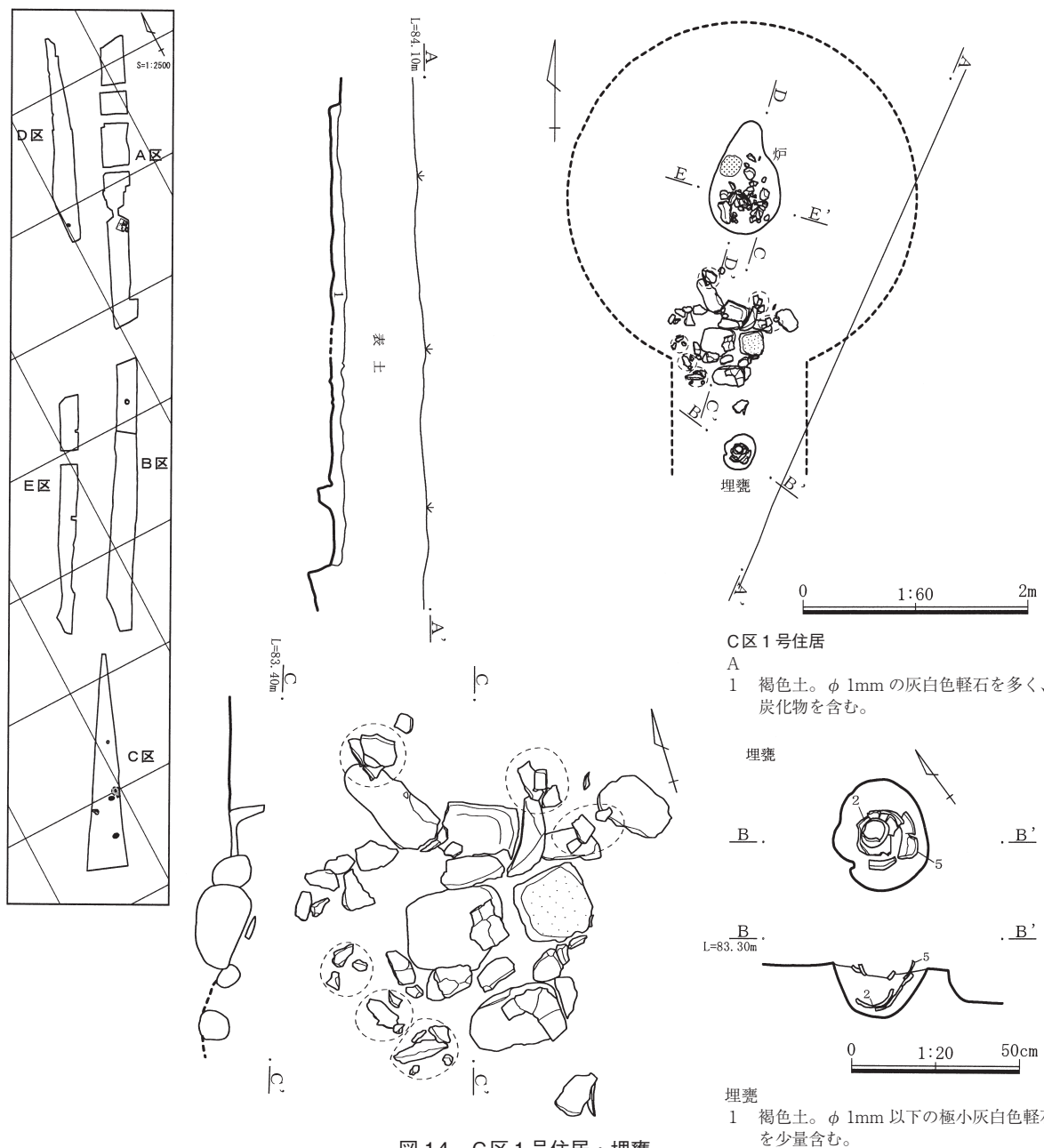


図 14 C区 1号住居・埋甕

### III 縄文時代の遺構と遺物

深さ15cmの楕円形状を呈す掘方内に、深鉢の下半部を正位で埋め、さらに深鉢と掘方の間を土で充填した後に完形の小形深鉢を正位で埋める。周溝 未確認。遺物 深鉢、磨製石斧、打製石斧、凹石が出土。但し、床面が未確認であるために、No.2・5の埋甕

を除いては出土レベルの床面との関係が不明。重複遺物の分布状況から、住居の北西部はC区1号墳の周堀が掘り込むものと推定。方位 ほぼN-S。面積 計測不可。時代 埋甕の土器型式から、縄文時代後期初頭と推定。

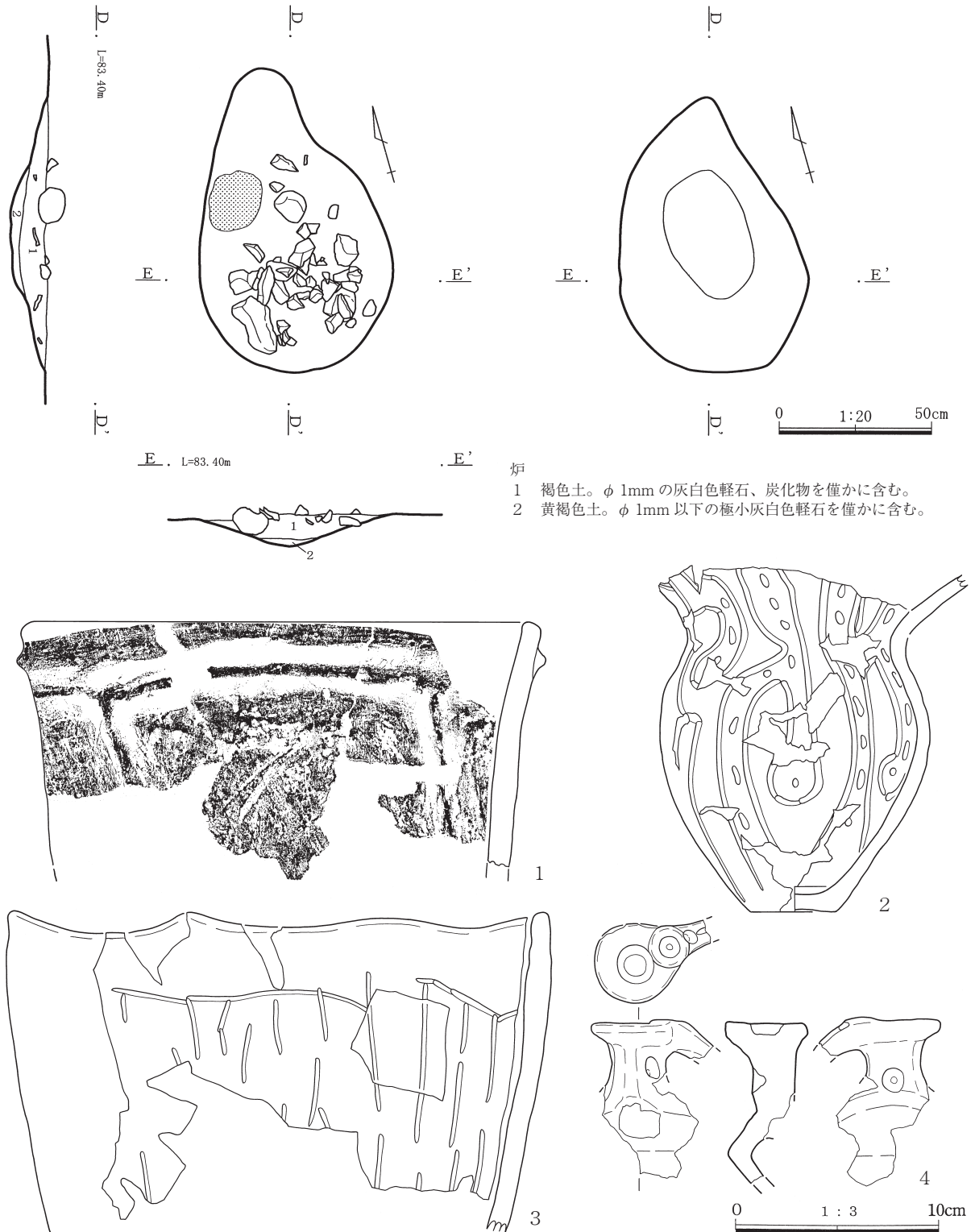


図15 C区1号住居炉・出土遺物 1



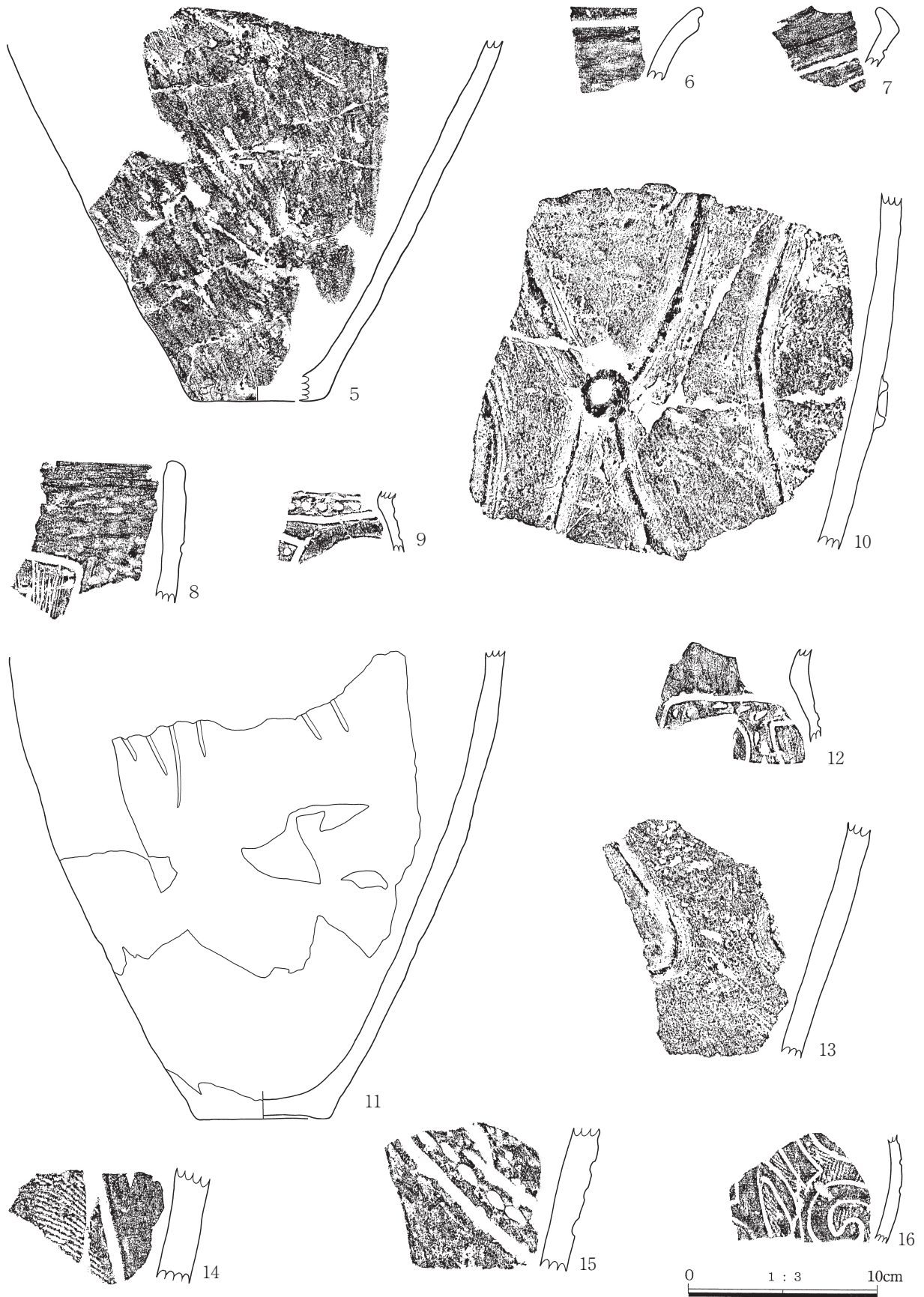


图 16 C区1号住居出土遗物 2

III 縄文時代の遺構と遺物

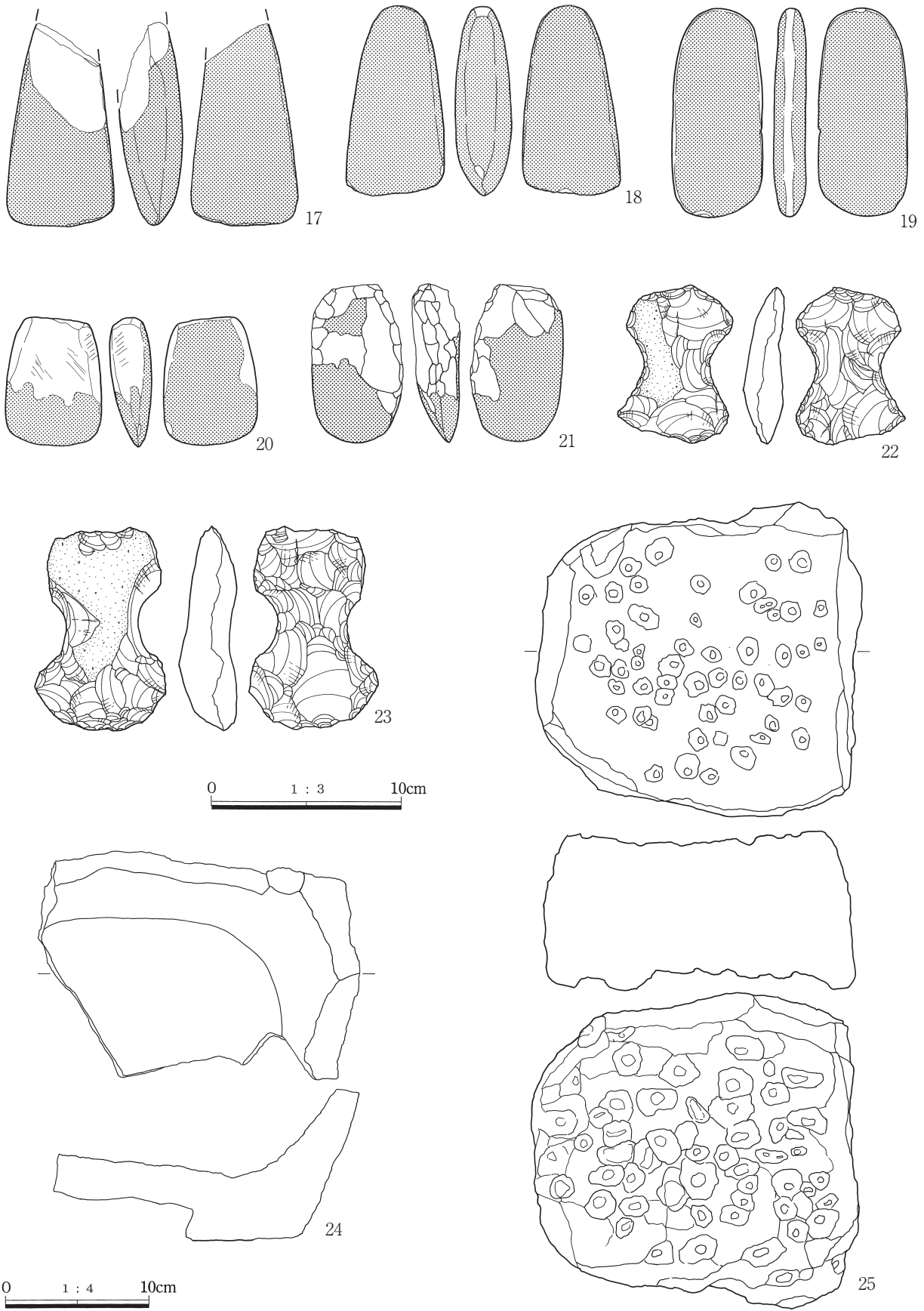


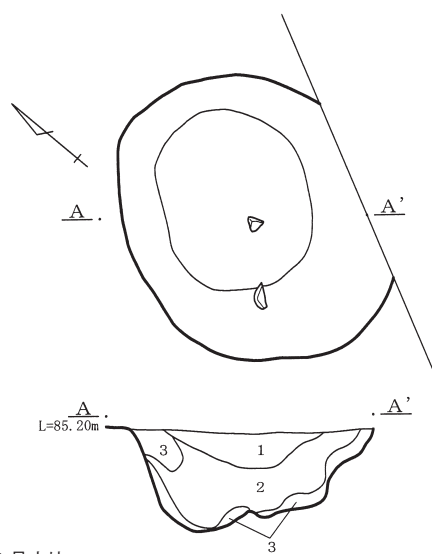
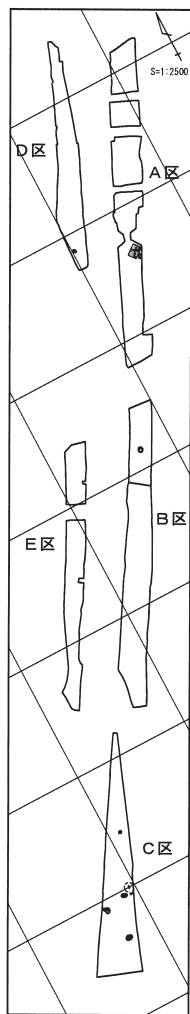
図 17 C区1号住居出土遺物 3



### 3 土坑

#### A区 1号土坑(写真PL.6)

位置 063・-421 グリッド。A区中央の東端部に位置する。検出 ローム層の上面で検出。規模・形状 短軸1.3 m、長軸1.5 m、深さ50cmで、南北にやや長い楕円形状を呈す。底面 小さな起伏があり、平坦ではない。遺物 無し。重複 無し。方位 N-35°-E。時代 覆土の状況から縄文時代と考えられるが、詳細な年代は不明。

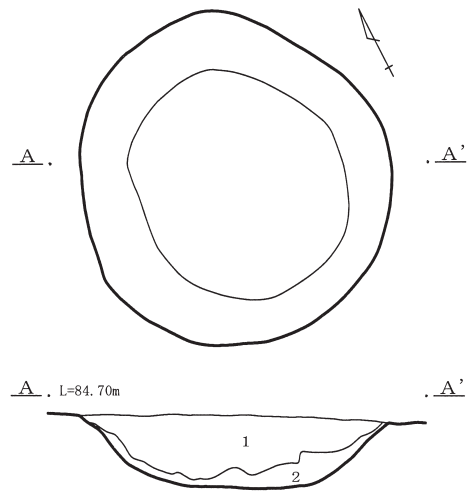


#### A区 1号土坑

- A
- 1 黒褐色土。φ 1～5mm の灰白色軽石を多く含む。
  - 2 黒褐色土。φ 1～2mm の軽石を僅かに含み、褐色土が斑に混ざる。
  - 3 褐色土。φ 1mm の軽石を僅かに含む。

#### B区 1号土坑(写真PL.6)

位置 006・-451 グリッド。B区北側の中央部に位置する。検出 ローム層の上面で検出。規模・形状 直径1.7 m、深さ40cm のほぼ整った円形。底面 平坦で整う。遺物 無し。重複 無し。時代 覆土の状況から縄文時代と考えられるが、詳細な年代は不明。

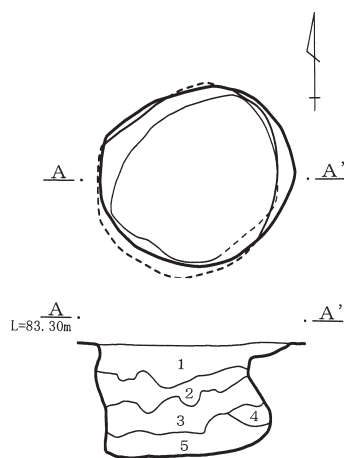


#### B区 1号土坑

- A
- 1 黒褐色土。φ 1～3mm の軽石を多く含み、φ 1～2cm の褐色土を斑点状に含む。
  - 2 褐色土。φ 1mm の軽石を僅かに含む。

#### C区 1号土坑(写真PL.6)

位置 897・-516 グリッド。C区の中央部に位置する。検出 ローム層の上層付近で検出。規模・形状 直径1.0 m、深さ60cm のほぼ円形。断面形状は一部に袋状を呈す部分がある。底面 ほぼ平坦で整う。遺物 無し。重複 無し。時代 覆土の状況から縄文時代と考えられるが、詳細な年代は不明。



#### C区 1号土坑

- A
- 1 黄褐色土。φ 1～2mm の灰白色軽石を多く含む。
  - 2 褐色土。φ 1～5mm の灰白色軽石を多く含む。
  - 3 褐色土。φ 1～2mm の灰白色軽石を多く、φ 10mm の黄褐色土を斑に含む。
  - 4 褐色土。φ 1～2mm の灰白色軽石を僅かに含む。
  - 5 黄褐色土。φ 1mm 以下の極小灰白色軽石を僅かに含む。

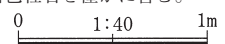
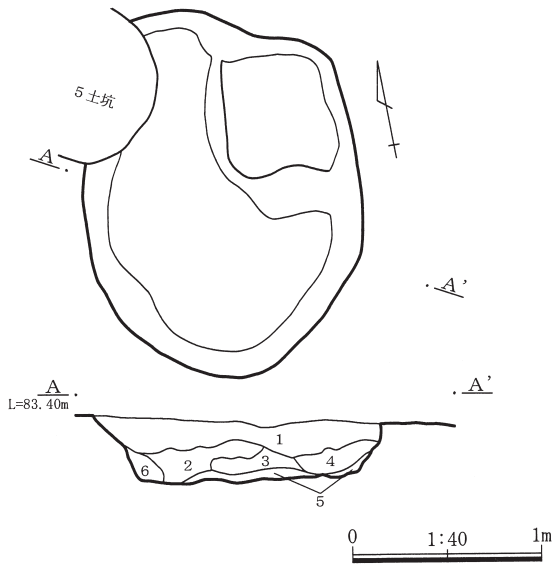


図 18 A区 1号土坑・B区 1号土坑・C区 1号土坑

III 縄文時代の遺構と遺物

C区 2号土坑(写真PL.6・32、遺物観察72頁)

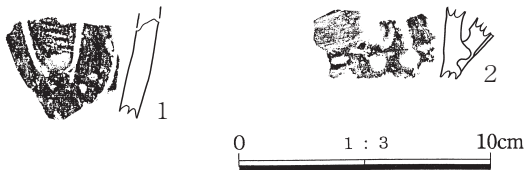
位置 876・-532グリッド。C区南半部の西側に位置する。検出 ローム層の上面で検出。規模・形状 短軸1.5m、長軸2.0m、深さ30cmで、南北にやや長い不整楕円形状。底面 全体に傾斜があり、平坦ではない。遺物 覆土内から縄文土器深鉢の体部・把手破片が出土。重複 C区5号土坑と北西部で重複。新旧関係は不明。方位 N-4°-E。時代 伴出土器の型式から、縄文時代後期初頭と推定。



C区2号土坑

A

- 1 におい黄褐色土。φ 1～2mmの灰白色軽石を非常に多く含む。
- 2 褐色土。φ 1mmの灰白色軽石を多く含む。
- 3 褐色土。φ 1mmの灰白色軽石を多く含む。
- 4 褐色土。φ 1mmの灰白色軽石を多く含む。
- 5 黄褐色土。
- 6 黄褐色土。φ 1mm以下の極小灰白色軽石を僅かに含む。
- 7 褐色土。φ 1mm以下の灰白色軽石を多く、φ 1mmの炭化物を僅かに含む。
- 8 褐色土。φ 1～2mmの灰白色軽石を少量含む。



C区3号土坑

A

- 1 黒褐色土。φ 1～5mmの灰白色軽石を非常に多く含む。
- 2 黒褐色土。φ 1～2mmの灰白色軽石を多く、におい黄褐色土を斑に含む。
- 3 黒褐色土。φ 1～2mmの灰白色軽石を多く、におい黄褐色土を斑に含む。
- 4 暗褐色土。φ 1～5mmの黄橙色軽石を多く、炭化物を少量含む。
- 5 褐色土。φ 1～5mmの灰白色・黄橙色軽石を多く含む。
- 6 褐色土。φ 1～2mmの灰白色・黄橙色軽石を少量含む。
- 7 褐色土。φ 1～2mmの灰白色・黄橙色軽石を多く含む。
- 8 暗褐色土。φ 1mm以下の極小灰白色軽石を僅かに含む。
- 9 褐色土。φ 1mm以下の極小灰白色軽石を僅かに含む。
- 10 褐色土。φ 1mm以下の極小灰白色軽石を僅かに含む。

C区 3号土坑(写真PL.7)

位置 865・-530グリッド。C区南半部の東側に位置する。検出 ローム層の上面で検出。規模・形状 上端部は短軸1.6m、長軸2.2m、底面部は短軸30cm、長軸1.5mで、深さ1.6mの楕円形状。断面は底面上50cm以下が急傾斜となる。底面 平坦で整う。遺物 無し。重複 無し。方位 N-93°-E。時代 覆土の状況から縄文時代と考えられるが、詳細な年代は不明。所見 逆茂木の痕跡は未確認だが、平面及び断面の形状から、陥穴の可能性が高い。

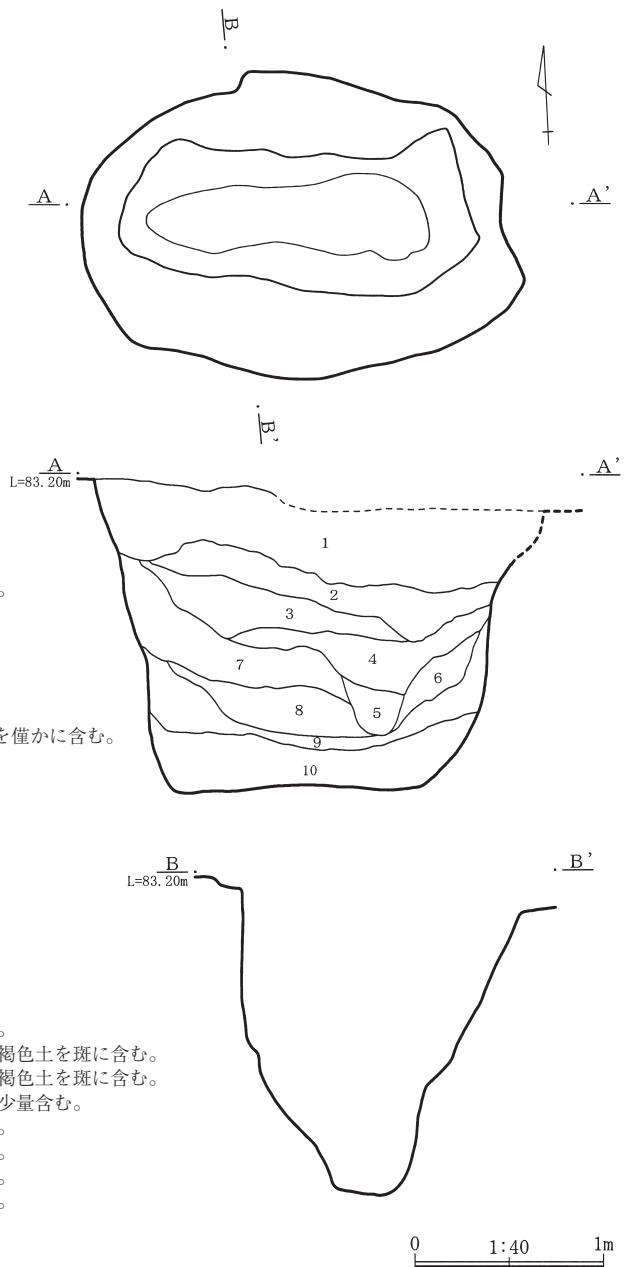


図 19 C区2号土坑・出土遺物・C区3号土坑

C区 4号土坑(写真PL.7・32、遺物観察 72頁)

位置 878・-524グリッド。C区の中央部に位置する。検出 ローム層の上面で検出。規模・形状

上端部は短軸1.3m、長軸2.1m、底面部は短軸40cm、長軸1.5mで、深さ1.1mの楕円形状。断面は底面上50cm以下がやや急傾斜となる。底面平坦で整う。遺物 覆土内から縄文土器深鉢の体部破片が出土。重複 南西部でC区2号墳と重複。方位

N-113°-E。時代 伴出土器の型式から、縄文時代後期初頭と推定。所見 逆茂木の痕跡は未確認だが、平面及び断面の形状から陥穴の可能性が高い。

C区 5号土坑(写真PL.7・32、遺物観察 72頁)

位置 877・-532グリッド。C区南半部の西側に位置する。検出 ローム層の上面で検出。規模・形状

短軸80cm、長軸1.1m、深さ70cmで、南北にやや長い不整円形状。底面 ほぼ平坦で整う。遺物

覆土内から縄文土器深鉢の体部破片、凹石片、削器が出土する他、底面上約10cmの位置から短軸30cm、長軸40cmの角礫が出土。重複 南東部でC区2号土坑と重複。新旧関係は不明。方位 N-143°-E。時代 伴出土器の型式から、縄文時代中期末と推定。

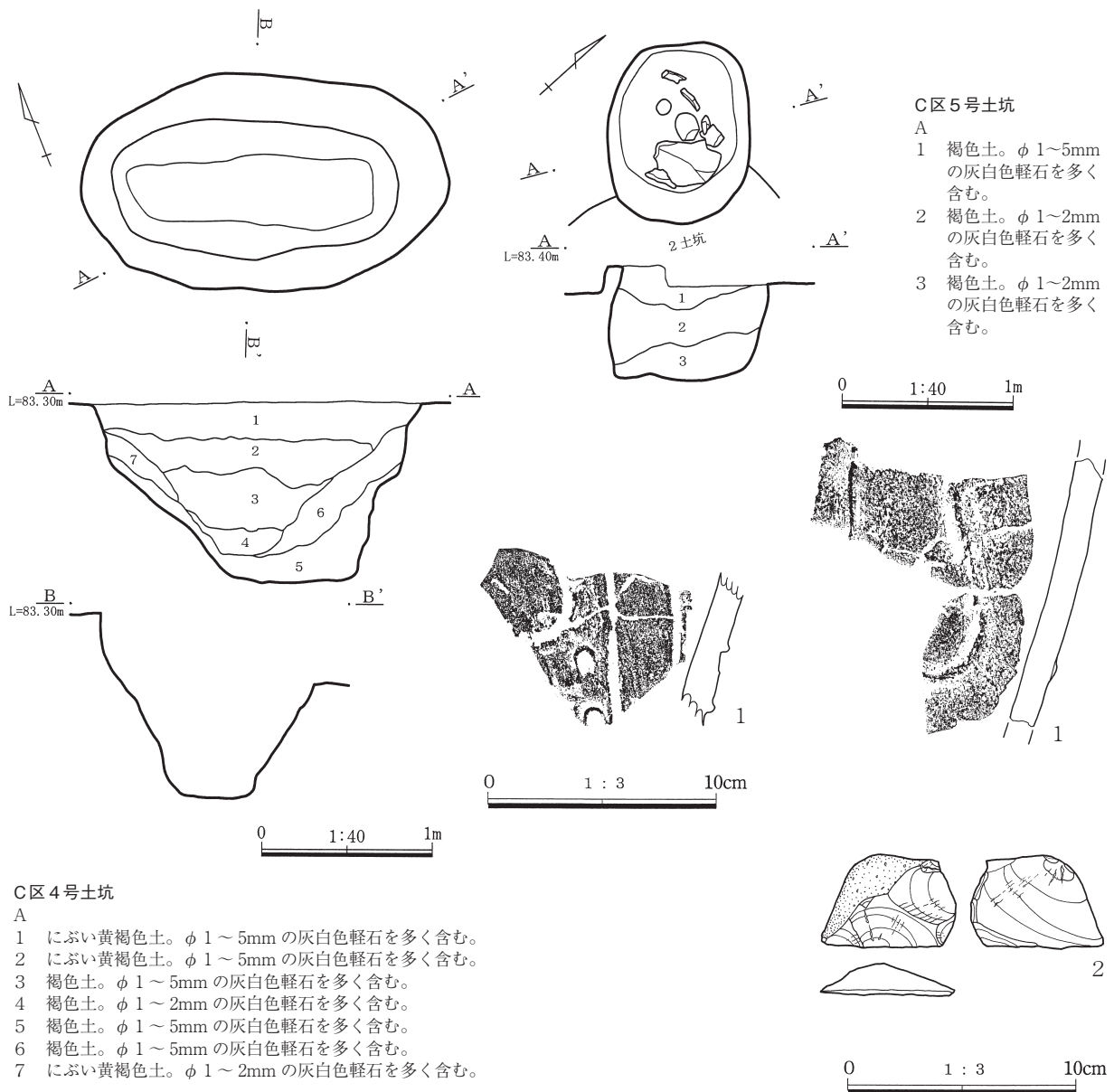


図 20 C区4号土坑・出土遺物・C区5号土坑・出土遺物



III 縄文時代の遺構と遺物

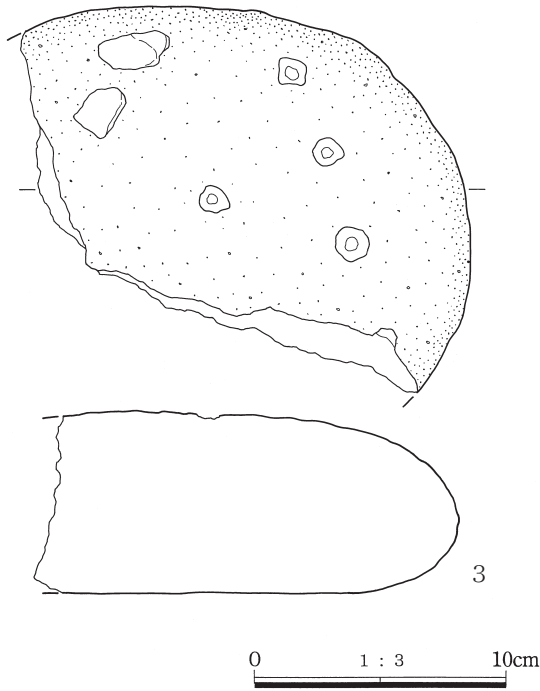


図 21 C区5号土坑出土遺物

4 集石遺構(写真 PL.4・32、遺物観察 72頁)

**位置** 065・-422グリッド。A区の中央部に位置する。**検出** 基本土層Ⅲ～Ⅳ層の黒褐色土及び暗黄褐色土内で検出。Ⅲ～Ⅳ層はローム層より上位で、3世紀後半の浅間C軽石(As-C)を含む黒色土の下位に位置する。**規模・形状** 主として直径2mほどの範囲に、5～15cm大の河原石が集中的に分布し、少量の縄文土器片が混じる。河原石の垂直分布は、

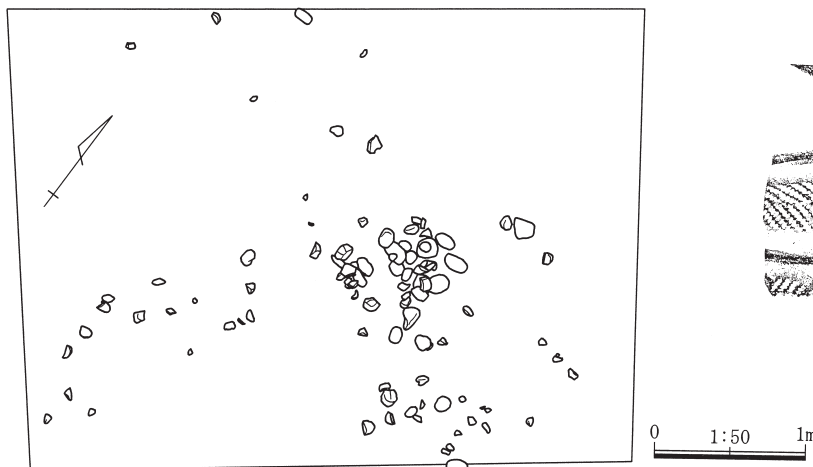
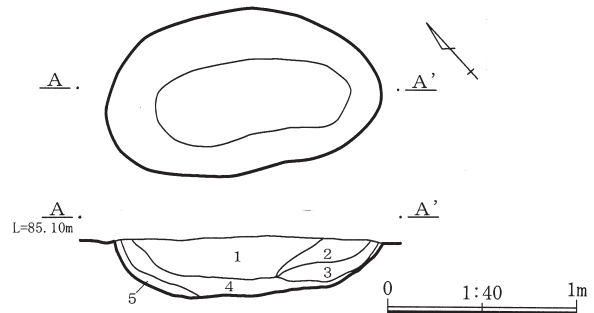


図 23 A区集石遺構・出土遺物

D区 1号土坑(写真 PL.7)

**位置** 074・-439グリッド。D区の南端部に位置する。**検出** ローム層の上面付近で検出。**規模・形状** 短軸0.9m、長軸1.5m、深さ30cmの楕円形状。**底面** ほぼ平坦で整う。**遺物** 無し。**重複** 無し。**方位** N-126°-E。**時代** 覆土の状況から縄文時代と考えられるが、詳細な年代は不明。

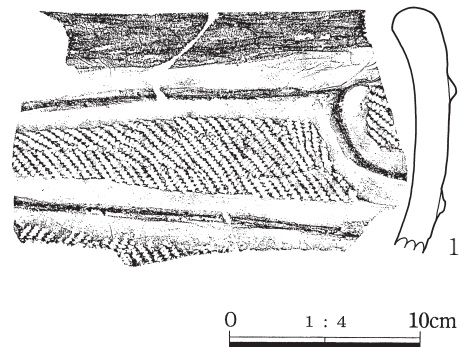


A

- 1 黒褐色土。φ1～5mmの褐色・灰色軽石、ローム粒を含む。
- 2 暗茶褐色土。φ1～5mmの褐色・灰色軽石、ローム粒を含む。
- 3 暗黄褐色土。ロームブロックを多く含む。
- 4 暗黄褐色土。ロームを主体。
- 5 黄褐色土。ロームを主体。

図 22 D区1号土坑

標高85m前後の高さ約20cmの範囲に収まるが、規則的な配置は見られない。**遺物** 縄文土器深鉢の口縁部破片が出土するが、この遺構に共伴するか否かは不明。**重複** A区1号溝と重複。集石遺構→A1溝の順で新しい平面精査の所見を得た。**時代** 伴出土器の型式から、縄文時代中期後半の可能性が考えられるが詳細な年代は不明で、その性格も不明。



## IV 古墳時代の遺構と遺物



調査区遠景（B区，北から，手前からB区2・3・4号墳、1号溝）

調査原因が道路の拡幅事業であることから、現道に沿った両側の幅約10mの範囲が調査対象地となった。このため、全形を確認できた古墳は皆無だが、一方で長さ300mにわたって古墳の分布状況が明らかとなり、同事業で既に発掘調査されている北側の上植木光仙房遺跡を含めると、その長さは800m以上にも及ぶ。



## IV 古墳時代の遺構と遺物

### 1 概要

この遺跡における古墳時代の遺構は、前期に属す6基の方形周溝墓と、後期に属す20基の古墳である。調査時に墳丘の高まりが遺存していた箇所は、伊勢崎市教育委員会が発掘調査した一ノ関古墳(『上毛古墳綜覧』殖蓮村71号墳)を除いてまったく存在せず、調査区域のほぼ全域がローム層の上面付近まで削平されており、調査面はローム層の上面付近で、主として周溝及び周堀のみの調査となった。

前期の方形周溝墓は、全調査区域北側のA・D区にのみ分布し、周溝が近接するものの明らかな重複関係にあるものはない。一方、後期の古墳は調査区域のほぼ全域に分布し、一部に周堀が近接したものが存在するものの、これらも重複したものはない。方形周溝墓が調査区域の一部に集中して分布するのに対して、古墳はほぼ全域に分布して、両者は対照的な分布状況を示す一方で、方形周溝墓が占地する一画には古墳が立地しないという特徴をも示す。

前期の方形周溝墓で、主体部を確認したものは皆無である。一方、後期の古墳では、20基のうちの7基から主体部を確認した。確認した主体部は、横穴式石室のA区1号墳を除く6基が竪穴系で、これらは小石槨をもつものが2基、粘土床を施すものが2基、木棺直葬と考えられるものが2基である。

調査区域が現道に沿った両側の拡幅部であることから、方形周溝墓、古墳ともにその全体を確認し得たものはない。確認した範囲から推定する古墳周堀の内径規模は、最小のものが5.0mで、最大のものが16.3mである。周堀からの出土遺物は概して少なく、その詳細な年代判定が難しい。また、埴輪を樹立していたと考えられるのは、規模が最大のC区1号墳のみで、C区2号墳の主体部から出土した「赤玉」は、今のところ周辺の古墳群も含めて類例がない。なお、前期・後期ともに墳墓が分布するのみで、古墳時代の竪穴住居は存在しない。



図 24 古墳時代の遺構分布図



2 古墳

A区 1号墳(写真PL.8)

位置 078・-422グリッド。A区中央部の西端に位置し、石室のみをほぼ全掘。墳丘 ほぼローム層の上面まで削平されて確認できず、葺石、埴輪列も確認できない。周堀 調査区域内を精査したが確認

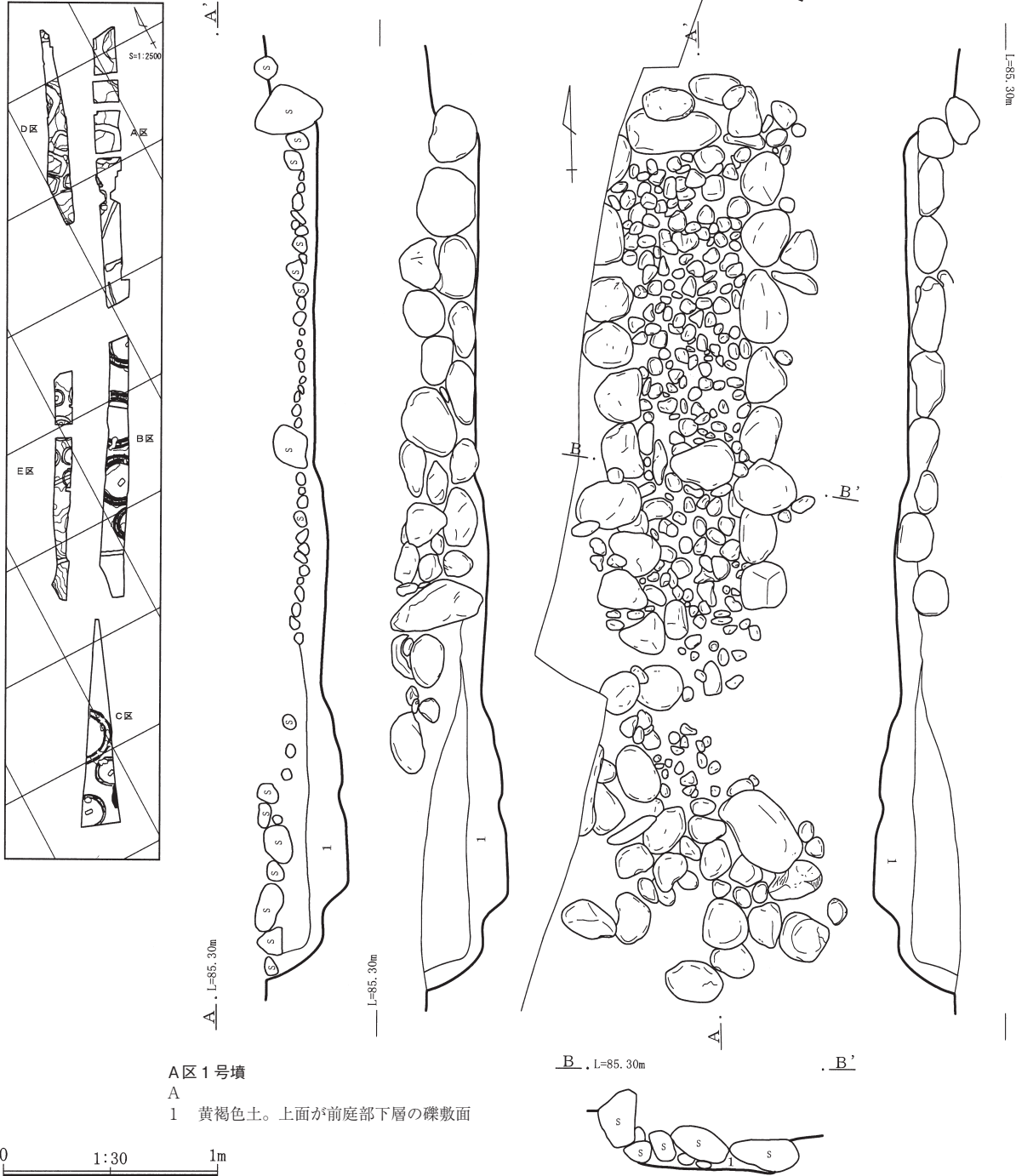


図25 A区1号墳主体部

#### IV 古墳時代の遺構と遺物

できず、したがって古墳の規模は不明。主体部 南方向に開口する、自然石乱石積みの無袖型横穴式石室。石室の床面はローム層中に位置する。この古墳の北東約50 mに位置するA区2号墳の東壁土層断面から、当時の旧地表面に近い浅間C軽石(As-C)を含む黒色土層は、ローム層上面より40cmほど上位に位置する。したがって、石室の高さは不明だが、旧地表面より下位に石室が位置する「地下式」または「半地下式」の構造と推定。羨道部右壁の一部を除いて根石列が遺存し、羨道から玄室の左壁側はほぼ二段目までが遺存。石室は全長2.4 m、玄室長1.5 m、羨道長0.9 m、玄室の最大幅60cm、羨道の最大幅50cm。羨道部の手前には上幅60cm、下幅1.5 m、長さ1.3 mほどの台形状に雑な石敷きを施した前庭状の施設をもつ。全体に河原石を主体とした自然石で構成され、羨道から玄室にかけての床面は、ローム層を15cmほど掘り込み、厚さ5cmほどの盛土で整えた面に拳大の玉石を敷き、その後に梱石を置いて羨道と玄室を区画する。羨道は右壁の前側が削平されているが、長さ90cm、幅40cmの長方形。4石の河原石で構成し、最奥のものは他より大きな長さ30cm大のものを小口を内側にして据えるため、石室の外側の線がこの部分だけ突出する形となる。閉塞の状況は不明。玄室は長さ1.5 m、前幅50cm、中央部幅55cm、奥幅60cmで、奥幅がやや長い長方形。根石は20～35cm大の河原石5石を、横口面を内側にして据える。左壁側は、床面から30cmの高さが遺存。奥壁は中央部に長さ45cmの河原石を横口面を内側にして据え、その両側に長さ20cmの河原石を石室を閉じる形で置く。掘方は羨道から玄室にかけての部分が長軸2.8 m、短軸1.1 m、確認面からの深さ15cmで、全体にほぼ平坦。掘方の壁面にはほぼ沿う位置に根石を据え、石室の全体に裏込めがない。前庭状の部分は直径1.2 m、確認面からの深さ30cmの不整円形状に掘り込み、最深部では羨道部・玄室部より15cmほど深い。この底面を厚さ10cmほどの黄褐色土で埋め戻した後に拳大の玉石を敷き、さらにこの上位に15～20cm大の河原石を、

平坦面を上にして雑に敷く。したがってこの面のレベルは、羨道部・玄室部の床面より5～10cmほど高くなる。なお、石敷きの上面は平坦ではなく、中央部が僅かに窪んでいるが、これは土坑状の掘り込みがその後に沈下した可能性も考えられる。軸線方位 N-1°-W。出土遺物 無し。年代 出土遺物が皆無で詳細は不明だが、石室の形状から6世紀前半と推定。所見 石室の床面がローム層中に位置し、石室が当時の旧地表面より下位に位置する「地下式

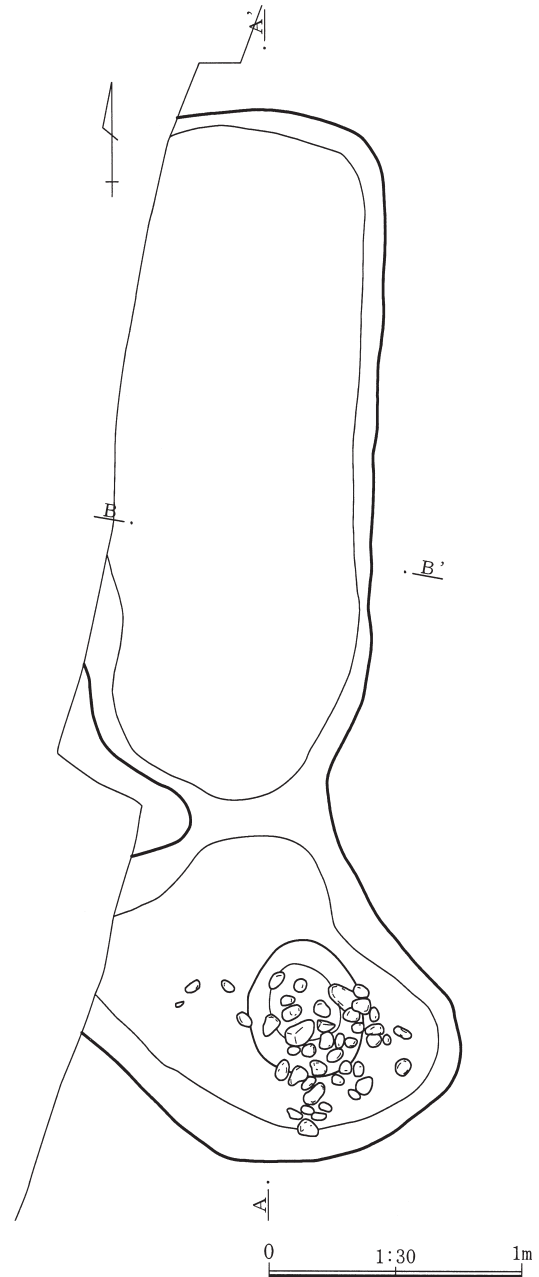


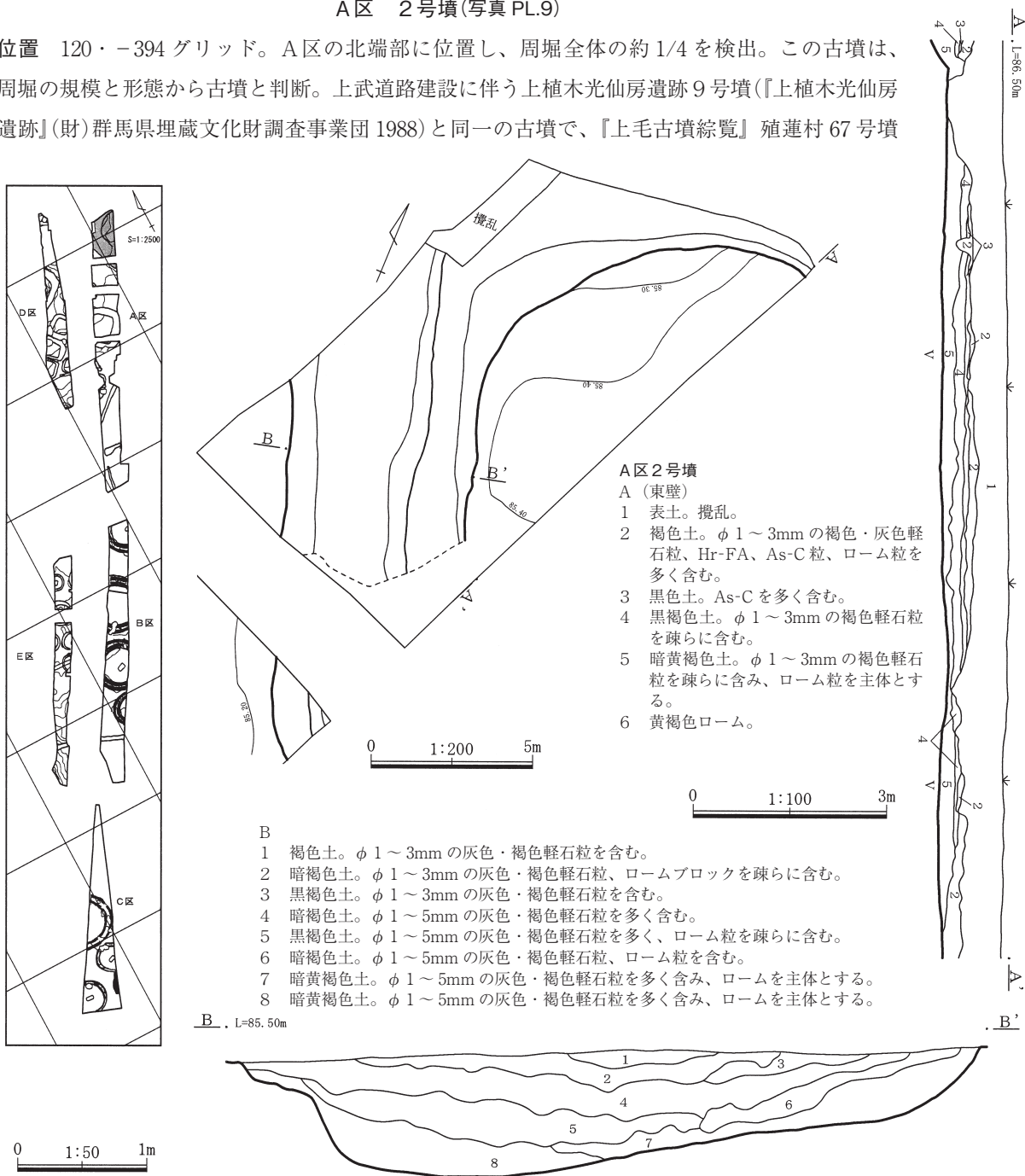
図26 A区1号墳主体部掘方

」または「半地下式」の構造で、石室の裏込めがなく、前庭状の施設を伴う古墳。同様に「地下式」または「半地下式」で石室の裏込めがなく、前庭状の施設を伴う古墳は、上武道路建設に伴う上植木光仙房遺跡1号墳に認められ、この古墳でも全周する周堀は確認されていない(『上植木光仙房遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1988)。但し、上植木

光仙房遺跡1号墳は、前庭状の施設の掘方内に特別な構造が認められなかったことから、前庭部は素掘りとの解釈をしている。これに対してこの古墳は前庭部に相当する部分を掘り込み、この底面を黄褐色土で埋め戻した後に玉石を敷き、さらにこの上位には台形状に河原石を並べて敷いていることから、その構造には違いが認められる。

A区 2号墳(写真PL.9)

位置 120・-394グリッド。A区の北端部に位置し、周堀全体の約1/4を検出。この古墳は、周堀の規模と形態から古墳と判断。上武道路建設に伴う上植木光仙房遺跡9号墳(『上植木光仙房遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1988)と同一の古墳で、『上毛古墳総覧』殖蓮村67号墳





#### IV 古墳時代の遺構と遺物

に相当する可能性が高い。**墳丘** 東壁の土層断面において、浅間C軽石(As-C)を含む黒色土の上位に位置する2層は、ロームブロックを含むことから墳丘の盛土の可能性が高い。葺石、埴輪列は確認できない。**周堀** 全形の北西部1/4ほどを確認。検出面で上幅5.8m、下幅約3.0m、深さ1.0m。全体に方形を呈す。確認した周堀の規模から、内径約15m、外径約27mの円墳と推定。**主体部** 調査区域外で未確認。**出土遺物** 無し。**年代** 伴出遺物が皆無で

詳細な年代は不明だが、墳丘の盛土と考えられる2層に6世紀初頭の榛名二ツ岳渋川テフラ(Hr-FA)を含むことから、6世紀初頭以降と判断。**所見** 上幅5.8mで内径約15mと推定される周堀をもつ、この古墳群の円墳では三番目に大きな古墳。この古墳が『上毛古墳総覧』殖蓮村67号墳であるとすれば、記載された墳丘の高さは6尺(1.8m)となり、6世紀初頭以降と判断される年代を考慮すると、主体部は横穴式石室である可能性が高い。

#### A区 3号墳(写真PL.9)

**位置** 070・-425グリッド。A区中央部の西端に位置し、周堀全体の約1/3を検出。**墳丘** ローム層の上面まで削平されて確認できず、葺石、埴輪列も確認できない。**周堀** 全形の東側1/3ほどを確認し

たが、西側の大半が調査区域外のため、全幅を確認できたのは南側の一部のみ。検出面で上幅約2.0m、下幅約60cm、深さ約50cm。確認した周堀の規模から内径6.8m、外径約11.5mの円墳と推定。**主体部** 調査区域外で未確認。**出土遺物** 無し。**年代** 不明。**所見** 周堀の規模から、主体部は縦穴系の可能性が高い。

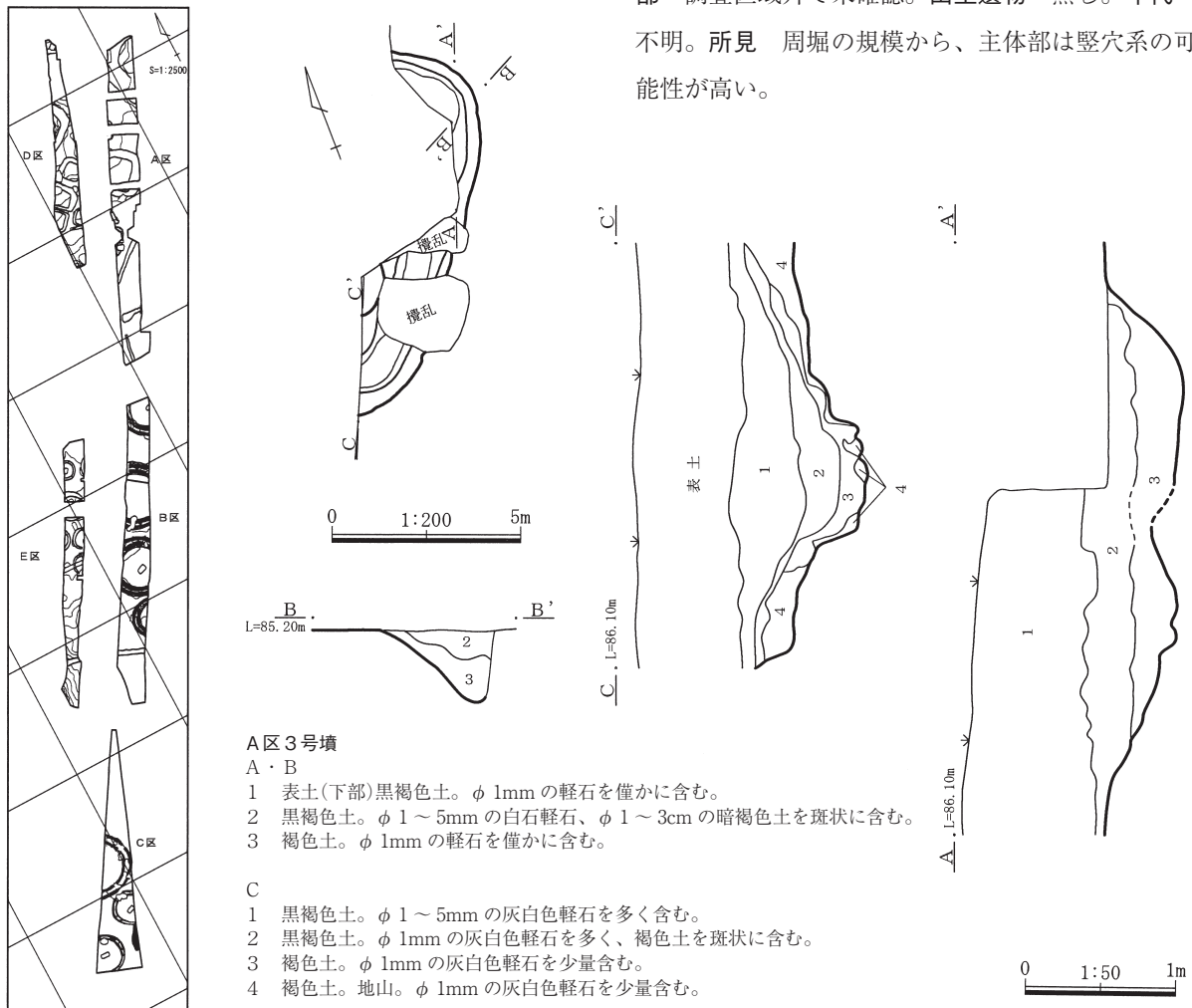


図28 A区3号墳

## A区 4号墳(写真PL.10・32、遺物観察72頁)

位置 044・-431グリッド。A区南側の中央部に位置し、周堀の北辺の一部を検出。墳丘 ローム層の上面まで削平されて確認できず、葺石、埴輪列

も確認できない。周堀 検出面で最大上幅約2.5m、最大下幅約1.5m、深さ15cm。北辺の一部と考えられるが、確認した周堀の範囲からでは規模の推定が不可能。主体部 未確認。出土遺物 周堀の底面付近から土製紡錘車が出土するが、年代を判定できる遺物は皆無。年代 不明。所見 確認した範囲が周堀の一部であることから古墳の規模は不明だが、確認されていない周堀の南辺が仮に南側の調査区域外に出るとすればその内径は15m前後となり、この古墳群の円墳では最大級に属することになる。また、『上毛古墳総覧』殖蓮村69号墳に相当する可能性がある。

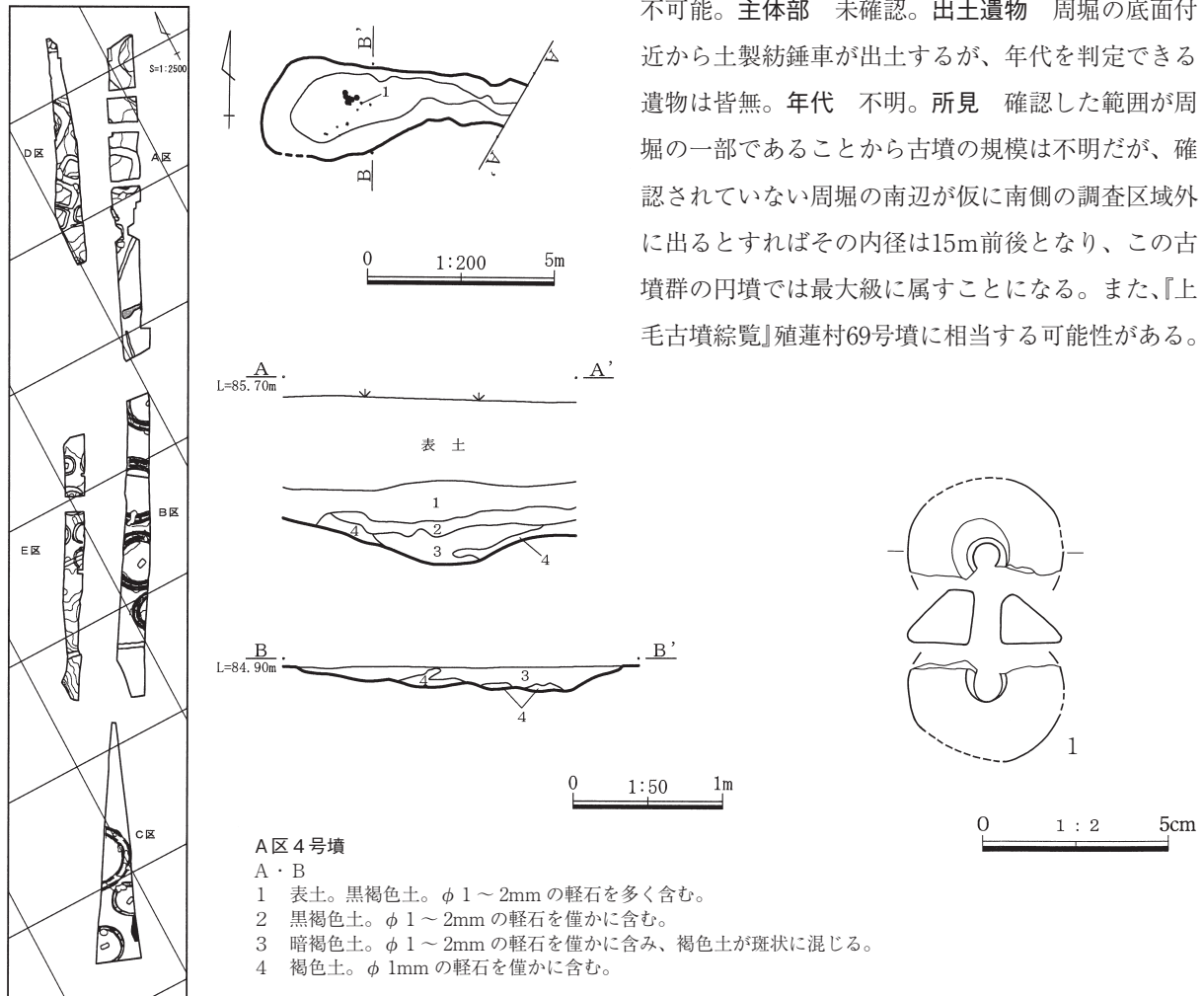


図29 A区4号墳・出土遺物

## B区 1号墳(写真PL.11・32、遺物観察72頁)

位置 017・-442グリッド。B区の北端部に位置し、周堀全体の約1/6を検出。墳丘 ローム層の上面まで削平されて確認できず、葺石、埴輪列も確認できない。周堀 全形の南西部1/6ほどを確認。検出面で上幅3.0m、下幅1.0m、深さ80cm。墳丘部側は底面からほぼ中位までが比較的急勾配で、中位以上は緩やかに立ち上がる。一方、外側は約40°のほぼ一定した勾配で立ち上がる。周堀南端部の外側に幅50cm、深さ40cm、確認した長さ1.6mの周堀

に沿った掘り込みを確認。土層断面からこの周堀と同時かそれ以前であるが、性格は不明。確認した周堀の規模から内径11.0m、外径17.5mの円墳と推定。主体部 墳丘部のほぼ中央と想定される位置に土坑を検出。土坑の東側が調査区域外で全形は不明だが、掘方は長軸を東西方向にもち、短軸1.4m、長軸1.9m以上、深さ80cmの長方形で、長軸の方位はN-80°-E。底面には長軸に沿った中央部の幅50cmの範囲に白色粘土を敷いた粘土床を施し、おそらくそ

IV 古墳時代の遺構と遺物

の上に木棺を設置した可能性が高く、その中央部の幅 30cm の範囲が周囲より 10cm ほど窪んだ状態で出土。木棺そのものの痕跡はなく、褐色土を充填して土坑を閉塞。出土遺物 周堀南端部の覆土内から土師器坏破片が出土。年代 周堀内から出土した土

師器坏から、6 世紀中葉の可能性はある。所見 この古墳群で確認した 6 基の竖穴系主体部のうち、粘土床を施す 2 基のうちのひとつの古墳。埋葬施設はおそらく木棺と推定。また、『上毛古墳綜覧』殖蓮村 52 号墳に相当する可能性が高い。

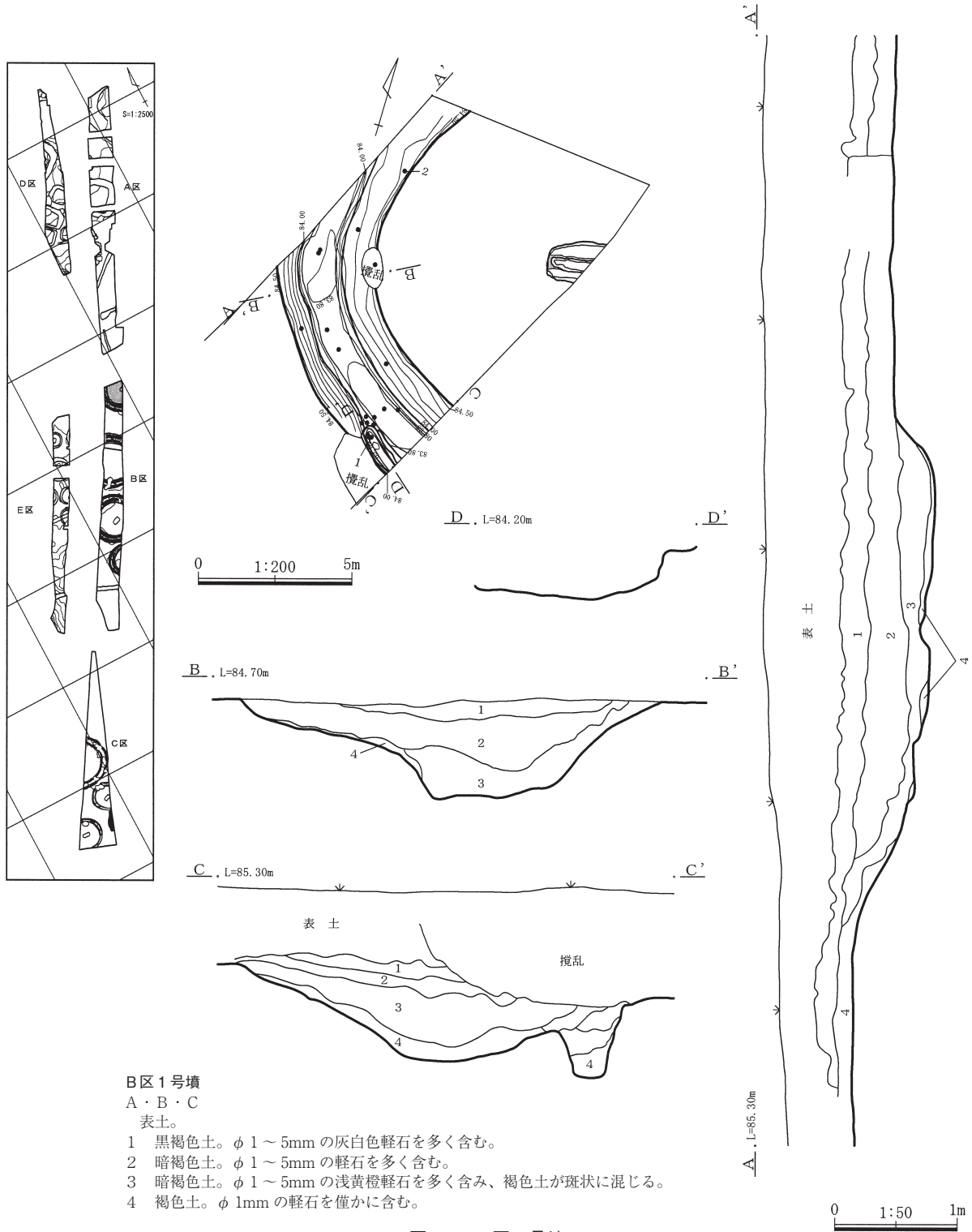


図 30 B区1号墳



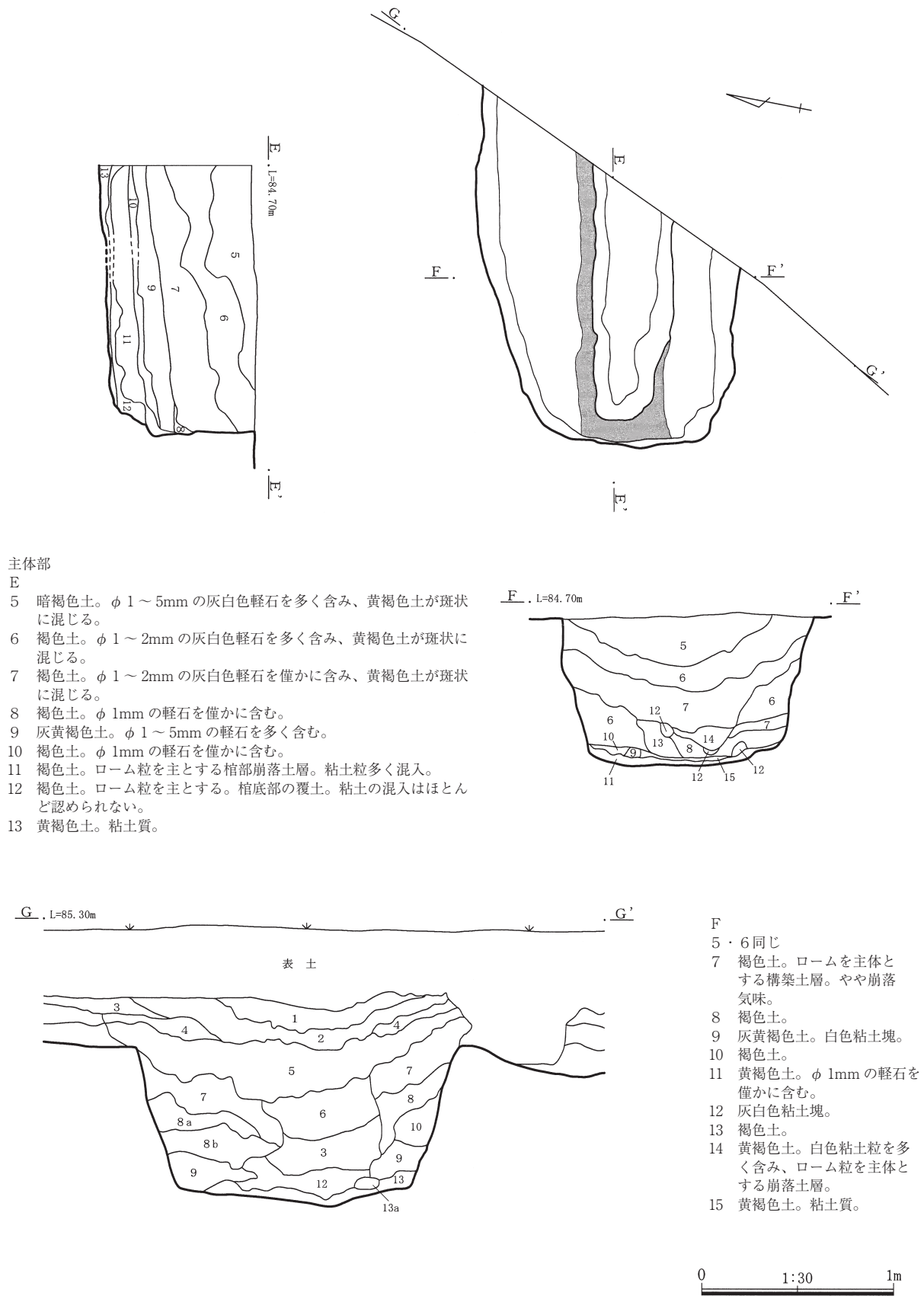
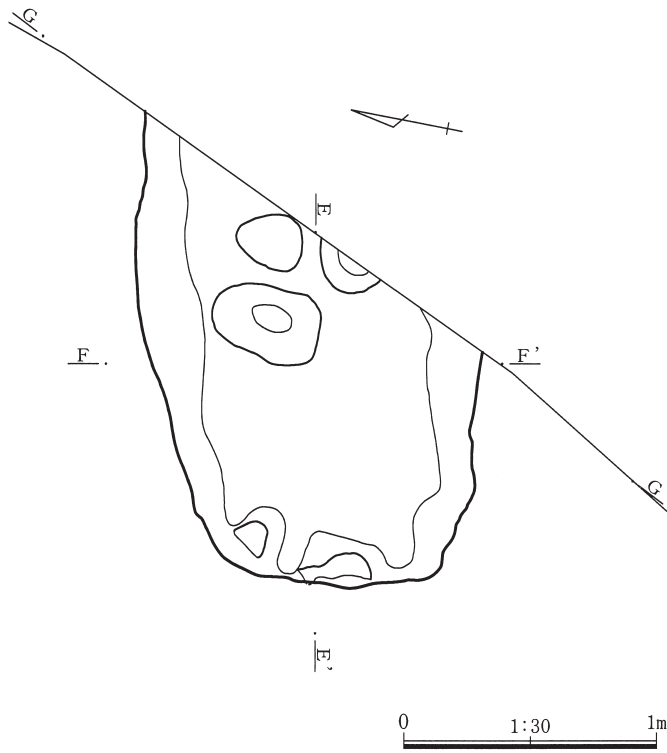


図 31 B区1号墳主体部

IV 古墳時代の遺構と遺物



- G
- 1 黄褐色土。ロームブロック主体。φ 1～2mm の灰白色軽石を多く、炭化物を少量含む。
  - 2 黄褐色土。ロームブロック主体。φ 1～5mm の灰白色軽石を多く、炭化物を少量含む。
  - 3 褐色土。φ 1～2mm の灰白色軽石を多く、炭化物を少量含む。
  - 4 褐色土。φ 1～2mm の灰白色軽石を多く、炭化物を少量含む。
  - 5 暗褐色土。φ 1～5mm の灰白色軽石を多く含む。
  - 6 褐色土。φ 1mm 以下の極小灰白色軽石を僅かに、φ 10～20mm の黄褐色土を斑状に含む。
  - 7 褐色土。φ 1～5mm の灰白色軽石を多く、炭化物を僅かに含む。
  - 8 褐色土。φ 1mm 以下の極小灰白色軽石を僅かに含む。
  - 8a 褐色土。φ 1mm 以下の極小灰白色軽石を僅かに含む。
  - 8b 褐色土。φ 1mm 以下の極小灰白色軽石を僅かに含む。
  - 9 褐色土。φ 1mm 以下の極小灰白色軽石を僅かに含む。
  - 10 褐色土。φ 1mm 以下の極小灰白色軽石を僅かに、φ 10～20mm の黄褐色土を斑状に含む。
  - 11 褐色土。φ 1mm 以下の極小灰白色軽石を僅かに、φ 10～20mm の黄褐色土を斑状に含む。
  - 12 におい黄褐色土。φ 1mm 以下の極小灰白色軽石を僅かに含む。
  - 13 黄褐色土。φ 1mm 以下の極小灰白色軽石を僅かに含む粘質土。
  - 13a 灰黄褐色土。灰白色粘土塊。

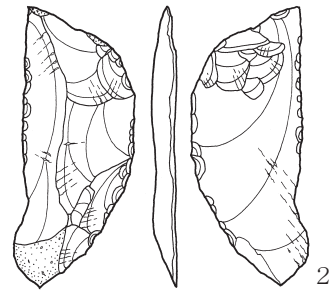
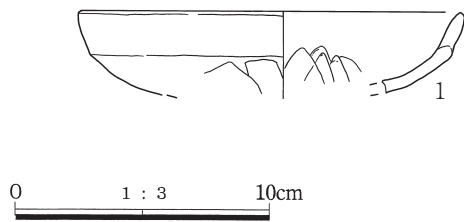


図 32 B区1号墳主体部掘方・周堀出土遺物

B区 2号墳(写真 PL.12・32、遺物観察 73頁)

**位置** 992・-459グリッド。B区の中央部に位置し、二か所で周堀全体の約1/4を検出。**墳丘** ローム層の上面まで削平されて確認できず、葺石、埴輪列も確認できない。**周堀** 全形の北東部と南西部の二か所、合わせて1/4ほどを確認。検出面で上幅3.0～4.0m、下幅0.7～1.3m、深さ1.1～1.2m。北側の周堀が南側よりやや広い。墳丘部側は底面からほぼ中位までが比較的急勾配で、中位以上は緩やかに立ち上がる。一方、外側は約45°のほぼ一定した勾配で立ち上がる。確認した周堀の規模から内径15.2m、外径22.0mの円墳と推定。**主体部** 未確認。**出土**

**遺物** 南西部周堀の覆土内から土師器坏破片が出土する他、周堀覆土内から鉄環が出土するがこれは性格不明。**年代** 周堀内から出土した土師器坏から、6世紀中葉の可能性がある。**所見** 確認した周堀から推定する内径15.2mは、発掘調査したこの古墳群の円墳のなかで二番目に大きな規模となる。周堀の上幅は南辺より北辺が1mほど広く、この傾向は隣接するB区3号墳でも同様に認められる。主体部は確認できないが、規模と年代が比較的近似するB区3号墳が木棺直葬であることから、おそらく堅穴系の埋葬施設であった可能性が考えられる。

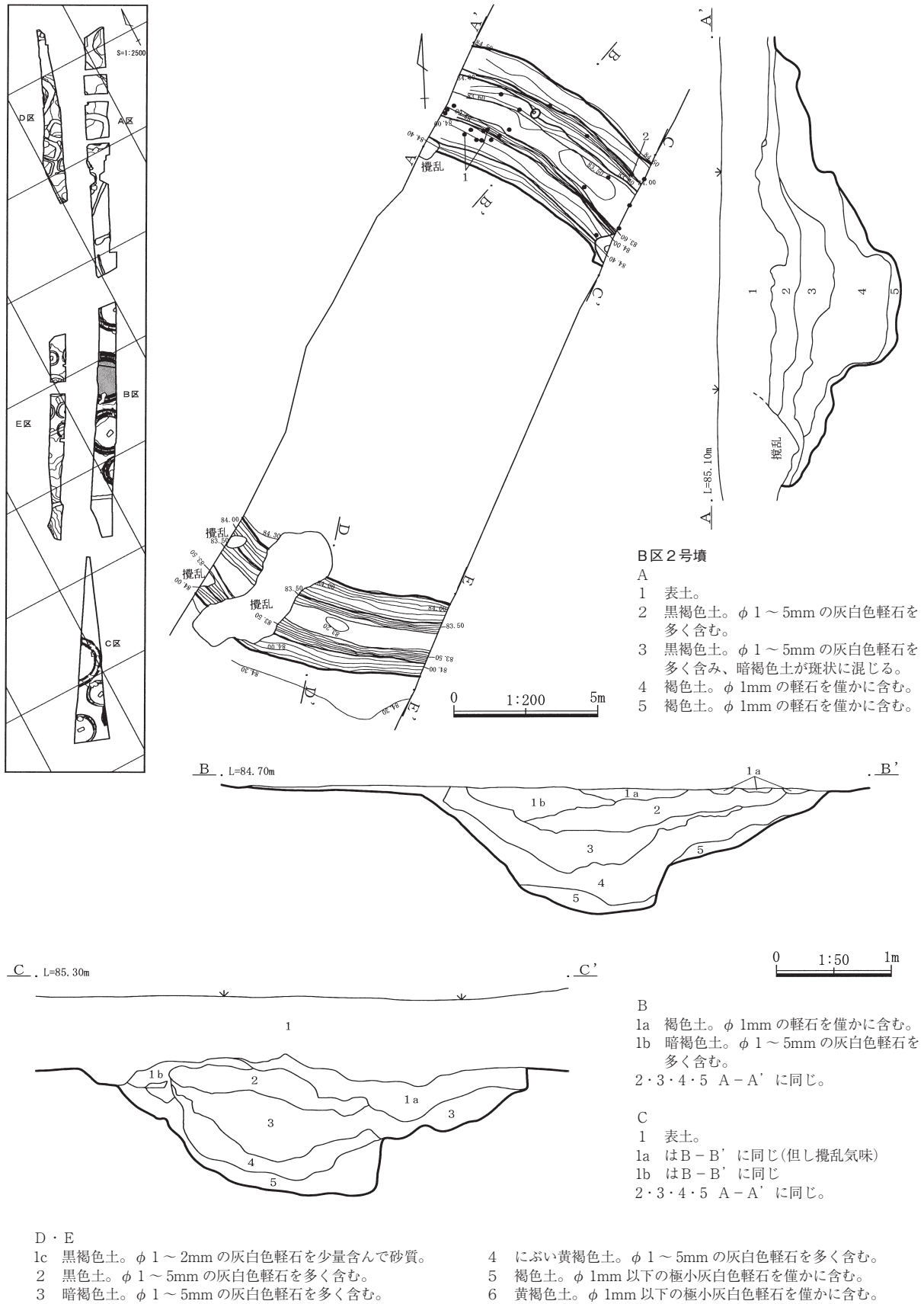


図 33 B区2号墳



IV 古墳時代の遺構と遺物

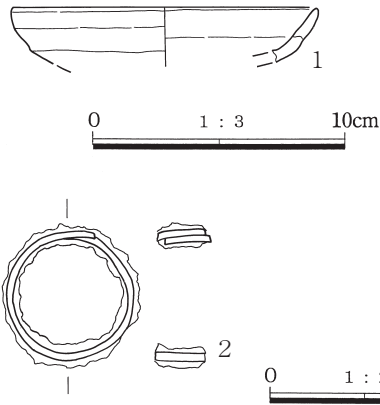


図34 B区2号墳周堀出土遺物

B区 3号墳(写真PL.12・13・32、遺物観察73頁)  
位置 970・-470グリッド。B区の中央部に位置し、  
二か所で周堀全体の約1/3を検出。墳丘 ローム層  
の上面まで削平されて確認できず、葺石、埴輪列も  
確認できない。周堀 全形の北東部と南西部の二か

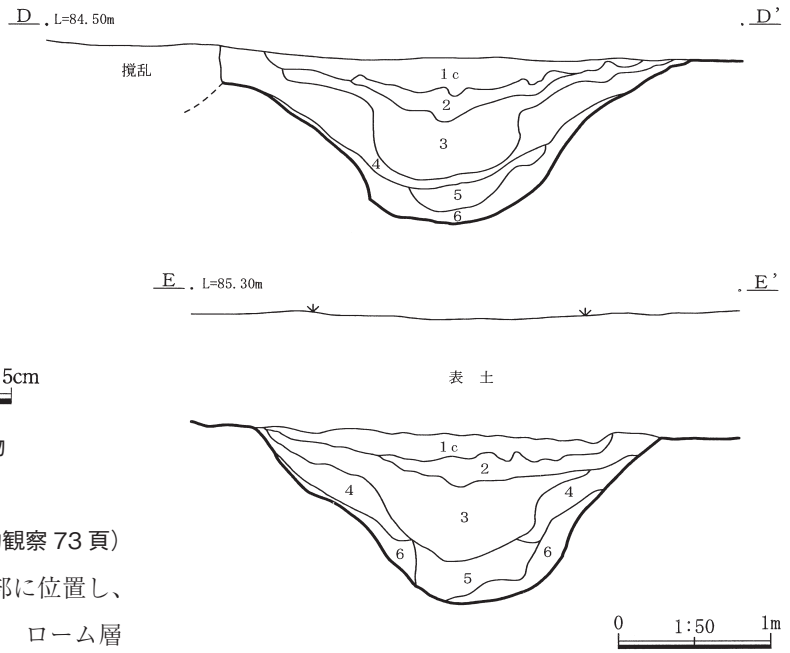
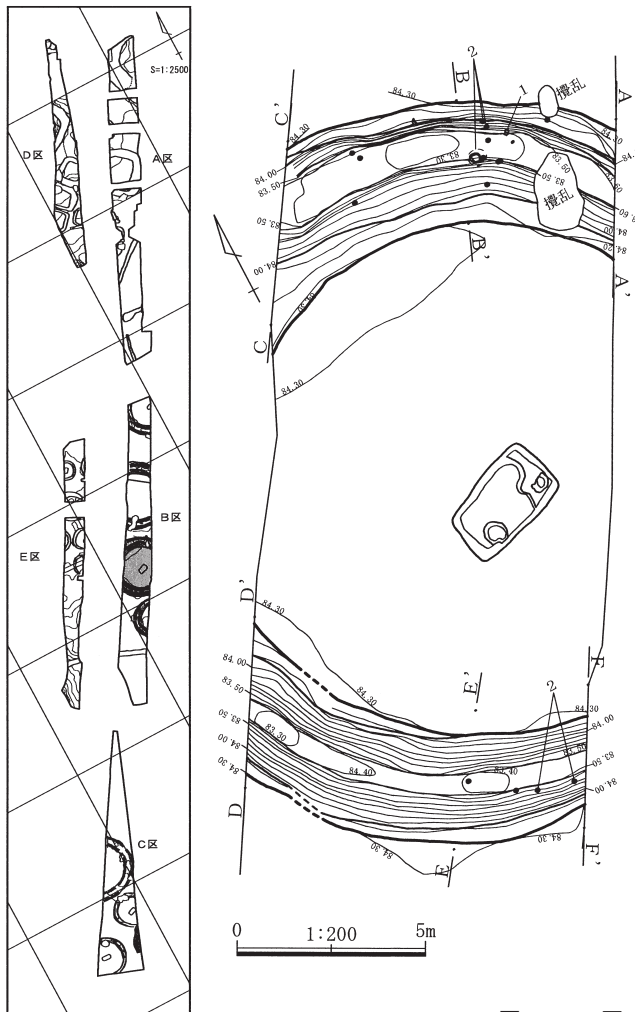


図35 B区2号墳



B区3号墳

A・B・C

- 1a 暗褐色土。
- 1b 暗褐色土。φ5cmのブロック状にAs-Bを含む。
- 2 黒褐色土。
- 3 黒褐色土・暗褐色土の混土層。φ1~2mmの浅黄  
橙色軽石を僅かに含む。
- 4 暗褐色土。φ1~3mmの浅黄橙色軽石を含む。
- 5 暗褐色土。ローム粒多く含む。
- 6 褐色土。ロームブロック多く含む。
- 6a 褐色土。φ5~10cmのロームブロックを多く含む。
- 6b 褐色土。ロームブロック僅かに含む。
- 7 暗褐色土。

図36 B区3号墳

所、合わせて1/3ほどを確認。検出面で上幅2.8～3.2 m、下幅0.5～0.8 m、深さ0.9～1.5 m。概して墳丘部側は底面からほぼ中位までが比較的急勾配で、中位以上は緩やかに立ち上がる。一方、外側は約40～50°のほぼ一定した勾配で立ち上がる。確認した周堀の規模から内径13.7 m、外径19.7 mの円墳と推定。主体部 墳丘部の中央よりやや南側と想定される位置に土坑を検出。土坑は掘方が長軸を東西方向にもち、短軸1.8 m、長軸2.9 m、深さ70 cmの長方形で、長軸の方位はN-70°-E。底面にB区1号墳のような粘土が全く見られないことから、埋

葬施設は木棺直葬と考えられる。木棺そのものの痕跡はなく、ロームブロックを多量に含む褐色土を充填して土坑を閉塞。出土遺物 周堀北東部中央の底面上28 cmから土師器壺がほぼ完形で出土する他、周堀の底面直上から円筒埴輪の基部破片が出土。年代 周堀内から出土した土師器壺及び円筒埴輪片から、6世紀中葉と推定。所見 この古墳群で確認した6基の堅穴系主体部のうち、埋葬施設が木棺直葬と考えられる唯一の古墳。隣接するB区2号墳に周堀の形状や、推定される内径の規模が近似し、年代も比較的近接したものと考えられる。

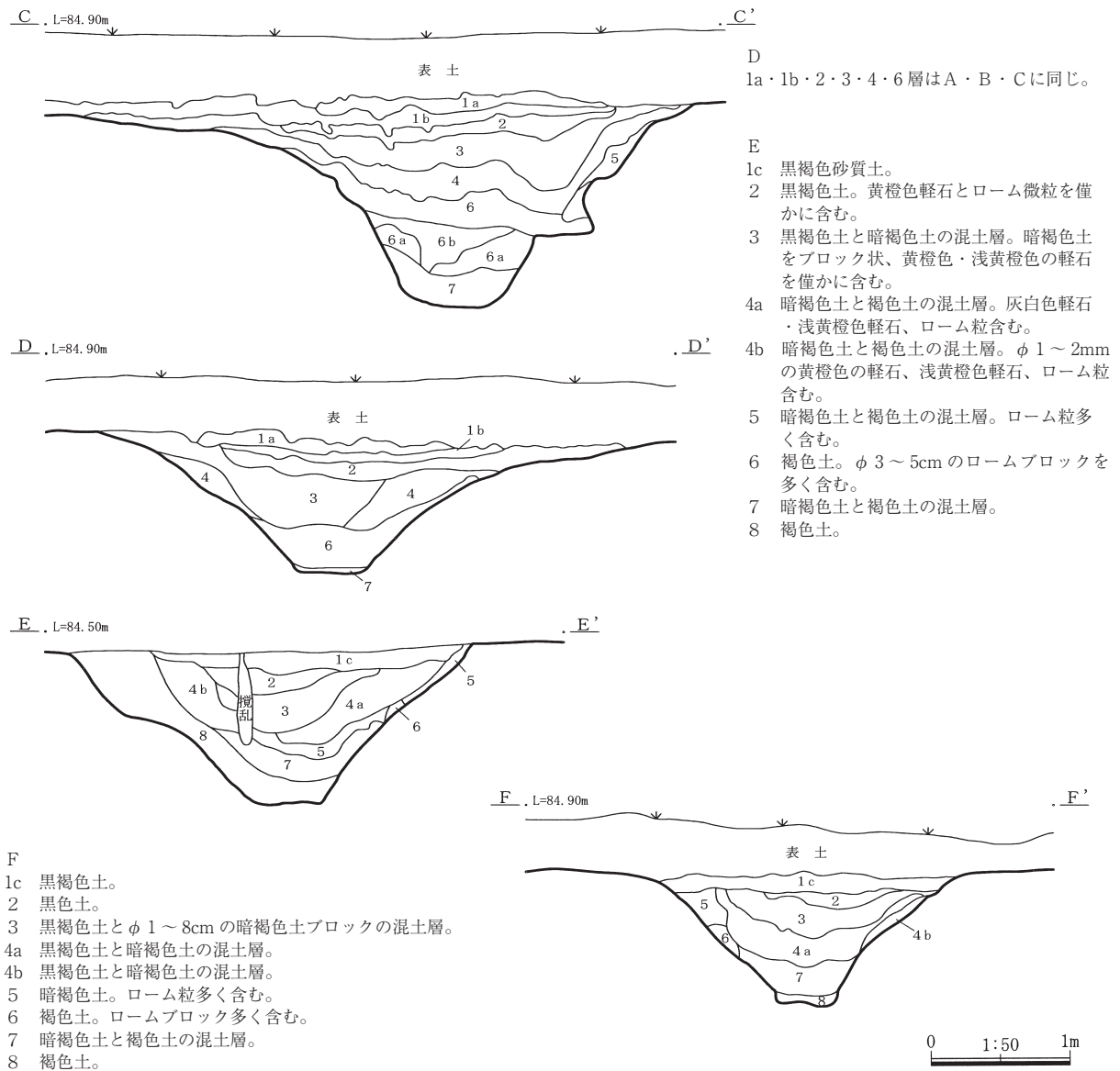
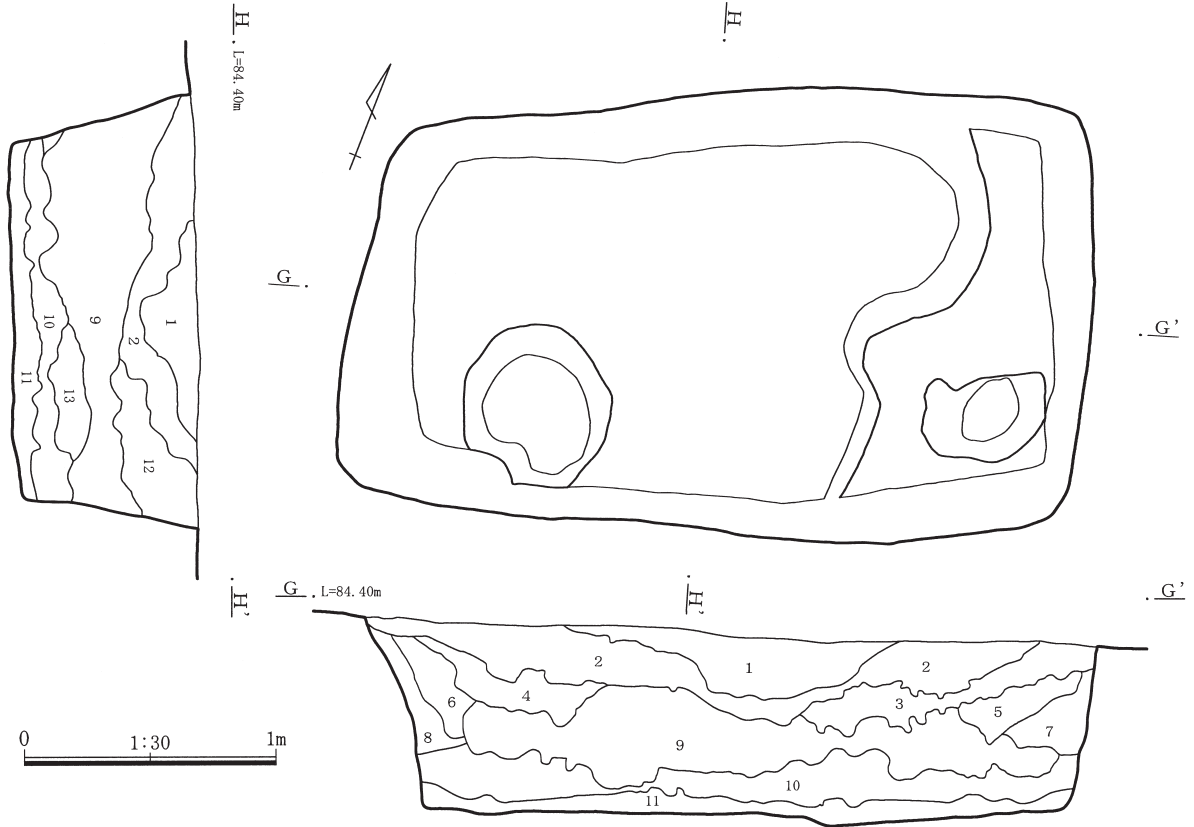


図37 B区3号墳

IV 古墳時代の遺構と遺物



主体部

G・H

- 1 褐色土。硬質の黄褐色ロームを多く含む。φ 1～2mmの灰白色軽石を少量含む。
- 2 黄褐色土。硬質の黄褐色ロームを非常に多く含む。φ 1～2mmの灰白色軽石を含む。硬質ローム多い。
- 3 におい黄褐色土。φ 1mmのローム粒を多く含む。
- 4 褐色土。黄褐色のロームブロックを多く含む。
- 5 褐色土。黄褐色のφ 3～5cmのロームブロックを多く含む。4に似ている。
- 6 褐色土。黄褐色のロームブロックを少量含む。φ 1mmのローム粒を多く含む。
- 7 褐色土。黄褐色のロームブロックを少量含む。φ 1mmのローム粒を多く含む。6に似ている。
- 8 褐色土。φ 1mmのローム粒を多く含む。
- 9 黄褐色土。黄褐色土のロームブロック多く含む。φ 1～3mmの灰白色軽石を含む。4・5に似ている。
- 10a 黄褐色土。φ 5cmのロームブロック含む。
- 10b 暗褐色土。
- 11 黄褐色土。
- 12 におい黄褐色土。
- 13 におい黄褐色土。

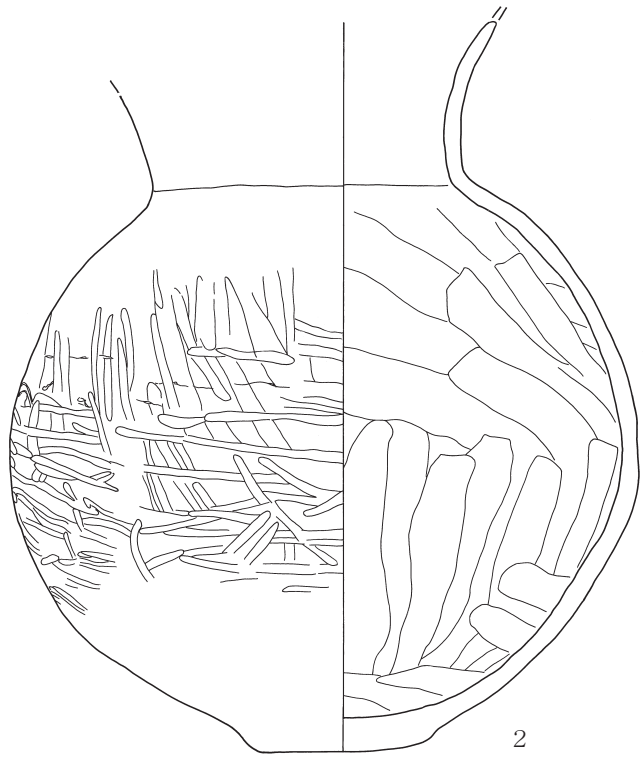
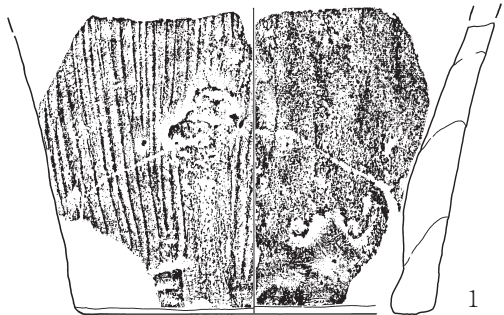


図 38 B区3号墳主体部・周堀出土遺物



## B区 4号墳(写真 PL.13・32、遺物観察 73頁)

位置 955・-475 グリッド。B区南側の東端部に位置し、周堀全体の約1/3を検出。墳丘 ローム層の上面まで削平されて確認できず、葺石、埴輪列も確認できない。周堀 全形の北西部1/3ほどを確認。検出面で上幅1.9～2.4m、下幅40～60cm、深さ40～70cm。北側の東端部では漸移的に上幅を減じ、底面の深さもやや浅くなる傾向にある。断面形は全体に緩やかな船底状を呈すが、部分的には墳丘部側が底面からほぼ中位までが比較的急勾配で、中位以上は緩やかに立ち上がる部分がある。一方、外側は

ほぼ一定した緩やかな勾配で立ち上がる。確認した周堀の規模から内径9.8m、外径約14mの円墳と推定。主体部 調査区域外で未確認。出土遺物 周堀の覆土内から縄文時代の打製石斧が出土するが、この古墳に伴う遺物はない。年代 不明。所見 確認した周堀から推定する内径9.8mは、発掘調査したこの古墳群の円墳のなかでは平均的な規模で、中規模の古墳に属す。主体部は確認できないが、周堀の内径や上幅を考慮すると、おそらく堅穴系の埋葬施設である可能性が高いものと考えられる。

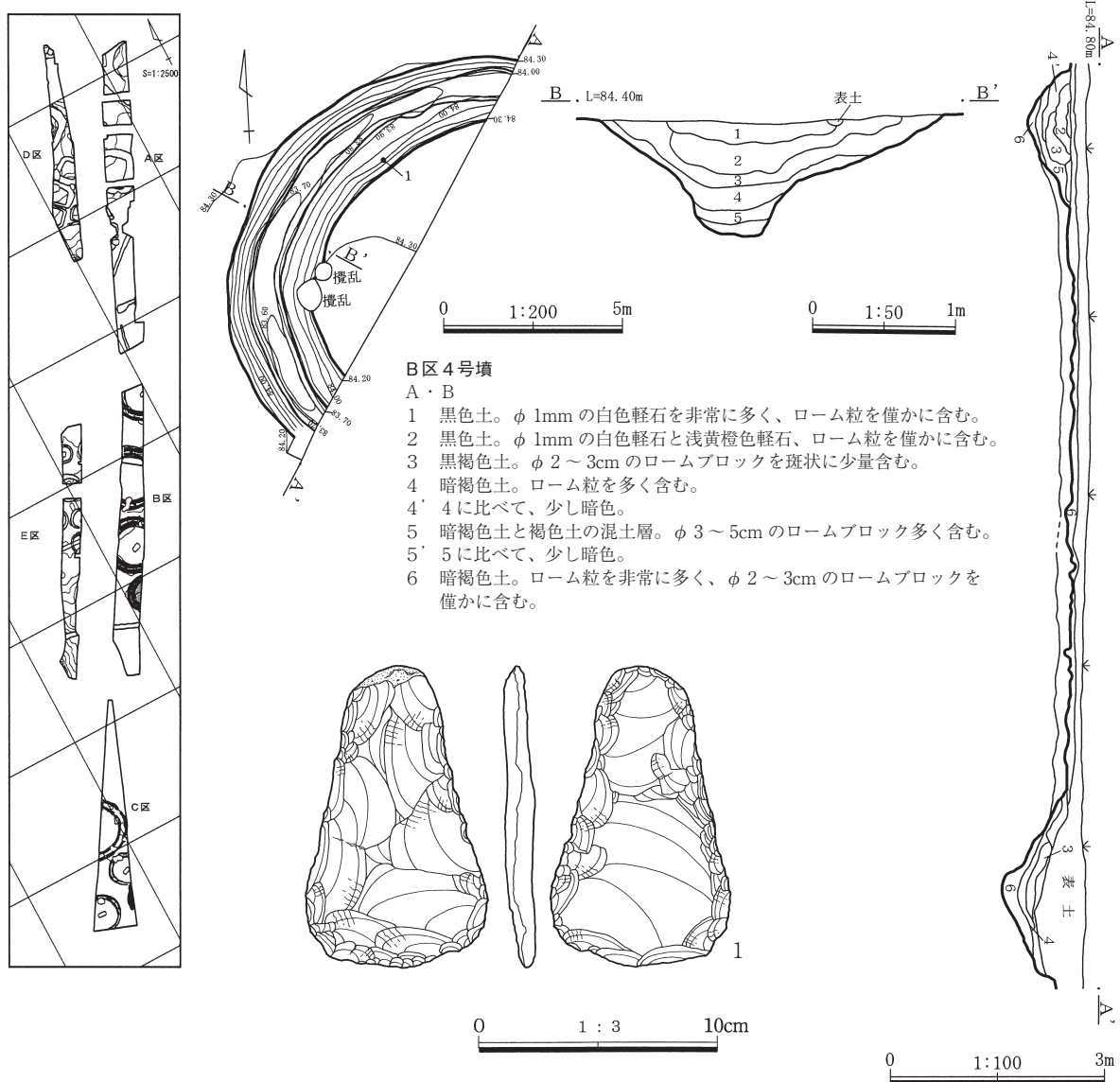


図 39 B区4号墳・周堀出土遺物

IV 古墳時代の遺構と遺物

C区 1号墳(写真PL.14・15・32～34、遺物観察73頁)

**位置** 889・-525グリッド。C区の中央部に位置し、周堀全体の約1/2を検出。**墳丘** ほぼローム層の上面まで削平されて確認できず、葺石、埴輪列も確認できない。**周堀** 全形の東側1/2ほどを確認。検出面で上幅2.0～2.7m、下幅1.4～1.6m、深さ0.8～1.0m。墳丘部側、外側ともに近似した勾配で、断面形は船底状を呈す。確認した周堀の規模から内径16.3m、外径21.7mの円墳と推定。**主体部** 調査区域外で未確認。**出土遺物** 周堀北東部の底面直上から土師器壺・小形壺・坏、周堀北端部の墳丘側覆土内から円筒埴輪、周堀南東部の覆土内から家形埴輪の屋根部破片、覆土内から蓋形埴輪の受部破片

が出土。なお、蓋形埴輪の立飾りの先端部破片がC区の遺構外から採集されており、これはこの古墳に伴う可能性がある(「遺構外出土遺物」70頁参照)。**年代** 周堀から出土した土師器壺・坏、円筒埴輪から、6世紀中葉と推定。**所見** 発掘調査したこの古墳群の円墳のなかでは最大の、内径16.3mと推定される規模をもつ。埴輪列としては確認できないが、おそらく円筒埴輪、蓋形埴輪、家形埴輪の樹立があったものと考えられ、発掘調査したこの古墳群の円墳のなかで埴輪の樹立を想定できる唯一の古墳。主体部は確認できないが、周堀の内径や上幅を考慮すると、おそらく竪穴系の埋葬施設である可能性が高い。

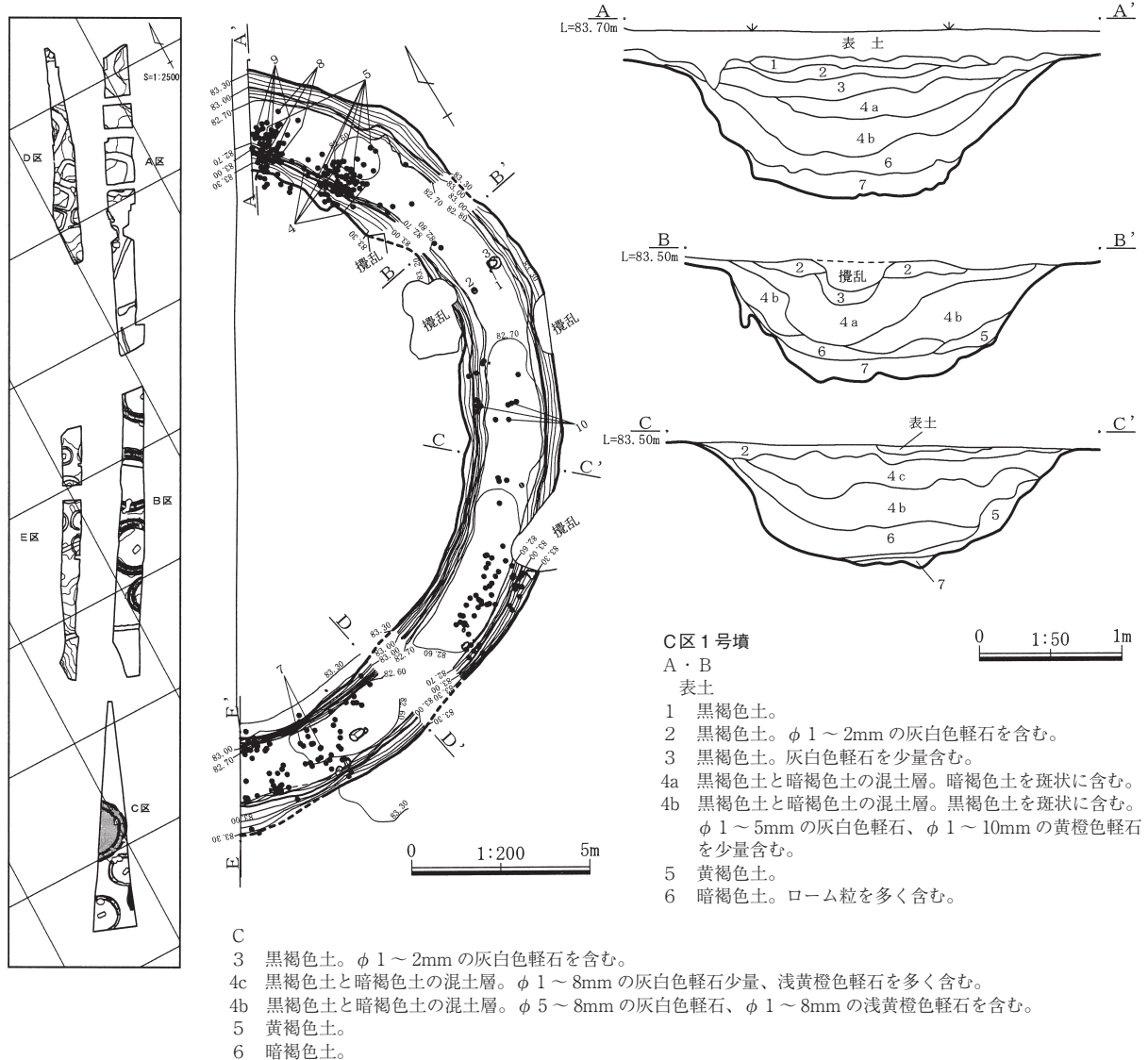
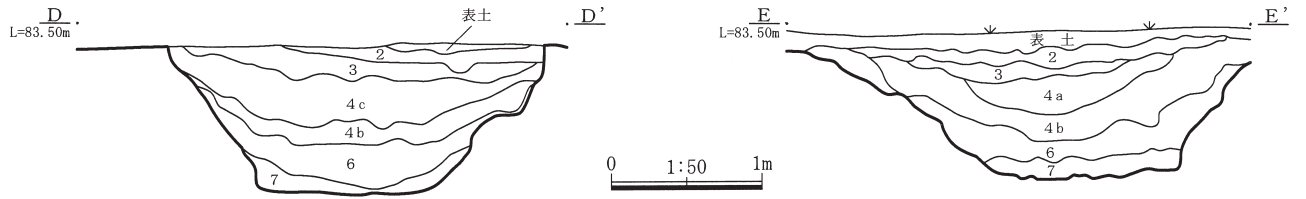


図40 C区1号墳



D

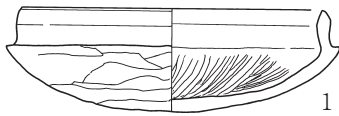
表土

- 2 褐色土。φ 1～3mm の灰白色軽石を多く含む。
- 3 黄褐色土。φ 1～5mm の灰白色軽石を多く、浅黄橙色軽石を含む。
- 4c 褐色土。黒褐色土と暗褐色土の混土層。φ 1～8mm の灰白色軽石、φ 1～5mm の浅黄橙色軽石を含む。
- 4b 褐色土。黒褐色土と暗褐色土の混土層。φ 1～8mm 灰白色軽石、φ 1～5mm の浅黄橙色軽石を含む。
- 6 褐色土。
- 7 褐色土。

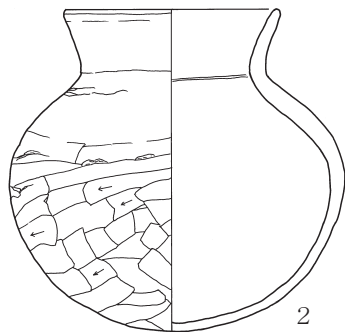
E

表土

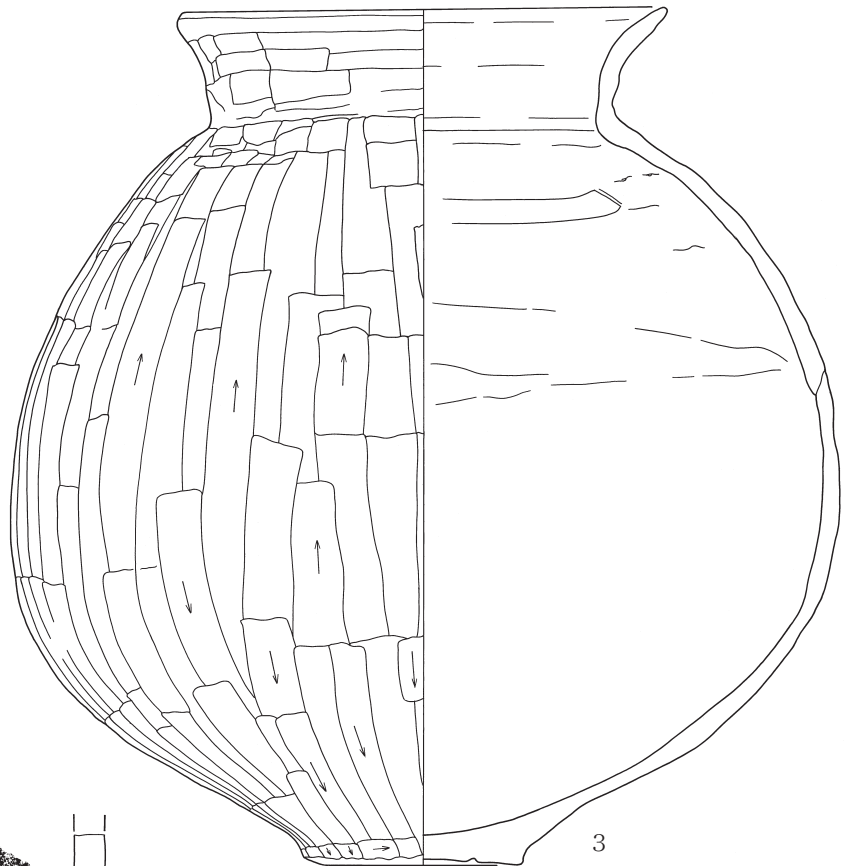
- 2 黒褐色土。As-Bと思われる軽石を僅かに含む。
- 3 黒色土。φ 1～2mm の浅黄橙色軽石を少量含む。
- 4a 黒褐色土と暗褐色土の混土層。φ 1～5mm の灰白色軽石、φ 1～3mm の浅黄橙色軽石、φ 1～5mm の黄橙色軽石を含む。
- 4b 黒褐色土と暗褐色土の混土層。φ 1～5mm の灰白色軽石、φ 1～5mm の浅黄橙色軽石を含む。
- 6 褐色土。ローム粒を多く含む。
- 7 褐色土。φ 2～5cm 黄褐色土ブロック、φ 1mm のローム粒を多く含む。



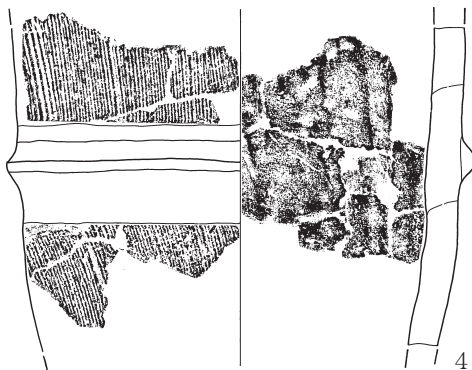
1



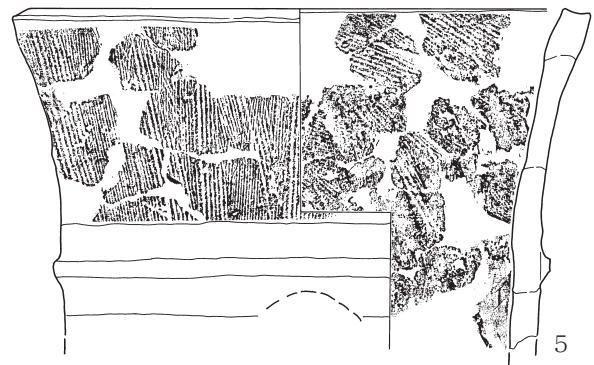
2



3



4



5

0 1:3 10cm

図 41 C区1号墳・周堀出土遺物 1



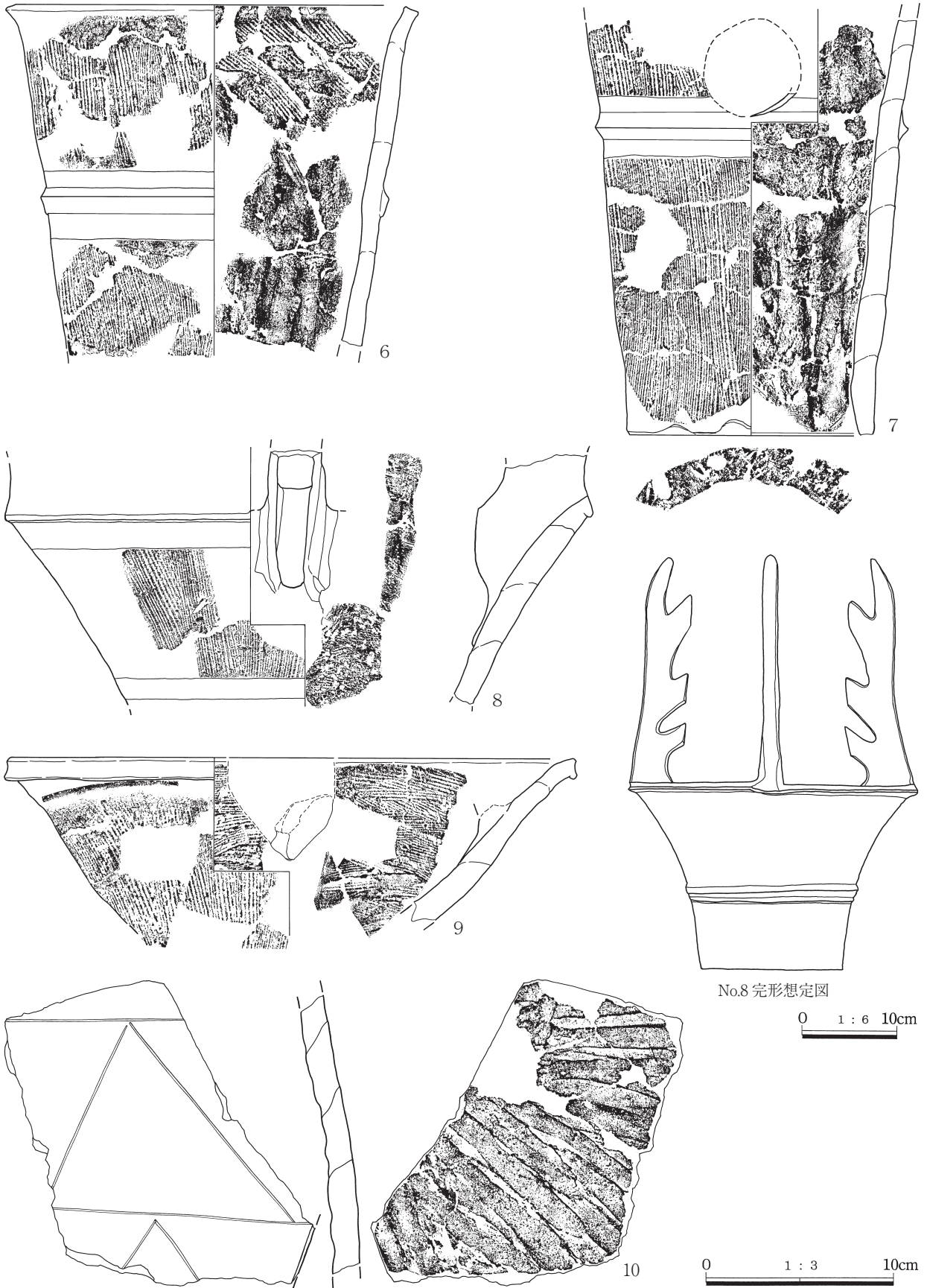
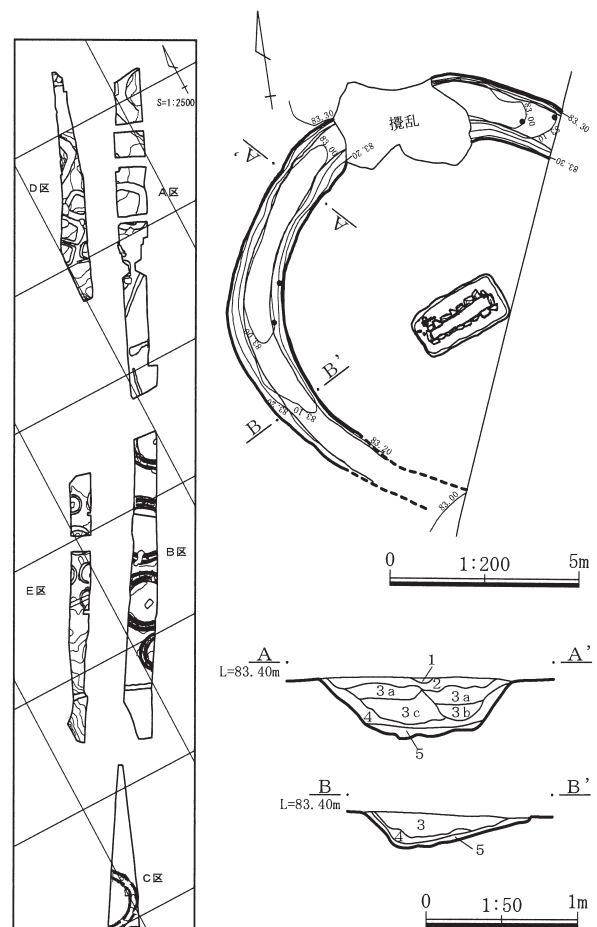


図 42 C区1号墳周堀出土遺物 2

## C区 2号墳(写真PL.15・16・34、遺物観察73頁)

**位置** 872・-525グリッド。C区の南側に位置し、周堀全体の約1/2を検出。墳丘 ほぼローム層の上面まで削平されて確認できず、葺石、埴輪列も確認できない。**周堀** 全形の西側1/2ほどを確認。検出面で上幅1.2～1.5m、下幅60～80cm、深さ20～40cm。断面形は緩やかな船底状を呈し、南側は掘り込みが漸移的に浅くなって、ローム層上面では消滅。確認した周堀の規模から内径9.0m、外径11.8mの円墳と推定。**主体部** 墳丘部のほぼ中央と想定される位置に、竪穴式小石槨を設置。土坑の掘方は短軸1.3m、長軸2.5m、深さ50cmで、長軸を東西方向にもつ整った長方形。各壁面から30cmほどの位置に、短軸15～30cm、長軸30～40cm大の角礫で、北辺の側壁に8石、南辺9石、短辺側に1石をそれぞれ平坦面を内側に向けて据え、石槨を構築。石槨の規模は内法で短軸30cm、長軸1.75m、長軸方位N-67°-E。天井石は短軸20～35cm、長軸50～60cm大の角礫で構成。当初7石を平坦面を下に向けて置き、西側は天井石上面の高さを揃えるかのようにさらに2石を高架。側壁北辺の3石と南辺の2石は内面の上位に、北辺と南辺の東側の2石は上面に、天井石は東端部と中央部の内面に、それぞれベンガラによる赤色塗彩を施す(「自然科学分析」95頁参照)。東端部を中心に赤色塗彩を施すことから、頭位は東側にあった可能性が高い。床面から天井石下面までの高さは25～30cm。天井の隙間を5～10cm大の角礫で埋めた後、黒色粘土を被覆し、褐色土で土坑の全体を閉塞。**出土遺物** 主体部から赤色球状未焼成土製品(赤玉)が出土。土坑の掘方底面で石槨と土坑壁との間に置かれ、南辺を中心にして南東隅に最も集中。南辺の西側と東端部及び北東部は、潰れた「赤玉」により底面が赤く変色。潰れたものもあって正確な個体数は不明だが、ある程度形状を留めたものは15個。このうち完全に球状を呈すものは8個で、うち4個には底面に何らかの2条の圧痕が付く(76頁参照)。主体部の構築過程から、おそらく石槨を黒色粘土で被覆した後で、

褐色土による土坑全体の閉塞の前に置かれた可能性が高い。周堀からの出土遺物はない。年代 詳細な年代は不明だが、6世紀前半の可能性が高い。**所見** 周堀の規模から推定される内径9.0mは、発掘調査したこの古墳群の円墳のなかでは平均的な規模。主体部に竪穴式石槨を確認したのは2基だが、土坑の中央部に石槨を構築するのはこの古墳のみ。「赤玉」を副葬するのもこの古墳のみで、周辺の古墳群にも類例がない。



## C区2号墳

A・B

- 1 褐灰色土。
- 2 黒褐色土。φ1～5mmの灰白色軽石を少量含む。
- 3 暗褐色土。φ1～2mmの浅黄橙色軽石を多く含む。
- 3a 黒褐色土。黄褐色軽石を多く含む。
- 3b 黒褐色土。軽石を少量含む。
- 3c 黒褐色土。軽石を少量含む。
- 4 暗褐色土。φ1～2mmの浅黄橙色軽石を少量含む。
- 5 褐色土。

図43 C区2号墳

IV 古墳時代の遺構と遺物

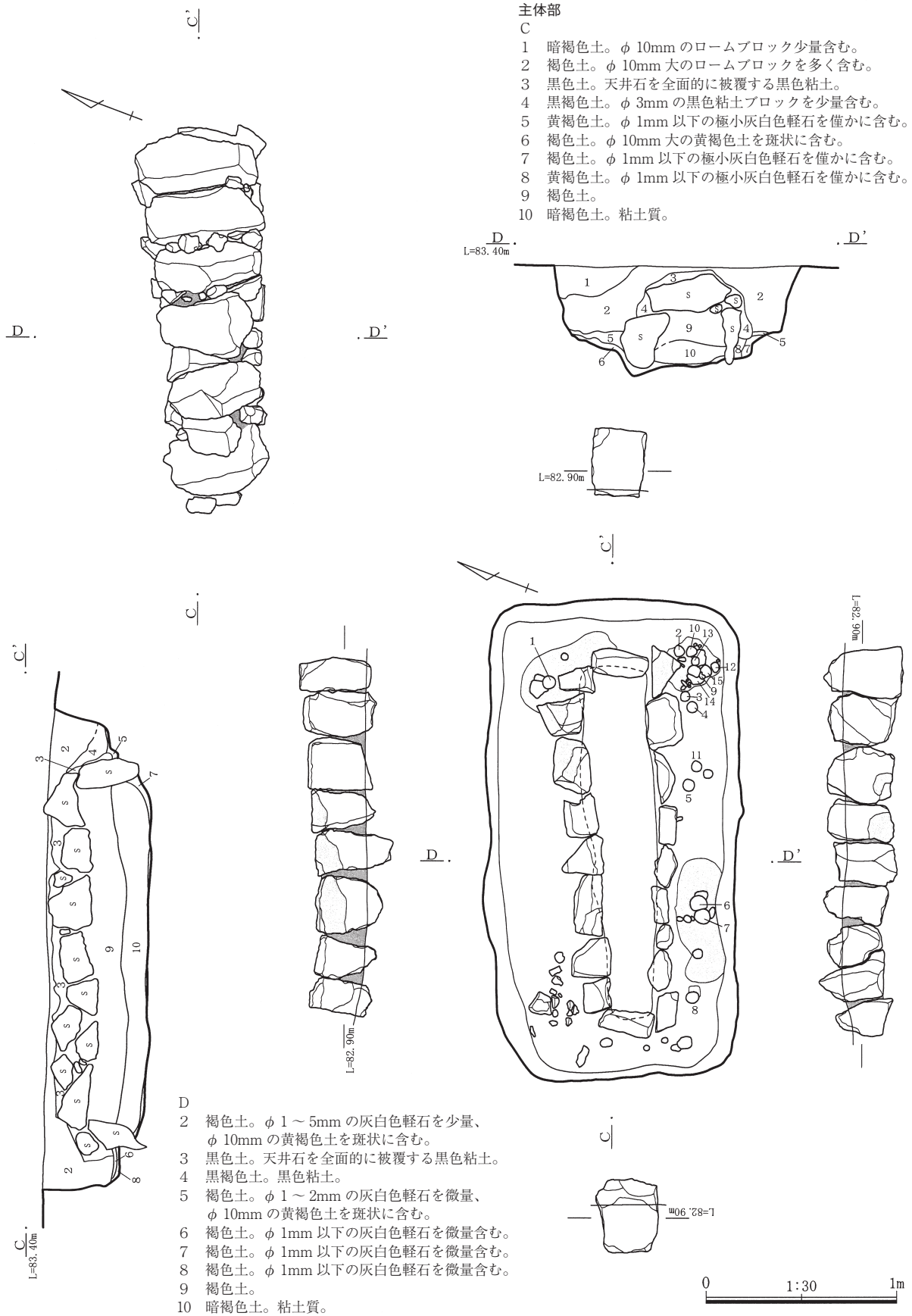


図 44 C区2号墳主体部



2 古墳

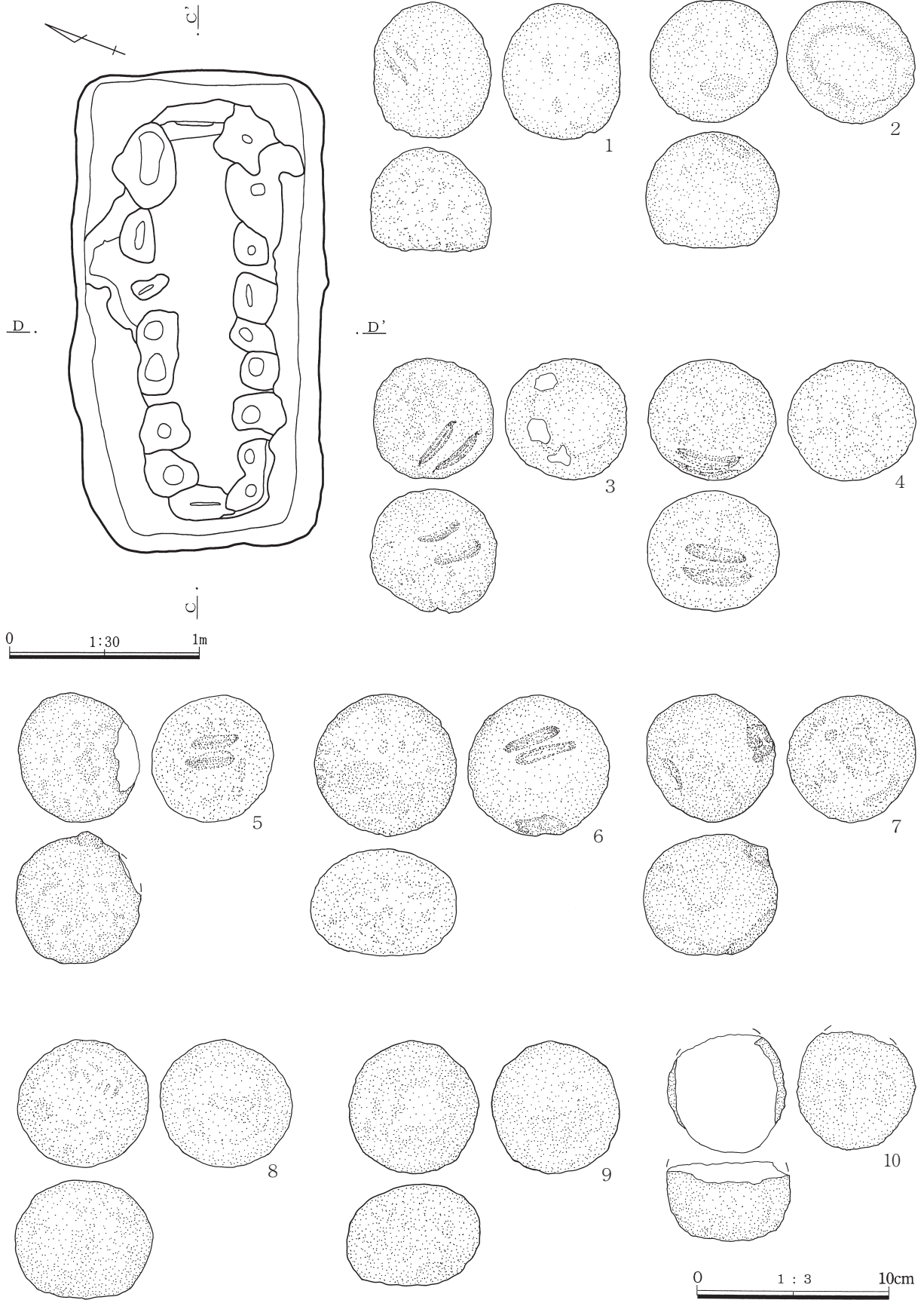


图 45 C区 2号墳主体部掘方・出土遺物 1

#### IV 古墳時代の遺構と遺物

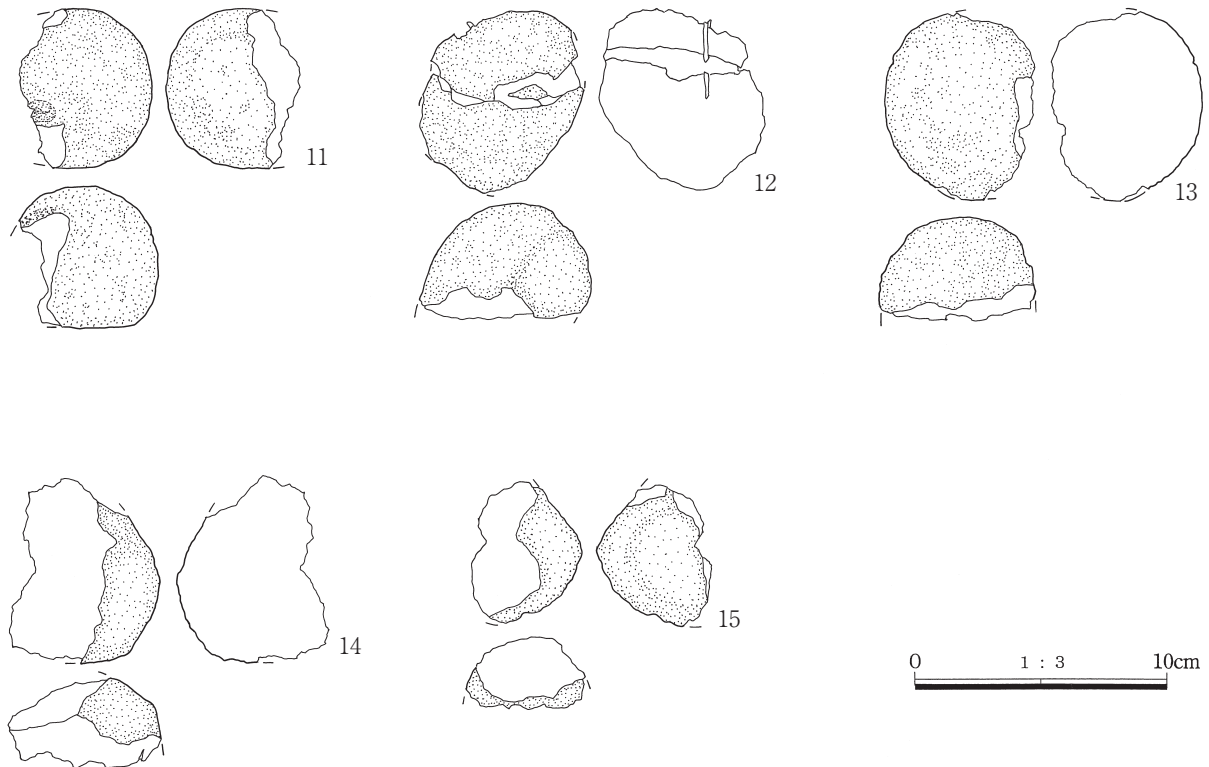


図46 C区2号墳主体部出土遺物 2

#### C区 3号墳(写真 PL.17・34、遺物観察 73頁)

**位置** 862・-540 グリッド。C区南端部の西側に位置し、周堀全体の約1/2を検出。**墳丘** ほぼローム層の上面まで削平されて確認できず、葺石、埴輪列も確認できない。**周堀** 全形の東側1/2ほどを確認。検出面で上幅0.9~1.5m、下幅30~70cm、深さ50cm。断面形は墳丘側、外側ともに緩やかな船底状を呈す。確認した周堀の規模から内径11.0m、外径14.0mの円墳と推定。**主体部** 墳丘部のほぼ中央と想定される位置に土坑を検出。土坑の掘方は短軸1.4m、長軸3.0m、深さ1.0m、長軸の方位N-93°-Eで、長軸を東西方向にもつ整った長方形を呈し、各壁は垂直に近い状態でしっかりと掘り込む。底面には長軸に沿った中央部に短軸75cm、長軸2.7mの範囲に黒色粘土を敷いた粘土床を施す。おそらく木棺を設置した可能性が高く、その中央部の短軸50cm、長軸2.3mの範囲が周囲より10cmほど窪んだ状態で出土。木棺そのものの痕跡はなく、褐色土を充填して土坑の全体を閉塞。**出土遺物** 周堀南東部

の底面直上から、土師器坏がほぼ完形の状態出土。これはこの古墳の築造時期か、それに近いものと判断。**年代** 周堀の底面直上より出土した土師器坏から、6世紀前半と推定。**所見** 確認した周堀から推定する内径11.0mは、発掘調査したこの古墳群の円墳のなかで5番目の規模をもつ。この大きさはこの古墳群の平均的な規模よりやや大きい。この古墳群の全体としては中規模の古墳に属す。また、この古墳群で確認した6基の堅穴系主体部のうち、粘土床を施した古墳は2基であるが、この古墳はそのうちのひとつ。埋葬施設は、土坑の底面に黒色粘土を用いた粘土床を施す。木棺は確認できないが、おそらくこの上に木棺を設置したものと考えられる。粘土床を施したもう1基の古墳はB区1号墳であるが、この古墳とは年代が比較的近似し、その遺存状態も近く、推定する内径の規模も11.0mと同じである。但し、B区1号墳は粘土床に白色粘土を用い、黒色粘土を用いたこの古墳とはその材料が異なる。

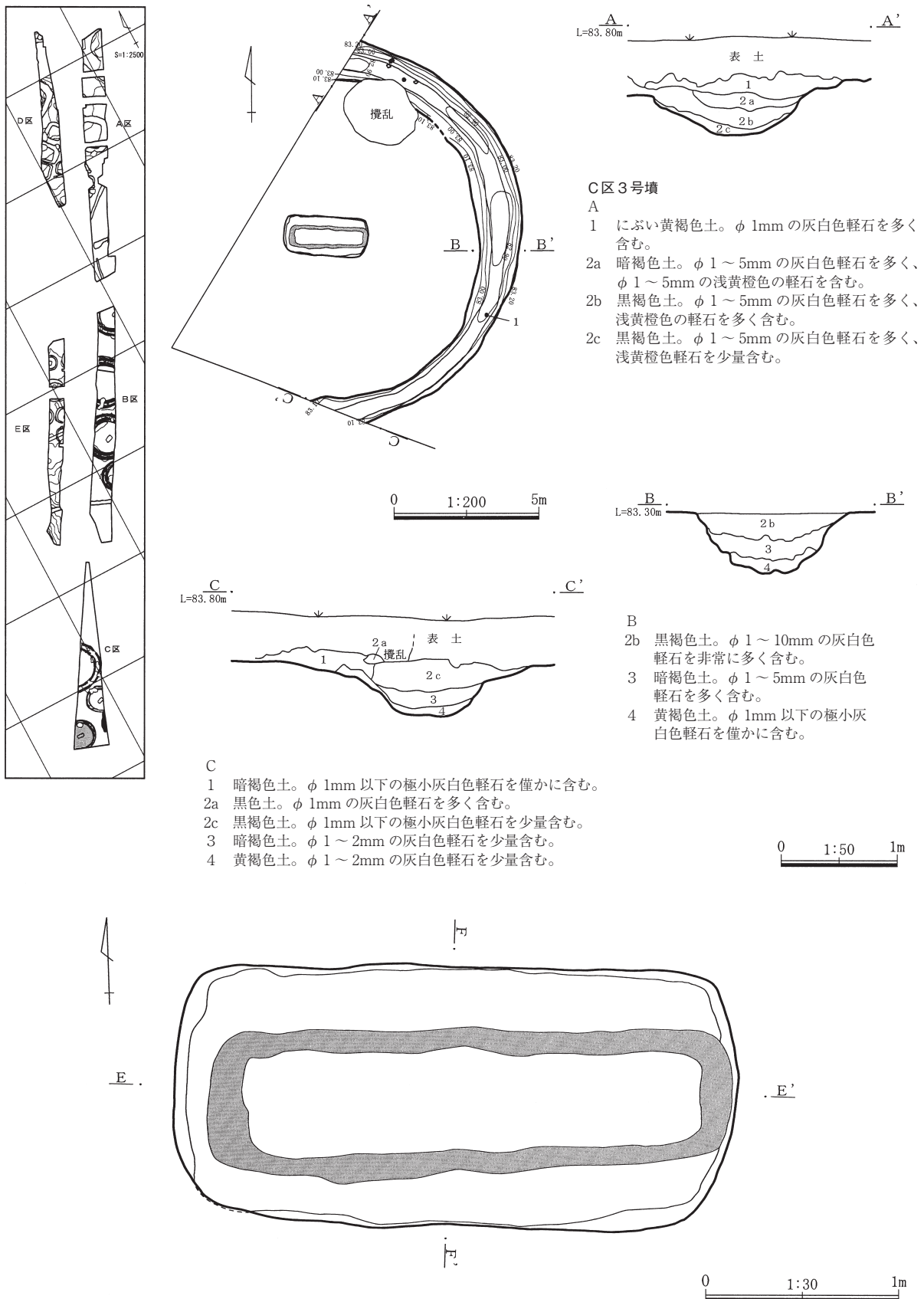


図 47 C区3号墳・主体部



IV 古墳時代の遺構と遺物

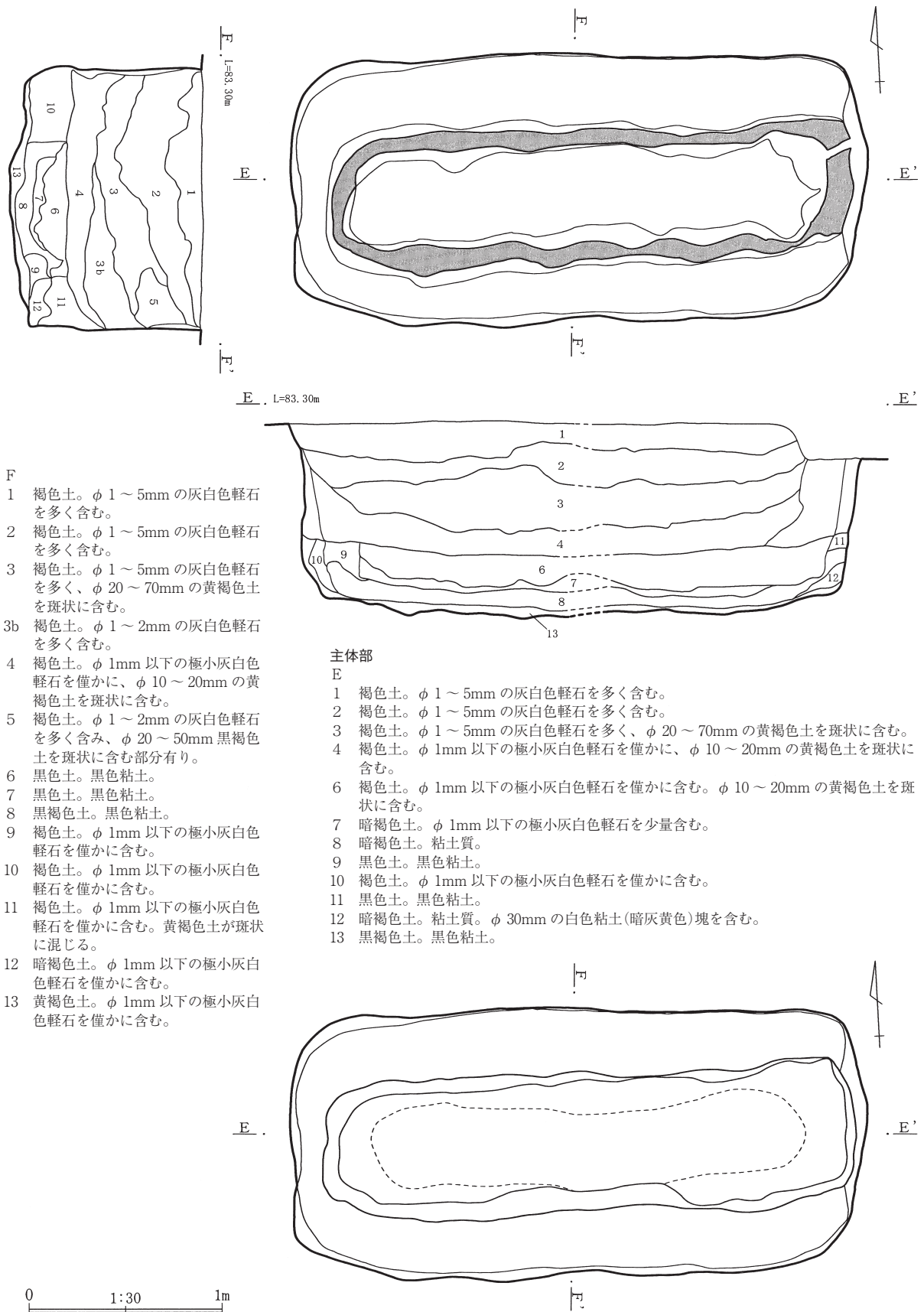


図 48 C区3号墳主体部

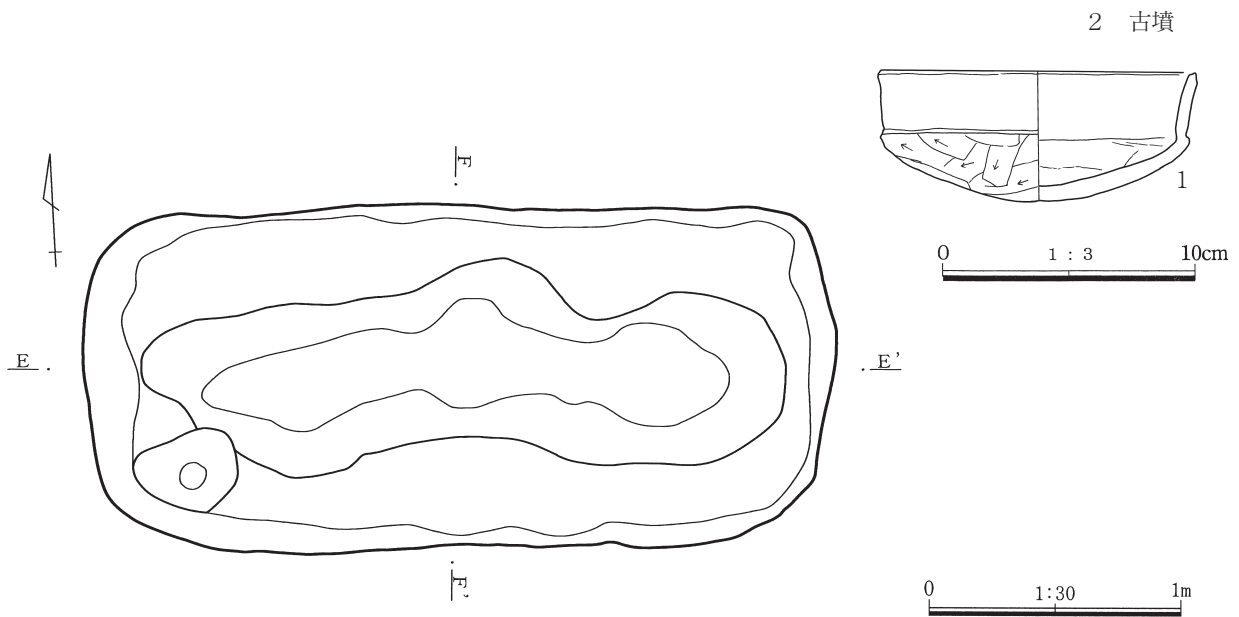


図49 C区3号墳主体部掘方・周堀出土遺物

C区 4号墳(写真PL.18)

位置 862・-528グリッド。C区南側の東端部に位置し、周堀全体の約1/4を検出。墳丘 ほぼローム層の上面まで削平されて確認できず、葺石、埴輪列も確認できない。周堀 全形の北西部1/4ほどを確認。周堀の墳丘部側の立ち上がり部分が調査区域外であるため、周堀の全幅を確認できた部分はない。現状で確認した上幅は2m以上で、検出面からの深さは1.0m。おそらく上幅は2.5～3mになるものと推定。底面はほぼ平坦で、外側は約40°のほぼ一定した勾配で立ち上がる。確認した周堀の規模から推定する外径が12m前後になることから、2.5～3mの周堀の幅を考慮すると内径が6～7m前後の円墳と推定。主体部 調査区域外で未確認。出土遺物 無し。年代 不明。所見 確認した周堀から推定する内径約6～7mの規模は、発掘調査したこの古墳群の円墳のなかでは小規模の古墳に属す。発掘調査したこの古墳群の円墳のうち、規模が推定できたものは18基だが、このうち内径が7m級の古墳は2基で、全体の平均的な古墳は9m級となる。したがって、この古墳は小規模に属す古墳のうちのやや大きな部類の古墳となる。主体部は確認できないが、古墳の規模を考慮すると、おそらく堅穴系の埋葬施設である可能性が高いものと考えられる。

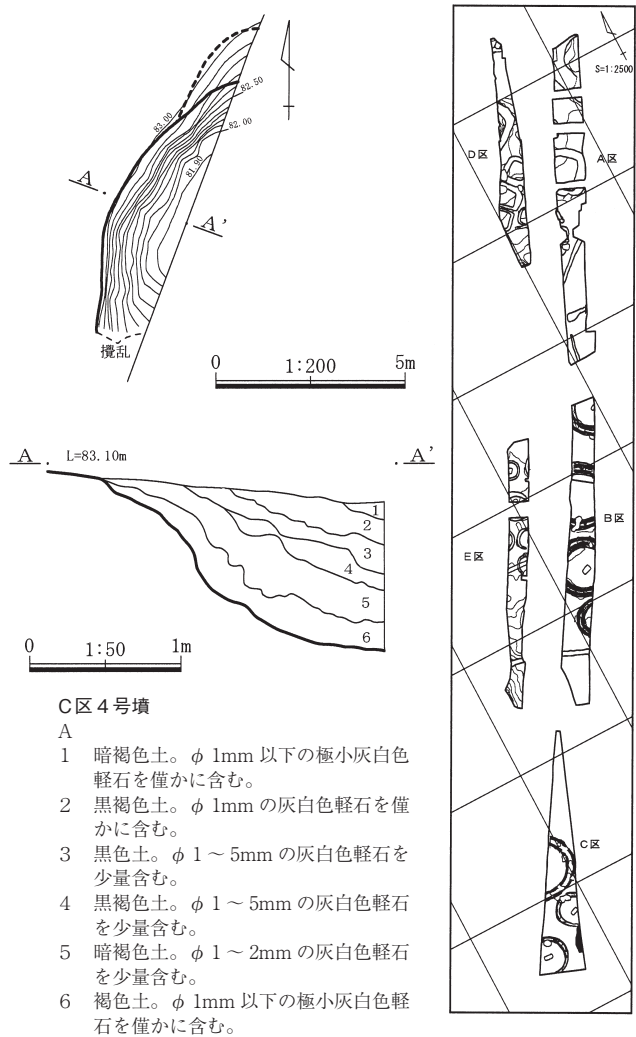


図50 C区4号墳

D区 1号墳(写真 PL.19)

**位置** 139・-415グリッド。D区の北端部に位置し、周堀の一部を検出。この古墳は、上武道路建設に伴う上植木光仙房遺跡5号墳(『上植木光仙房遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団1988)と同一の古墳で、同古墳の南東部に接続する周堀の一部を検出。**墳丘** ほぼローム層の上面まで削平されて確認できず、葺石、埴輪列も確認できない。**周堀** 南東部の長さ2mほどの範囲を確認。検出面で上幅1.7~1.9m、下幅1.0~1.3m、深さ30cm。確認した範囲では底面が平坦で広く、墳丘側、外側ともに緩やかな勾配で立ち上がる。確認した周堀の規模から内径6.5m、外径9~10mほどの円墳と推定。**主体部** 調査区域外で未確認。**出土遺物** 無し。**年代** 不明。**所見** 確認した周堀から推定する内径約6.5mは、発掘調査したこの古墳群の円墳のなかでは小規模の古墳に属す。発掘調査したこの古墳群の円墳のうち、規模が推定できたものは18基だが、このうち内径が6m級の古墳は最も多い6基である。したがって、小規模に属す古墳のうちの最も一般的な規模の古墳となる。主体部は確認できないが、古墳の規模を考慮すると、おそらく竪穴系の埋葬施設である可能性が高いものと考えられる。

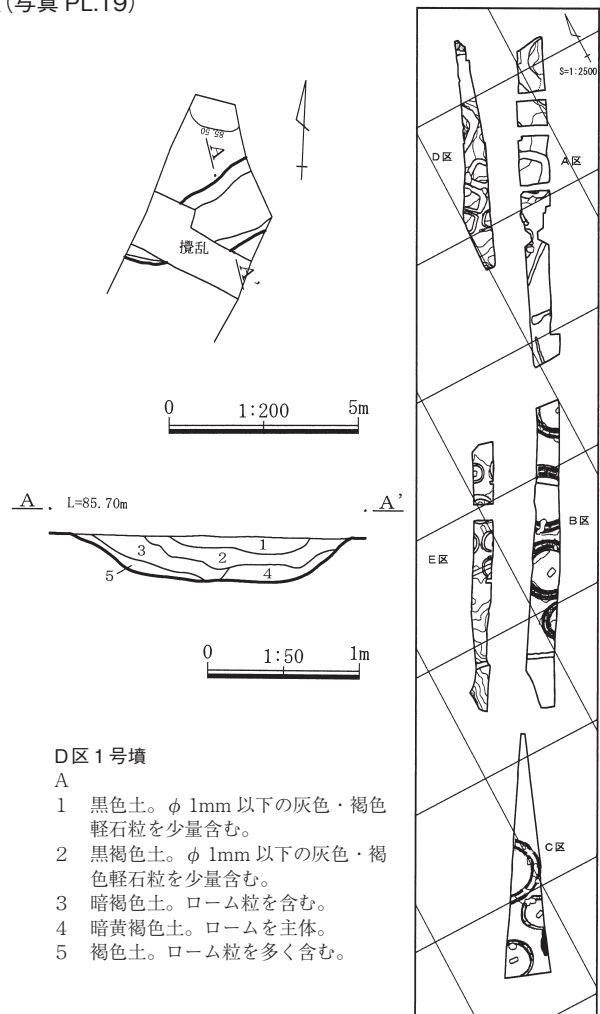


図51 D区1号墳

D区 2号墳(写真 PL.19)

**位置** 113・-425グリッド。D区の中央部に位置し、周堀全体の約1/3を検出。当初、周堀の平面形状から方形周溝墓と想定したが、西壁の断面において崩れた葺石と考えられる河原石が、周堀の斜面に沿って出土したことから葺石をもつ古墳と判断。**墳丘** ほぼローム層の上面まで削平されて確認できず、原位置を留めた葺石、埴輪列も確認できない。但し、西壁の土層断面において、周堀の墳丘側の斜面に沿って出土した河原石が、周堀に崩れ落ちた葺石の可能性が高いことから、葺石が施されていたものと考えられる。**周堀** 全形の南東部1/3ほどを確認。周堀の平面形は確認した範囲では円形を呈さず、やや角張った方形状を呈す。検出面で上幅2.2~3.3m、

下幅1.4~2.5m、深さ20~30cm。底面は平坦で幅が広く、確認した範囲では墳丘側、外側ともに緩やかな勾配で立ち上がる。確認した周堀の規模から内径10.5m、外径17mほどの円墳と推定。**主体部** 調査区域外で未確認。**出土遺物** 無し。**年代** 出土遺物が皆無で詳細な年代は不明だが、周堀の覆土に含まれる褐色軽石が、6世紀初頭に降下した榛名二ツ岳洪川テフラ(Hr-FA)の可能性あることから、6世紀初頭以降の可能性が高い。**所見** 確認した周堀から推定する内径約10.5mの規模は、発掘調査したこの古墳群の円墳のなかでは中規模の古墳に属し、葺石をもつ可能性が高い。主体部は確認できないが、古墳の規模を考慮すると竪穴系の可能性が高い。



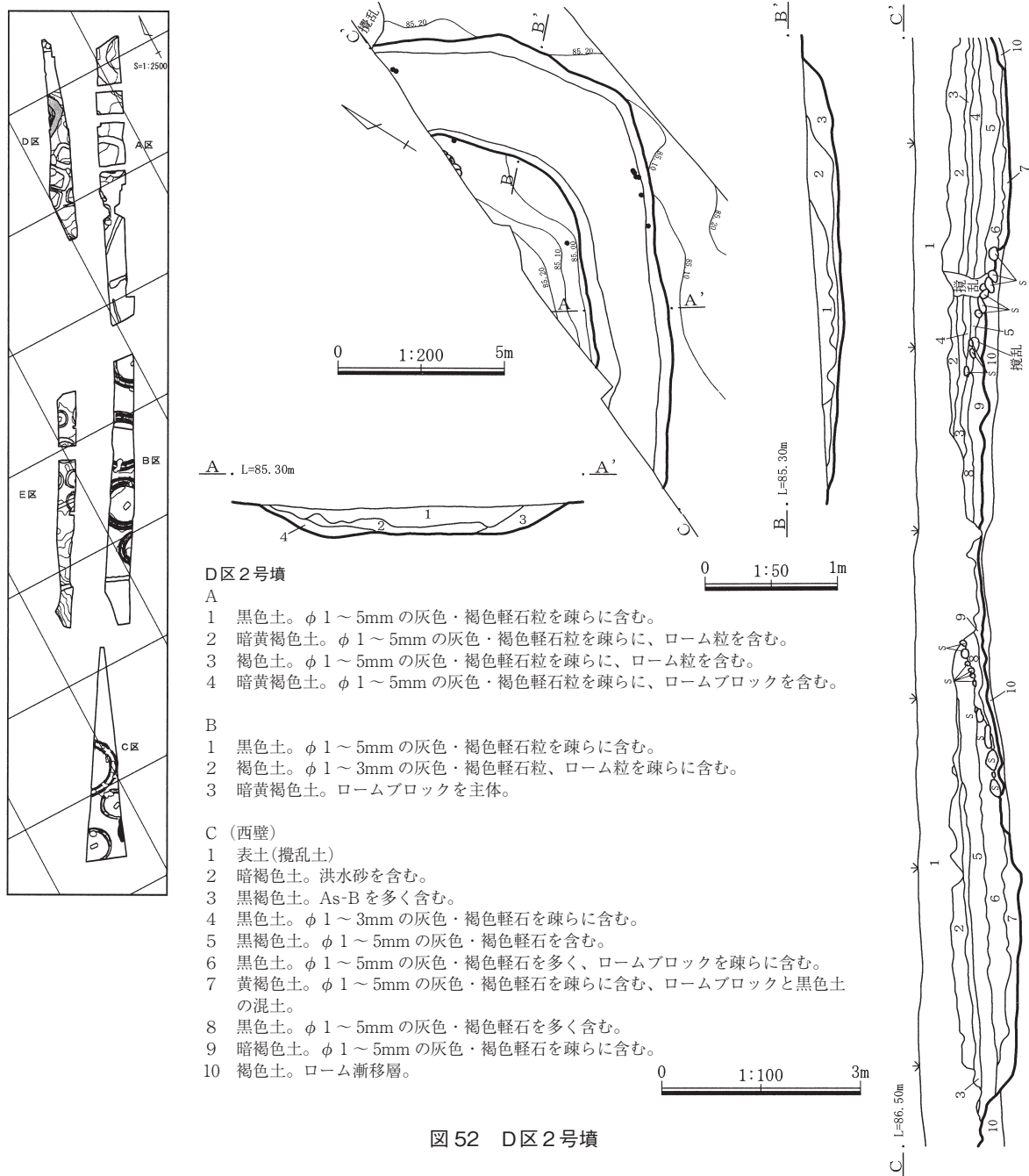


図 52 D区2号墳

**E区 1号墳(写真PL.20)**

**位置** 010・-476グリッド。E区北部の西側に位置し、周堀全体の約1/2を検出。**墳丘** ほぼローム層の上面まで削平されて確認できず、葺石、埴輪列も確認できない。**周堀** 全形の東半部1/2ほどを確認。検出面で上幅70cm、下幅40cm、深さ15～30cm。底面は比較的平坦で、墳丘側、外側ともに緩やかな勾配で立ち上がる。確認した周堀の規模から内径5.0m、外径6.5mの円墳と推定。**主体部**

墳丘部のほぼ中央と想定される位置に、竪穴式小石槨を設置。石槨は、東端部を除く南辺と天井石が遺存しない。土坑の掘方は北西隅が調査区域外で全形は不明だが、短軸1.4m、長軸1.9m、深さ50cmで、長軸を東西方向にもつほぼ整った長方形。全体に短軸15～30cm大、長軸20～40cm大の河原石を主体とした自然石を、土坑の壁面に沿う形に積んで石槨を構成。長辺側は基本的には小口面を内側にして

IV 古墳時代の遺構と遺物

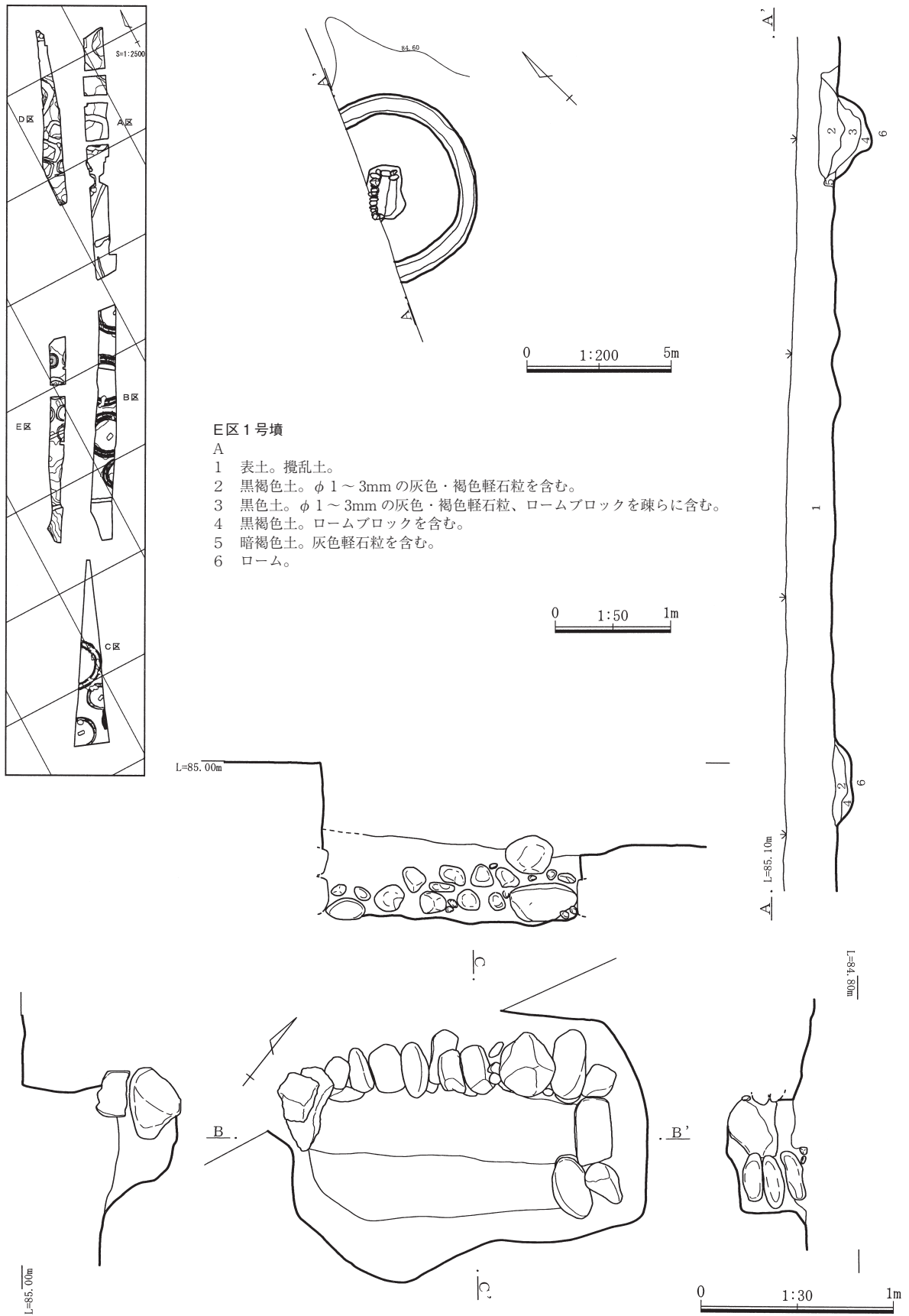


図 53 E区1号墳・主体部

据えるが、北辺東端部の根石1石のみは横口面を内側にして据える。短辺側はそれぞれ1石で構成するが、東辺には上端部を平坦に加工した河原石を据え、西辺には内面側を平坦に加工した角礫を据える。石槨の規模は内法で短軸30cm、長軸1.3mと推定でき、長軸の方位はN-93°-E。調査の過程で天井石と考えられる一辺60cm大の石が出土したが、原位置を留めていない。出土遺物 無し。年代 出土遺物が皆無で詳細な年代は不明だが、周堀の覆土中に含ま

れる褐色軽石が、6世紀初頭に降下した榛名二ツ岳洪川テフラ(Hr-FA)の可能性あることから、6世紀初頭以降の可能性が高い。所見 確認した周堀から推定する内径5.0mは、発掘調査したこの古墳群の円墳のなかで最も小さい古墳。竪穴式石槨をもつのはこの古墳とC区2号墳の2基のみだが、C区2号墳は石槨と土坑壁との間に空間をもち、平坦面を内側にした角礫で構成するのに対して、この古墳は土坑壁に沿った河原石の小口積み基本とする。

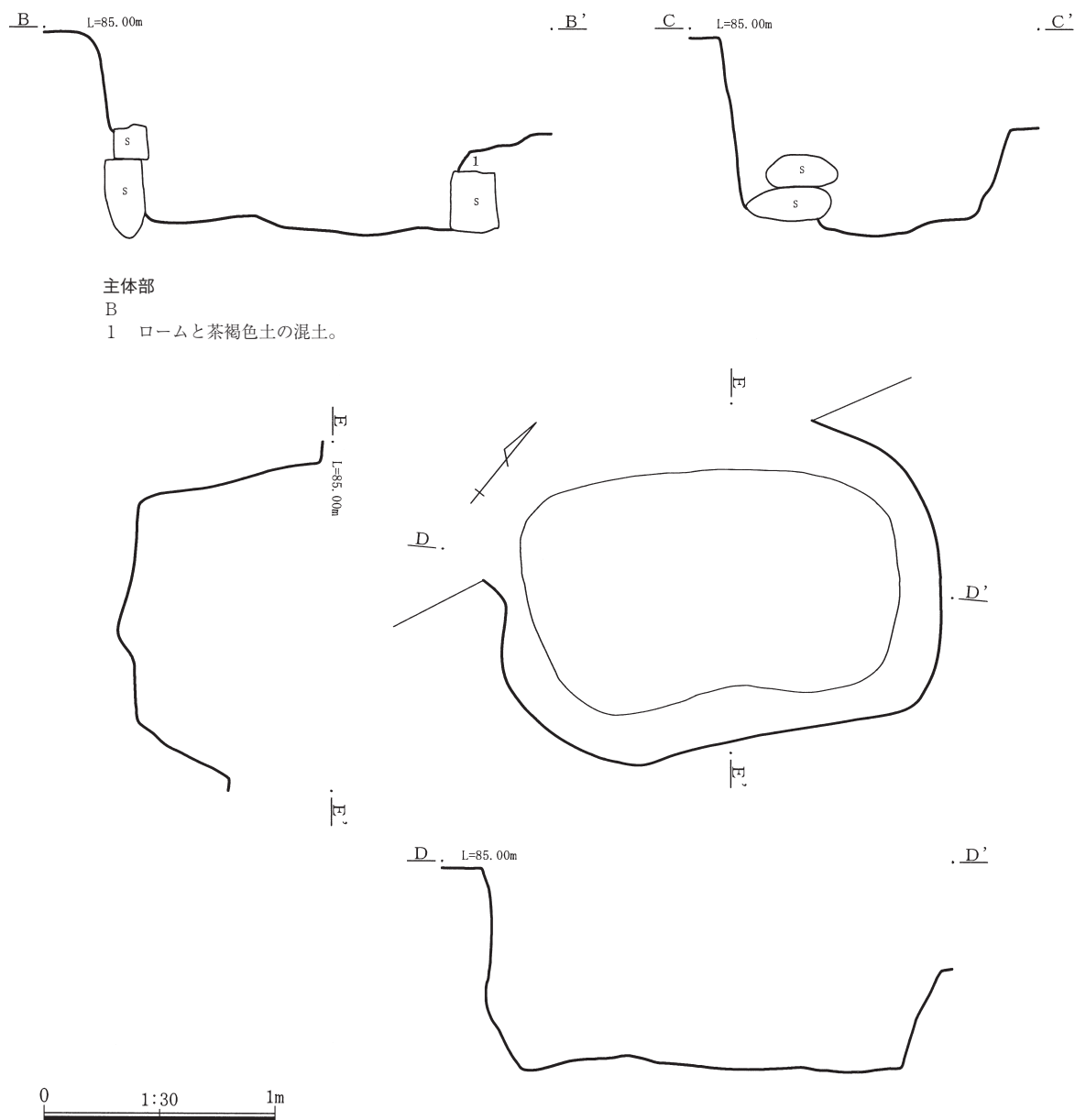
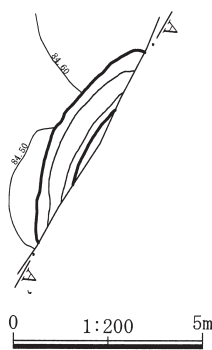


図54 E区1号墳主体部掘方



E区 2号墳(写真 PL.20)

**位置** 009・-470グリッド。E区北側の東端部に位置し、周堀全体の一部を検出。**墳丘** ほぼローム層の上面まで削平されて確認できず、葺石、埴輪列も確認できない。**周堀** 北西部の一部を確認。検出面で上幅1.0m、下幅50cm、深さ50cm。確認した周堀の規模から内径6.6m、外径8.5mの円墳と推定。**主体部** 調査区域外で未確認。**出土遺物** 無し。**年代** 出土遺物が皆無で詳細な年代は不明だが、周堀の覆土中に含まれる褐色軽石が、6世紀初頭に降下した榛名二ツ岳渋川テフラ(Hr-FA)の可能性あることから、6世紀初頭以降の可能性が高い。**所見** 確認した周堀から推定する内径約6.6mは、発掘調査したこの古墳群の円墳のなかでは最も数の多い6m級の小規模古墳に属す。主体部は確認できないが、古墳の規模を考慮すると、おそらく竪穴系の埋葬施設である可能性が高いものと考えられる。



E区 2号墳

- A 表土。攪乱土。
- 1 黒褐色土。ローム粒を含む。
- 2 暗黄褐色土。ローム粒を多く含む。
- 3 黒褐色土。灰色・褐色軽石粒1～3mmを含む。
- 4 暗褐色土。ロームブロックを含む。
- 5 黄褐色ローム。
- 6

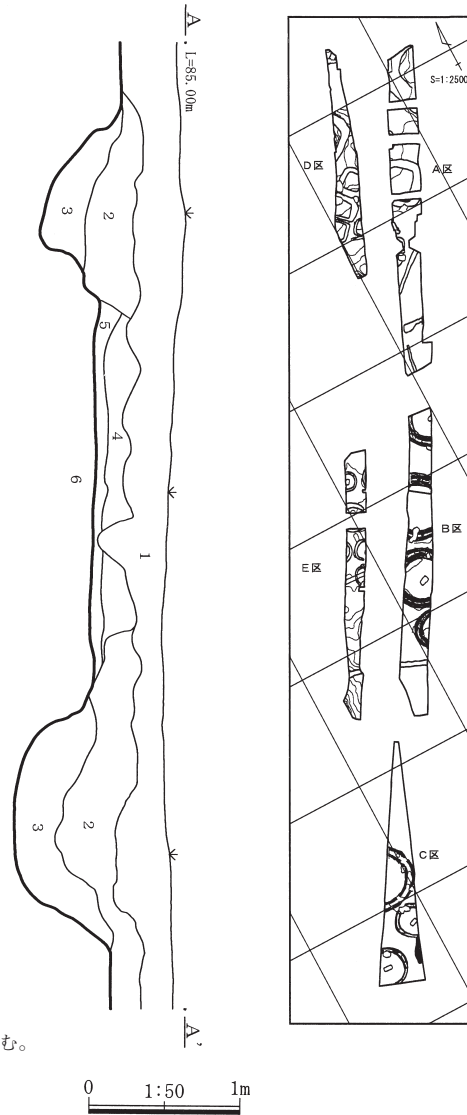


図55 E区2号墳

E区 3号墳(写真 PL.20・21・34、遺物観察 73頁)

**位置** 999・-480グリッド。E区北側の中央部に位置し、周堀全体の約1/2を検出。**墳丘** ほぼローム層の上面まで削平されて確認できず、葺石、埴輪列も確認できない。**周堀** 全形の北部と南部の合わせて1/2ほどを確認。検出面で上幅1.0～1.7m、下幅50cm、深さ50cm。確認した周堀の規模から内径7.3m、外径9.5mの円墳と推定。**主体部** 調査区域外で未確認。**出土遺物** 周堀の覆土内から円筒埴輪片が出土するが、この古墳に伴うか否か疑わし

い。**年代** 出土した円筒埴輪片がこの古墳に伴うか否か疑わしく詳細な年代は不明だが、周堀の覆土中に6世紀初頭に降下した榛名二ツ岳渋川テフラ(Hr-FA)を含むことから、6世紀初頭以降と推定。**所見** 確認した周堀から推定する内径7.3mの規模は、発掘調査したこの古墳群の円墳のなかでは中規模の古墳に属す。主体部は確認できないが、古墳の規模を考慮すると、おそらく竪穴系の埋葬施設である可能性が高いものと考えられる。

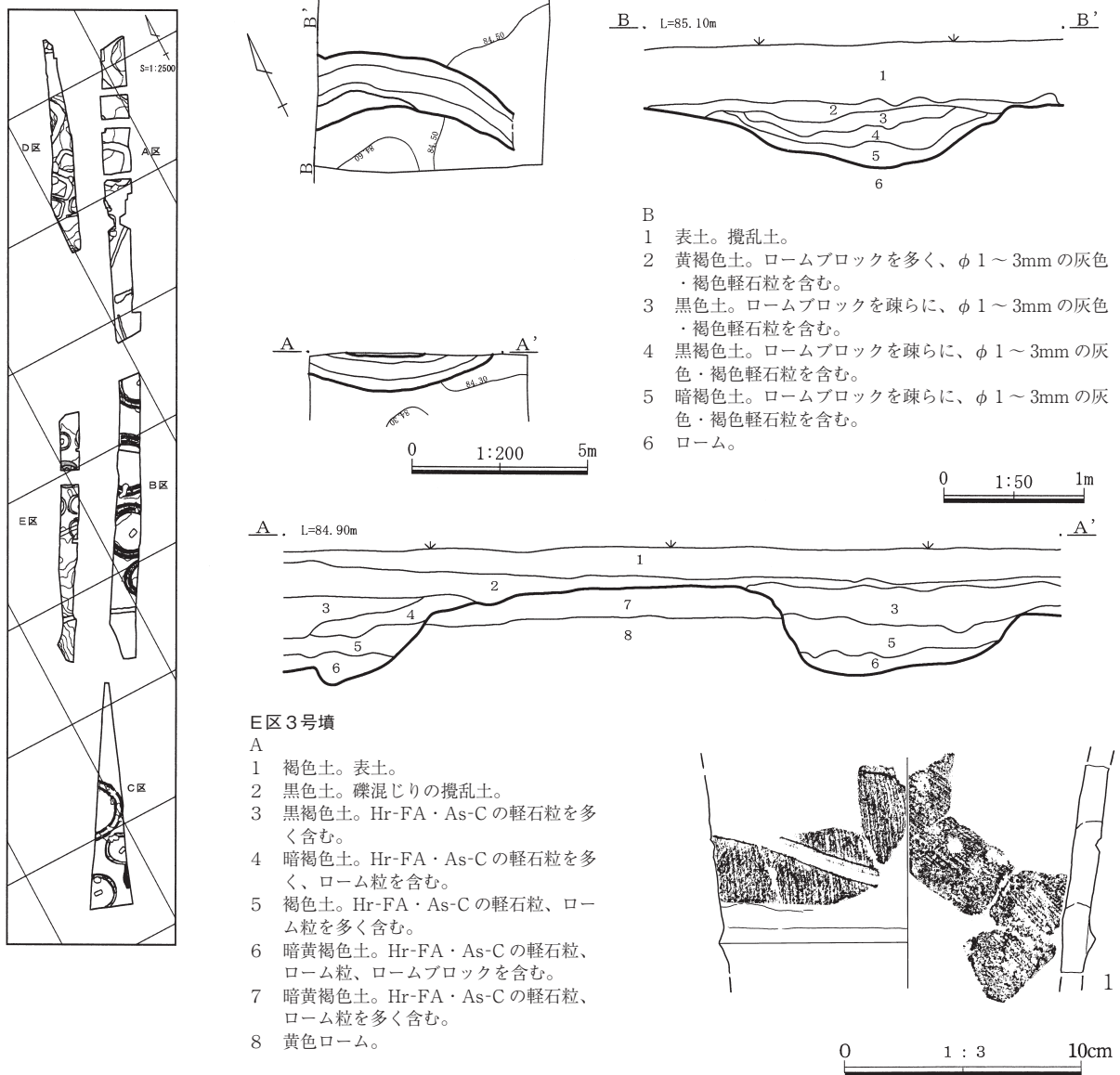


図56 E区3号墳・周堀出土遺物

**E区 4号墳(写真PL.21・34、遺物観察73頁)**

**位置** 990・-487グリッド。E区中央の西端部に位置し、周堀全体の約1/3を検出。**墳丘** ほぼローム層の上面まで削平されて確認できず、葺石、埴輪列も確認できない。**周堀** 全形の東側1/3ほどを確認。検出面で上幅70～90cm、下幅40cm、深さ30～50cm。断面形は緩やかな船底状。確認した周堀の規模から内径6.8m、外径8.6mの円墳と推定。**主体部** 調査区域外で未確認。**出土遺物** 周堀南部の底面上25cmの位置から口縁部を半分ほど欠いた土師器坏が出土。**年代** 周堀から出土した土師器坏は6世

紀中葉と考えられるが、底面上25cmの出土であることから、この古墳の年代を直接示すか否か疑わしい。一方、周堀の覆土中には6世紀初頭に降下した榛名二ツ岳渋谷テフラ(Hr-FA)を含んでいる。したがって、この古墳は6世紀初頭以降で、6世紀中葉以前と推定。**所見** 確認した周堀から推定する内径約6.8mは、発掘調査したこの古墳群の円墳のなかでは最も数の多い6m級の小規模古墳に属す。主体部は確認できないが、古墳の規模を考慮するとおそらく竪穴系の埋葬施設である可能性が高いものと考えられる。

IV 古墳時代の遺構と遺物

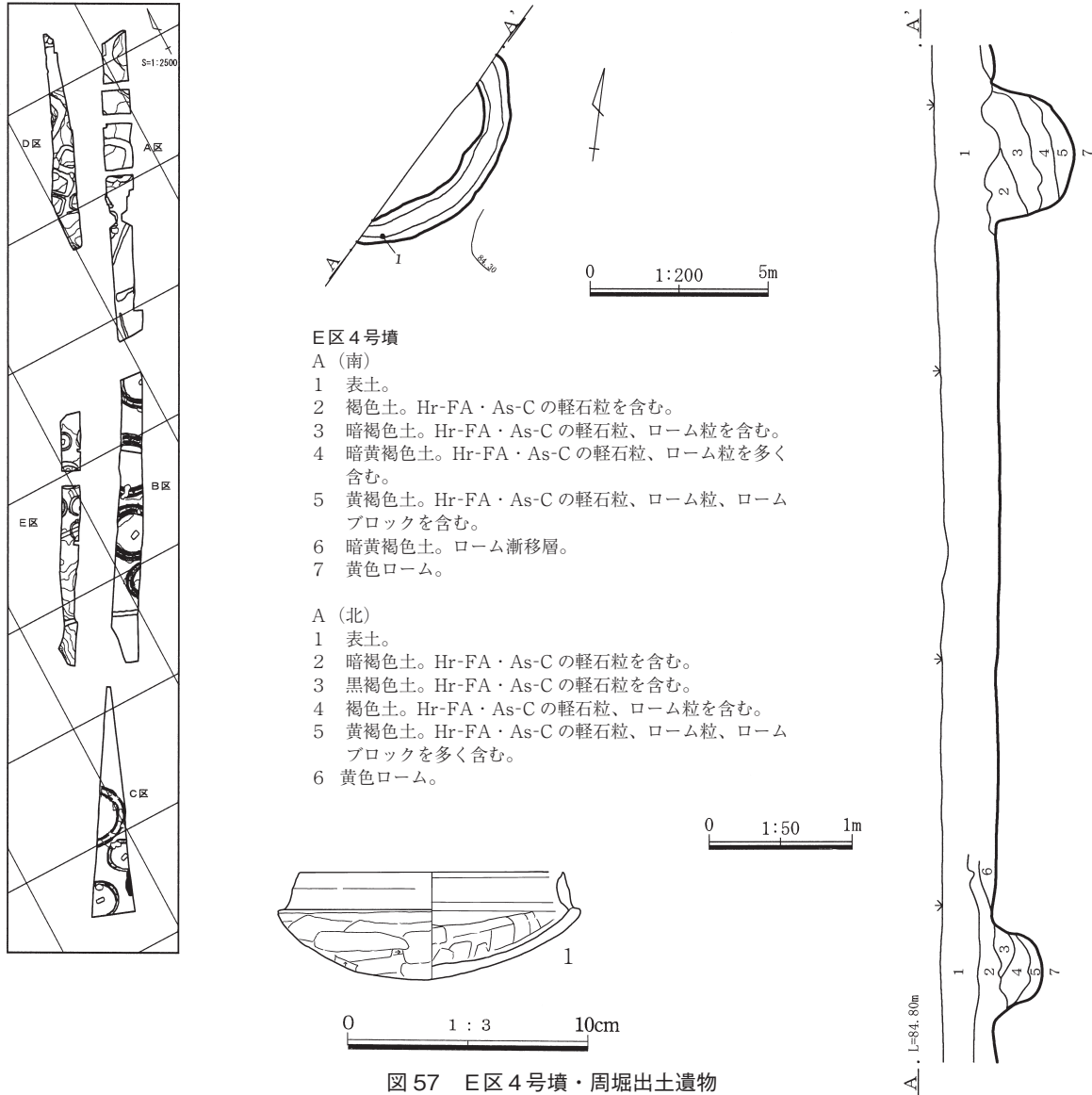


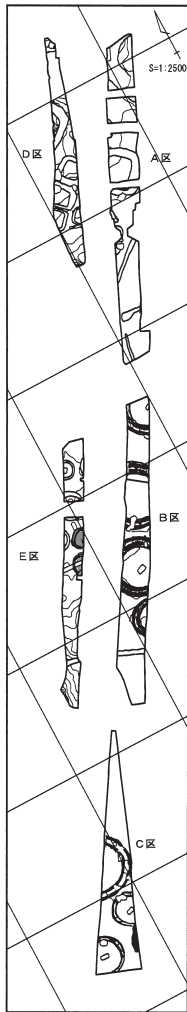
図57 E区4号墳・周堀出土遺物

E区 5号墳(写真PL.21・22)

**位置** 988・-481グリッド。E区中央の東端部に位置し、周堀全体の約1/2を検出。**墳丘** ほぼローム層の上面まで削平されて確認できず、葺石、埴輪列も確認できない。**周堀** 全形の西側1/2ほどを確認。検出面で上幅60cm～1.0m、下幅40cm、深さ10～20cmで、底面は平坦。南側は掘り込みが漸移的に浅くなって、ローム層上面では消滅。確認した周堀の規模から内径6.0m、外径8.0mの円墳と推定。**主体部** 墳丘部の中央と想定される位置よりやや南側に土坑を検出。土坑の東側が調査区域外で全形は不明だが、掘方は長軸1.4m、深さ20cm、長軸の

方位N-30°-Eで、おそらく南北に長軸をもつ長方形と推定。土坑の南端部には河原石が出土するが、この土坑に伴うか否か不明。底面に石槨を構築した掘方の痕跡がなく、粘土床も検出できないことから、埋葬施設は木棺直葬と考えられる。**出土遺物** 無し。**年代** 出土遺物が皆無で詳細な年代は不明だが、周堀の覆土中に6世紀初頭に降下した榛名二ツ岳洪川テフラ(Hr-FA)を含むことから、6世紀初頭以降と推定。**所見** 確認した周堀から推定する内径約6.0mは、発掘調査したこの古墳群の円墳のなかでは最も数の多い6m級の小規模古墳に属す。





E区5号墳

A・B

- 1 褐色土。表土。
- 2 暗褐色土。表土と同質の攪乱土。
- 3 褐色土。φ 15～70mmの玉石を多く含む。
- 4 暗褐色土。φ 15～70mmの玉石を多く含む。
- 5 黄褐色土。ローム粒を多く含む。
- 6 黒褐色土。Hr-FA・As-Cの軽石粒を含む。
- 7 暗黄褐色土。Hr-FA・As-Cの軽石粒を含む、ローム粒、ロームブロックを含む。
- 8 暗黄褐色土。ローム漸移層。
- 9 黄色ローム。

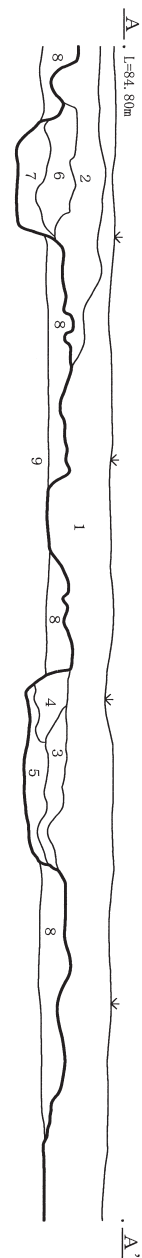
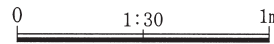
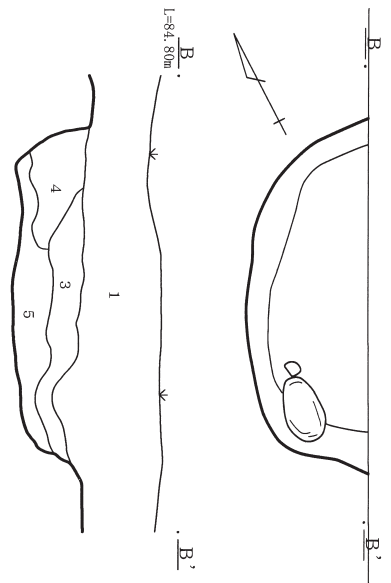
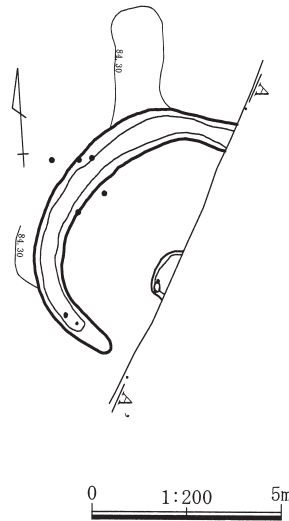


図58 E区5号墳・主体部

E区 6号墳(写真PL.22)

**位置** 981・-485グリッド。E区中央の東端部に位置し、周堀全体の約1/2を検出。**墳丘** ほぼローム層の上面まで削平されて確認できず、葺石、埴輪列も確認できない。**周堀** 全形の西側1/2ほどを確認。検出面で上幅60～70cm、下幅40～50cm、深さ20cmで、底面はほぼ平坦。南側は掘り込みが漸移的に浅くなって、ローム層上面では消滅。北側は攪乱で未確認。確認した周堀の規模から内径6.0m、外径7.8mの円墳と推定。**主体部** 調査区域外で未確認。**出土遺物** 無し。**年代** 出土遺物が皆無で詳細な年代は不明だが、隣接するE区5号墳に規模、形状が近似することから、6世紀初頭以降と推定。**所見** 確認した周堀から推定する内径約6.0mは、発掘調査したこの古墳群の円墳のなかでは最も数の多い6m級の小規模古墳に属す。主体部は確認

できないが、古墳の規模を考慮すると、おそらく竪穴系の埋葬施設である可能性が高いものと考えられる。

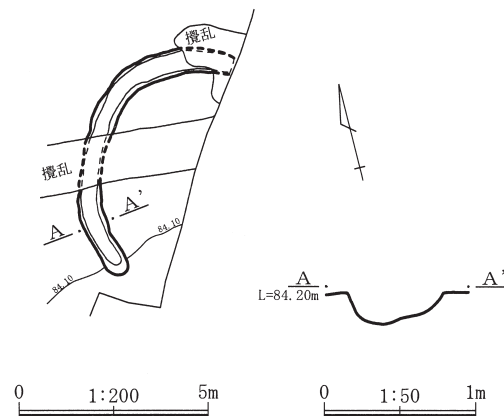


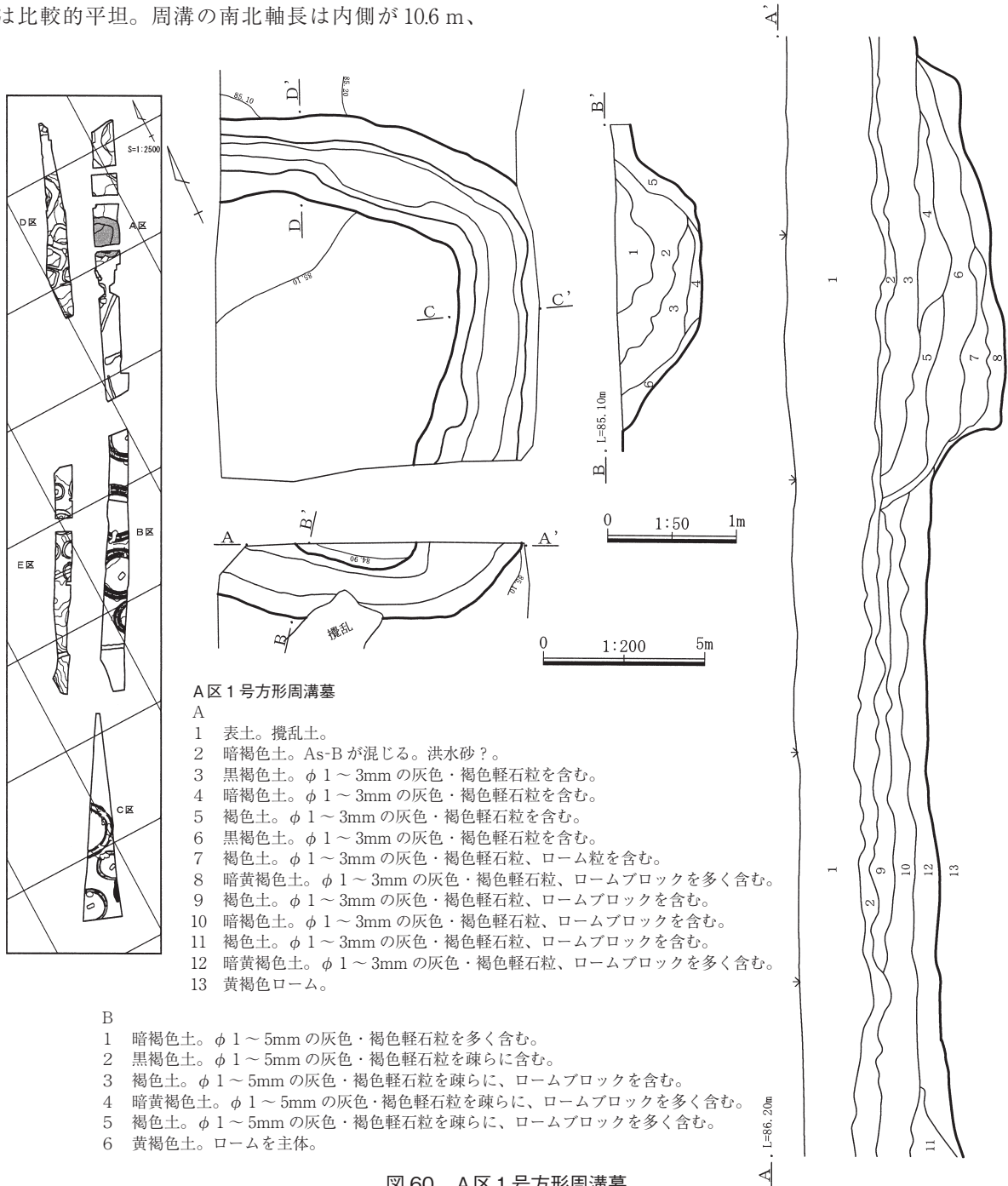
図59 E区6号墳

### 3 方形周溝墓

#### A区 1号方形周溝墓(写真 PL.23・34、遺物観察 73頁)

位置 089・-414グリッド。A区の中央部に位置し、周溝全体の約2/3を検出。墳丘 ほぼローム層の上面まで削平されて確認できない。周溝 全形の東側2/3ほどを確認。西辺は調査区域外。検出面で上幅3.0m、下幅約50cm~1.0m、深さ60~70cmで、底面は比較的平坦。周溝の南北軸長は内側が10.6m、

外側15.5m。軸線方位 N-34°-E。主体部 未確認。出土遺物 周溝の覆土内から縄文時代の石鏃が出土するが、この遺構に伴うものはない。年代 古墳時代前期と推定。所見 この古墳群の方形周溝墓のうち、最大の規模をもつ。



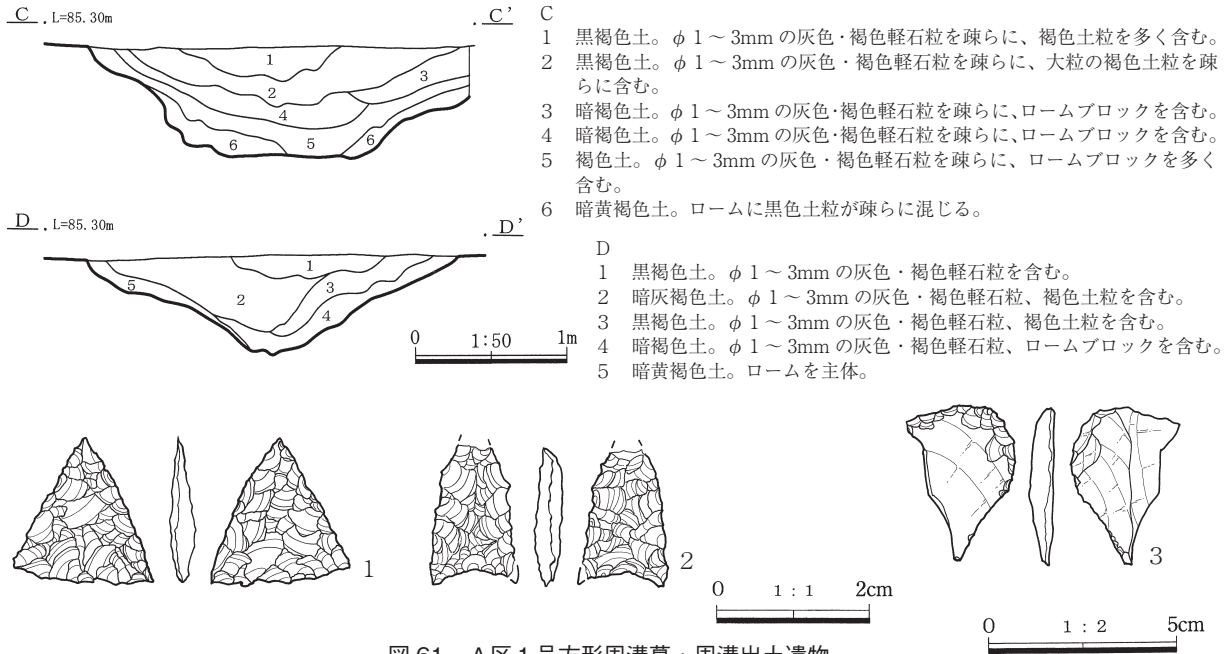
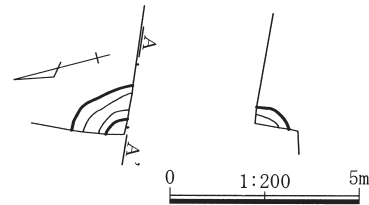


図 61 A区1号方形周溝墓・周溝出土遺物

A区 2号方形周溝墓(写真 PL.23)

**位置** 103・-409グリッド。A区北側の西端部に位置し、周溝の一部を検出。**墳丘** ローム層の上面まで削平されて確認できない。**周溝** 北東隅と南東隅の一部を確認。検出面で上幅80cm、下幅30cm、深さ30cmで、底面はほぼ平坦。周溝の南北軸長は内側が4.2m、外側6.0mと推定。**軸線方位** N-12°-E。**主体部** 調査区域外で未確認。**出土遺物** 無し。**年代**古墳時代前期と推定。**所見** 周溝の一部を検出

したのみで全形は不明だが、推定される規模はこの古墳群の方形周溝墓のなかで最も小さい。



A区2号方形周溝墓  
A(東-西)

- 1 表土。攪乱土。
- 2 灰褐色土。
- 3 暗褐色土。φ 1～3mm の灰色・褐色軽石粒を疎らに含む。
- 4 黒褐色土。φ 1～3mm の灰色・褐色軽石粒を疎らに含む。
- 5 暗黄褐色土。ロームを多く含む。
- 6 暗黄褐色土。ロームを多く含む。5よりも暗い。
- 7 黄褐色土。ロームを主体。
- 8 褐色土。φ 1～3mm の灰色・褐色軽石粒を含む。

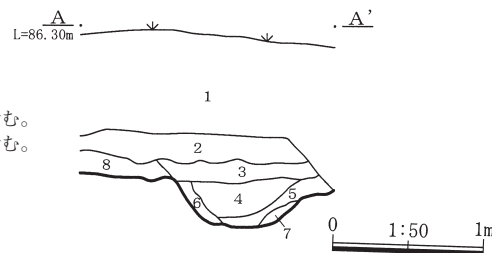
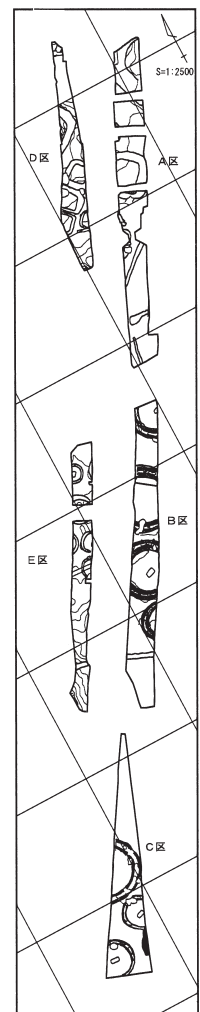


図 62 A区2号方形周溝墓

D区 1号方形周溝墓(写真 PL.24)

**位置** 082・-432グリッド。D区南側の東端部に位置し、周溝全体の約1/3を検出。**墳丘** ローム層の上面まで削平されて確認できない。**周溝** 全形の西側1/3ほどを確認。東辺は調査区域外。検出面で上幅80cm、下幅40cm、深さ20cm。周溝の南北軸長

は内側が4.3m、外側5.5mと推定。**軸線方位** N-43°-E。**主体部** 調査区域外で未確認。**出土遺物** 無し。**年代**古墳時代前期と推定。**所見**





IV 古墳時代の遺構と遺物

全形は不明だが、推定される規模はこの古墳群の  
方形周溝墓のなかで最も小さい部類に属す。

D区 1号方形周溝墓

A

- 1 暗褐色土。φ 1～3mmの灰色軽石粒(As-C)を疎らに含む。
- 2 暗黄褐色土。φ 1～3mmの灰色軽石粒(As-C)を疎らに、ロームブロックを多く含む。

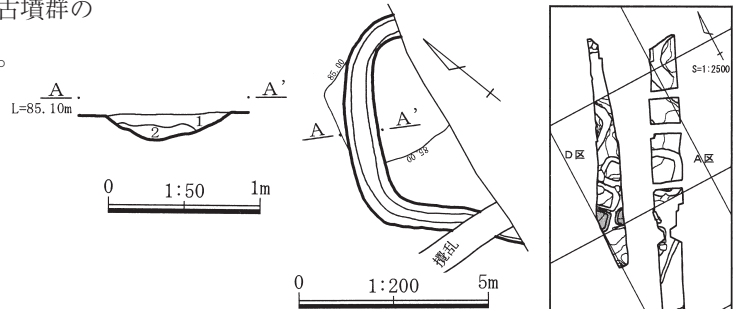
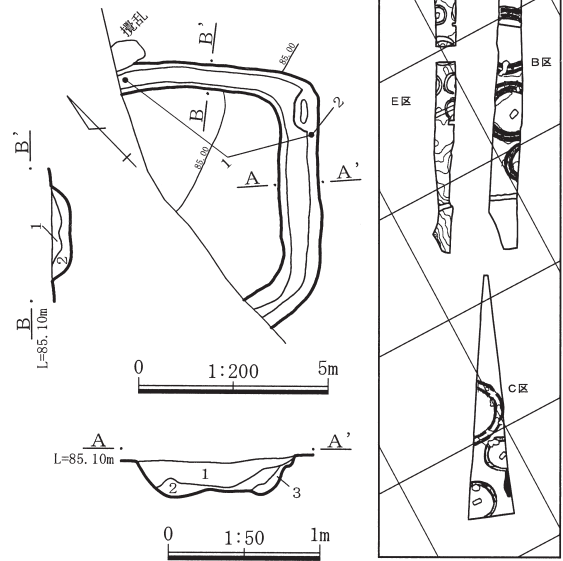


図 63 D区 1号方形周溝墓

D区 2号方形周溝墓(写真PL.24・34、遺物観察 74頁)

位置 085・-439グリッド。D区南側の西端部に位置し、周溝全体の約1/2を検出。墳丘 ローム層の上面まで削平されて確認できない。周溝 全形の東側1/2ほどを確認。西辺と南辺は調査区域外。検出面で上幅60cm～1.0m、下幅40～50cm、深さ10～20cmで、底面はほぼ平坦。周溝の南北軸長は内側が5.8m、外側7.3mと推定。軸線方位 N-40°-E。主体部 未確認。出土遺物 周溝の北辺西側と東辺北側の覆土内から、土師器壺が出土。年代 周溝内から出土した土師器壺から、古墳時代前期の4世紀後半と推定。所見 全形は不明だが、推定される規模はこの古墳群の方形周溝墓のなかでは中規模に属す。



D区 2号方形周溝墓

A

- 1 暗褐色土。φ 1～3mmの灰色・褐色軽石粒、φ 1～5mmのローム粒を含む。
- 2 暗褐色土。φ 1～3mmの灰色・褐色軽石粒、ロームブロックを疎らに含む。
- 3 暗黄褐色土。φ 1～3mmの灰色・褐色軽石粒、ロームブロックを多く含む。

B

- 1 暗褐色土。φ 1～3mmの灰色軽石粒、ローム粒を疎らに含む。
- 2 暗黄褐色土。φ 1～3mmの灰色軽石粒、ロームブロックを多く含む。

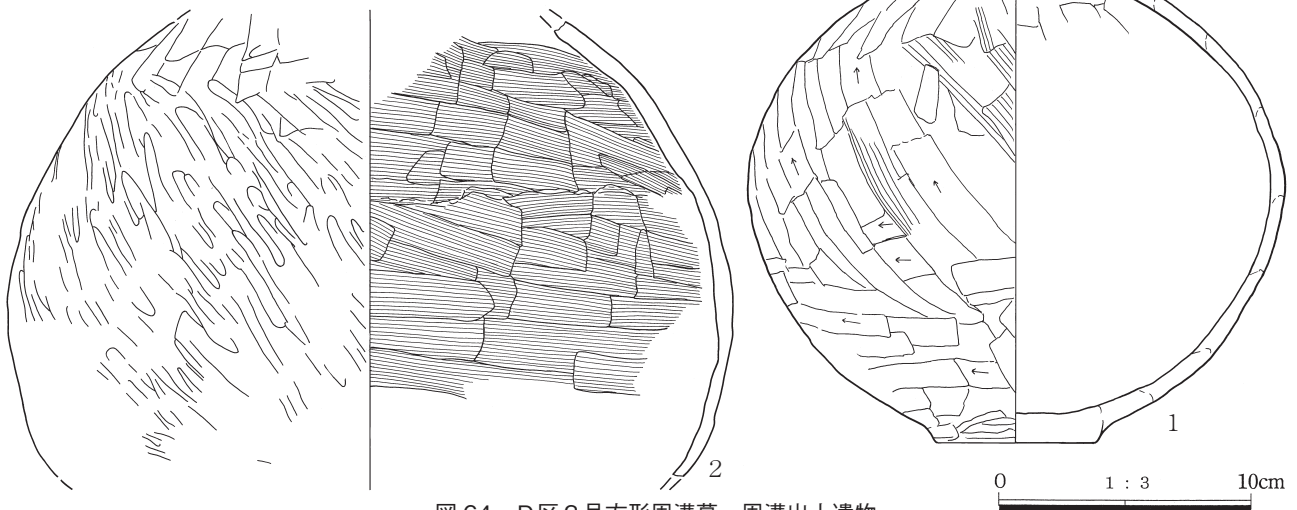
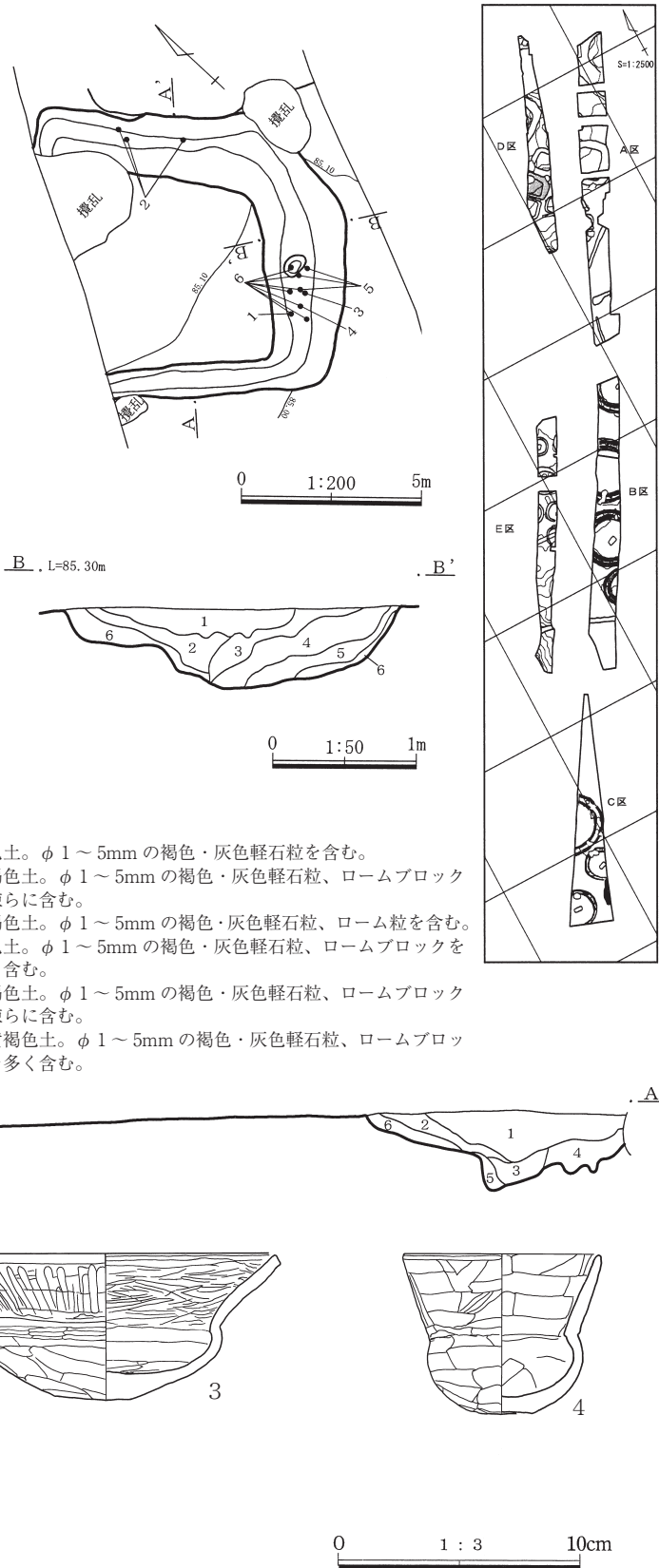


図 64 D区 2号方形周溝墓・周溝出土遺物

D区 3号方形周溝墓(写真 PL.25・35、遺物観察 74頁)

**位置** 090・-435グリッド。D区南側の中央部に位置し、周溝全体の約3/4を検出。**墳丘** ローム層の上面まで削平されて確認できない。**周溝** 全形の東側3/4ほどを確認。西辺は調査区域外。検出面で上幅1.0～2.2m、下幅40～90cm、深さ30～60cmで、南辺の幅が他に対して極端に狭い。周溝の南北軸長は内側が5.3m、外側7.8m。東西軸長は内側が5.3m、外側8.8mで、周溝の外側では東西に長軸をもつ長方形と推定。**軸線方位** N-45°-E。**主体部** 未確認。**出土遺物** 周溝東辺の覆土内から土師器壺・埴・鉢が出土。**重複** 北辺がD区4号方形周溝墓と接するが、新旧関係は不明。**年代** 周溝内から出土した土師器から、古墳時代前期の4世紀後半と推定。**所見** 全形は不明だが、推定される規模はこの古墳群の方形周溝墓のなかでは中規模に属す。



D区3号方形周溝墓

A (南)

- 1 暗褐色土。φ1～5mmの灰色・褐色軽石粒、ロームブロックを疎らに含む。
- 2 黒褐色土。φ1～5mmの灰色・褐色軽石粒、ロームブロックを疎らに含む。
- 3 暗黄褐色土。ロームを主体。

A (北)

- 1 暗灰褐色土。φ1～5mmの褐色・灰色軽石粒、ローム粒を含む。
- 2 暗灰褐色土。φ1～5mmの褐色・灰色軽石粒を含む。1よりローム粒が多い。
- 3 暗灰褐色土。1・2より軽石粒が少ない。
- 4 暗黄褐色土。ロームを主体。
- 5 暗黄褐色土。ロームブロックを多く含む。
- 6 黄褐色土。ロームを主体。

B

- 1 黒色土。φ1～5mmの褐色・灰色軽石粒を含む。
- 2 暗褐色土。φ1～5mmの褐色・灰色軽石粒、ロームブロックを疎らに含む。
- 3 黒褐色土。φ1～5mmの褐色・灰色軽石粒、ローム粒を含む。
- 4 褐色土。φ1～5mmの褐色・灰色軽石粒、ロームブロックを多く含む。
- 5 暗褐色土。φ1～5mmの褐色・灰色軽石粒、ロームブロックを疎らに含む。
- 6 暗黄褐色土。φ1～5mmの褐色・灰色軽石粒、ロームブロックを多く含む。

A . L=85.30m

A'

図65 D区3号方形周溝墓・周溝出土遺物 1



図 66 D区3号方形周溝墓周溝出土遺物 2

D区 4号方形周溝墓(写真PL.25・26・35、遺物観察74頁)

**位置** 096・-427グリッド。D区南側の東端部に位置し、周溝全体の約3/4を検出。**墳丘** ローム層の上面まで削平されて確認できない。**周溝** 全形の西側3/4ほどを確認。南辺は調査区域外。検出面で上幅1.5～2.3m、下幅70cm～1.5m、深さ30～50cm。周溝の東西軸長は内側が5.8m、外側9.4m。南北軸長は内側が5.5m、外側8.9mで、周溝の外側では東西に長軸をもつ長方形と推定。**軸線方位**

N-52°-E。**主体部** 未確認。**出土遺物** 周溝北辺と西辺の覆土内から、口縁部がS字状を呈すものと、単口縁の2個体の土師器台付甕が出土。**重複** 西辺の上端がD区3号方形周溝墓周溝の上端と接するが、新旧関係は不明。**年代** 周溝内から出土した土師器台付甕から、古墳時代前期の4世紀後半と推定。**所見** 全形は不明だが、推定される規模はこの古墳群の方形周溝墓のなかでは中規模に属す。



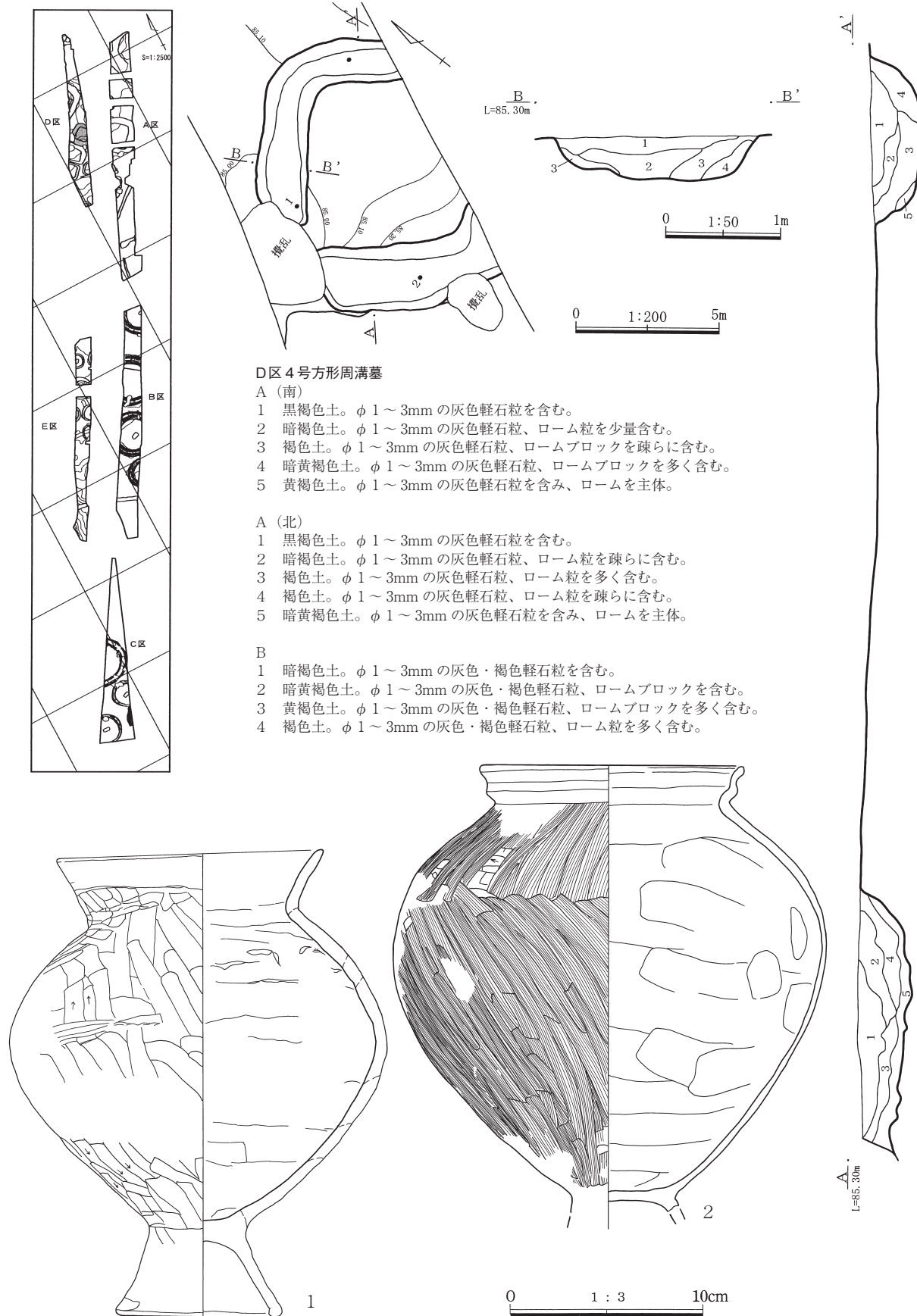


図 67 D区4号方形周溝墓・周溝出土遺物

## V その他の遺構と遺物

### 1 溝

#### A区 1号溝(写真PL.27)

位置 062・-425グリッド。A区の中央部に位置する。検出 ほぼローム層の上面で検出。規模・形状 上幅1.0～1.5m、下幅40～50cm、深さ30～40cmで、断面形は緩やかな船底状。走行 北東から南西の方向に走行。底面の標高は、北東が高く南

西が低い。遺物 無し。重複 北東部でA区集石遺構と重複。集石遺構→A1溝の順で新しい平面精査の所見を得た。新旧関係を判定する資料を欠く。年代 年代を判定する資料を欠く。所見 古墳時代以降の所産と考えられるが、年代、性格ともに不明。

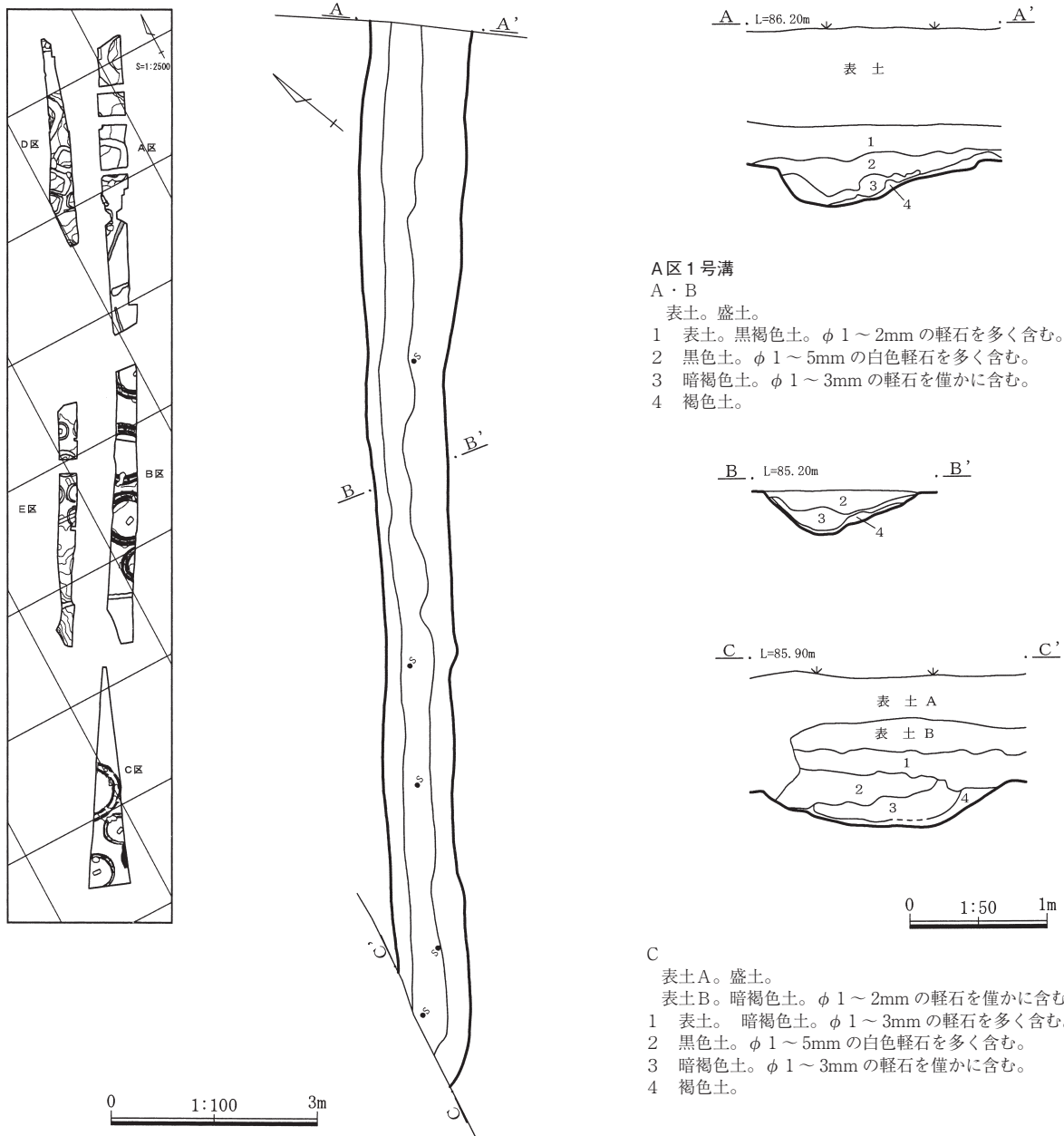
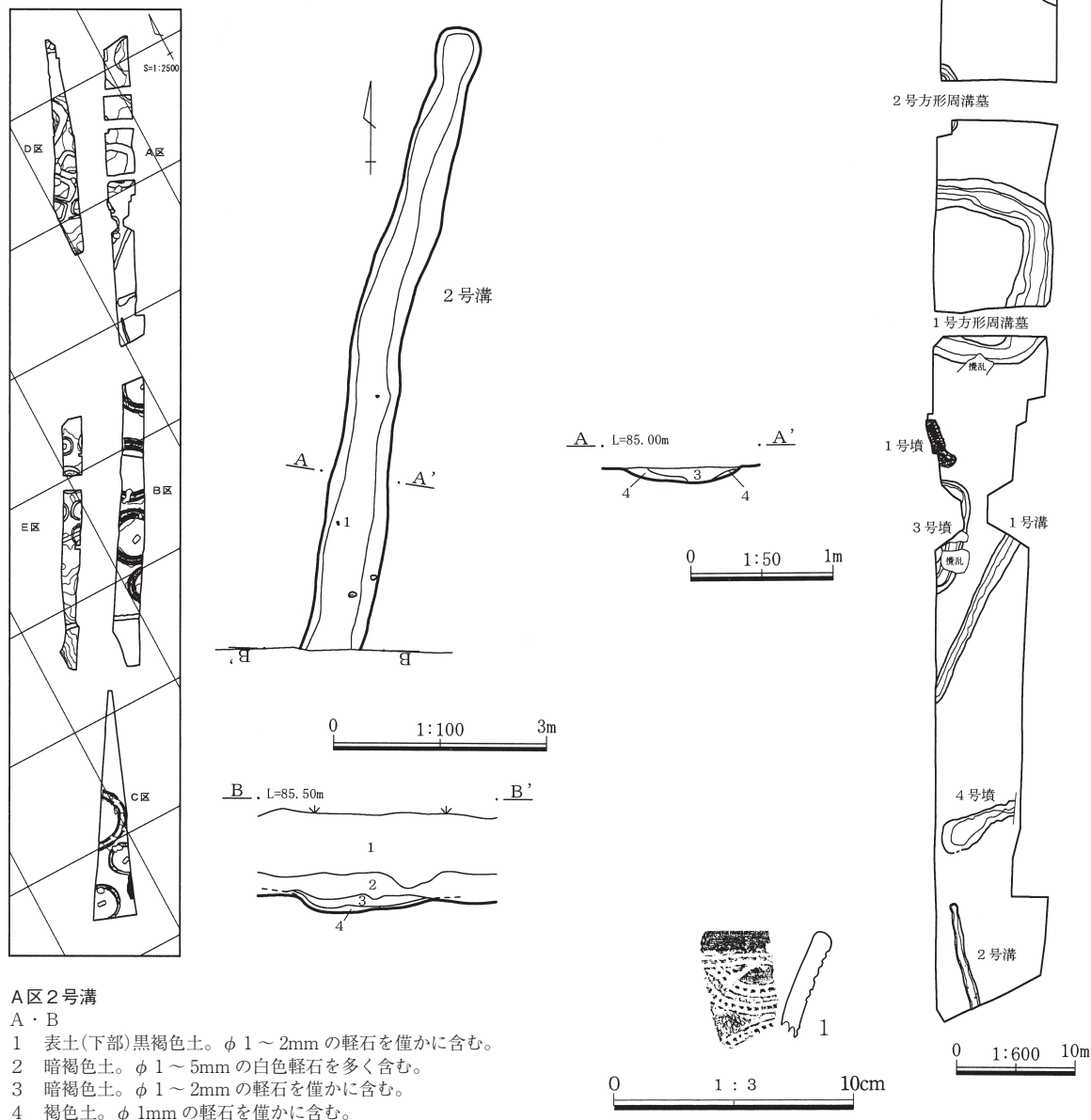


図68 A区1号溝

A区 2号溝(写真PL.27・35、遺物観察74頁)

位置 035・-438グリッド。A区の南端部に位置する。検出 ほぼローム層の上面で検出。規模・形状

上幅60~90cm、下幅30~60cm、深さ10cmで、断面形は緩やかな船底状。走行 北から南の方向に走行。底面の標高は、北部、南部ともにほぼ同レベル。遺物 覆土内から縄文土器深鉢の破片が出土するが、この遺構に伴うものではないと判断。重複 無し。年代 年代を判定する資料を欠く。所見 古墳時代以降の所産と考えられるが、年代、性格ともに不明。



A区2号溝

A・B

- 1 表土(下部)黒褐色土。φ1~2mmの軽石を僅かに含む。
- 2 暗褐色土。φ1~5mmの白色軽石を多く含む。
- 3 暗褐色土。φ1~2mmの軽石を僅かに含む。
- 4 褐色土。φ1mmの軽石を僅かに含む。

図69 A区2号溝・出土遺物



B区1号溝・E区1号溝(写真PL.28)

**位置** 947・-485グリッド。B区1号溝とE区1号溝は中央の調査範囲外を挟んで両側に確認し、その平面位置が連続し、断面の形状が近似することから同一の溝と判断。**検出** ほぼローム層の上面で検出。**規模・形状** 上幅1.5m、下幅40~90cm、深さ90cm~1.4mの逆台形状。**走行** 緩やかな傾斜

地形の等高線を斜めに横切る形で、西北西から東南東の方向に走行。底面の標高は、西側が高く東側が低い。**遺物** 無し。**重複** 無し。**年代** 年代を判定する資料を欠く。**所見** 年代、性格ともに不明であるが、走行する方向と底面の傾斜から、粕川から引いた用水路の可能性が考えられる。

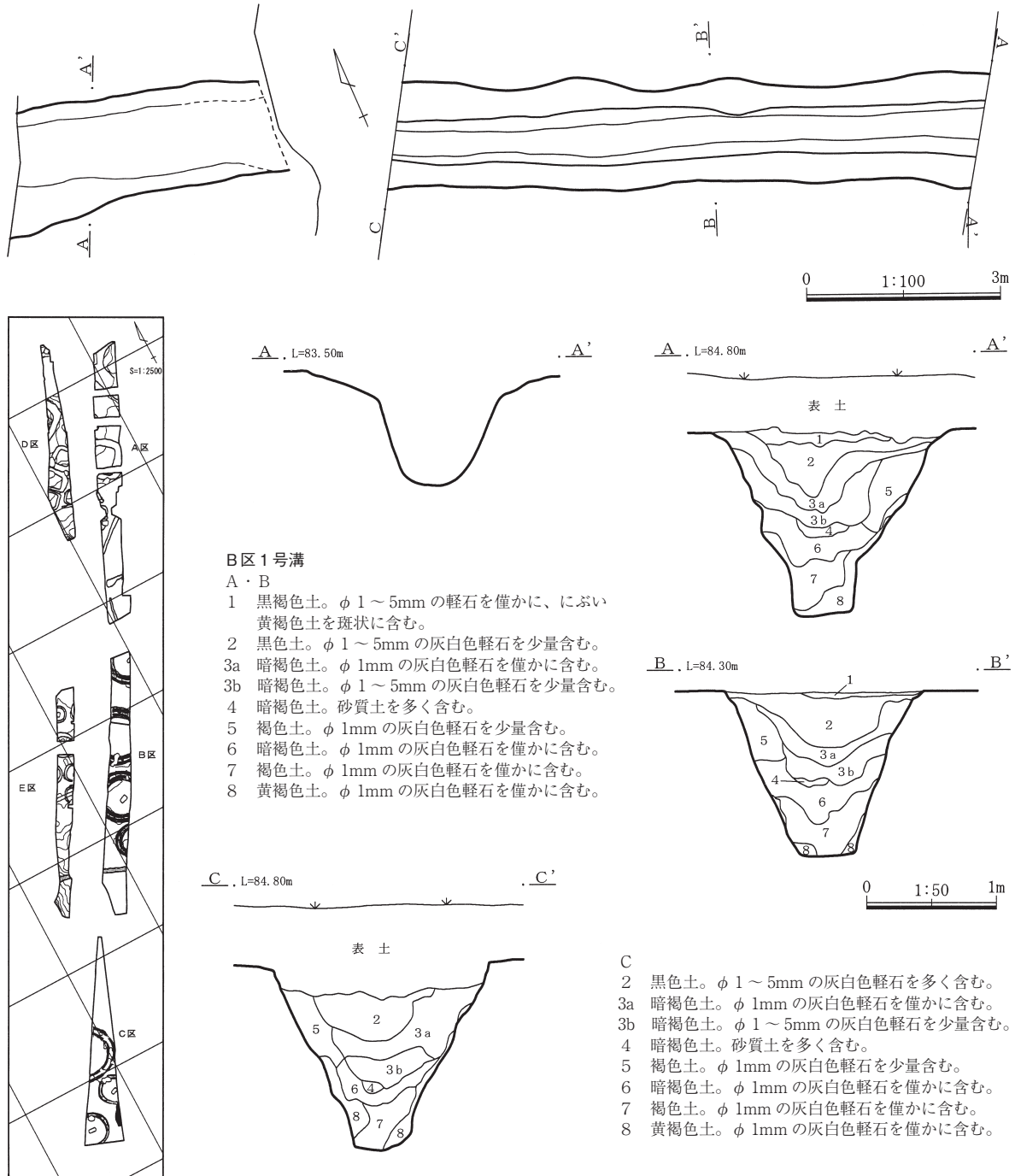


図70 B区1号溝・E区1号溝

2 遺構外出土遺物

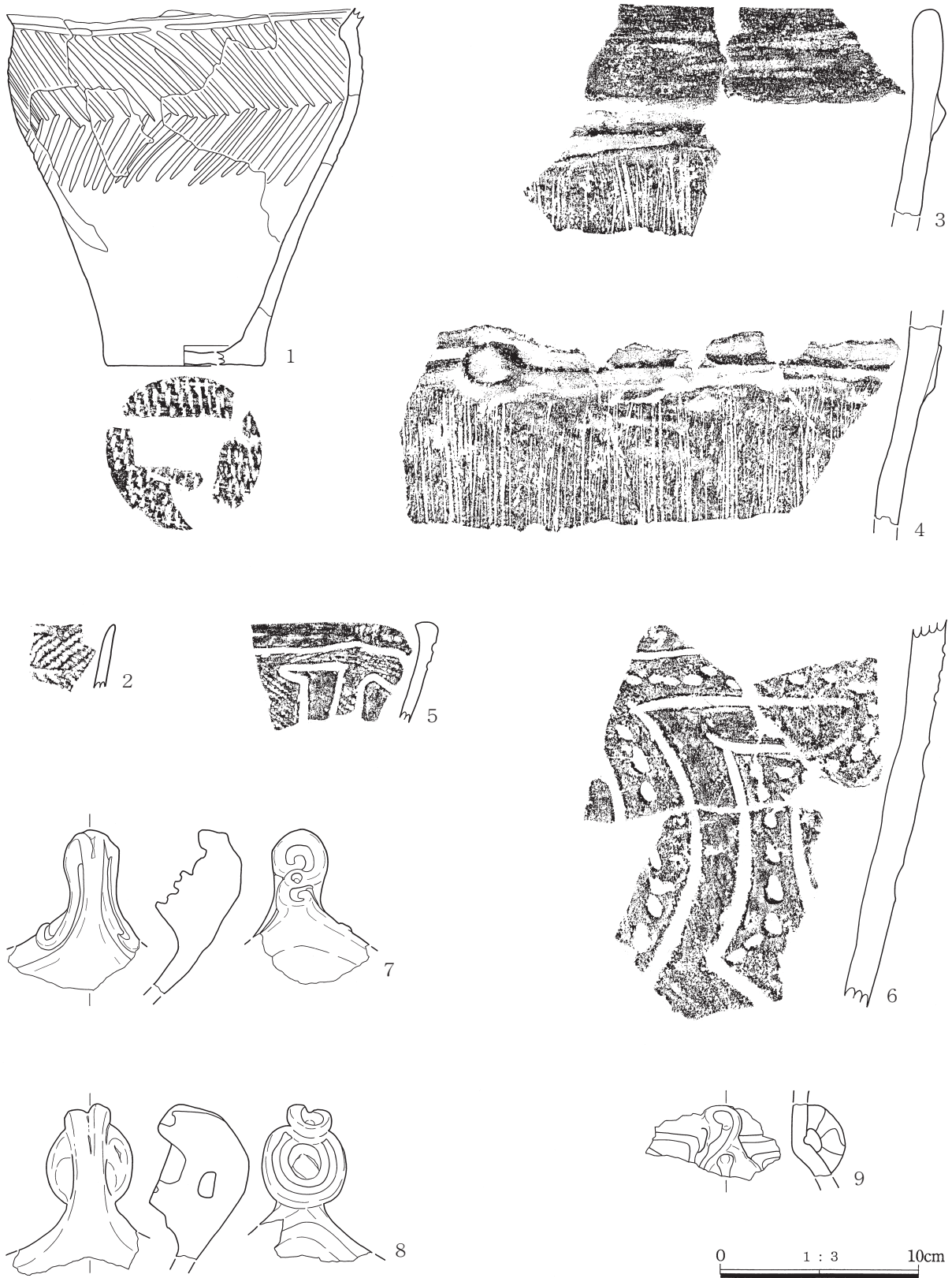


图 71 遺構外出土遺物 1

V その他の遺構と遺物

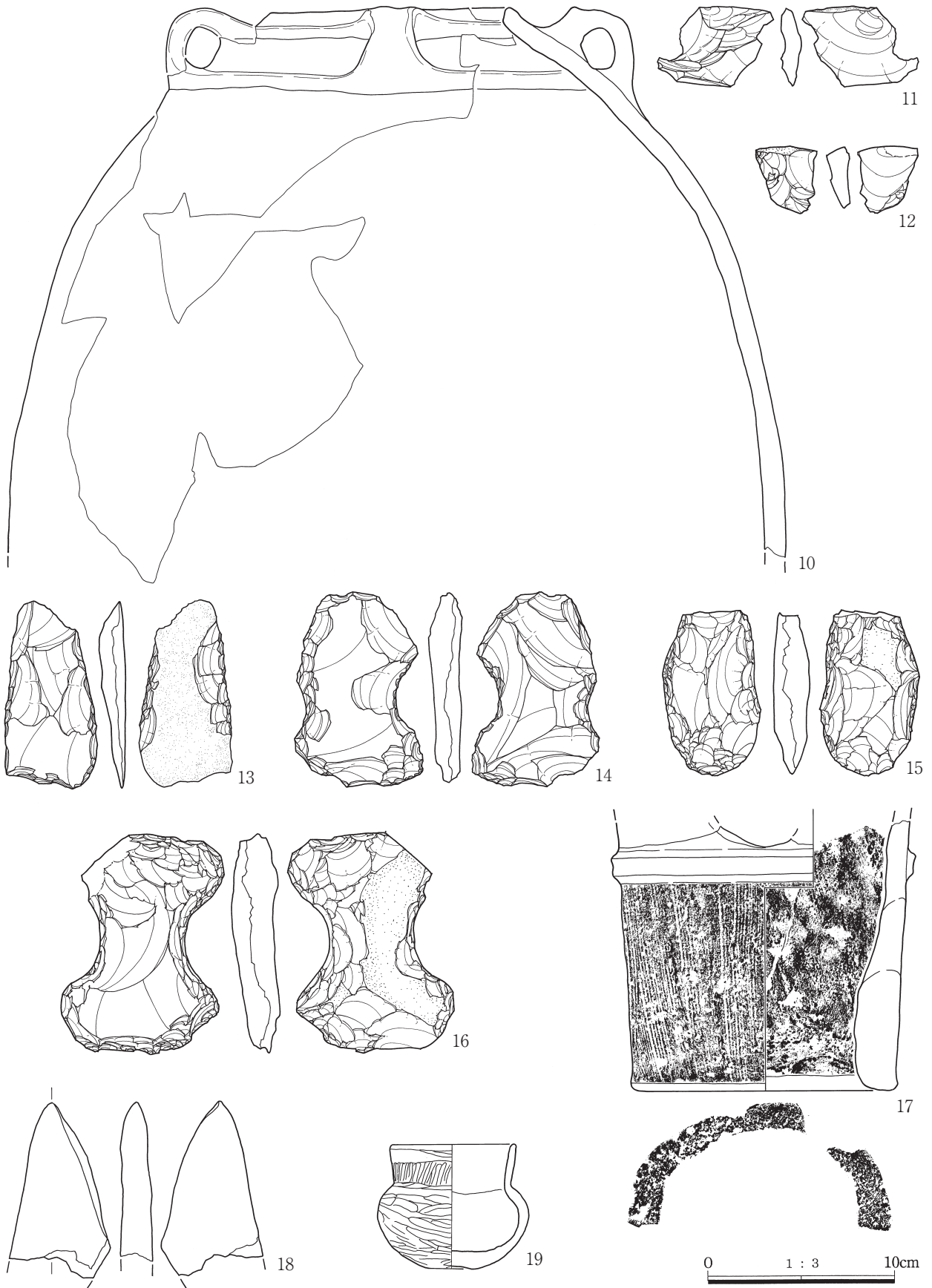


図 72 遺構外出土遺物 2



## VI 遺物観察表



### C区1号墳 周堀出土遺物

埴輪の樹立を想定できる古墳が極めて少ないこの古墳群において、C区1号墳は本報告書中で唯一埴輪の樹立が想定でき、内径16.3mの規模も最大の古墳。

円筒埴輪の他、形象埴輪として蓋形、家形が、それぞれ周堀内から破片の状態出土した。周堀内からは、土師器の壺・小形壺・坏も伴出したが、おそらく埴輪との年代に矛盾は認められない。

VI 遺物観察表

本関町古墳群 遺物観察表

竪穴住居

C区1号住居(※床面未確認のため、出土レベルは不明)

番号	種類 器種	出土 レベル	法量 (cm)	①焼成 ②色調 ③胎土	成・整形技法の特徴 (器形・文様の特徴)	残存状態 備考
1	縄文土器 深鉢		口25.4底- 高-	①普通 ②黄灰色 ③白 色軽石	口縁部に横位隆帯1条、以下に縦位隆帯垂下。	口縁部～胴部 上位1/4
2	縄文土器 深鉢	埋甕	口-底4.3 高-	①普通 ②鈍い黄橙色③白 ・黒色粒・石英・角閃石	帯状沈線間に列点施文。	口縁部～胴部 上位欠損
3	縄文土器 深鉢		口(26.4)底- 高-	①普通 ②鈍い黄橙色 ③白・黒・褐色粒	口縁部に横位沈線1条、以下に疎らな縦位沈線。	口縁部～胴部 上位1/4
4	縄文土器 深鉢		口-底- 高-	①普通 ②鈍い黄橙色③ 白色軽石・石英・角閃石	円形刺突。	口縁部把手
5	縄文土器 深鉢	埋甕	口-底7.3 高-	①普通 ②橙色 ③白・ 褐色粒・白色軽石・長石	櫛歯状工具による沈線。	胴部中位～底 部1/3
6	縄文土器 深鉢		口-底- 高-	①普通 ②鈍い黄橙色③ 白・白色軽石	口縁部に横位沈線1条。	胴部破片
7	縄文土器 深鉢		口-底- 高-	①普通 ②鈍い褐色 ③ 白色軽石・褐色粒	口縁部に沿って帯状沈線。	口縁部破片
8	縄文土器 深鉢		口-底- 高-	①普通 ②浅黄橙色 ③ 白・黒色粒	沈線による幾何学モチーフ区画。区画内に条線充填 施文。	口縁部破片
9	縄文土器 深鉢		口-底- 高-	①普通 ②鈍い褐色 ③ 白・黒色粒・長石	沈線による曲線モチーフ。沈線間に列点施文。	胴部破片
10	縄文土器 深鉢		口-底- 高-	①普通 ②鈍い橙色 ③ 白色軽石・褐色粒	隆帯をX字状、U字状に貼付。	胴部破片
11	縄文土器 深鉢		口-底7.5 高-	①普通 ②浅黄橙色 ③ 白・褐色粒・角閃石・石英	縦位帯状沈線施文。	胴部中位～底 部1/3
12	縄文土器 深鉢		口-底- 高-	①普通 ②鈍い黄橙色③ 白・褐色粒	帯状沈線間に列点施文。	胴部破片
13	縄文土器 深鉢		口-底- 高-	①普通 ②鈍い黄橙色③ 白・褐色粒・白色軽石	U字状に隆帯貼付。	胴部破片
14	縄文土器 深鉢		口-底- 高-	①普通 ②灰黄褐色 ③ 白・黒・褐色粒・石英	沈線区画内にLR縄文縦位施文。	胴部破片
15	縄文土器 深鉢		口-底- 高-	①普通 ②浅黄橙色 ③ 白・黒・白色軽石・角閃 石	帯状沈線間に列点施文。	胴部破片
16	縄文土器 深鉢		口-底- 高-	①普通 ②鈍い黄橙色③ 黒・褐色粒・白色軽石	帯状沈線による曲線モチーフ。区画内にLR縄文充 填施文。	胴部破片
17	磨製石斧		長さ10.6	幅5.6 厚さ3.3 重さ266.9 g	変玄武岩	一部欠損
18	磨製石斧		長さ9.9	幅5.1 厚さ3.0 重さ262.6 g	変玄武岩	完形
19	磨製石斧		長さ11.0	幅4.7 厚さ1.7 重さ162.0 g	黒色頁岩	完形
20	磨製石斧		長さ6.7	幅5.0 厚さ2.1 重さ131.1 g	変玄武岩	ほぼ完形
21	磨製石斧		長さ8.2	幅4.7 厚さ2.4 重さ135.7 g	黒色頁岩	ほぼ完形
22	打製石斧		長さ8.2	幅5.7 厚さ2.1 重さ85.0 g	黒色頁岩	完形
23	打製石斧		長さ10.7	幅6.8 厚さ3.0 重さ214.6 g	黒色頁岩	完形
24	炉石		長さ(15.6)	幅(22.3) 厚さ(4.8) 重さ2,800 g	粗粒輝石安山岩	破片
25	多孔石		長さ23.0	幅22.0 厚さ11.5 重さ7,200 g	粗粒輝石安山岩	完形

土坑

C区2号土坑

1	縄文土器 深鉢	覆土	口-底- 高-	①普通 ②鈍い黄橙色③ 白・黒色粒	垂下沈線間にLR縄文施文。	胴部破片
2	縄文土器 深鉢	覆土	口-底- 高-	①普通 ②鈍い黄色③白 色軽石・角閃石・石英	括れ部に把手を付す。	胴部破片

C区4号土坑

1	縄文土器 深鉢	覆土	口-底- 高-	①普通 ②浅黄橙色 ③ 白色軽石	沈線区画内に列点施文。	胴部破片
---	------------	----	------------	---------------------	-------------	------

C区5号土坑

1	縄文土器 深鉢	+34	口-底- 高-	①普通 ②灰黄褐色 ③ 白色軽石・褐色粒	U字状に隆帯貼付。	胴部破片
2	削器	+45	長さ4.1	幅5.8 厚さ1.4 重さ31.0 g	黒色頁岩	完形
3	凹石	+2	長さ(16.7)	幅(14.5) 厚さ7.2 重さ2,700 g	粗粒輝石安山岩	2/3

集石遺構

A区集石遺構

1	縄文土器 深鉢		口-底- 高-	①普通 ②鈍い黄褐色 ③ ③白・黒色粒・角閃石	口縁部に隆帯による楕円形状区画。区画内にRL縄 文充填施文。	口縁部破片
---	------------	--	------------	----------------------------	-----------------------------------	-------

古墳

A区4号墳

1	土製紡錘車	+7	上幅1.7 下幅4.1 厚さ1.5	灰黄褐色 白色軽石・黒色粒		1/2
---	-------	----	-------------------	---------------	--	-----

B区1号墳

1	土師器 坏	+22	口(15.2)底- 高-	①普通 ②明赤褐色 ③ 白色軽石・黒・褐色粒	外面 口縁部横撫で、体部篋削り。 内面 口縁部横撫で、体部篋研磨。	口縁部～体部 破片
2	削器	+10	長さ11.0 幅4.7 厚さ0.9	重さ46.7 g		完形

## B区2号墳

番号	種類 器種	出土 レベル	法量 (cm)	①焼成 ②色調 ③胎土	成・整形技法の特徴 (器形・文様の特徴)	残存状態 備考
1	土師器 坏	+7	口12.0底- 高-	①普通 ②明黄褐色 ③ 白・黒・褐色粒	外面 口縁部横撫で。 内面 口縁部横撫で。	口縁部破片
2	鉄環	+29	直径3.2 重さ23.3 g			完形?

## B区3号墳

1	円筒埴輪	+3	口-底14.0 高-	①普通 ②橙色 ③白色 軽石・褐色粒・角閃石	外面 縦刷毛。 内面 撫で。	基底部破片
2	土師器 壺	+28	口-底7.5 高-	①普通 ②橙色 ③白色 軽石・褐色粒・石英	外面 口縁部横撫で、胴部磨研。 内面 口縁部横撫で、胴部磨研。	口縁部欠損

## B区4号墳

1	打製石斧	+13	長さ12.6 幅7.6 厚さ1.2 重さ122.3 g			完形
---	------	-----	-----------------------------	--	--	----

## C区1号墳

1	土師器 坏	±0	口12.0底- 高4.0	①普通 ②赤褐色 ③白 ・褐色粒・角閃石	外面 口縁部横撫で、体部磨削り。 内面 口縁部横撫で、体部斜縦位磨研。	ほぼ完形
2	土師器 小形壺	+6	口8.5底- 高12.7	①普通 ②橙色 ③白色 軽石・黒色粒・角閃石	外面 口縁部横撫で、体部斜縦位磨削り後上位撫で。 内面 口縁部横撫で、体部撫で。	完形
3	土師器 壺	±0	口19.4底8.7 高33.7	①普通 ②橙色 ③白色 軽石・褐色粒・角閃石・石英	外面 口縁部横撫で、体部縦位磨削り。 内面 口縁部横撫で、体部磨削り。	ほぼ完形
4	円筒埴輪	+5~45	口-底- 高-	①普通 ②橙色 ③白色 軽石・褐色粒	外面 縦刷毛。 内面 撫で。	胴部破片
5	円筒埴輪	+4~58	口22.8底- 高-	①普通 ②橙色 ③白色 軽石・褐色粒・角閃石	外面 縦刷毛。 内面 撫で。	口縁部
6	円筒埴輪	覆土	口(21.8)底- 高-	①普通 ②鈍い橙色 ③ 白色軽石・褐色粒・石英	外面 縦刷毛。 内面 撫で。	口縁部破片
7	円筒埴輪	+43	口-底13.2 高-	①普通 ②鈍い橙色 ③ 白色軽石・褐色粒・角閃石	外面 縦刷毛。 内面 撫で。	胴中位~底部
8	蓋形埴輪	+11~49	口(31.0)底- 高-	①普通 ②明赤褐色 ③ 白色軽石・褐色粒・角閃石・石英	外面 撫で。 内面 撫で。	受部破片
9	蓋形埴輪	±0~50	口(30.0)底- 高-	①普通 ②明赤褐色 ③ 白色軽石・褐色粒・角閃石	外面 縦刷毛。 内面 横刷毛。	受部破片
10	家形埴輪	+26~49	口-底- 高-	①普通 ②橙色 ③白色 軽石・黒・褐色粒・石英	外面 撫で。 内面 撫で。	下屋根部破片

## C区2号墳(主体部土坑底面)

1	赤色球状未焼成土製品(赤玉)	短径6.1 長径7.1 厚さ5.4 重さ229.2g	明赤褐色 白色軽石・赤色粒・細砂粒	完形、凹み2条
2	赤色球状未焼成土製品(赤玉)	短径6.3 長径6.8 厚さ6.0 重さ248.6g	明赤褐色 白色軽石・赤色粒・細砂粒	完形、凹み1条
3	赤色球状未焼成土製品(赤玉)	短径6.3 長径6.3 厚さ6.4 重さ234.3g	明赤褐色 白色軽石・赤色粒・細砂粒	完形、凹み2条
4	赤色球状未焼成土製品(赤玉)	短径6.3 長径6.9 厚さ6.3 重さ246.9g	明赤褐色 白色軽石・赤色粒・細砂粒	完形、凹み2条
5	赤色球状未焼成土製品(赤玉)	短径6.3 長径6.8 厚さ6.7 重さ255.7g	明赤褐色 白色軽石・赤色粒・細砂粒	一部欠損、凹み2条
6	赤色球状未焼成土製品(赤玉)	短径7.5 長径7.5 厚さ5.6 重さ290.1g	明赤褐色 白色軽石・赤色粒・細砂粒	完形、凹み2条
7	赤色球状未焼成土製品(赤玉)	短径6.6 長径6.8 厚さ6.3 重さ261.9g	明赤褐色 白色軽石・赤色粒・細砂粒	完形
8	赤色球状未焼成土製品(赤玉)	短径6.6 長径6.9 厚さ6.0 重さ261.3g	明赤褐色 白色軽石・赤色粒・細砂粒	完形
9	赤色球状未焼成土製品(赤玉)	短径6.6 長径7.0 厚さ5.3 重さ223.5g	明赤褐色 白色軽石・赤色粒・細砂粒	完形
10	赤色球状未焼成土製品(赤玉)	短径6.0 長径<6.1> 厚さ<3.5> 重さ151.6g	明赤褐色 白色軽石・赤色粒・細砂粒	1/2
11	赤色球状未焼成土製品(赤玉)	短径<5.1> 長径6.3 厚さ<5.6> 重さ163.5g	明赤褐色 白色軽石・赤色粒・細砂粒	1/2
12	赤色球状未焼成土製品(赤玉)	短径<6.1> 長径<7.0> 厚さ<4.5> 重さ151.4g	明赤褐色 白色軽石・赤色粒・細砂粒	1/2、割れてずれる
13	赤色球状未焼成土製品(赤玉)	短径<5.9> 長径7.3 厚さ<4.2> 重さ149.3g	明赤褐色 白色軽石・赤色粒・細砂粒	1/2
14	赤色球状未焼成土製品(赤玉)	短径<3.0> 長径<6.3> 厚さ<3.5> 重さ89.4g	明赤褐色 白色軽石・赤色粒・細砂粒	破片
15	赤色球状未焼成土製品(赤玉)	短径<4.2> 長径<5.6> 厚さ<2.8> 重さ40.3g	明赤褐色 白色軽石・赤色粒・細砂粒	破片

## C区3号墳

1	土師器 坏	+5・14	口12.4底- 高5.1	①普通 ②明赤褐色 ③ 白色軽石・黒・褐色粒	外面 口縁部横撫で、体部磨削り。 内面 口縁部横撫で、体部撫で。	ほぼ完形
---	----------	-------	-----------------	---------------------------	-------------------------------------	------

## E区3号墳

1	円筒埴輪	覆土	口-底- 高-	①普通 ②明赤褐色 ③ 白色軽石・褐色粒・角閃石	外面 縦刷毛。 内面 撫で。	胴部破片
---	------	----	------------	-----------------------------	-------------------	------

## E区4号墳

1	土師器 坏	+24	口11.0底- 高4.5	①普通 ②鈍い赤褐色 ③白・黒・褐色粒	外面 口縁部横撫で、体部磨削り。 内面 口縁部横撫で、体部撫で。	口縁部一部欠損
---	----------	-----	-----------------	------------------------	-------------------------------------	---------

## 方形周溝墓

## A区1号方形周溝墓

1	石鎌	覆土	長さ2.0 幅1.9 厚さ0.3 重さ0.8 g	チャート	完形
2	石鎌	覆土	長さ(1.9) 幅1.3 厚さ0.3 重さ0.7 g	黒曜石	先端部欠損
3	石錐	覆土	長さ4.2 幅2.8 厚さ0.5 重さ5.8 g	黒色頁岩	完形



VI 遺物観察表

D区2号方形周溝墓

番号	種類 器種	出土 レベル	法量 (cm)	①焼成 ②色調 ③胎土	成・整形技法の特徴 (器形・文様の特徴)	残存状態 備考
1	土師器 壺	+18・23	口12.7 底6.4 高24.0	①普通 ②橙色 ③白色 軽石・黒色粒・石英	外面 口縁部横撫で、頸部～胴部斜縦位刷毛目。 内面 口縁部～頸部横撫で、胴部上位刷毛目、中・ 下位撫で。	2/3
2	土師器 壺	+23	口-底- 高-	①普通 ②橙色 ③白・黒 色粒・石英	外面 胴部斜縦位篋研磨。 内面 胴部横位刷毛目。	胴部1/4

D区3号方形周溝墓

1	土師器 鉢	+49	口10.6 底2.2 高4.3	①普通 ②鈍い黄橙色 ③白・黒・褐色粒	外面 口縁部～体部横位篋削り後撫で。 内面 口縁部～体部斜横位刷毛目。	完形
2	土師器 埴	+14・21・ 28	口16.7 底- 高5.0	①普通 ②橙色 ③白色 軽石・褐色粒・角閃石	外面 口縁部篋撫で、体部篋削り。 内面 口縁部～底部縦位篋研磨。	2/3
3	土師器 埴	+25	口14.5 底3.3 高6.1	①普通 ②橙色 ③白色 軽石・黒・褐色粒	外面 口縁部縦位篋研磨、体部横位篋撫で。 内面 口縁部横位篋研磨、体部撫で。	完形
4	土師器 埴	+35	口8.2 底2.3 高6.7	①普通 ②橙色 ③白色 軽石・黒色粒	外面 口縁部～体部横位篋撫で。 内面 口縁部～体部横位篋撫で。	ほぼ完形
5	土師器 埴	+13・18・ 21	口22.3 底- 高12.9	①普通 ②鈍い橙色 ③ 黒・褐色粒	外面 口縁部～底部縦位篋研磨。外面煤付着。 内面 口縁部～底部縦位篋研磨。	完形
6	土師器 壺	+4・8・37	口-底9.2 高-	①普通 ②橙色 ③白色 軽石・黒色粒	外面 頸部～胴部斜縦位刷毛目後、胴部斜縦位篋研 磨。内面 頸部撫で、胴部上・中位横位篋撫で後撫 で、下位横位刷毛目。内外面接合痕顕著。	口縁部欠損
7	土師器 壺	覆土	口-底8.9 高-	①普通 ②橙色 ③白・ 黒・褐色粒	外面 胴部斜縦位篋研磨。 内面 胴部斜横位刷毛目後、斜縦位刷毛目。	胴部下位～底 部

D区4号方形周溝墓

1	土師器 台付甕	+7	口13.9 底8.7 高24.1	①普通 ②鈍い黄橙色 ③白色軽石・石英・角閃石	外面 口縁部上半横撫で、下半～台部斜縦位篋撫で。 内面 口縁部横撫で、胴部・台部撫で。	2/3、内面に接 合痕顕著
2	土師器 台付甕	+34	口13.8 底- 高-	①普通 ②浅黄色 ③白 色軽石・角閃石	外面 口縁部横撫で、胴部斜縦位刷毛目。 内面 口縁部横撫で、胴部篋撫で後撫で。	台部欠損

溝

A区2号溝

1	縄文土器 深鉢	+9	口-底- 高-	①普通 ②橙色 ③黒色 粒・石英・長石	C字状爪形文による木の葉状モチーフ。	口縁部破片
---	------------	----	------------	------------------------	--------------------	-------

遺構外出土遺物

1	縄文土器 深鉢		口-底8.1 高-	①普通 ②鈍い黄橙色 ③白・黒色粒・石英	胴部に横位矢羽根状沈線施文。底面に網代痕。	胴部～底部 1/2
2	縄文土器 深鉢		口-底- 高-	①普通 ②橙色 ③白色 粒・長石	口縁部にLR・RL羽状縄文を横位施文。	口縁部破片
3	縄文土器 深鉢		口-底- 高-	①普通 ②浅黄色 ③白 色軽石・褐色粒・角閃石	口縁部横位隆帯1条、以下に縦位条線施文。	口縁部破片
4	縄文土器 深鉢		口-底- 高-	①普通 ②灰黄色 ③白 色軽石・褐色粒・角閃石	胴部に縦位条線施文。	胴部破片
5	縄文土器 深鉢		口-底- 高-	①普通 ②鈍い黄橙色 ③白・黒色粒・石英	帯状沈線による幾何学モチーフ。区画内にLR縄文 充填施文。	口縁部破片
6	縄文土器 深鉢		口-底- 高-	①普通 ②鈍い黄橙色 ③白色軽石・黒・褐色粒・ 角閃石	帯状沈線による幾何学モチーフ。沈線間に列点施 文。	胴部破片
7	縄文土器 深鉢		口-底- 高-	①普通 ②鈍い橙色 ③ 白色粒・石英・角閃石	波頂部の把手。S字状隆帯貼付。	把手
8	縄文土器 深鉢		口-底- 高-	①普通 ②浅黄橙色 ③ 白色粒・角閃石	波頂部の把手。円板状に成形。	把手
9	縄文土器 深鉢		口-底- 高-	①普通 ②浅黄橙色 ③ 白色軽石	頸部の把手。沈線施文。	把手
10	縄文土器 深鉢		口(12.0)底- 高-	①普通 ②鈍い黄橙色 ③白色軽石・黒・褐色粒	口縁部に2条の隆帯と把手。無文。	口縁部～胴部 破片
11	剥片		長さ3.5 幅3.1 厚さ1.2 重さ11.9 g	黒色頁岩		完形
12	剥片		長さ4.2 幅6.2 厚さ1.1 重さ24.9 g	黒色頁岩		完形
13	打製石斧		長さ10.0 幅4.9 厚さ1.4 重さ63.0 g	細粒輝石安山岩		完形
14	打製石斧		長さ10.3 幅6.7 厚さ1.8 重さ103.4 g	黒色頁岩		完形
15	打製石斧		長さ8.7 幅5.2 厚さ1.9 重さ110.1 g	黒色頁岩		完形
16	打製石斧		長さ11.6 幅8.6 厚さ2.4 重さ235.5 g	細粒輝石安山岩		完形
17	円筒埴輪		口-底14.0 高-	①普通 ②橙色 ③白・ 黒・褐色粒	外面 縦刷毛。 内面 撫で。	基底部1/2
18	蓋形埴輪		口-底- 高-	①普通 ②鈍い赤褐色 ③白色軽石・黒・褐色粒	外面 篋撫で。 内面 篋撫で。	立飾り先端部 破片
19	土師器 埴		口6.7 底2.8 高6.6	①普通 ②鈍い黄橙色 ③白・黒・褐色粒	外面 口縁部縦位篋研磨、体部横位篋研磨。 内面 口縁部～体部撫で。体部内面以外赤色塗彩。	3/4

## VII 調査の成果



C区遠景(北から、中央の主体部が赤玉を出土したC区2号墳)

この古墳群では、周堀の規模が判明した古墳は18基。これらのうち、最小のものは内径5m、最大のものは16.3mで、6m級が最も多く、9mがその平均値となる。赤玉を出土したC区2号墳の内径は9mで、この古墳群において、最も平均的な規模の古墳となる。

## 本関町古墳群出土の「赤玉」について

専修大学大学院・前橋国際大学講師 右 島 和 夫

### 1. はじめに

本古墳群のC区2号墳から出土した赤色球状未焼成土製品(「赤玉」)は、当地域では類例をほとんど知らないところであり、その形態的特徴、出土状態からして、何らかの特別な意図を持って置かれた可能性に強く興味を持たれるところである。現状における類例の詳細な探索を経ていないことから、今後の資料の集積を期して検討すべきかもしれないが、とりあえず現状における事実関係を確認し、資料解釈の可能性を検討することにより、問題提起の機会とする意義を重視し、予察的な観点からまとめてみた。

列島全域で類例を探索してみると、宮崎県を中心として地下式横穴墓で確認されている「朱玉」と呼称されている遺物に一定の共通点が見出される場所である(80頁図1～3)。この資料については、栗原文蔵氏がはじめて注目し、戸高真知子氏が精力的に検討した段階でも宮崎県を中心とした地域の極めて限られた墳墓以外では認められなかったことから、古墳時代において古墳から出土する普遍的な遺物ではない可能性が指摘されている。なお、本古墳群の赤玉と宮崎県地域の朱玉資料は形態的特徴等に相違点もあるので、両者が果たして同じ種類のものなのかどうかの検討も必要である。

### 2. 赤玉の資料的特徴について

**形態** 自然科学分析(「赤玉の成分分析」・「赤玉の溶解・焼成実験」)の項でも述べられているように、本資料は自然に得られる赤黄色土を固めて乾かしただけのものであるため、もろいものである。確実に完形及びそれに近いと考えられるものは、No.1～No.9までの9点である。形状は球形を意図して整形しているものと考えられ、直径が6.0～7.5cmと区々であるが、6.5～7.0cmの間の大きさのものが多い。同程度の大きさのものに仕上げる意図があったことは明らかである。この大きさは、成人が両手で包み込むような感じで球形を意識しておむすびを握った場合

の大きさに近いと言える。一個当たりの重量は220～290gを量る。大きさとも併せ、複数の人間が携わった場合のバラツキの範囲内としていだろう。

ところで、球形を意図しているとしたが、実際は完全な球形のものは少なく、非常にわずかではあるが扁平なものが多い。そのため、それぞれの資料を平坦なところに置くと、必ず据わりよく収まる。その上下の面の片側に、浅いU字形に窪んだ線上の圧痕が2条ほど平行して認められるものがある。おそらく、塑性に富んだ状態で握って整形を終え、仕上がったものをアシのような茎の上に乗せて乾かしたことを物語る痕跡であろう。そこから完全に乾燥していく過程で、当初球形に近かったものが、その重みで若干扁平になったものと考えられよう。

資料の表面が当初の状態を保っているものをみると、最終仕上げとして、ナデ整形に近い調整が施されていることがわかる。泥を丸く握り、少し乾いてくる時点で平滑に仕上げられたことがわかる。

ところで、完形でない資料の中には、球形のものが半裁されたような形状のものがある(80頁図4 No.1・10・12・13。No.1は損なわれている程度は軽いがこれらに類する)。その平坦な面はざらざらしており、当初の仕上げ面とは明らかに異なっている。溶解実験により明らかになったように、本資料は水分に対して非常にもろいことがよくわかった。この性質を踏まえるなら、本資料が石槨の掘り方内に置かれた時、設置面の水分の多寡が関係しているものと思われる。

赤玉実測図に掲載した資料は15点であるが、この他に断片となってしまっている資料が10点ある。上述の想定を踏まえると、これらの中には、さらに水分の環境が悪い場所で溶解してしまった割合の高かったものがあると思われる。実際、掘り方内の赤玉設置面に、形状を保たず溶解した結果と思われる赤色面の広がり複数箇所確認されている。



以上の状況から、確実な個体数は15点であるが、当初は、おそらく25～30点の赤玉が置かれていたと想定していいだろう。

**出土状態** 赤玉が置かれていたのは、竪穴式小石槨の掘り方内の、掘り方壁面と石槨長側壁外面との間である(80頁図4)。ただし、掘り方底面そのものの上ではなく、石槨の側壁を据え付け、その下端部を土で埋めて安定させる状態にした面上である。

赤玉は、大半は長軸を東西とし、東側を頭位とする竪穴式石槨の南壁の外側に沿って置かれていた。その場合、均等に列状をなすのではなく、およそ50cmほどの間隔をあけて、東端、西端と中程の2カ所の都合4カ所にブロックをなして置かれている。これに3点ではあるが、北壁の東端寄り外側にブロックをなして置かれているものがあるので、全部で5ブロックになる。前述した設置面に溶解した赤色面が認められるのは、これら5ブロックの範囲を出るものではないので、当初は石槨を取り囲むように全周していたという可能性はない。

これらの赤玉のうち、南壁外側の東端寄りのブロックに置かれたものが、実測図を掲げたもの9点で、それより小さい破片が4点あるので、この部分に10点以上が置かれていたことが考えられる。他のブロックが破片資料も含めて3～4点のまとまりであるから、東端寄りの位置に集中的に置かれていると考えることができる。この位置は、石槨内に安置された遺体の頭部の位置に対応するものと考えていいだろう。頭部の外側に設置した意図を読み取ることができよう。そのように考えると、この集中区の反対側、すなわち北壁外側の東端寄りのブロックについても、同じ設置意図と理解していいだろう。北壁外側については、この部分だけで、他に置かれていないことは、頭部外側への設置に一義的な意図を想定する傍証になるであろう。

一方、南壁の外側に沿ってのみ置かれていることも、なんらかの意図を反映しているものと考えられる。これについては、現状では妙案が浮かばない。

ところで、本墳の竪穴式小石槨では、調査記録に

より、壁石及び天井石の内面に赤色塗彩が施されていることがわかる。その部位は、C区2号墳の調査報告で具体的に示されているところである。筆者は現地で石槨の塗彩状況について実見する機会を逸してしまったので、調査記録の内容から、遺体埋葬状態での頭部を取り巻く付近を中心に赤色塗彩がなされたのではと考えた。しかし、明確にそのような規則性が見られるわけではないこと、確認箇所が一つの石材についても部分的であること、さらには赤色顔料に赤玉と同じ成分で、水に溶解しやすいものを使用している可能性を考えると、次のような可能性も十分ある。調査時に塗彩箇所として確認できたのは、現段階で色あせずに残っていた箇所、当初は石槨内面の全面が塗彩されていた、という推測である。

### 3. C区2号墳への赤玉設置の意味

**赤玉の用途** 赤玉が古墳に設置された意味を検討する際の前提として、まず赤玉自体がどのような用途のものであったかということがある。

成分分析等の成果からは、洪積台地の高位段丘上に多く分布する赤黄色土に起因するとの可能性が指摘されている。すなわち、天然に存在する赤黄色土を採取し、団子状に丸めたものの可能性である(96頁「赤玉の成分分析」参照)。

赤玉を墓への設置という側面に重点をおいて見た場合、なんらかの赤い形状の品物を実物の替わりに土で形作った土製品とも考えられるところである。その場合は色調に意味があると考えられる必要がある。桃、赤米のおむすび等の食物も考えられなくはないが、この可能性は非常に少ないと思う。まず、周辺一帯の古墳を見渡しても類例が現段階ではまったく認められないからである。また、C区2号墳は群集墳の中では小型の部類に属する円墳であり、この古墳に限って一般的な部類に属する食物供献のような行為がなされる必然性が認められないからである。

単なる一小型古墳の葬送行為の派生的場面のためだけに本資料の原材料の赤黄色土を、例えば赤城山南麓の洪積台地の適当な箇所を訪れてわざわざ確保したとは考えられないところである。

## Ⅶ 調査の成果

このことと、赤玉の溶解・焼成実験の結果(103頁)、あるいはその成分分析結果からすると(96頁)、赤色顔料の原材料としての製品の用途の可能性はないだろうか。とするならば、赤玉に製品・流通形態としての側面が考えられてくるのである。

**C区2号墳被葬者の人物像** 少なくとも群馬県地域では現段階では一例に過ぎない古墳への赤玉副葬。しかもC区2号墳は6世紀前半の古墳としては小規模の部類に属する。果たして、本墳の被葬者には、どのような人物像が想定できるのだろうか。

まず、考えられるのは、赤玉と被葬者の間に特別な個人的関係があった可能性である。このことは、C区2号墳以外に赤玉がまったく認められていない事実から十分考えられるだろう。このことと、赤玉が赤色顔料の原材料としての製品であったという想定が正しいとするならば、C区2号墳の被葬者は副葬されている赤玉の製作者そのものではなかったろうか。すなわち、赤色顔料(赤玉)の原材料の生産に従事していた人物の可能性を考えたい。

後述するように、この時期、赤色顔料は社会の様々な場面で使用されていた。その中に、古墳の主体部である横穴式石室・竪穴式石槨の壁面やあるいは石槨の内面を赤色塗彩することがよく行われている。C区2号墳の竪穴式石槨も赤色塗彩されていたことは既述の通りである。これは、遺骸を永遠に保護したり、僻邪から守る朱・ベンガラ等の赤色に対する考え方を実現したものであり、その類例は枚挙にいとまがない。

赤玉の科学分析結果は、これがベンガラに起因するものでないことを指摘しているところである。一方で、赤色顔料の高い必要性を考えたとき、その代用品として身近で得られる本資料が赤色顔料材として使われた可能性は十分あるだろう。今後、当地域周辺一帯で、赤色顔料が使用されているものについて科学分析を及ぼし検討していく必要があるだろう。

C区2号墳の場合、石槨の壁面等への赤色塗彩に赤玉が原材料として使用されているとしたら、被葬者が、その原料たる赤玉製作にたずさわっていた特

殊性から、この赤玉で被葬者の頭部を中心とした周囲を取り囲む設置につながったのではなかろうか。

もちろん、赤玉が壁面等を赤色塗彩するものになるものであるから、赤玉自体にも壁面塗彩等と同じ効能がイメージされていたものと思われる。

### 4. 南九州における朱玉について

赤玉資料の類例の少なさのため、その意義について思案していたところであるが、そのような中、榎原考古学研究所の吉村和昭氏が、これによく似ているのではないかと思われる宮崎県を中心に南九州の地下式横穴から出土する「朱玉」の存在を教えてくれた。この資料は径約5cmの円形で、厚さ約1cmなので、煎餅あるいは薄い饅頭のような形状である。

この資料を最初に注目した栗原文蔵氏は、宮崎県小林市尾中原地下式横穴で出土した朱玉資料を検討している。その場合、発見が工事中の偶然の機会であったため、遺構との具体的な関係の把握はできなかった。その検討の中で、一定の規格性が認められること、板状の用具の上で乾燥させたことを指摘し、さらに、赤色顔料の原材料の製品としての流通形態であることを指摘した点は重要である。

その後、戸高真知子氏は、類例を増したこの朱玉資料について、もう一段掘り下げた検討を行っている。それは、この時点では、類例が10カ所以上の地下式横穴に及んだこと、分布が宮崎県を中心に、熊本県、鹿児島県にまで及ぶことがわかってきた。戸高氏の成果で重要なのは、朱玉の化学分析・顕微鏡観察の結果、朱玉にパイプ状の粒子が多量に含まれることから、鉄分を多く含む土・泥をもとにして製作したものであることを指摘した点である。

このように見てくると、南九州の朱玉は、形態・法量的には、本関町古墳群の赤玉とは異なるが、酸化第二鉄を多く含む土から製作していること、規格性が認められること、焼成して製品の形を作っているのではない点等、共通する部分も多くあり興味深いところである。

現状では、赤玉に類する資料は、南九州の朱玉資料だけであるが、それをもって、彼我の間に直接的

系譜関係を想定することには無理があるだろう。朱玉資料については、実見の機会を得ているわけではないこと、関連資料等の検討も十分果たしていないことから、今後の調査の機会をまって関係性の検討に及ぼしたい。

### 5. 群馬県地域における赤玉関連資料

高崎市教育委員会の田辺芳昭氏から、かつて実施した中之条町伊勢町地区遺跡群の調査で、赤玉に類する資料があるとの教示を得た。当該資料は現在、中之条町立歴史民俗資料館に展示されており、町教育委員会・資料館の好意により実見し、種々教示を得る機会があった。資料は、挿図に掲載したものを参照してもらいたい(80頁図5・6)、出土したのは同遺跡群の川端遺跡の5世紀後半に属するC区20号住居の壁際の床面上からである。資料は大きさとしては、赤玉資料に近いものであるが、本関町例の崩れそうなほどのもろさはない。同じ住居からは石に近い赤色岩塊片と思われるものも出土しているが、これをつぶして原料として玉状のものがつくられた可能性も考えられなくはない。ただし、本関町の赤玉資料のような科学分析等を経ていないので、今後の検討課題として残る。

なお、旧子持村(現渋川市)の中郷田尻遺跡の調査では、5世紀前半の26・28・29・30号住居の床面から、赤色顔料の広がりが見られた。この資料については、科学分析が行われ、パイプ状粒子が認められ、酸化第二鉄を多量に含む土を素材としたベンガラであることが確認されている。本関町赤玉資料とは原材料を異にしているが、おそらく、当初は赤玉形態で住居内にあったものが、溶解した結果を物語っている可能性が考えられないだろうか。

### 6. おわりに

本関町古墳群の周辺では、5世紀後半から6世紀前半にかけて、赤色顔料を使用して赤色塗彩された古墳埋葬施設の事例が非常に多い。葬られた死者の周囲を赤色で取り囲むことが広く行われていたことを物語っている。この傾向は、5世紀後半の竪穴式石槨や舟形石槨に認められるところである。より顕

著な状況を示すのは、6世紀初頭ないし前半に出現する初現期の横穴式石室においてである。この時期に本格的な横穴式石室を採用しているのは、前方後円墳や帆立貝式古墳、大型円墳をはじめとする有力古墳に限られており、これらのいずれもが石室の壁面を赤色顔料で赤色に仕上げていることが確認できる。前橋市大室古墳群の前二子古墳や本関町古墳群に近接して所在する洞山古墳、南方に所在する権現山古墳群の権現山Ⅱ号墳などが代表的である。

竪穴式から横穴式への主体部の移行過程の検討の中でも触れたように、有力墳の主体部形式として横穴式石室が採用されたのと、時期的に併行する群集墳では竪穴式石槨が主流であった。このことからすると、本関町古墳群のC区2号墳はもちろんのこと、伊勢崎市峯岸山古墳群や地藏山古墳群、あるいは伊勢崎市多田山古墳群の6世紀前半につくられた竪穴式石槨に認められる壁面への赤色塗彩は、横穴式石室の導入にあわせて活発化した壁面赤色塗彩の流れの影響を受けている可能性も考えられる。

一方、6世紀の上野地域は古墳への埴輪樹立が全国的に見ても抜きんでて活発な状況を示す地域である。この埴輪生産においては、赤色顔料は大いに利用されていたところである。

いずれにしても、C区2号墳がつけられた6世紀前半の時期は、古墳時代の中でも赤色顔料の使用が盛んになった時期と考えて間違いはないだろう。その需要に応ずるような背景があつて、赤玉が登場し、C区2号墳の被葬者に想定したような職掌が生まれた可能性を考えたい。

### 参考文献

- 栗原文蔵「朱玉」『考古学雑誌』1969
- 戸高真知子「赤い供物、朱玉」『えとのす』31 1986
- 戸高真知子「赤色顔料からみた葬送儀礼」『宮崎考古』16 1998
- 前橋市教育委員会『大室古墳群』2005
- 松村和男ほか『中郷田尻遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団 2007
- 『群馬県史』資料編3 1981
- 『伊勢崎市史』通史編1 1987
- 右島和夫「群馬県における初期横穴式石室」『古文化談叢』12集 1983
- 右島和夫「上野型埴輪」の成立』『群馬県埋蔵文化財調査事業団研究紀要』12 1995



Ⅶ 調査の成果

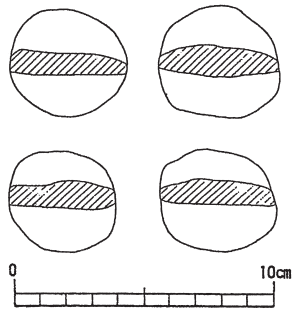


図1 宮崎県小林市尾中原地下式横穴出土朱玉  
(栗原 1969, 戸高 1986 より転載・写真: 宮崎県立考古博物館提供)

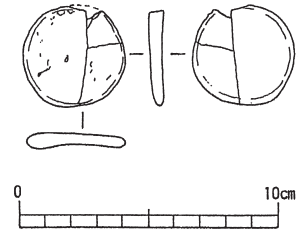
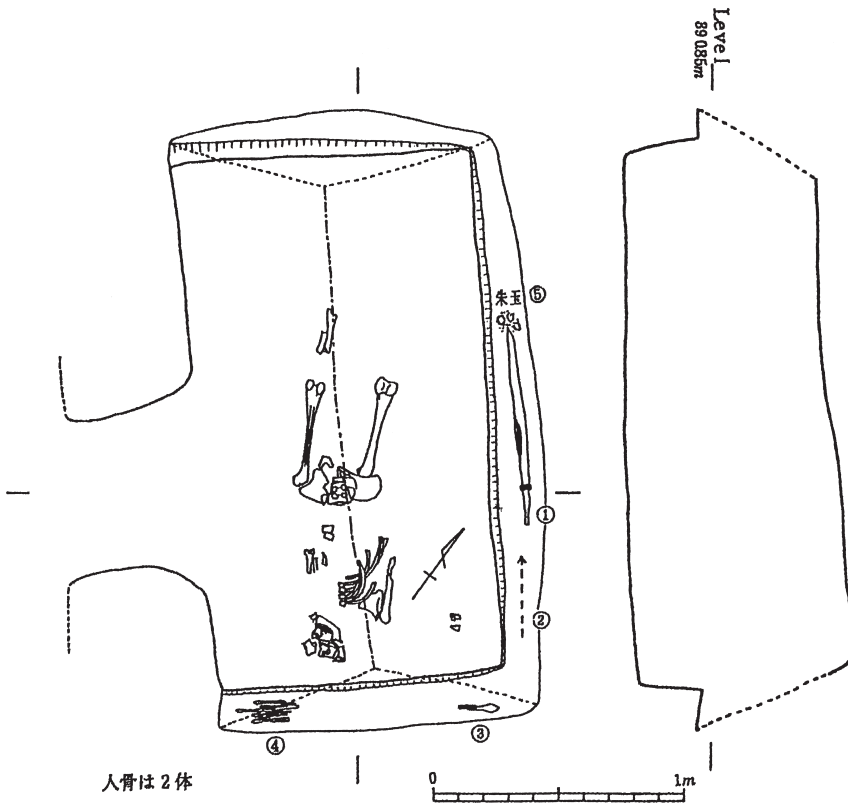


図2 宮崎県串良町岡崎1号地下式横穴出土朱玉  
(戸高 1998 より転載)



人骨は2体

図3 宮崎県須木村上ノ原2号地下式横穴実測図  
(戸高 1998 より転載)

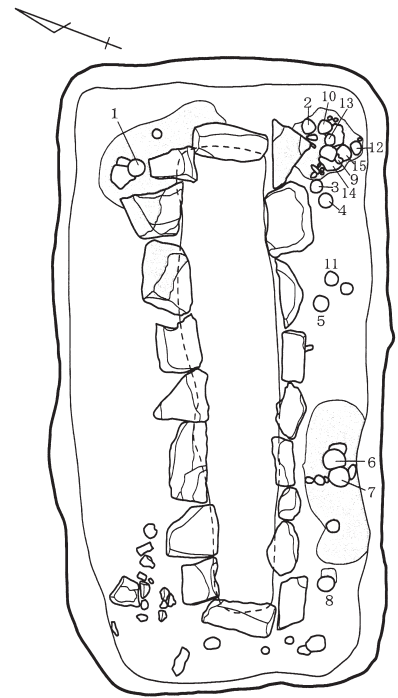


図4 本関町古墳群C区2号墳主体部



図5 群馬県中之条町伊勢町川端遺跡C区20号住居赤玉出土状況

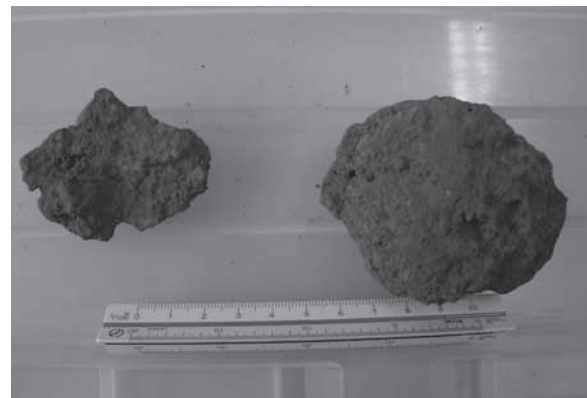


図6 群馬県中之条町伊勢町川端遺跡C区20号住居出土赤玉

# 群集墳における竪穴式から横穴式への移行過程

専修大学大学院・前橋国際大学講師 右 島 和 夫

## 1. 群集墳研究の課題と本関町古墳群

調査に基づいて本関町古墳群を構成する個々墳を具体的に検討したのをうけて、本項では、本関町古墳群が、赤城山南麓における古墳時代の展開過程の中で、どのように位置づけられるのか、また、日本列島の各地で進められた古墳造営活動・時代展開のなかにもどのように位置づけられるのかを検討することにしたい。その場合、古墳群が保有している諸特性のうちから一つのテーマにしぼって検討してみることにする。

表題にも掲げたように、群集墳における主体部は、群馬県地域では、多くの他地域と同様に、ある時点で竪穴式から横穴式へと移行していったわけである。本関町古墳群の場合にも、最初のところで概述したように、おおよそ六世紀中頃を前後した時期を境に、竪穴式から横穴式への移行が果たされたことが確認できる。ここでは、この変化の背景に、どのようなことが横たわっているのかを、古墳の諸特徴から導き出していきたい。また、本関町古墳群における移行過程が、赤城山南麓における、共通した状況なのかを比較検討することとしたい。

**初期群集墳について** ところで、群馬県地域において、横穴式石室を主体部形式としない群集墳(初期群集墳)が注意にのぼるようになったのは、昭和50年から51年にかけて実施された伊勢崎市(旧赤堀村)峯岸山古墳群、52年から53年にかけての同地蔵山古墳群、また53年の伊勢崎市(旧境町)下淵名古墳群の調査がきっかけと考えられる。その後、前橋市(旧粕川村)の白藤古墳群や渋川市の空沢古墳群など、良好な事例の発見が続き、初期群集墳の様相把握が厚みを増している。

筆者も、下淵名古墳群の調査を担当し、その後、調査報告書の古墳群の項の執筆の機会があり、またその後、次々と発見、調査されるようになった群馬県地域の初期群集墳全般について検討する機会があった。そこで確認できた主な特徴を記すと、①5

世紀後半に形成が開始される。②形成は急激であり、しかも県内の主要地域に一斉に広がる。③低墳丘の小規模円墳を構成の主体とする。④主体部は竪穴式小石槨を主とし、人体が入るギリギリの規模。⑤構成する古墳の中に階層差があり、埴輪の有無が連動している。等々の特徴をあげた。

あらたにこのような群集墳が成立した背景については、一つには、この時代の中心地である畿内の古墳動向を見逃すことができない。ここでは、先駆的に「初期群集墳」の登場が認められるところである。そこでは、生産力の増大等に基づいた有力家長層の輩出を受けて、ヤマト政権によるこれら家長層の直接把握の動きとして、従来の古墳システムの末端に位置づける新たな枠組みとして初期群集墳が登場する。この新しいシステムが間髪をおかずに畿内以外の有力諸地域にも広がったと考えられた。その場合、それら諸地域の群集墳に関わる家長層もヤマト政権の直接支配の枠組みに加わったのか否かについては、個別具体例に則した検討が必要であり、まだ完全な解決にはいたっていない。

群馬県地域の場合、この5世紀後半の時期に、明確な時代的画期性を指摘しうる。まず、それ以前の段階の前方後円墳の存在形態を見てみると、その数が非常に限られていること、規模的には非常に大型のものを主体としていたことがわかる。さらに、所在地が平野部の中核地域に限られていたことも特徴であり、寡占的な支配構造が看取されるところである。これに対して、5世紀後半の時期以降、築造される前方後円墳の数が大幅に増大する点と、それらの中に、前代に見られたような圧倒的に卓越した存在を指摘することはできない。しかも、所在地域において、従来の伝統的拠点を抜け出して築造される古墳が顕著となる点に注意される。その代表例を高崎市保渡田古墳群に見出すことができる。時代展開の中核エリアが分散する流れ、そこに新たな前方後円墳造営につながる首長層の輩出・成長の過程が見

## Ⅶ 調査の成果

えてくるわけである。このことと連動するように、集落の大幅拡大、新興地への進出が、集落・生産地（主として水田・畑跡）の様相から明確に把握することができる。畿内の時代動向において概述した有力家長層の輩出の動きが、群馬県地域の場合にも、具体的に、顕著に認められるわけである。この時期、当地域においても畿内同様、初期群集墳が成立する基盤形成が用意されてきたことは明らかだった。

**群集墳における横穴式石室の採用** ところで、群集墳における竪穴式から横穴式への移行について、筆者はかつて漠然と、横穴式石室が首長墓に採用される6世紀初頭ないし前半の時期には、これに連動して群集墳にも徐々に採用されるようになって考えていた。そのように考えた大きな要因として、初期群集墳として捉えた古墳群の個々墳には、厳密に時期決定ができる遺物に乏しいことがある。一方で、その当時調査され良好な資料に恵まれているものに5世紀後半の事例が多かったことが判断を一面的にさせてしまったといえる。下淵名古墳群・白藤古墳群・空沢古墳群・芳賀団地遺跡群等であり、周堀内の埋没土中に、6世紀初頭降下の榛名山二ツ岳火山灰層が共通して認められている。もちろん、この種の事例が多いことも確かである。と同時に、初期群集墳の形成が明らかに6世紀前半まで及ぶ事例、あるいは主体が6世紀前半にある事例が増えてきている。世良田諏訪下古墳群、古海松塚古墳群、多田山古墳群等である。地蔵山古墳群も主体は6世紀前半にあることが理解されてきた。

**横穴式石室採用における首長墓と群集墳** ところで、かつての、群集墳における横穴式石室の採用を、6世紀初頭ないし前半からとする解釈には、その時点でも問題点がなかったわけではない。その第一は、この時期に属する事例の少なさである。それに対して、6世紀後半、さらには7世紀に属する横穴式古墳の多さは圧倒的であり、実際の資料では6世紀前半の空白は埋めきれなかった。調査が古墳群全体に及んでいないため、未調査の中に6世紀前半までさかのぼる横穴式古墳がひそんでいるのでは、と考えたが、どうしてもこの解釈には無理がある。この群集墳における実態を素直に解釈するなら、群集墳における横穴式石室の採用がピークをむかえるの

は、その実態通り6世紀後半からということになりそうである。そして初期群集墳の形成が6世紀前半まで及ぶ、という実態とスムーズに結びつくことになる。

このような移行過程、言いかえるならば、首長墓と群集墳における横穴式石室採用時期の温度差は、むしろ当時としては現実的な流れであったと考えられる。というのは、前方後円墳をはじめとする有力墳に横穴式石室が採用される流れと、群集墳に横穴式石室が採用される流れは、築造体制を具体的に想定したとき、おそらく同一線上にはなかつただろうと考えられるからである。とするならば、前方後円墳において横穴式石室の築造体制が整ったことは、群集墳においても築造体制が整ったことにはならないからである。群馬県地域における上述した実態からするならば、群集墳における横穴式石室の築造体制が大勢として整備されるようになったのが、6世紀後半ということになるだろう。

そこで、以下で本関町古墳群の様相を、上記の視点からもう一度見てみることにしよう。

### 2. 本関町古墳群における古墳群形成過程

**群構造の特徴** 今回の本関町古墳群の調査では、調査対象となった古墳が初期群集墳の分布域と重なっていたため、大半がI章4(2)及び86頁図1に示した1類に属する結果となった。このことは、一つの群集墳の群構造には、一定の規則性が見いだせることを意味している。その場合、時期別に一定のエリア内にまとまる傾向があることを注意しておく必要があるだろう。

検討が、調査された古墳に限られる制約はあるが、初期群集墳である1類は、粕川左岸の縁辺部に沿って、調査区の南半分集中する。これに対して、2類は、粕川左岸の縁辺部に3基の中規模前方後円墳が南北に間をあけて占地し、その間の内側に円墳がくる。ただし、この傾向を古墳群の全体に及ぼすことはできない。それでも、前方後円墳を粕川の縁辺部に占地させた意図は読み取ることができるだろう。

古墳群総体で見た場合、円墳の密集傾向は、調査区の南半分に認められるところである。『上毛古墳綜覧』掲載の諸古墳の分布の中心が、今回の一連の



調査区の東側に隣接して所在する傾向が認められる。すでに存在していた1類の諸古墳を避けて、2、3類の諸古墳が東側にまとまったと理解することができるだろう。終末期段階に属する3類は調査区の中心寄りの東側に集中する傾向が認められる(86頁図1)。

このように、群集墳形成の段階ごとに、分布傾向を異にし、それぞれの類内にまとまりが認められる点は重要である。このような特徴を赤城南麓の他の群集墳でも認めることができるからである。

ところで、畿内の群集墳の群構造を検討した水野正好氏は、滋賀県甲西町狐栗古墳群の分析において、群集墳が、幹道から分岐する複数の枝道に沿って3～4基が占地し、幹道寄りから枝道に沿って順次古墳が築造されていく構造と理解し、この枝道に沿った3～4基を、同一世帯の代々の家長の死が契機となって築造されていった結果と考えた。畿内においては、これに近い群構造が、各群集墳において把握できるとするならば、本関町古墳群の群構造は、明らかに、これとは異なるものであることになる。

**竪穴式から横穴式への移行過程** 調査の結果、本関町古墳群における初期群集墳の形成時期が6世紀前半を中心とするものであることが明らかになった。これに対しては、最も古くさかのぼる横穴式石室は、今回報告のA区1号墳であり、6世紀前半の所産と考えられるところである。本墳の墳丘は、完全に削平されてしまっており、不明である。石室全長2.4m、埋葬部長1.5m、同最大幅0.6mという石室規模から考えて、群集墳においても優勢な位置を占めるものではない小型円墳であったと考えられる。その階層にまで横穴式石室の採用が及んだことになる。ちなみに、本墳のような簡易で小規模な構造の袖無型横穴式石室が、最初に採用される状況は、赤城南麓の他の群集墳においても認められるところである。

何分にも、本関町古墳群の場合、2類を構成する中核部分の様相が明らかでない制約はあるが、6世紀第1四半期まで竪穴式主体部による初期群集墳が形成され、その段階での横穴式石室の採用はなかったと考えていいだろう。そして、第2四半期には横穴式石室を採用する古墳も現れる。その場合、竪穴式主体部による古墳が、完全に造られなくなったの

かどうかは、今後も検討課題として残る。

**前方後円墳の成立** 6世紀第3四半期を中心とした時期に、墳丘長約50mの前方後円墳一ノ関古墳(旧殖蓮村71号墳)が築造される。本関町古墳群の形成過程においては、極めて大きな画期点をなしていたと考えられるところである。当古墳群のその直前までの古墳様相を見る限り、前方後円墳が成立する前提が内在しているとは到底考えられないところである。その場合、前方後円墳の可能性が強い(県道)E・F2号墳、北関A-1号墳の帰属時期が気になるところである。わずかな手掛かりとなる出土埴輪の様相からは、大きくさかのぼらせ得る内容は持ち合わせていないように思われる。一方で、一ノ関古墳と北関A-1号墳との間には、墳丘規模、周堀の形態的特徴に共通性が見いだせるところである。共通の設計企画に基づいて築造された可能性を示唆するものであり、時期的接近を示唆するものと考えられる。大きくは、これら3基の前方後円墳を6世紀後半の所産と考えたい。

とするならば、3基の前方後円墳の成立基盤については、本関町古墳群の群集墳も当然直接支配下にあったとしても、より広い枠組みの中に位置づけていく必要があるだろう。前方後円墳が本関町古墳群のエリア内に占地したことについては、その以前の段階からの連続性においてではなく、新たにここが、首長墓の墓域として選定された流れが加わったものと考えたい。

その意味では、本報告書が対象とした調査区の東側に近接して所在し、昭和42年に調査された7世紀後半の上原古墳は、これら前方後円墳に系譜的に連なる可能性があるものとして注目されるところである。本墳は直径12mの円墳で、全長5.41m、玄室長3.41m、同奥幅1.93mの比較的大型の横穴式両袖型石室を伴う円墳である。特に注目されるのは、副葬品の内容で、蕨手刀、青銅製銚帯金具一式、刀子、鉄鏃、棺釘等がある。被葬者が郡司階層に連なるような有力者層であったことをうかがわせるものである。

### 3. 赤城南麓における群集墳

ここでは、特に群集墳における主体部の竪穴式から横穴式への移行の様相、及び群構造の特徴について検討することとしたい。

## Ⅶ 調査の成果

**地藏山古墳群** 本関町古墳群とは粕川を挟んで南西側に近接して所在する。独立丘陵の南斜面に形成され、43基が調査された(86頁図3)。5世紀後半に形成を開始し、7世紀後半まで及ぶ。初期群集墳は15基で、すべて円墳。5世紀後半に属するものもあるが、主体は6世紀前半にある。一方、横穴式古墳は26基で、6世紀前半に属するもの4基、後半に属するもの6基、7世紀に属するもの16基からなる。6世紀前半の段階は、竪穴式から横穴式への移行期と考えられるが、一部混在していた期間があった可能性がある。

墓域全体における位置関係は、初期群集墳と6世紀の横穴式古墳は東寄りに混在し、7世紀の横穴式古墳は西寄りにまとまる傾向が認められる。

**白藤古墳群** 群構成の大半に当たる52基が調査された。うち10基は前期の方形周溝墓。初期群集墳に属するのは35基ですべて円墳。形成は5世紀第3四半期から6世紀第1四半期まで及ぶが、主体は5世紀後半にある。

横穴式古墳は6基ある。その形成時期は7世紀であるから、初期群集墳とのあいだに1世紀近い断絶があることになる。本古墳群の形成上の空白となる6世紀後半の時期は、おそらく横穴式古墳が造られていた時期として間違いない。その墓域が、他地域に求められたことは明らかであり、北東方に所在する月田古墳群が有力候補である。

**多田山古墳群** 帆立貝式古墳1基を含む20基が調査された。丘陵のほぼ全域を対象としているので、古墳群の全体に近い様相が把握できた。明確に4つの支群にわかれる。最北端に位置する第1支群は10基から構成され、うち8基が帆立貝式古墳(3号墳)を含む初期群集墳で、すべて6世紀前半に属する(86頁図2)。

その南側に位置する第2支群は3基の円墳からなり、すべて7世紀に属する。2基は截石切組積石室で、このうちの12号墳には唐三彩陶枕が伴う。

第2支群と谷を挟んで南側にある第3支群は4基の円墳からなり、すべて7世紀に属する。このうちの15号墳は大型の截石切組積石室を有する。

第3支群の南に位置する第4支群は3基の円墳からなり、6世紀前半から後半にかけて形成された。

調査区の関係で3基にとどまるが、支群はさらに南にのびることと、これとは別の支群が存在する可能性がある。

このように、一つの古墳群として、一定のまとまりを有していることは明らかであるが、その内部を詳細に見ていくと、構成される支群が、それぞれに築造時期を同一にしたまとまりが明確に認められる点が重要である。

**赤城山南麓における群集墳の諸相** ここでは、その他の赤城山南麓の群集墳で、これまで見てきたものとは様相を異にする事例を概観しておく。

蟹沼東古墳群は、地藏山古墳群と低地部を挟んで西側にある。62基の大小の円墳が調査された比較的規模の大きい群集墳である。詳しい調査内容が明らかでないため不分明な点も多いが、3基の竪穴式主体部の円墳と内容が不分明な4基を除くと、他はすべて横穴式古墳である。その形成の端緒をなすのは、袖無型石室を有する6世紀前半(第2四半期か?)のものであるが、大勢は6世紀後半から7世紀にかけて形成されたものである。

群構造の詳細は興味が持たれるところであり、今後の課題である。

次に、二之堰古墳群は、蟹沼東古墳群の北西約2kmの前橋市飯土井町の南下がりの比較的なだらかな丘陵に所在している。そのほぼ全体に当たる21基が調査された。調査された古墳は、すべて前庭を有する横穴式石室を主体部とする。また、当地域の6世紀後半の古墳に数多く認められ埴輪を伴うものは1基も存在しない。7世紀、とりわけ中葉から後半にかけて形成されたものと考えられる。3段階の形成過程が認められ、第1段階の古墳4基は、周堀を全周させる。第2段階は、前段階の古墳の間隙に造られるため、周堀部分が重なる部分では、避けるか、掘らないため、全周しないもので、5基ある。第3段階は、さらに墓域が狭くなり、周堀を掘らないで、横穴式石室だけを築造する。石室の構築後、それを覆う程度の盛土は存在したのだろう。4基がこれに属する。さらに、第4段階とも称すべき、明らかに一体埋葬の小規模石室がこの後に造られる。ただし、これらを古墳に含めるべきか否かは、検討の必要がある。

#### 4. おわりに

本関町古墳群の形成過程を起点として、赤城山南麓における群集墳の様相を見てきたが、そこに、いくつかの特徴的なありかたを認めることができた。その点を整理することにより、今後の当該地域の群集墳、ひいては古墳研究の展望・課題につないでいければと考える。

**竪穴式から横穴式への温度差の背景** 当地域の初期群集墳に一般的な主体部形式である竪穴式石槨とこれに引き続いて採用されるようになる横穴式石室との間には、構築技術の系譜をまったく異にする断絶が介在したと考えられる。特に顕著なのは、6世紀初頭の前二子古墳に代表されるような首長墓に採用された横穴式石室の構造的特徴・構築技術においてである。その採用には、新たな専門技術者の介在を想定せざるを得ないところである。背景に列島規模に連なるような政治的意図が作用していると考えていだろう。このような技術体系が同時期に及ぼされた範囲は、前方後円墳とこれに準ずる有力古墳に限られていたことがわかる。そのことが、一般成員の家長層に関わる群集墳を構成する中・小型円墳に、依然として竪穴式石槨を中心とした主体部形式が採用され続ける理由と考えていだろう。

そのような中で、赤城山南麓の地域では、6世紀前半でも比較的早い段階に、群集墳の一部に横穴式石室を採用する流れが認められる。代表的な事例として、伊勢崎市(旧赤堀村)峯岸山古墳群の事例をあげることができるが、これらはちょうど竪穴式石槨の短壁を開けて横穴式石室とした構造であり、在来の技術的基礎の延長上で横穴式石室を実現したことが考えられる。そのため、群集墳の大勢の動きにならなかったものと思われる。

群集墳の大勢が横穴式古墳を築造するようになるのは、既述のとおり、6世紀後半のこととしていだろう。おそらく、首長墓における横穴式石室の技術が影響を与え、群集墳の築造体制も整備されるようになった結果と考えていだろう。

おそらく、このような動向は、ひとり赤城山南麓に限られたことではないと考えられる。早くに横穴式石室が定着する北部九州を除いた列島規模で、もちろん温度差はありつつも、存在した流れであった

と考えているところである。

**群構造の諸相** 赤城山南麓の群集墳を具体的に見てみると、群集墳の構造原理に、特徴的な存在形態を指摘できそうな状況が見えてきた。

その最大の特徴は、各時期ごとに、古墳がブロックをなしている可能性である。このことは、今後より厳密に検討を重ねる中で、再度言及していくべき重要課題である。

少なくとも、水野正好氏の群集墳論に触れる中でも述べたが、近畿地方の群集墳の存在形態との間に基本的な構成原理の違いが見いだせる可能性が十分ある。今後に期したい。

\*紙数の都合で、註を省略したことを御寛恕いただきたい。

#### 参考文献

- 近藤義郎ほか『佐良山古墳群の研究』1954  
 西嶋定生「古墳と大和政権」『岡山史学』10 1961  
 白石太一郎「畿内の後期大型群集墳に関する一試考」『古代学研究』42・43 1966  
 水野正好ほか『甲賀郡甲西町狐栗古墳群調査概要』滋賀県教育委員会 1968  
 都出比呂志「横穴式石室と群集墳の発生」『古代の日本』5 1970  
 石部正志「群集墳の発生と古墳文化の変質」『東アジア世界における日本古代史講座』4 1979  
 森岡秀人「群集墳の形成」『古代を考える 古墳』1989  
 和田晴吾「群集墳と終末期古墳」『新版古代の日本』5 1992  
 右島和夫「東国古墳時代の研究」1994  
 若狭徹『古墳時代の水利社会研究』2007  
 右島和夫「群馬県における初期横穴式石室」『古文化談叢』12集 1983  
 右島和夫「上野における群集墳の成立」『関西大学考古学研究室開設40周年記念考古学論叢』1993  
 右島和夫「群集墳の築造背景」『福岡大学考古学論叢』2004  
 松村一昭『赤堀村峯岸山古墳群の研究』赤堀村教育委員会 1・2 1975・1976  
 松村一昭『赤堀村地蔵山古墳群の研究』赤堀村教育委員会 1・2 1977・1978  
 松本浩一・桜場一寿・大塚昌彦『空沢遺跡』渋川市教育委員会 1978  
 徳江秀夫他『荒砥二之堰遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団 1986  
 小島純一『白藤古墳群』柏川村教育委員会 1989  
 右島和夫「古墳と埴輪・古墳時代の土壙墓」『下淵名塚越遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団 1991  
 三浦京子ほか『世良田諏訪下遺跡』尾島町教育委員会 1998  
 関本寿雄『古海松塚古墳群』大泉町教育委員会 2002  
 深澤敏仁ほか『多田山古墳群』群馬県埋蔵文化財調査事業団 2004  
 前橋市教育委員会『大室古墳群』2005  
 出浦崇ほか『関山遺跡Ⅱ』伊勢崎市教育委員会 2005  
 出浦崇『一ノ関古墳』伊勢崎市教育委員会 2008  
 『群馬県史』資料編3 1981  
 『伊勢崎市史』通史編1 1987  
 『上毛古墳総覧』群馬県史蹟名勝天然記念物調査報告書第五輯 1938



Ⅶ 調査の成果



図1 本関町古墳群の時期別・種類別古墳分布図

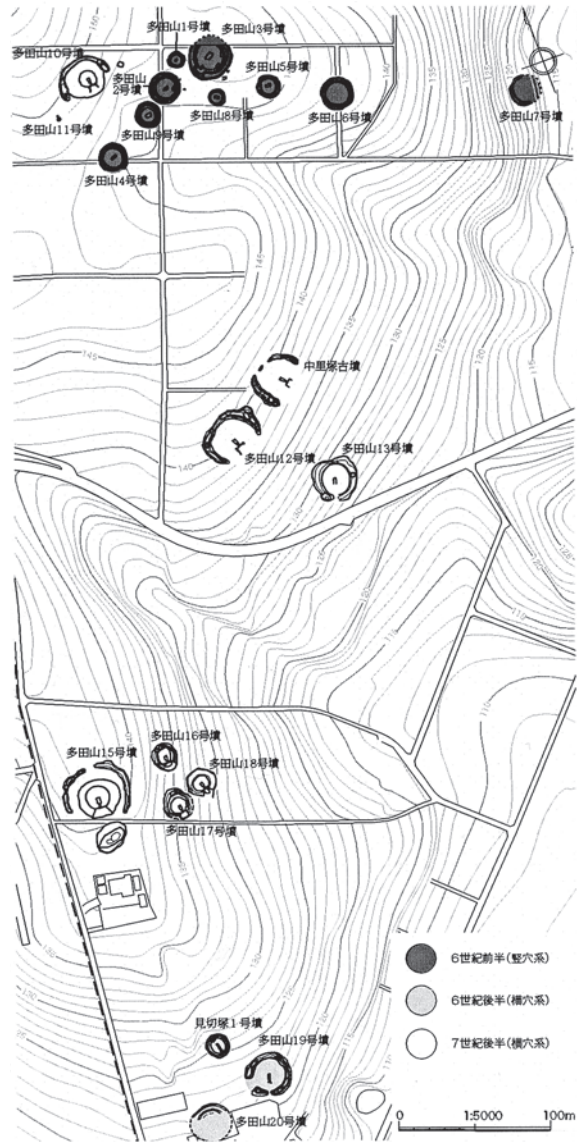


図2 多田山古墳群の時期別・種類別古墳分布図

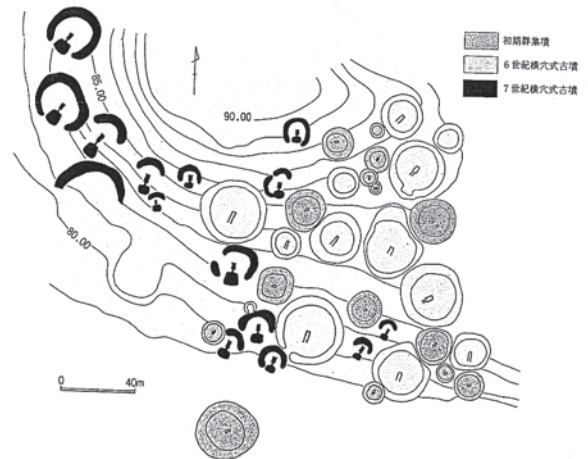


図3 地藏山古墳群の時期別・種類別古墳分布図

## 群馬県伊勢崎市・本関町古墳群と周辺集落の動向

－ 集落変遷と湧水点との因果関係 －

(財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団 坂口 一

### 1. はじめに

伊勢崎市・本関町古墳群は、東西約300m、南北約1,200mの範囲を占地し、古墳時代後・終末期にあたる6・7世紀の古墳群である(図2)。この古墳群には本関町古墳群の報告書で掲載した古墳の他、関山遺跡、上植木光仙房遺跡、光仙房遺跡、三和工業団地Ⅳ遺跡などの諸遺跡が含まれ、これらの遺跡群では40基の古墳が発掘調査されている。また、昭和10年における県下一斉古墳分布調査の『上毛古墳綜覧』殖蓮村には、63基の古墳が記載されている。さらに、本報告書で報告した古墳の大半は『上毛古墳綜覧』に該当するものがなかったが、おそらく周囲には記載漏れの古墳が10基以上は存在するものと予想される。したがってこの古墳群は、その総数がおそらく百数十基に及ぶものと考えられる。

さて、この古墳群の範囲には、その一面に平安時代の住居が立地するものの、古墳時代の住居はまったく存在しない。この古墳群を支えた居住域の主たる場所は、その距離的な位置関係と継続年代から、古墳群の東側に展開した集落の可能性が高い。すなわち、光仙房遺跡、上植木光仙房遺跡、舞台遺跡、



図1 本関町古墳群と周辺集落の位置図(S = 1:25,000)



図2 本関町古墳群古墳分布図(S = 1:7,000)

## Ⅶ 調査の成果

三和工業団地遺跡、上植木壺町田遺跡、下植木壺町田遺跡である(図3)。これらの諸遺跡では、合計で50万㎡以上の調査区域から、約1,000軒にも達する古墳時代～平安時代の竪穴住居が発掘調査されており、これらを年代別に集計すると、大勢として図3グラフのような変遷を辿る。

まず古墳時代前期の3世紀代に出現した集落が、4世紀代にかけて急激に増大する。次の5世紀代には集落は激減し、それまで主要な分布域であった台地上からほぼ姿を消す。その後6世紀代に再び出現した集落は、その数を減じながらも8世紀代まで継続するが、この6・7世紀代が本関町古墳群に対応する集落の可能性が高い。

さらに9世紀代では再び急激な増加を示し、その規模を減じながらも10世紀代まで継続する。

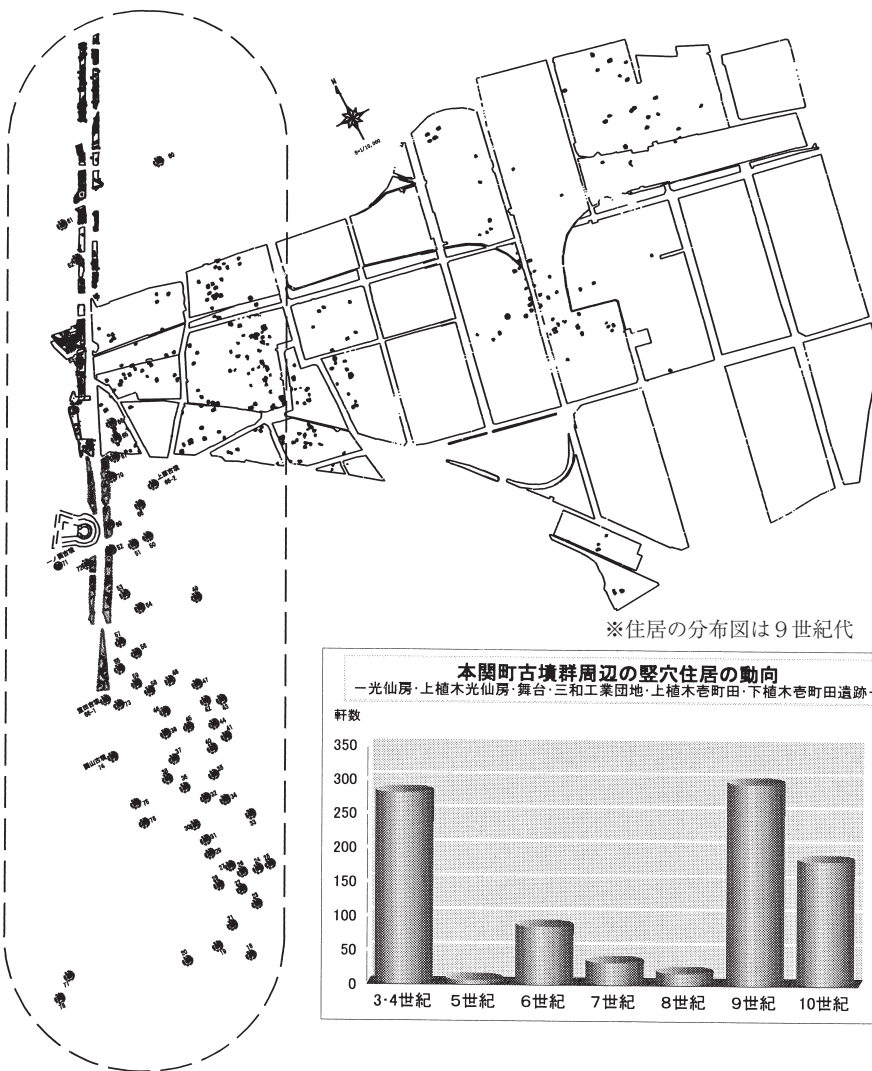


図3 本関町古墳群と周辺の集落(S = 1:10,000)

## 2. 住居分布の変遷

ここでは、住居が立地する遺跡群の地形のうち、この地域に特有な湧水点を概観した上で、主として古墳時代の住居の変遷過程をみてみたい。

この遺跡群は、約5万年前に段丘化したローム台地である、大間々扇状地I面(桐原面)の扇中央部に立地している。この大間々扇状地I面の扇中央部には、標高約90mの等高線に沿うようにかつていくつもの湧水点が点在し、これらの湧水点の下流には、湧水点を谷頭とする小谷が形成されて、ローム台地をいく筋かの低地が刻んでいる。

遺跡群は、「男井戸」、「角弥清水」、「谷地清水」と呼ばれた湧水点の周囲と、これを起源とする小谷に挟まれた台地上に立地し、これらのうち東側の「男井戸」湧水を起源とする谷(谷A)と、中央部の「角弥

清水」を起源とする谷(谷B)に挟まれた舌状台地(台地A)が、最も広い台地を形成している(図5)。

さて住居の分布状況であるが、出現期の3・4世紀代は、主として谷Aと谷Bに挟まれた台地Aに約280軒の住居が広く展開する(図4)。また、居住域の南側で、谷Aの右岸側の縁辺部には、前方後方形2基を含む32基の方形周溝墓群が形成され、集落域の一面を墓域が占める形となる。

5世紀代には、主として台地Aに広く分布していた住居は継続せず、谷B下流の左岸側に僅かに点在する一画を除いて、この台地のほぼ全域から住居は姿を消す(図5)。

6世紀代になると、主



として台地Aを中心に約80軒の住居が展開する(図6)。但し、3・4世紀代が台地Aのほぼ全域に分布していたのに対して、この年代には谷Bに面した台地の西半部に限定した分布となる。7世紀代もこの分布域を踏襲して、台地Aの西半部に約30軒の住居が分布する(図7)。

奈良時代以降は、谷Bの西側付近を中心に約20軒の住居が散在的に分布する8世紀代を経て、9世紀代には台地Aと谷Bの西側に約290軒が広く展開する(図3)。この9世紀代の分布範囲をほぼ踏襲して、10世紀代の住居約180軒が分布し、これらを最後にこの遺跡群の範囲から堅穴住居は姿を消す。

### 3. 住居変遷の画期とその背景

**変遷の画期** 前章で概観した住居の変遷から、これらの遺跡群における古墳時代の集落には次の大きな画期を認めることができる。すなわち①3・4世紀代に広く展開した集落が激減して、その分布域を限定的にする5世紀代と、②5世紀代に激減していた集落が、占地を新たにして再開する6世紀代である。

この二つの画期のうち、②の6世紀代に再開して7世紀代まで継続する集落こそが、本関町古墳群を支えた主たる居住域ではないかと想定している。この6世紀代に再開する集落は、5世紀代とはその分布域を全く異にしていることからみて、基本的には5世紀代からの継続性が認められず、新たに出現した集落であるという点が重要である。つまり、本関町古墳群における初期群集墳は、県下で多くみられる5世紀後半の画期を背景に出現したものとはその様相を異にしているものと言えよう(右島, 1994)。

**画期の背景** これらの画期の背景を全て合理的に説明できる論拠は持たないが、その大きな要因のひとつに湧水の枯渇や減少など、湧水点に異変があったものとの想定をしている。これには次に述べるように、集落の出現期である3・4世紀代及び6・7世紀代の住居の分布状況と、三和工業団地I遺跡における、湧水点の発掘調査が示唆的な資料を提供している。

**住居の分布と湧水点** ここで再び、3・4世紀代と6・7世紀代の住居の分布状況をみてみよう。3・

4世紀代は、谷Aの谷頭を中心として台地Aの広い範囲に住居が分布している(図4)。これに対して6・7世紀代は、明らかに谷Aから離れた台地Aの西半部に限定して分布し、台地Aのほぼ全域に分布した3・4世紀代とは対照的な分布状況を示している(図6・7)。この3・4世紀代と6・7世紀代の住居の分布状況の差は、次に示すように3・4世紀代に主要であった谷A湧水点の異変を暗示している。

なお、遺跡群北側の書上浄水場建設時の調査で遺構が全く確認されていないことから、台地Aの集落はこの分布範囲がその全容とみることができる。

**谷A湧水点の発掘資料** 三和工業団地I遺跡では、谷Aの谷頭付近の発掘調査が行われ、台地上の集落の変遷に示唆的ないくつかの湧水点に関する資料が得られている(坂口, 1999)。そのひとつは、3世紀代における谷頭付近の掘削痕と木材による導水施設(図8)及び、浅間C軽石(As-C)に直接被覆された祭祀跡である。これらは、集落の開始時期において谷A湧水点の周囲を掘削し、これによってその湧水量を増やしたことが伺われる。また、この谷頭周辺から出土した土器には、As-Cより下位の土器群の他に、As-C降下以降の4世紀代のものも含まれることから、この湧水点の維持は4世紀代まで継続していると判断することができる。

次に6世紀代であるが、この年代にも3世紀代と同様な谷頭付近の掘削痕が検出されている(図9)。但し、この掘削痕は榛名二ツ岳渋川テフラ(Hr-FA)に相当する層で覆われて出土し、その後掘削された痕跡がない。一方、この周辺からは陶邑古窯址群編年(田辺, 1981)のMT-15型式に比定できる須恵器蓋と、これとの平行関係に矛盾がない土師器坏がHr-FAの直下から出土している。これらの土器群は6世紀初頭に位置付けられ、これらが本関町古墳群における最古段階の土器群と一致しているが、この後に継続する土器群はまったく出土していない。

つまり、これらの掘削痕と伴出する土器群は、本関町古墳群の造営開始時期である6世紀初頭に湧水点付近の掘削を試みたものの、おそらく湧水量の増加を図ることができずに放棄したことを示しており、

Ⅶ 調査の成果



図4 周辺遺跡の竪穴住居分布図(3・4世紀)



図5 周辺遺跡の竪穴住居分布図(5世紀)



図6 周辺遺跡の竪穴住居分布図(6世紀)



図7 周辺遺跡の竪穴住居分布図(7世紀)



Ⅶ 調査の成果

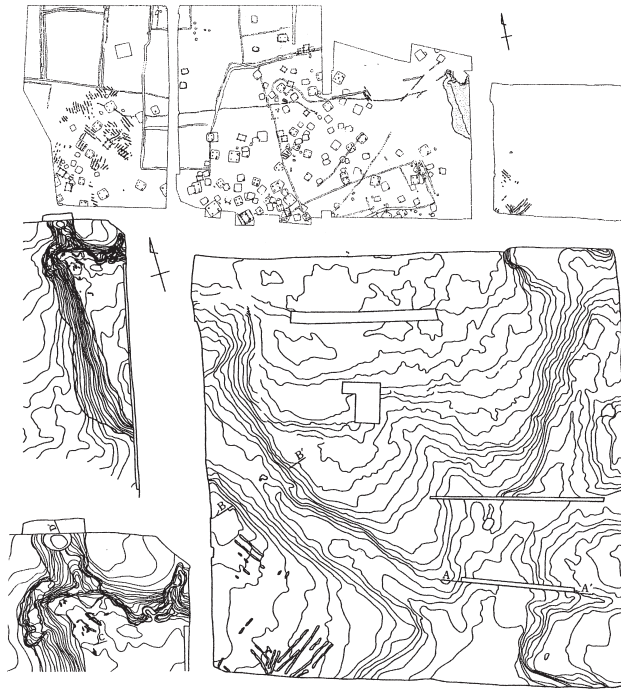


図8 三和工業団地Ⅰ遺跡湧水点(3世紀, S = 1:1,600)

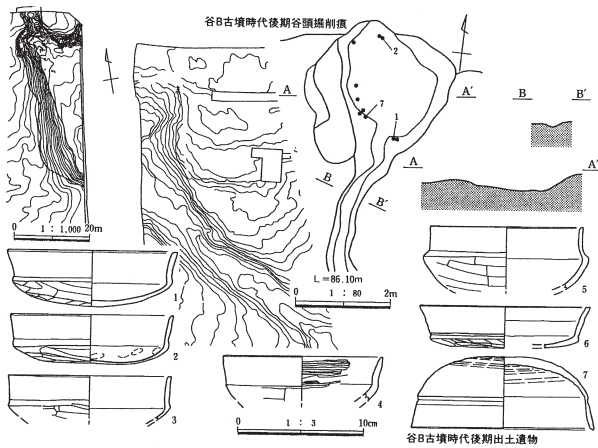


図9 三和工業団地Ⅰ遺跡湧水点・出土遺物(6世紀, S = 1:1,600)

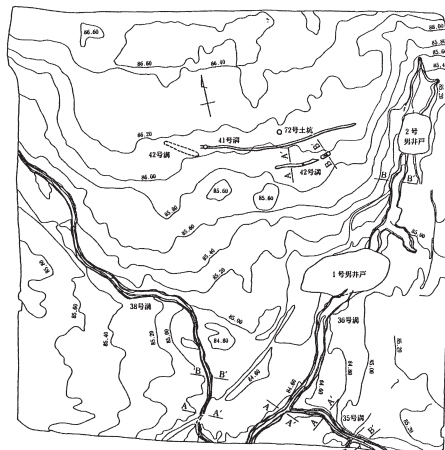


図10 三和工業団地Ⅰ遺跡湧水点(現代, S = 1:1,600)

谷Aとその谷頭周辺に6・7世紀代の住居がほとんど分布しないことと一致した現象を示している。

さらに、現代の農業用水に利用していた「男井戸」湧水であるが、発掘調査では覆土の異なる「井戸」が二箇所に検出されている(図10)。聞き込み調査の結果、これは当初掘られた下池(1号井戸)の湧水量が減少したことに伴って、新たに上池(2号井戸)を掘削したとの証言を得ている。つまり、これらの資料は湧水点における湧水量が必ずしも一定ではなく、枯渇や減少することがあったことを示している。

以上のことから、住居の分布と湧水点で確認した諸現象とは連動しており、集落変遷の要因のひとつに湧水の枯渇あるいは減少があるとの想定には無理がないものと言えよう。

4. まとめ

本関町古墳群に対応する集落を、その東側に展開する遺跡群に位置付け、その変遷の要因のひとつに湧水点に関係していることを述べてきた。

扇状地の中央部では、降水が地下の深部に浸透するという扇状地特有の現象がある。このため、扇状地上で河川から離れたこの地域の水田農耕は、湧水点の存在なくしてその成立はあり得ない。したがって、湧水点付近における住居の分布状況と、これに連動した湧水点の掘削の状況は、集落変遷のひとつのパターンを示していると考えられるのである<sup>※1</sup>。

なお、本関町古墳群には、6世紀後半に50m級の前方後方墳である一ノ関古墳が築造される(出浦, 2005)。この古墳は首長墓であることから、その背景となる居住域はおそらくここに示した遺跡群の範囲に収まることは考え難い。したがって、今後さらに周辺における集落の検討が必要になろう。

引用・参考文献

- 『光仙房遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2003
  - 『上植木光仙房遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1988
  - 『舞台遺跡(2)』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2004
  - 『三和工業団地Ⅰ遺跡(2)』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1999
  - 『三和工業団地Ⅱ～Ⅳ遺跡』群馬県企業局他 2004
  - 『下植木老町田遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1999
  - 『上植木老町田遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1988
  - 右島和夫 1994『上野における群集墳の成立』『東国古墳時代の研究』学生社
  - 坂口一 1999『三和工業団地Ⅰ遺跡における集落と湧水点について』『三和工業団地Ⅰ遺跡(2)』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
  - 田辺昭三 1981『須恵器大成』角川書店
  - 出浦崇 2005『関山遺跡Ⅱ』伊勢崎市教育委員会
- ※1 この遺跡群には、9世紀代に多くの須恵器窯が構築されることから、9世紀代の住居はその生業を古墳時代とは異にしている可能性がある。したがって、これらの変遷の要因は、必ずしも古墳時代とは同一に考えることができないものと考えられる。

# 付 篇

## 自然科学分析

### I. 本関町古墳群の土層とテフラ

株式会社 古環境研究所

#### 1. はじめに

群馬県域中央部に分布する後期更新世以降に形成された地層の中には、浅間や榛名など北関東地方とその周辺の火山、中部地方や九州地方などの火山に由来するテフラ(火山碎屑物、いわゆる火山灰)が多く認められる。テフラの中には、噴出年代が明らかにされている指標テフラがあり、これらとの層位関係を遺跡で求めることで、遺構の構築年代や遺物包含層の堆積年代などを知ることができるようになっている。

そこで、層位や年代が不明な土層や石器が検出された本関町古墳群においても、地質調査を行って土層層序を記載するとともに、採取された試料を対象に火山ガラス比分析を行って指標テフラの検出同定を行い、土層や石器の層位や年代に関する資料を収集することになった。調査分析の対象地点は、920-505 グリッド基本土層断面および旧トレンチ S-1 地点の 2 地点である。

#### 2. 土層の層序

##### (1) 920-505 グリッド基本土層断面

920-505グリッド基本土層断面では、下位より暗灰褐色土(層厚25cm以上)、灰褐色土(層厚12cm)、褐色土(層厚20cm)、黄橙色軽石に富む褐色砂質土(層厚8cm, 軽石の最大径2mm)、炭化物や砂を含む褐色土(層厚7cm)、黄色軽石を多く含む褐色土(層厚27cm, 軽石の最大径6mm)、黄色細粒軽石混じり褐色土(層厚12cm, 軽石の最大径2mm)、黄色細粒軽石を含む灰褐色砂質土(層厚16cm, 軽石の最大径2mm)が認められる(図1)。

##### (2) 旧トレンチ S-1 地点

旧トレンチ S-1 地点では、石器(S-1)の下位の土層をよく観察することができた(図2)。ここでは、下位より褐色土(層厚 10cm 以上)、黄橙色軽石に富む褐色砂質土(層厚 9cm, 軽石の最大径 2mm)、砂混じり褐色土(層厚 5cm)、黄色軽石を含む褐色土(層厚 19cm, 軽石の最大径 4mm)が認められる。

#### 3. 火山ガラス比分析

##### (1) 分析試料と分析方法

920-505グリッド基本土層断面において、基本的に厚さ 5cm ごとに設定採取された試料のうちの 8 点と、旧トレンチ S-1 地点において石器(S-1)の直下から採取された試料の合計 9 点を対象に、火山ガラスで特徴づけられるテフラの降灰層準を把握するために火山ガラス比分析を行った。火山ガラス比分析の手順は次の通りである。

- 1) 試料 12g を秤量。
- 2) 超音波洗浄により泥分を除去。
- 3) 80 ° C で恒温乾燥。
- 4) 分析篩により、1/4-1/8mm の粒子を篩別。
- 5) 偏光顕微鏡下で 250 粒を観察し、火山ガラスの形態色調別比率を求める。

##### (2) 分析結果

両地点における火山ガラス比分析の結果の内訳を表 1 に示す。920-505グリッド基本土層断面では、試料 7 と試料 5 に無色透明のバブル型ガラスの出現ピークが認められる(13.2%)。試料 13 では、無色透明のバブル型ガラス(2.8%)と、スポンジ状に発泡した軽石型ガラス(2.8%)が認められるのみであるが、試料 7 より上位では、分厚い中間型ガラスや、繊維束状に発泡した軽石型ガラスが顕著になる。そして試料 1 には、中間型ガラス、スポンジ状に発泡した軽石型ガラス、繊維束状に発泡した軽石型ガラスがより多く含まれるようになる。

一方、旧トレンチ S-1 地点の試料 1 には、分厚い中間型ガラス(2.0%)、繊維束状に発泡した軽石型ガラス

(2.0%)、スポンジ状に発泡した軽石型ガラス(0.8%)が含まれている。

#### 4. 考察

920-505 グリッド基本土層断面における火山ガラス比分析で検出された火山ガラスのうち、無色透明のバブル型ガラスについては、その特徴から約 2.4 ~ 2.5 万年前<sup>\*1</sup>に南九州の始良カルデラから噴出した始良 Tn 火山灰(AT, 町田・新井, 1976, 松本ほか, 1987, 村山ほか, 1993, 池田ほか, 1995)に由来すると考えられる。その産状から、920-505 グリッド基本土層断面では、試料 17 付近に AT の降灰層準があると推定される。

試料 13 の土層中に多く含まれる黄橙色軽石については、その岩相やスポンジ状に発泡した軽石型ガラスで特徴づけられることなどから、約 1.9 ~ 2.4 万年前<sup>\*1</sup>に浅間火山から噴出した浅間板鼻褐色軽石群(As-BP Group, 新井, 1962, 町田・新井, 1992, 早田, 未公表資料)のうちの中・上部に由来すると考えられる。

試料 7 に含まれる軽石や火山ガラスについては、とくに中間型ガラスで特徴づけられることから、約 1.7 万年前<sup>\*1</sup>に浅間火山から噴出した浅間大窪沢第 1 軽石(As-Ok1, 中沢ほか, 1984, 町田・新井, 1992, 早田, 1996)あるいは約 1.6 万年前<sup>\*1</sup>に浅間火山から噴出した浅間大窪沢第 2 軽石(As-Ok2, 中沢ほか, 1984, 町田・新井, 1992, 早田, 1994)に由来すると思われる。

さらに試料 1 に多く含まれる火山ガラスについては、中間型ガラス、スポンジ状に発泡した軽石型ガラス、繊維束状に発泡した軽石型ガラスで特徴づけられることから、約 1.3 ~ 1.4 万年前<sup>\*1</sup>に浅間火山から噴出した浅間板鼻黄色軽石(As-YP, 新井, 1962, 町田・新井, 1992)に由来すると考えられる。ただし、As-YP については、土層の保存状態が良い地点では、一般にいわゆるローム層の最上部に認められることが多い。したがって、本地点においても、本来の As-YP の降灰層準はローム層最上部にあった可能性が高い。

旧トレンチ S-1 地点の試料 1 に含まれる中間型ガラスについては、その特徴から As-Ok1 あるいは As-Ok2 に由来すると思われる。この試料には、一方で、繊維束状に発泡した軽石型ガラスが比較的顕著である。この火山ガラスについては、その特徴から約 1.8 万年前に浅間火山から噴出した浅間白糸軽石(As-Sr, 町田ほか, 1984, 町田・新井, 1992)に由来するのかも知れない。そうすると、本試料が採取された層準は、920-505 グリッド基本土層断面の試料 7 より若干下位にあるのかも知れない。以上のことから、石器(S-1)については、少なくとも As-Sr より上位で、As-Ok1 あるいは As-Ok2 よりさらに上位にある可能性も考えられよう。さらに信頼度の高い屈折率測定などを行って、指標テフラとの同定精度が高められると良い。

#### 5. 小結

本関町古墳群において、地質調査と火山ガラス比分析を行った。その結果、下位より始良 Tn 火山灰(AT, 約 2.4 ~ 2.5 万年前<sup>\*1</sup>)、浅間板鼻褐色軽石群(As-BP Group, 約 1.9 ~ 2.4 万年前<sup>\*1</sup>)の中・上部、浅間大窪沢第 1 軽石(As-Ok1, 約 1.7 万年前<sup>\*1</sup>)あるいは浅間大窪沢第 2 軽石(As-Ok2, 約 1.6 万年前<sup>\*1</sup>)、浅間板鼻黄色軽石(As-YP, 約 1.3 ~ 1.4 万年前<sup>\*1</sup>)などのテフラや、それらに由来するテフラ粒子を検出することができた。本遺跡で検出された石器(S-1)の層位は、少なくとも As-Sr より上位で、As-YP より下位にあると考えられる。

\*1 放射性炭素(<sup>14</sup>C)年代。

#### 文 献

- 新井房夫(1962)関東盆地北西部の第四紀編年。群馬大学紀要自然科学編, 10, p.1-79.  
 池田晃子・奥野 充・中村俊夫・筒井正明・小林哲夫(1995)南九州, 始良カルデラ起源の大隅降下軽石と入戸火砕流中の炭化樹木の加速器質量分析法による <sup>14</sup>C 年代。第四紀研究, 34, p.377-379.  
 町田 洋・新井房夫(1976)広域に分布する火山灰-始良 Tn 火山灰の発見とその意義-。科学, 46, p.339-347.  
 町田 洋・新井房夫(1992)火山灰アトラス。東京大学出版会, 276p.  
 町田 洋・新井房夫(2003)新編火山灰アトラス。東京大学出版会, 336p.  
 町田 洋・新井房夫・小田静夫・遠藤邦彦・杉原重夫(1984)テフラと日本考古学-考古学研究と関係するテフラのカタログ。古文化財編集委員会編「古文化財に関する保存科学と人文・自然科学」, p.865-928.  
 松本英二・前田保夫・竹村恵二・西田史朗(1987)始良 Tn 火山灰(AT)の <sup>14</sup>C 年代。第四紀研究, 26, p.79-83.  
 村山雅史・松本英二・中村俊夫・岡村 真・安田尚登・平 朝彦(1993)四国沖ピストンコア試料を用いた AT 火山灰噴出年代の再検討-タンデロン加速器質量分析計による浮遊性有孔虫の <sup>14</sup>C 年代。地質雑, 99, p.787-798.  
 中沢英俊・新井房夫・遠藤邦彦(1984)浅間火山, 黒斑-前掛期のテフラ層序。第四紀学会講演要旨集, no.14, p.69-70.  
 早田 勉(1996)関東地方~東北地方南部の示標テフラの諸特徴-とくに御岳第 1 テフラより上位のテフラについて-。名古屋大学加速器質量分析計業績報告書, 7, p.256-267.



表1 火山ガラス比分析結果

地点	試料	bw(cl)	bw(pb)	bw(br)	md	pm(sp)	pm(fb)	その他	合計
929-505グリッド	1	1	0	0	15	6	5	223	250
	5	1	0	0	8	9	1	232	250
	7	0	0	0	11	5	2	232	250
	13	7	0	0	0	7	0	236	250
	15	33	0	0	1	7	2	207	250
	17	33	0	0	1	5	3	208	250
	19	8	0	0	2	5	0	235	250
	21	1	0	0	3	6	0	240	250
旧トレンチ S-1 地点	1	0	0	0	5	2	5	237	250

数字は粒子数。bw：バブル型，md：中間型，pm：軽石型，sp：スポンジ状，fb：繊維束状，cl：無色透明，pb：淡褐色，br：褐色。

## II. 本関町古墳群における蛍光X線分析

株式会社 古環境研究所

### 1. 試料

試料は、C区1号墳主体部の天井石から採取された試料 T1-1、試料 T1'-1'、試料 T4-2 の3点の赤色顔料である。ここでは、赤色顔料の構成元素から顔料の種類を同定する目的で蛍光X線分析を行った。

### 2. 分析方法

エネルギー分散型蛍光X線分析システム(日本電子(株)製, JSX3201)を用いて、元素の同定およびファンダメンタルパラメータ法(FP法)による定量分析を行った。測定条件は、測定時間 300 秒、照射径 20mm、電圧 30keV、試料室内真空であり、X線発生部の管球はロジウム(Rh)ターゲット、ベリリウム(Be)窓、X線検出器はSi(Li)半導体検出器である。

### 3. 分析結果

各元素の定量分析結果(wt%)を表1に示す。なお、各試料とも微量であることから、定量分析の数値は必ずしも正確なものとはいえない。

### 4. 考察

赤色顔料としては、一般的に水銀朱(硫化水銀: HgS)、ベンガラ(酸化第二鉄: Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>)、鉛丹(酸化鉛: Pb<sub>3</sub>O<sub>4</sub>)が知られている(市毛, 1998, 本田, 1995)。

分析の結果、各試料とも鉄(Fe)の明瞭なピークが認められ、水銀(Hg)や鉛(Pb)は検出されなかった。鉄(Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>)の含量は、試料 T1-1 と試料 T4-2 では 23.0% および 25.6% と高い値であり、試料 T1'-1' でも 14.1% と比較的高い値である。

以上の結果から、C区1号墳の主体部天井石から採取された試料の赤色顔料はいずれもベンガラと考えられる。

### 文献

市毛 勲(1998)新版朱の考古学. 考古学選書. 雄山閣出版  
 本田光子(1995)古墳時代の赤色顔料. 考古学と自然科学. 31・32, p.63-79.

表1 本関町古墳群における蛍光X線分析結果

原子No.	12	13	14	15	16	19	20	22	23	25	26	37	38
化学式	MgO	Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	SiO <sub>2</sub>	P <sub>2</sub> O <sub>5</sub>	SO <sub>3</sub>	K <sub>2</sub> O	CaO	TiO <sub>2</sub>	V <sub>2</sub> O <sub>5</sub>	MnO	Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	Rb <sub>2</sub> O	SrO
T1-1	0.315	11.275	52.366	2.881	3.906	1.214	2.583	1.865	0.017	0.443	23.020	0.026	0.090
T1'-1'	0.424	8.843	51.605	9.385	10.525	0.512	3.102	1.480	0.000	0.000	14.092	0.008	0.025
T4-2	0.369	10.699	50.739	5.577	1.024	3.778	1.549	0.026	0.509	0.000	25.635	0.002	0.094

## Ⅲ. 赤玉の成分分析

藤根 久(パレオ・ラボ)

## 1. はじめに

本関町古墳群は、伊勢崎市本関町に所在する6世紀代の古墳群である。調査では、2号墳において複数個の赤玉が石室外側に置かれていた。ここでは、この赤玉の赤色成分の元素組成と鉱物組成について調べた。なお、薄片の顕微鏡観察も行っている(赤玉・埴輪・土師器胎土の材料分析参照)。

## 2. 試料と方法

試料は、C区2号墳主体部の石室外側から出土した赤玉1試料(明赤褐色、2.5YR 5/6)である。分析は、元素組成を調べるために蛍光X線分析を行い、鉱物組成を調べるためにX線回折分析を行った。なお、この赤玉は、容易に溶けることから焼成されていないものと考えられる。

元素組成は、赤玉の破断面において元素マッピングを行った後、鉄(Fe)の輝度の高い場所を5箇所選定して点分析を行った。分析は、(株)堀場製作所製X線分析顕微鏡XGT-5000Type IIを用いた。測定条件は、元素マッピングがX線導管径100  $\mu$  m、電圧50KV、電流自動設定、測定時間10000secであり、点分析がX線導管径100  $\mu$  m、電圧50KV、電流自動設定、測定時間500secである。定量計算は、標準試料を用いないFP法(ファンダメンタルパラメータ法)で半定量分析を行った。

赤玉の赤色成分の鉱物組成は、5g程度を採取し精製水を加えて超音波洗浄器で分散した後、コロイドを回収してスライドガラス上に展開・乾固した。測定は、(株)リガク製デスクトップX線回折装置MiniFlexを用いた。測定条件は、電圧30kV、電流15mA、Cu-X線管、走査範囲 $10^{\circ} \sim 90^{\circ}$ 、ステップ幅 $0.02^{\circ}$ 、計数時間1.0secのFT測定を行った。測定結果は、付属の定性分析プログラムにより鉱物種の同定を行った。

## 3. 結果

蛍光X線分析の結果、酸化ケイ素( $\text{SiO}_2$ )が33.39～64.57%、酸化鉄( $\text{Fe}_2\text{O}_3$ )が21.39～38.76%、酸化アルミニウム( $\text{Al}_2\text{O}_3$ )が6.70～14.42%、酸化イオウ( $\text{S}_2\text{O}_3$ )が4.12～10.15%であった(表1)。X線回折分析の結果、石英(Quartz)のピークがわずかに検出された。なお、その他赤鉄鉱(Hematite)など鉄から構成される鉱物群は検出されなかった(図2)。

表1 赤玉破断面の化学組成(単位%)

点No	MgO	$\text{Al}_2\text{O}_3$	$\text{SiO}_2$	$\text{P}_2\text{O}_5$	$\text{SO}_3$	$\text{K}_2\text{O}$	CaO	$\text{TiO}_2$	MnO	$\text{Fe}_2\text{O}_3$	CuO	$\text{As}_2\text{O}_5$	Total
1	0.00	7.67	52.08	0.31	4.12	0.62	0.20	1.17	0.00	33.75	0.03	0.05	100.00
2	0.54	14.42	33.39	0.31	10.15	1.34	0.29	0.60	0.00	38.76	0.13	0.07	100.00
3	0.01	9.13	49.52	0.15	5.56	0.67	0.19	0.99	0.00	33.62	0.08	0.08	100.00
4	1.20	6.70	64.57	0.16	4.13	0.59	0.22	1.00	0.00	21.39	0.01	0.03	100.00
5	0.90	10.24	53.39	0.34	4.98	0.65	0.23	1.09	0.00	28.11	0.03	0.04	100.00
最小値	0.00	6.70	33.39	0.15	4.12	0.59	0.19	0.60	0.00	21.39	0.01	0.03	
最大値	1.20	14.42	64.57	0.34	10.15	1.34	0.29	1.17	0.00	38.76	0.13	0.08	

## 4. 考察

この赤玉の化学組成は、酸化ケイ素( $\text{SiO}_2$ )、酸化鉄( $\text{Fe}_2\text{O}_3$ )、酸化アルミニウム( $\text{Al}_2\text{O}_3$ )、酸化イオウ( $\text{S}_2\text{O}_3$ )が多く、県内の関東ローム層堆積物と比較して、アルミニウムと鉄およびイオウが特徴的に多い。ただし、赤味が強いものの鉄含有量はベンガラ(hematite;  $\text{Fe}_2\text{O}_3$ )のように極端に高くはない。X線回折分析用の水洗残渣において砂粒物を多く含んでいることから、鉄含有量が相対的に低いものと考えられる。なお、薄片の顕微鏡観察では、大半の砂粒物は堆積岩類の砂粒から構成されている(赤玉・埴輪・土師器胎土の材料分析参照)。

一般的に、赤黄色土として知られている赤味の強い土壌は、洪積台地上の高位段丘上に多く分布し、中位段丘には少ないことから、洪積世の温暖期に生成した古土壌の残存物と考えられている。これらの赤黄色土は、湿潤温暖な気候下で風化作用が著しく進み、分解生成物中の珪酸や塩基類の大半は、洗脱して土壌系外に去り、残留した粘土の組成は、鉄(Fe)やアルミニウム(Al)に富み、土壌を赤、黄色に色づけたものである(松井,1976)。

### Ⅲ. 赤玉の成分分析

以上のことから、この赤玉の材料は、天然に産出する赤色土を玉状または団子状に整形して固めたものと推定される。なお、ここで検討した赤色土壌は、イオウ含有量が高いことから、火山地域または周辺に分布する火山性堆積物が関与するなど、県内の地質学的な状況を反映していることが考えられる。ただし、薄片の顕微鏡観察では、火山起源の砂粒物は含まれていない。

#### 引用文献

松井 健(1976)赤黄色土. アーバンクボタ, No.3,10-11.

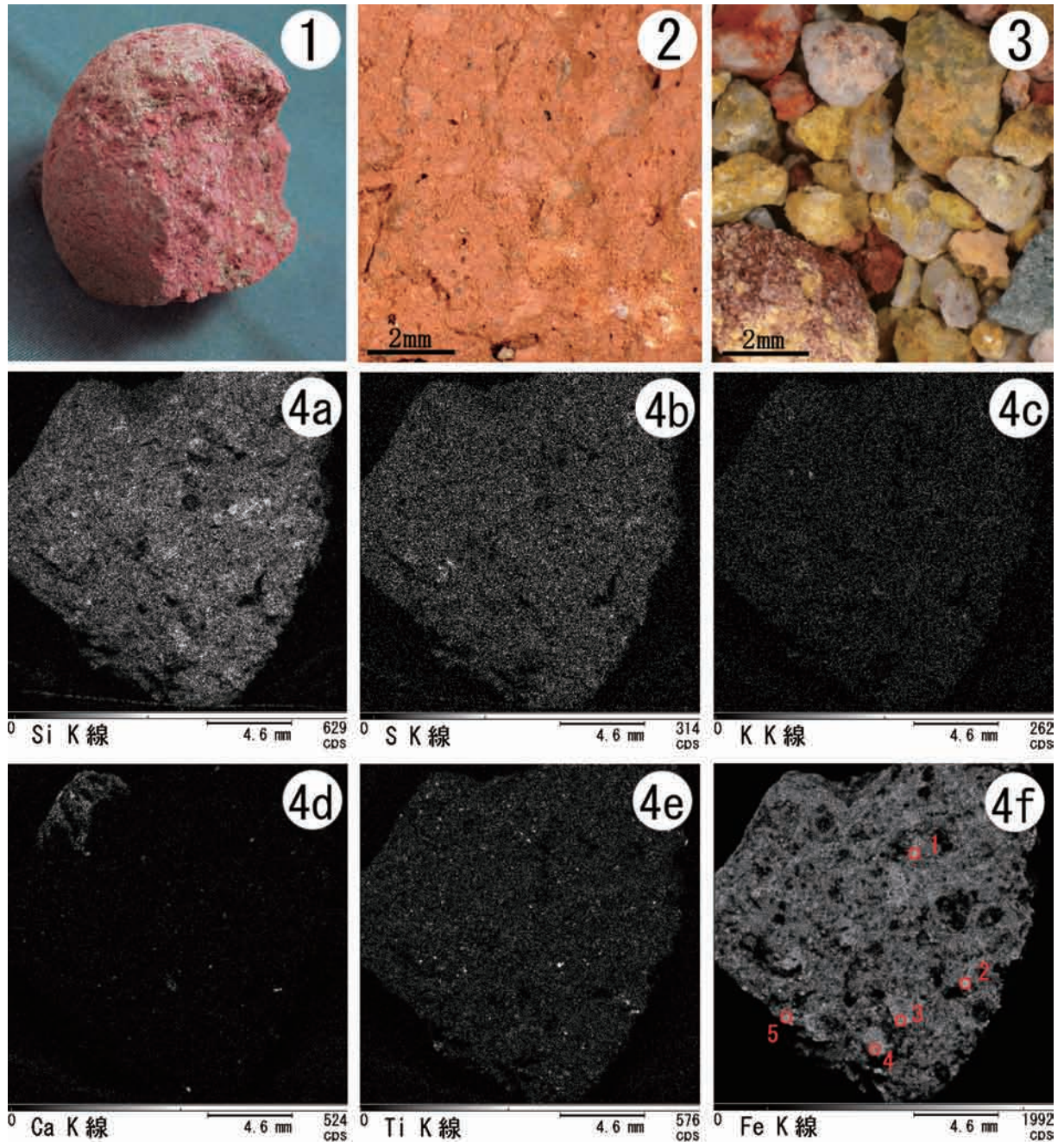


図1 赤玉と断面の元素マッピング図(鉄マッピング図中の番号：点分析の位置を示す)

1. 全体写真 2. 破断面 3. 砂礫 4a-4f. 元素マッピング図

[元素記号] Si:ケイ素, S:イオウ, K:カリウム, Ca:カルシウム, Ti:チタン, Fe:鉄



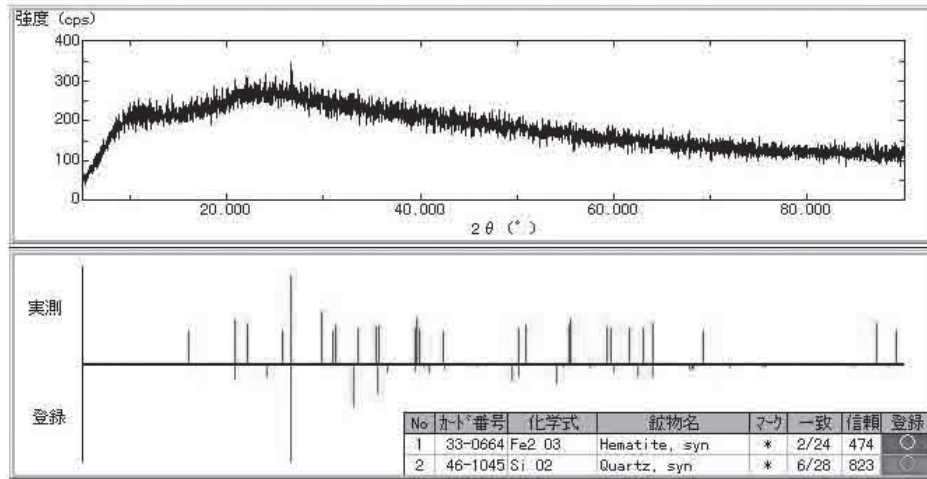


図2 赤玉断面のX線回折図(上段：スペクトル図、下段：ピークと同定鉱物)  
 [鉱物名] Hematite：赤鉄鉱、Quartz：石英

#### IV 赤玉・埴輪・土師器胎土の材料分析

藤根 久・米田恭子(パレオ・ラボ)

##### 1. はじめに

本関町古墳群は、伊勢崎市本関町に所在する6世紀代の古墳群である。ここでは、石室外側に置かれていた赤玉、円筒埴輪、土師器壺の各材料について調べた。なお、赤玉についてはその成分分析も検討している(赤玉の成分分析参照)。

##### 2. 試料と方法

試料は、赤色顔料の丸玉、円筒埴輪、土師器壺の各1試料である(表1)。

表1 材料を検討した試料

分析No.	種類	出土位置	遺物No.	色相 明度/彩度	色調	断面の特徴
1	赤玉	C区2号墳主体部		2.5YR 5/6	明赤褐色	砂粒多く含む
2	円筒埴輪	C区1号墳周堀	128	7.5YR 6/6	橙色	輝石類・角閃石類目立つ, 黄白色塊
3	土師器壺	C区2号墳周堀	368	7.5YR 6/6	橙色	中黒層あり, 輝石類・角閃石類目立つ

これら試料は、次の手順に従って偏光顕微鏡観察用の薄片を作成した。

(1) 試料は、始めに岩石カッターなどで整形し、恒温乾燥機により乾燥した。全体にエポキシ系樹脂を含浸させ固化処理を行った。これをスライドガラスに接着し平面を作成した後、同様にしてその平面の固化処理を行った。

(2) さらに、研磨機およびガラス板を用いて研磨し、平面を作成した後スライドガラスに接着した。

(3) その後、精密岩石薄片作製機を用いて切断し、ガラス板などを用いて研磨し、厚さ0.02mm前後の薄片を作成した。仕上げとして、研磨剤を含ませた布板上で琢磨し、コーティング剤を塗布した。

各試料は、偏光顕微鏡を用いて、薄片全面について微化石類(珪藻化石、骨針化石、孢子化石)や大型粒子などの特徴について観察・記載を行った。また、各試料のプレパラートにおける5 μm以上の粒子の占める割合を調べるために、500ポイント以上の格子点の粒子、粘土、空隙について計数した。

なお、ここで採用した各分類群の記載とその特徴などは以下の通りである。

##### [珪藻化石]

珪酸質の殻をもつ微小な藻類で、その大きさは10～数百 μm程度である。珪藻は海水域から淡水域に広く分布し、個々の種類によって特定の生息環境をもつ。最近では小杉(1988)や安藤(1990)によって環境指標種群が設定され、具体的な環境復原が行われている。ここでは種あるいは属が同定できるものについて珪藻化石(海

水種・淡水種)と分類し、同定できないものは珪藻化石(?)とした。なお、各胎土中の珪藻化石はその詳細を記載した。

#### [骨針化石]

海綿動物の骨格を形成する小さな珪質、石灰質の骨片で、細い管状や針状などを呈する。海綿動物は、多くは海産であるが、淡水産としても日本において23種ほどが知られ、湖や池あるいは川の水底に横たわる木や貝殻などに付着して生育する。

#### [植物珪酸体化石]

植物の細胞組織を充填する非晶質含水珪酸体であり、大きさは種類によっても異なり、主に約10~50 $\mu$ m前後である。一般的にプラント・オパールとも呼ばれ、イネ科草本、スゲ、シダ、トクサ、コケ類などに存在することが知られている。ファン型や亜鈴型あるいは棒状などがあるが、ここでは大型のファン型と棒状を対象とした。

#### [石英・長石類]

石英あるいは長石類は、いずれも無色透明の鉱物である。長石類のうち後述する双晶などのように光学的に特徴をもたないものは石英と区別するのが困難である場合が多く一括して扱う。

#### [長石類]

長石は大きく斜長石とカリ長石に分類される。斜長石は、双晶(主として平行な縞)を示すものと累帯構造(同心円状の縞)を示すものに細分される(これらの縞は組成の違いを反映している)。カリ長石は、細かい葉片状の結晶を含むもの(パーサイト構造)と格子状構造(微斜長石構造)を示すものに分類される。また、ミルメカイトは斜長石と虫食い状石英との連晶(微文象構造という)である。累帯構造を示す斜長石は、火山岩中の結晶(斑晶)の斜長石にみられることが多い。パーサイト構造を示すカリ長石は花崗岩などのSiO<sub>2</sub> 2%の多い深成岩や低温でできた泥質・砂質の変成岩などに産する。

ミルメカイトあるいは文象岩は火成岩が固結する過程の晩期に生じると考えられている。これら以外の斜長石は、火成岩、堆積岩、変成岩に普通に産する。

#### [雲母類]

一般的には黒雲母が多く、黒色から暗褐色で風化すると金色から白色になる。形は板状で、へき開(規則正しい割れ目)にそって板状に剥がれ易い。薄片上では長柱状や層状に見える場合が多い。花崗岩などのSiO<sub>2</sub> 2%の多い火成岩に普遍的に産し、泥質、砂質の変成岩および堆積岩にも含まれる。

#### [輝石類]

主として斜方輝石と単斜輝石とがある。斜方輝石(主に紫蘇輝石)は、肉眼的に淡褐色および淡緑色などの色を呈し、形は長柱状である。SiO<sub>2</sub> 2%が少ない深成岩、SiO<sub>2</sub> 2%が中間あるいは少ない火山岩、ホルンフェルスなどのような高温で生じた変成岩に産する。単斜輝石(主に普通輝石)は、肉眼的に緑色から淡緑色を呈し、柱状である。主としてSiO<sub>2</sub> 2%が中間から少ない火山岩によく見られ、SiO<sub>2</sub> 2%の最も少ない火成岩や変成岩中にも含まれる。

#### [角閃石類]

主として普通角閃石であり、色は黒色から黒緑色で、薄片上では黄色から緑褐色などである。形は細長く平たい長柱状である。閃緑岩のようなSiO<sub>2</sub> 2%が中間的な深成岩や斑れい岩などに産する。

#### [ガラス質]

透明の非結晶の物質で、電球のガラス破片のような薄くて湾曲したガラス(バブル・ウォール型)や小さな泡をたくさんもつガラス(軽石型)などがある。主に火山の噴出物と考えられる。

#### [複合石英類・複合鉱物類]

複合石英類は石英の集合している粒子で、基質(マトリックス)の部分をもたないものである。個々の石英粒子の粒径は粗粒なものから細粒なものまで様々である。ここでは、便宜的に個々の石英粒子の粒径が約0.01mm未満のものを微細、0.01~0.05mmのものを小型、0.05~0.1mmのものを中型、0.1mm以上のものを大型と

## 付 篇

分類した。また、等粒で小型の長石あるいは石英が複合した粒子は、複合石英類(等粒)として分類した。この複合石英類(等粒)は、ホルンフェルスなどで見られる粒子と考えられる。

### [砂岩質・泥岩質]

石英、長石類、岩片類などの粒子が集合し、それらの間に基質の部分をもつもので、含まれる粒子の大きさが約 0.06mm 以上のものを砂岩質とし、約 0.06mm 未満のものを泥岩質とする。

### [不透明・不明]

下方ポーラーのみ、直交ポーラーのいずれにおいても不透明なものや、変質して鉱物あるいは岩石片として同定不可能な粒子を不明とする。

## 3. 結果

胎土中の微化石類や鉱物・岩石片を記載するために、プレパラート全面を精査・観察した。以下では、粒度分布や 0.1mm 前後以上の鉱物・岩石片の砂粒組成あるいは計数も含めた微化石類などの記載を示す。なお、不等号は、概略の量比を示し、二重不等号は極端に多い場合を示す。なお、表 2 の微化石類および砂粒の出現頻度は、◎が特に多い、○が多い、△が少ない、空欄は検出されないことを示す。鉱物は、+++ が特に多い、++ が多い、+ が少ないが含まれている、である。

No.1: 400  $\mu$  m ~ 3.3mm、最大粒径 4.5mm。複合石英類(微細)》石英・長石類) 砂岩質、角閃石類、斜長石(双晶)、ガラス質、砂岩質

No.2: 100-900  $\mu$  m、最大粒径 1.1mm。角閃石類》石英・長石類) 斑晶質、複合石英類(微細)、斜長石(双晶) - ガラス付着、ガラス質、単斜輝石、凝灰岩質、骨針化石、植物珪酸体化石

No.3: 150-700  $\mu$  m、最大粒径 1.1mm。斜長石(双晶)》斜長石(累帯)》ガラス質(軽石型含む)、斑晶質、複合石英類(微細)、石英・長石類、単斜輝石、角閃石類、珪藻化石(淡水種 *Diploneis yatukaensis*、*Pinnularia* 属)、植物珪酸体化石

## 4. 考察

### i) 微化石類による材料粘土の分類

検討した試料中には、その薄片全面の観察から、珪藻化石や骨針化石などが検出された。これら微化石類の大きさは、珪藻化石が数十~数百  $\mu$  m(実際観察される珪藻化石は大きいもので 150  $\mu$  m 程度)、骨針化石が 10 ~ 100  $\mu$  m 前後である、植物珪酸体化石が 10 ~ 50  $\mu$  m 前後である。一方、碎屑性堆積物の粒度は、粘土が約 3.9  $\mu$  m 以下、シルトが約 3.9 ~ 62.5  $\mu$  m、砂が 62.5  $\mu$  m ~ 2mm である(地学団体研究会・地学事典編集委員会編, 1981)。このことから、植物珪酸体化石を除いた微化石類は胎土の材料となる粘土中に含まれるものと考えられ、その粘土の起源を知るのに有効な指標になると考える。なお、植物珪酸体化石は、堆積物に含まれているものの、製作場では灰質が多く混入する可能性が高いなど、他の微化石類のように粘土の起源を指標する可能性は低いと思われる。

検討した試料は、粘土部分に含まれる微化石類により、a) 淡水成粘土を用いた胎土、b) 水成粘土を用いた胎土、c) その他粘土を用いた胎土に分類された。以下に、分類された粘土の特徴について述べる。

#### a) 淡水成粘土を用いた胎土(No.3; 土師器壺)

この胎土中には、淡水種 *Diploneis yatukaensis*、*Pinnularia* 属などの珪藻化石が含まれていた。

#### b) 水成粘土を用いた胎土(No.2; 円筒埴輪)

この胎土中には、骨針化石も含まれていた。

#### c) その他粘土を用いた胎土(No.1; 赤玉)

この胎土中には、珪藻化石や骨針化石などの水成堆積環境を示す微化石類は含まれていなかった。

### ii) 胎土中の砂粒組成による分類

ここで用いた岩石分類群は、構成する鉱物種や岩石片の構造的特徴から設定した分類群であるが、地域を特徴づける源岩とは直接対比できない。このため、各胎土中の鉱物、岩石粒子の岩石学的特徴は、地質学的状況に一義的に対応しない。



ここでは、比較的大型の砂粒について起源岩石の推定を行った(表2)。岩石の推定は、複合石英類(微細)および砂岩類が堆積岩類、斑晶質が火山岩類、凝灰岩質が凝灰岩類、ガラス質がテフラ(火山噴出物)である。さらに、推定した起源岩石は、表3の組み合わせに従って分類した。

表2 胎土中の粘土および砂粒の特徴

試料No	種類	粘土の特徴					砂粒の特徴							鉱物の特徴				植物珪酸体化石	特徴			
		分類	珪藻化石	淡水種	不明種	骨針化石	胞子化石	分類	片岩類	深成岩類	堆積岩類	火山岩類	凝灰岩類	流紋岩類	テフラ	ジルコン	角閃石類			輝石類	雲母類	
1	赤玉	その他					C			◎					△		△					
2	円筒埴輪	水成			△		Gc			○	△	△			○		○	△			○	
3	土師器壺	淡水成	△				G			△	△				◎		○	○			○	ガラス付着の斜長石多い

表3 胎土中の岩石片と組み合わせ

		第1出現群						
		A	B	C	D	E	F	G
第2出現群	a	片岩類						
	b	深成岩類	Ab	Ba	Ca	Da	Ea	Fa
	c	堆積岩類	Ac	Bc	Cb	Dc	Ec	Fc
	d	火山岩類	Ad	Bd	Cd	Dd	Ed	Fd
	e	凝灰岩類	Ae	Be	Ce	De	Ee	Fe
	f	流紋岩類	Af	Bf	Cf	Df	Ef	Ff
	g	テフラ	Ag	Bg	Cg	Dg	Eg	Fg

iii) 胎土材料の特徴

石室外側に置かれていた赤玉、円筒埴輪、土師器壺の各材料について調べた結果、赤玉は、主に堆積岩類の砂粒からなる赤色土であった。この赤色土は、赤黄色土として知られている赤味の強い土壌であるが、洪積台地上の高位段丘上に多く分布し、中位段丘には少ないことから、洪積世の温暖期に生成した古土壌の残存物と考えられている。これらの赤黄色土は、湿潤温暖な気候下で風化作用が著しく進み、分解生成物中の珪酸や塩基類の大半は、洗脱して土壌系外に去り、残留した粘土の組成は、鉄(Fe)やアルミニウム(Al)に富み、土壌を赤、黄色に色づけたものである(松井,1976;赤玉の成分分析参照)。

埴輪胎土は、骨針化石を僅かに含む水成粘土であり、テフラおよび堆積岩類を主とした組成(Gc群)であった。この胎土は、角閃石類を特徴的に多く含むことから、No.3の土師器壺の胎土とは異なる材料である。この角閃石類を特徴的に多く含む特徴は、榛名火山噴出物の組成と考えられる。

土師器壺は淡水種珪藻化石を僅かに含む淡水成粘土であり、主として軽石型のテフラからなる組成(G群)であった。テフラは斜長石(双晶)や斜長石(累帯)あるいは輝石類を斑晶として含むことから、浅間火山噴出物の組成と考えられる。類似した材料は、同市内に所在する波志江中宿遺跡粘土採掘坑から出土したS字状口縁台付甕の胎土に類似している(藤根・今村,2001)。なお、各試料のプレパラートにおける5 μm以上の粒子の占める割合は、赤玉が39.57%(粘土50.96%、空隙9.45%)、円筒埴輪が23.57%(粘土72.50%、空隙3.92%)、土師器壺が29.24%(67.16%、空隙3.58%)であり(いずれも体積%)、赤玉の砂粒物(5 μm以上)が占める割合が非常に高いことが理解される。

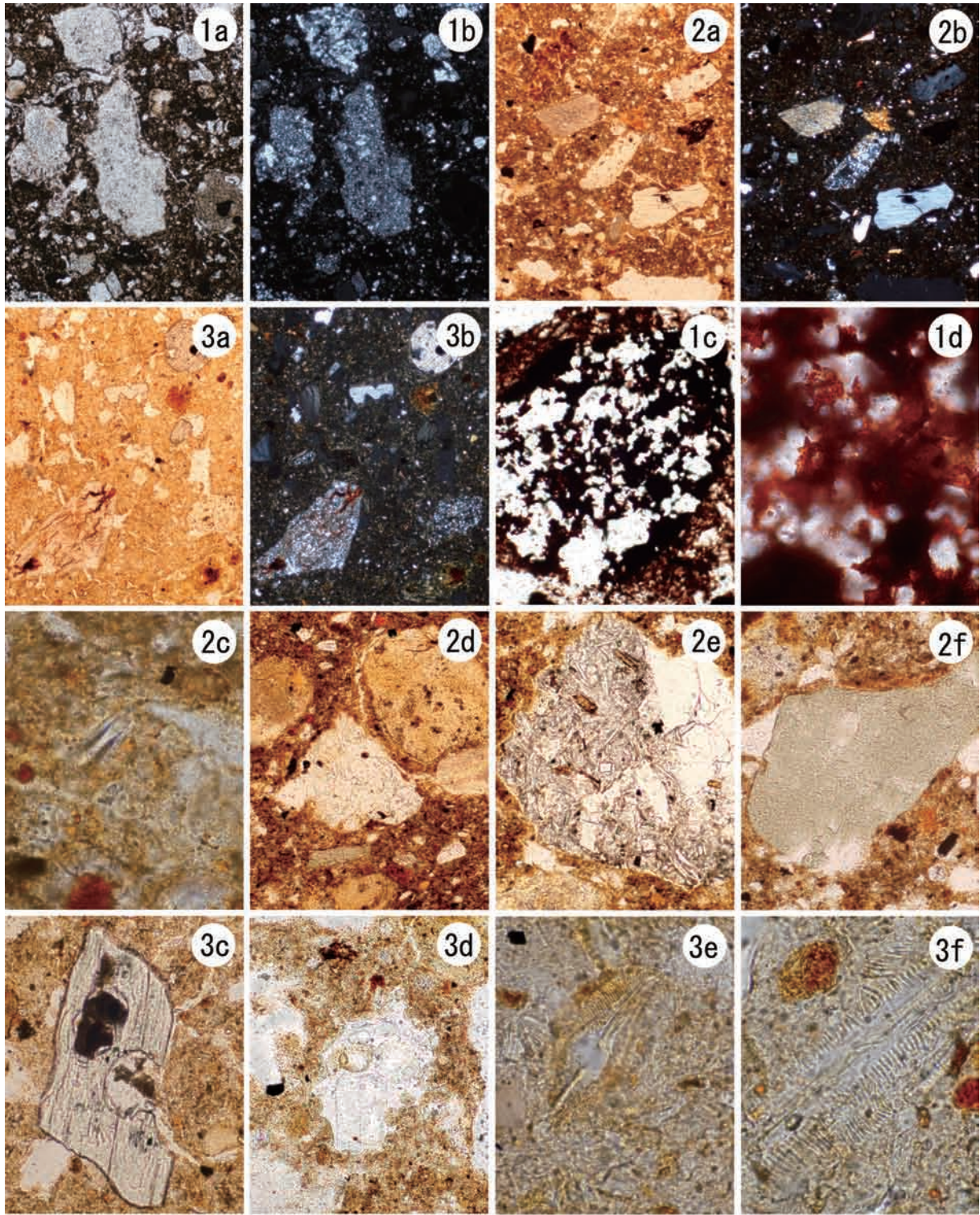
5. おわりに

石室に添えられた赤玉、円筒埴輪、土師器壺の各材料について調べた結果、いずれも異なった材料であることが判明した。なお、このうち、土師器壺は、同市内に所在する波志江中宿遺跡粘土採掘坑から出土したS字状口縁台付甕の胎土に類似していた。

引用文献

安藤一男(1990)淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用.東北地理,42,273-88.  
 地学団体研究会・地学事典編集委員会編(1981)『増補改訂 地学事典』,平凡社,1612p.  
 藤根 久・今村美智子(2001)第3節 土師の胎土材料と粘土採掘坑対象堆積物の特徴.波志江中宿遺跡,日本道路公団・伊勢崎市・(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団,262-277.  
 小杉正人(1988)珪藻の環境指標種群の設定と古環境復元への応用.第四紀研究,27,1-20.  
 松井 健(1976)赤黄色土.アーバンクボタ, No.3,10-11.





図版1 胎土の偏光顕微鏡写真(スケール, 1a-3b:500 $\mu$ m, 1c・2c-3d:100 $\mu$ m, 1d・3e・3f:20 $\mu$ m)  
 1a. 試料No1(解放ニコル) 1b. 試料No1(直交ニコル) 2a. 試料No2(解放ニコル) 2b. 試料No2(直交ニコル)  
 3a. 試料No3(解放ニコル) 3b. 試料No3(直交ニコル) 1c. 赤色部(N01) 1d. 赤色部拡大(N01)  
 2c. 骨針化石(N02) 2d. ガラス質(N02) 2e. 斑晶質(N02) 2f. 角閃石類(N02)  
 3c. 斜方輝石(N03) 3d. ガラス質-軽石型(N03) 3e. 珪藻化石 *Diploneis yatukaensis* (N03)  
 3f. 珪藻化石 *Pinnularia* 属(N03)



V 赤玉の溶解及び焼成実験

坂 口 一((財)群馬県埋蔵文化財調査事業団)

1. はじめに

C区2号墳の主体部から出土した赤色球状未焼成土製品(赤玉)は、当初は焼成されたものか否かの判断ができず、科学的な分析でもその判定は不可能とのことであった。また、隣接するC区3号墳から出土した土師器坏はその色調が赤玉に極めて近似しており(写真6)、赤玉は土師器の素材を用いたとも思われた。しかし、土師器坏は当然ながら焼成後の色調であり、赤玉の焼成後の色調に関する比較資料を必要とした。そこで、赤玉を水に浸す実験と、土師器に近い条件で焼成する実験を試みた。なお、実験には原位置を保つことなく崩れて出土し、他との接合関係が見出せない小破片の一部を用いた。

2. 溶解実験

①小皿に入れた試料に水を注いだところ(写真1)、吸水して瞬時に崩れ始め(写真2)、約5分ではほぼ全部が崩れて水は赤く濁った(写真3)。

②水に崩れた試料をビーカーに移し、超音波洗浄機で水を換えながら合計で約30分の洗浄を行ったところ(写真4)、赤味は薄くなって多量の砂粒が残存した(写真5)。残存した砂粒を乾燥させてその重さを計測したところ、溶解前が15.5gであったのに対して残存した砂粒は7.2gで、その占める割合は46.5%であった。

3. 焼成実験と焼成後の溶解実験

①試料を電気マッフル炉で700℃、3時間の焼成を行ったところ(写真7)、外形の大きさにほとんど変化はなかったが重さが4~5%ほど減り、色調は赤味がやや強くなったが焼成前とほぼ同じであった(表1、写真9・10)。

②焼成した試料に水を注いだところ、焼成前のように崩れることなく、触れてもその形状を保った(写真8)。

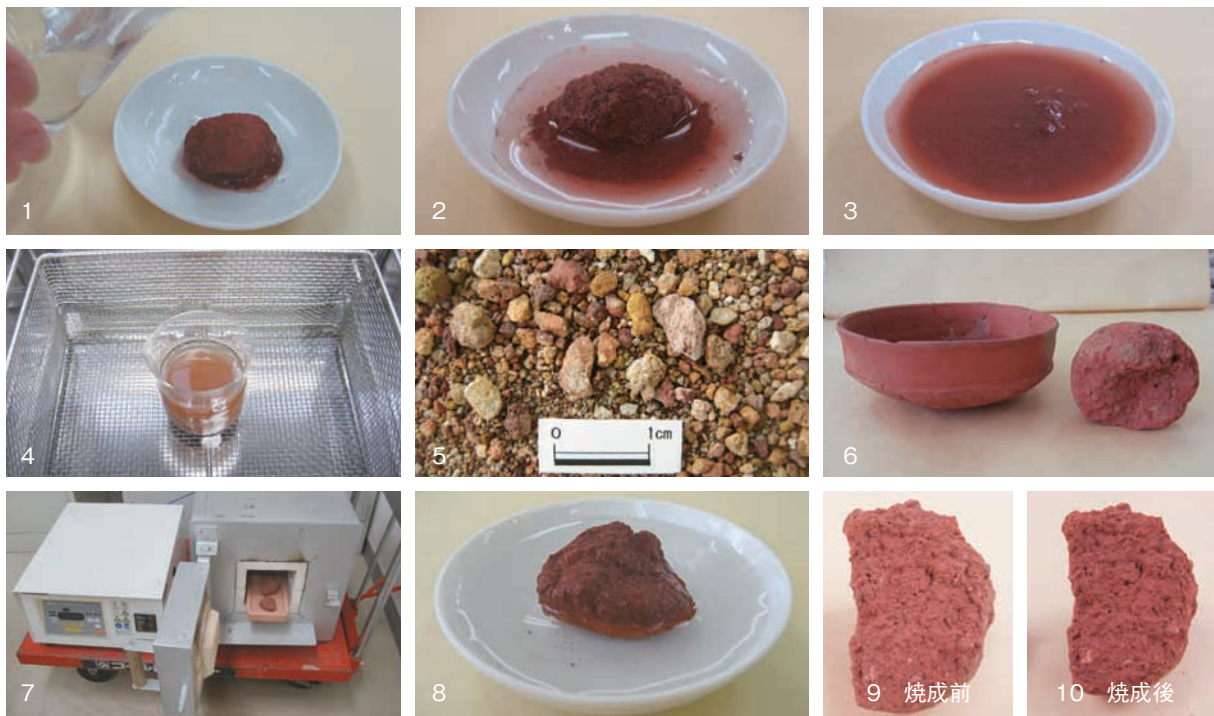
4. まとめ

以上の実験から、赤玉は焼成されていない泥団子状で、仮に焼成した場合はやや赤味が強くなるが、焼成前と同様に土師器坏の色調にほぼ近似していることが判明した。

表1 赤玉焼成実験結果表

(単位: cm)

	試料A					試料B				
	長さ	幅	厚さ	重さ(g)	色調	長さ	幅	厚さ	重さ(g)	色調
焼成前	4.5	2.2	3.5	59.1	明赤褐色 2.5YR5/6	3.5	3.6	2.3	21.8	明赤褐色 2.5YR5/6
焼成後	4.5	2.2	3.5	56.2	-4.9% 赤色 10R5/8	3.5	3.6	2.3	20.9	-4.1% 赤色 10R5/8





本関町古墳群 遺構等索引表  
旧石器時代

区	No.	器 種	石 材	掲載頁			出 土 位 置				計 測 値 (cm・g)				
				本文	写真	層位	X (日本)	Y (日本)	X (世界)	Y (世界)	Z	長さ	幅	厚さ	重さ
B	1	尖頭器	黒曜石	13	2・29	Ⅵ層	38971.840	-55465.750	39326.515	-55758.135	83.720	3.8	3.1	1.0	9.3
C	1	尖頭器	黒曜石	14	2・29	Ⅶ層	38916.500	-55508.020	39271.172	-55800.405	82.821	7.0	2.2	1.1	11.9
C	2	二次加工有る剥片	黒色安山岩	14	2・29	Ⅶ層	38919.520	-55507.550	39274.192	-55799.934	83.315	4.2	4.5	1.5	27.6
C	3	槍先形尖頭器	黒曜石	14	2・29	倒木	38917.464	-55507.210	39272.136	-55799.595	82.900	5.2	3.3	0.8	11.2
C	4	剥片	黒色安山岩	14	2・29	Ⅶ層	38920.475	-55506.635	39275.147	-55799.019	82.635	4.6	3.8	0.8	15.3
C	5	ポイントフレイク	黒曜石	14	2・29	Ⅶ層	38920.785	-55506.380	39275.457	-55798.764	82.785	3.1	2.3	1.0	6.1
C	6	微細剥片	黒曜石	14	2・29	Ⅶ層	38921.090	-55506.220	39275.762	-55798.604	82.873	1.0	0.6	0.1	0.1
C	7	剥片	黒曜石	14	2・29	Ⅶ層	38920.775	-55506.075	39275.447	-55798.459	82.698	0.9	2.5	0.2	0.6
C	8	ポイントフレイク	黒色安山岩	14	2・29	Ⅶ層	38921.375	-55506.100	39276.047	-55798.484	82.598	2.6	2.1	1.2	6.4
C	9	微細剥片	黒曜石	14	2・29	Ⅶ層	38921.110	-55505.365	39275.783	-55797.750	82.530	0.8	1.3	0.5	0.5
C	10	微細剥片	黒曜石	14	2・29	Ⅶ層	38921.250	-55506.340	39275.922	-55798.724	82.827	0.8	1.3	0.2	0.3
C	11	微細剥離痕有る剥片	黒曜石	14	2・29	Ⅶ層	38921.320	-55505.600	39275.993	-55797.985	82.573	2.8	1.8	0.7	3.4
C	12	剥片	黒曜石	14	2・29	Ⅶ層	38920.860	-55506.430	39275.532	-55798.814	82.780	1.2	2.0	0.4	1.0
C	13	二次加工有る剥片	黒色安山岩	14	2・29	Ⅶ層	38920.925	-55506.490	39275.597	-55798.874	82.795	2.9	2.7	1.1	7.6
C	14	剥片	黒曜石	14	2・29	Ⅶ層	38920.610	-55506.700	39275.282	-55799.084	82.852	1.8	3.0	0.3	2.0
C	15	剥片	黒曜石	14	2・29	Ⅶ層	38921.060	-55506.380	39275.732	-55798.764	82.878	2.2	2.0	0.4	2.0
E	1	二次加工有る剥片	チャート	16	4・29	Ⅷ層	38983.059	-55487.742	39337.734	-55780.126	83.002	3.0	2.3	1.6	7.5
E	2	微細剥片	黒曜石	16	4・29	Ⅶ層	38990.361	-55484.241	39345.036	-55776.625	83.507	1.7	1.3	0.3	0.6
E	3	微細剥片	黒曜石	16	4・29	Ⅶ層	38990.324	-55483.525	39344.999	-55775.909	83.735	1.4	1.0	0.3	0.4
E	4	微細剥片	黒曜石	16	4・29	Ⅶ層	38989.410	-55482.909	39344.085	-55775.293	83.479	0.9	1.2	0.2	0.2
E	5	切り出し形石器	黒曜石	16	4・29	Ⅶ層	38988.968	-55483.630	39343.643	-55776.014	83.481	2.8	2.0	0.8	2.7
E	6	剥片	ぎょくずい	16	4・29	Ⅶ層	38990.353	-55483.178	39345.028	-55775.562	83.660	3.3	4.6	1.0	18.2

縄文時代

区	No.	種 類	グリッド	掲 載 頁			短軸 (m)	長軸 (m)	深さ (cm)	方位	柱穴	時 代	備 考						
				本文	写真	観察													
C	1	柄鏡形敷石住居	880・525	19	5・30	72	(3.1)	(3.1)	-	N-S	未確認	後期初頭	床面未確認、埋壘・炉						
A		集石遺構	065・422	26	4・32	72	直径2 mほどの範囲		-	-	-	中期後半?	不規則的な配置						
区	No.	種 類	グリッド	掲 載 頁			短軸 (m)	長軸 (m)	深さ (cm)	区	No.	種 類	グリッド	掲 載 頁			短軸 (m)	長軸 (m)	深さ (cm)
本文	写真	観察	本文	写真	観察	本文								写真	観察				
A	1	土坑	063・421	23	6	-	1.3	1.5	50	C	3	土坑	865・530	24	7	-	1.6	2.2	30
B	1	土坑	006・451	23	6	-	直径1.7		40	C	4	土坑	878・524	25	7・32	72	1.3	2.1	40
C	1	土坑	897・516	23	6	-	直径1.0		60	C	5	土坑	877・532	25	7・32	72	0.8	1.1	70
C	2	土坑	876・532	24	6・32	72	1.5	2.0	30	D	1	土坑	074・439	26	7	-	0.9	1.5	30

古墳時代

区	No.	種 類	グリッド	掲 載 頁			周 堀 (m)			墳形	主 体 部	年 代	備 考
				本文	写真	観察	内径	外径	深さ				
A	1	古墳	078・422	29	8	-	不明	不明	-	不明	横穴式石室	6世紀前半	主体部のみ
A	2	古墳	120・394	31	9	-	15.0	27.0	1.00	円墳	不明	6世紀	綜覧67号墳
A	3	古墳	070・425	32	9	-	6.8	11.5	0.50	円墳	不明	不明	
A	4	古墳	044・431	33	10・32	72	不明	不明	0.15	円墳	不明	不明	綜覧69号墳
B	1	古墳	017・442	33	11・32	72	11.0	17.5	0.80	円墳	竪穴系(粘土床)	6世紀中葉	綜覧52号墳
B	2	古墳	992・459	36	12・32	73	15.2	22.0	1.20	円墳	不明	6世紀中葉	土師器・鉄環
B	3	古墳	970・470	38	12・32	73	13.7	19.7	1.50	円墳	竪穴系(木棺直葬)	6世紀中葉	円筒埴輪・土師器
B	4	古墳	955・475	41	13・32	73	9.8	14.0	0.70	円墳	不明	不明	
C	1	古墳	889・525	42	14・32	73	16.3	21.7	1.00	円墳	不明	6世紀中葉	埴輪樹立
C	2	古墳	872・525	45	15・34	73	9.0	11.8	0.40	円墳	竪穴系(小石櫛)	6世紀前半	主体部に赤玉
C	3	古墳	862・540	48	17・34	73	11.0	14.0	0.50	円墳	竪穴系(粘土床)	6世紀前半	土師器
C	4	古墳	862・528	51	18	-	7.0	12.0	1.00	円墳	不明	不明	
D	1	古墳	139・415	52	19	-	6.5	9.0	0.30	円墳	不明	不明	
D	2	古墳	113・425	52	19	-	10.5	17.0	0.30	円墳	不明	6世紀以降	
E	1	古墳	010・476	53	20	-	5.0	6.5	0.30	円墳	竪穴系(小石櫛)	6世紀以降	
E	2	古墳	009・470	56	20	-	6.6	8.5	0.50	円墳	不明	6世紀以降	
E	3	古墳	999・480	56	20・34	73	7.3	9.5	0.50	円墳	不明	6世紀以降	円筒埴輪
E	4	古墳	990・487	57	21・34	73	6.8	8.6	0.50	円墳	不明	6世紀前半	土師器
E	5	古墳	988・481	58	21	-	6.0	8.0	0.20	円墳	竪穴系(木棺直葬?)	6世紀以降	
E	6	古墳	981・485	59	22	-	6.0	7.8	0.20	円墳	不明	6世紀以降	
区	No.	種 類	グリッド	掲 載 頁			軸 長		深さ (cm)	主 体 部	年 代	備 考	
本文	写真	観察	(溝内, m)	(溝外, m)									
A	1	方形周溝墓	089・414	60	23・34	73	10.6	15.5	0.70	不明	古墳前期		
A	2	方形周溝墓	103・409	61	23	-	4.2	6.0	0.30	不明	古墳前期		
D	1	方形周溝墓	082・432	61	24	-	4.3	5.5	0.20	不明	古墳前期		
D	2	方形周溝墓	085・439	62	24・34	74	5.8	7.3	0.20	不明	4世紀後半	土師器出土	
D	3	方形周溝墓	090・435	63	25・35	74	5.3	7.8	0.60	不明	4世紀後半	土師器出土	
D	4	方形周溝墓	096・427	64	25・35	74	5.8	9.4	0.50	不明	4世紀後半	土師器出土	

# 写真図版



B・C区遠景





A区 旧石器試掘トレンチ No.1(南から)



A区 旧石器試掘トレンチ No.3・4(南から)



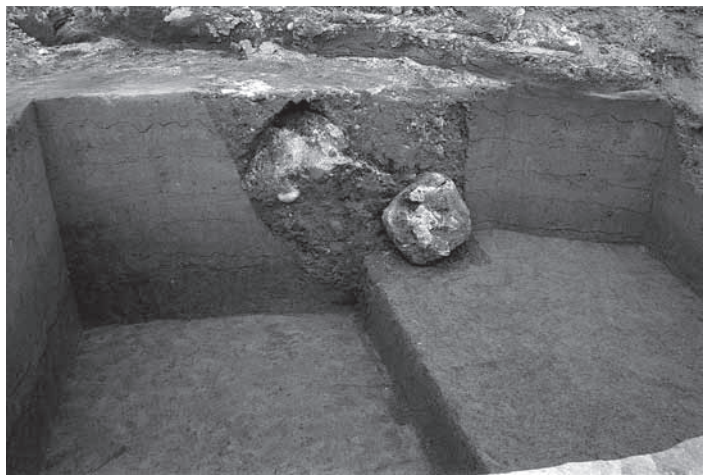
B区 旧石器試掘トレンチ No.9 石器出土状況(南から)



B区 旧石器試掘トレンチ No.9 出土石器(南から)



B区 旧石器試掘トレンチ No.9 土層断面(南から)



B区 旧石器試掘トレンチ No.9 土層断面(西から)



C区 旧石器試掘トレンチ No.14 石器出土状況(南から)



C区 旧石器試掘トレンチ No.14 石器出土状況(南から)





C区 旧石器試掘トレンチ No.14 石器出土状況 (東から)



C区 旧石器試掘トレンチ No.14 石器出土状況 (東から)



C区 旧石器試掘トレンチ No.14 石器出土状況 (南から)



C区 旧石器試掘トレンチ No.14 石器出土状況 (南から)



C区 旧石器試掘トレンチ No.14 出土石器 (南から)



C区 旧石器試掘トレンチ No.14 出土石器 (南から)



D区 旧石器試掘トレンチ配置状況 (南から)



D区 旧石器試掘トレンチ配置状況 (南から)

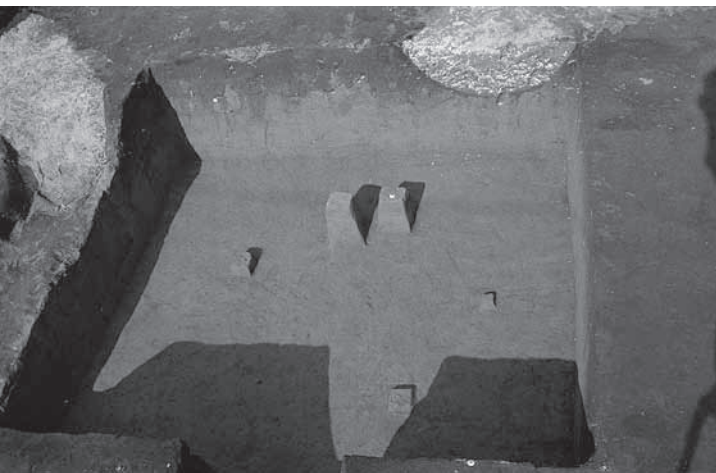




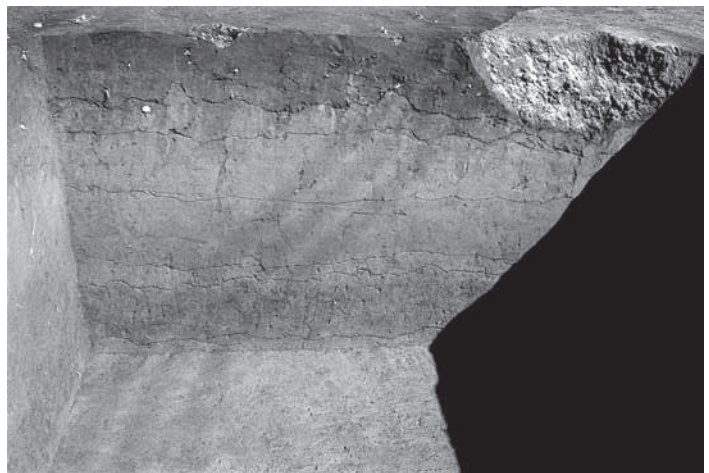
E区 旧石器試掘トレンチ配置状況(南から)



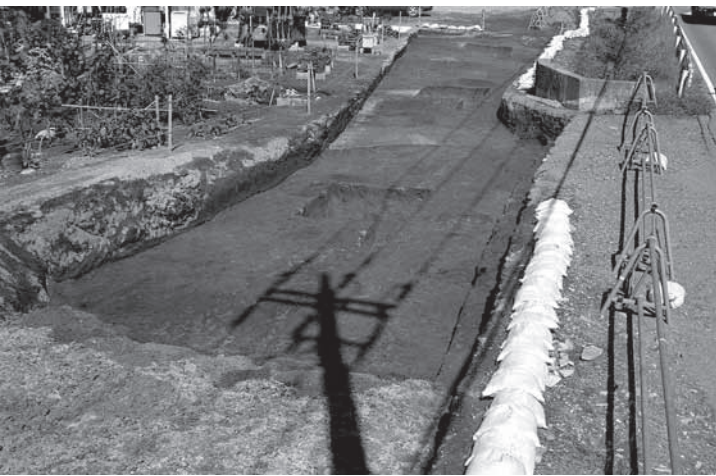
E区 旧石器試掘トレンチ No.5 石器出土状況(南から)



E区 旧石器試掘トレンチ No.6 石器出土状況(南から)



E区 旧石器試掘トレンチ No.6 土層断面(南から)



E区 旧石器試掘トレンチ配置状況(南から)



E区 旧石器試掘トレンチ配置状況(南から)



A区 集石遺構全景(南から)



A区 集石遺構出土遺物(西から)





C区 1号住居土層断面A (西から)



C区 1号住居土層断面C (西から)



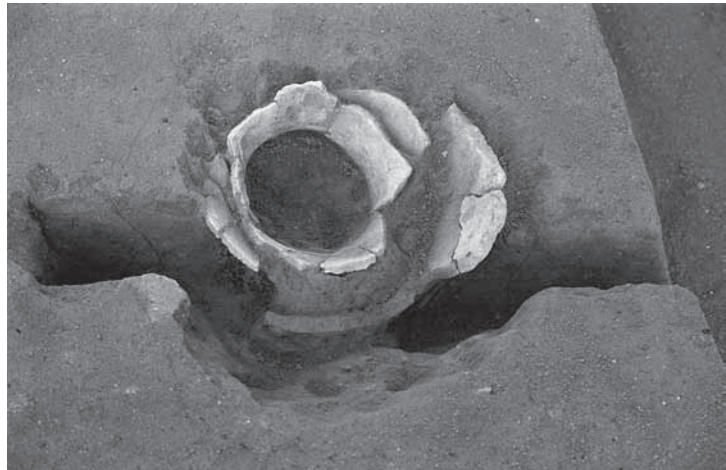
C区 1号住居土層断面 (南から)



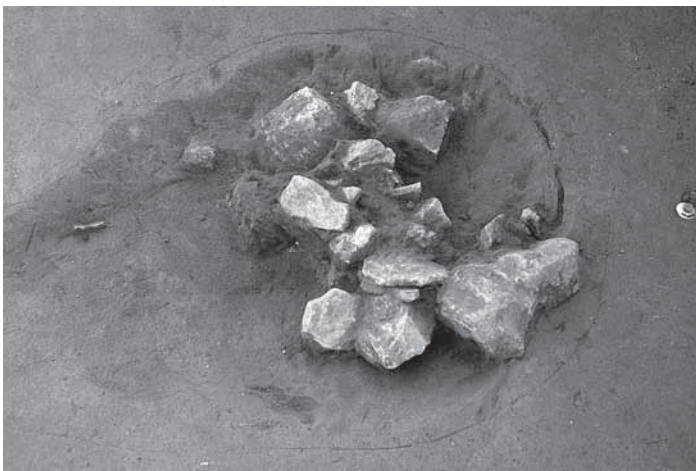
C区 1号住居全景 (西から)



C区 1号住居遺物出土状況 (西から)



C区 1号住居埋甕 (南から)



C区 1号住居炉 (西から)



C区 1号住居炉掘方 (西から)





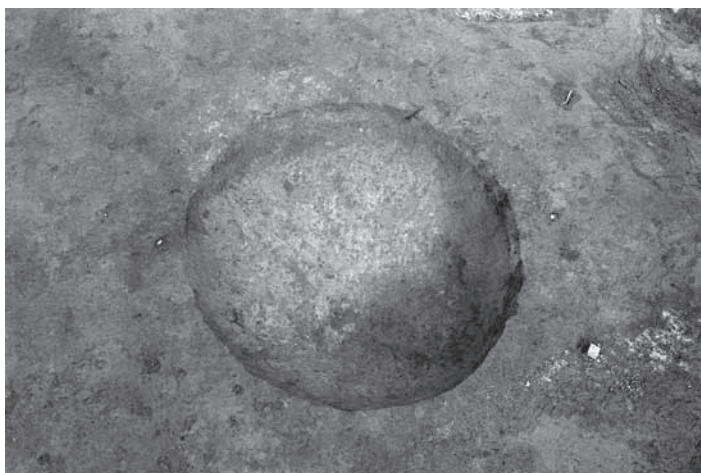
A区 1号土坑土層断面(南から)



A区 1号土坑全景(南から)



B区 1号土坑土層断面(南から)



B区 1号土坑全景(南から)



C区 1号土坑土層断面(南から)



C区 1号土坑全景(南から)



C区 2号土坑土層断面(南から)



C区 2号土坑全景(北から)





C区 3号土坑土層断面(北から)



C区 3号土坑全景(東から)



C区 4号土坑土層断面(南から)



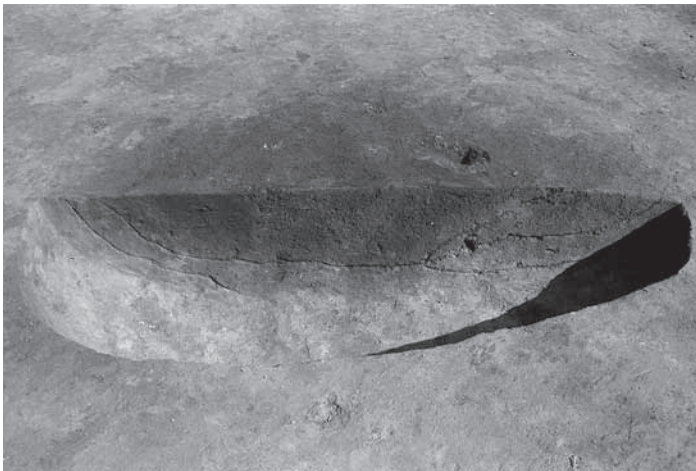
C区 4号土坑全景(東から)



C区 5号土坑土層断面(東から)



C区 5号土坑全景(東から)



D区 1号土坑土層断面(南から)



D区 1号土坑全景(南から)





A区 1号墳主体部全景(南から)



A区 1号墳主体部全景(拡張前,南から)



A区 1号墳主体部全景(拡張前,東から)



A区 1号墳主体部全景(東から)



A区 1号墳前庭状施設(南から)



A区 1号墳前庭状施設下層礫敷き(南から)



A区 1号墳主体部掘方全景(南から)





A区 2号墳周堀土層断面B(南から)



A区 2号墳全景(南から)



A区 2号墳全景(北から)



A区 2号墳周堀土層断面B(南から)



A区 3号墳周堀土層断面C(東から)



A区 3号墳周堀土層断面A(東から)



A区 3号墳周堀土層断面B(北から)

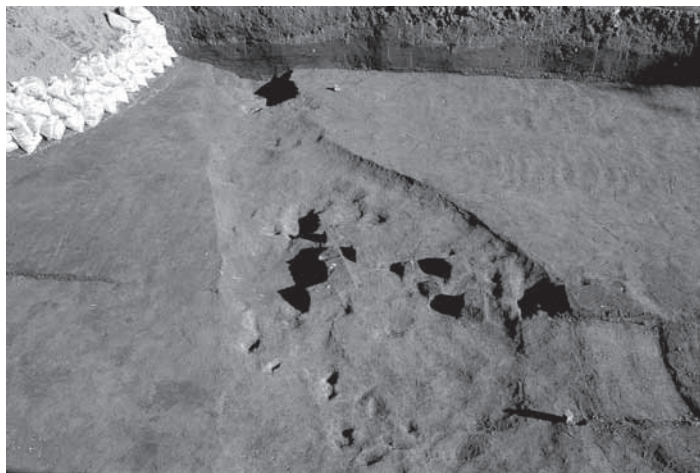


A区 3号墳全景(東から)





A区 4号墳周堀土層断面A (西から)



A区 4号墳周堀全景 (西から)



A区 4号墳周堀全景 (東から)



A区 遠景 (南から)



A区 作業風景 (南から)



A区 遠景 (南から)



A区 遠景 (北から)





B区 1号墳周堀土層断面A (東から)



B区 1号墳周堀土層断面B (西から)



B区 1号墳全景 (南から)



B区 1号墳主体部検出状況 (西から)



B区 1号墳主体部土層断面F (西から)



B区 1号墳主体部全景 (西から)



B区 1号墳主体部掘方全景 (西から)



B区 遠景 (南から)





B区 2号墳周堀土層断面A (東から)



B区 2号墳周堀土層断面B (西から)



B区 2号墳周堀 (北から)



B区 2号墳全景 (北から)



B区 3号墳周堀土層断面C (東から)



B区 3号墳周堀土層断面E (東から)



B区 3号墳周堀遺物出土状況 (西から)

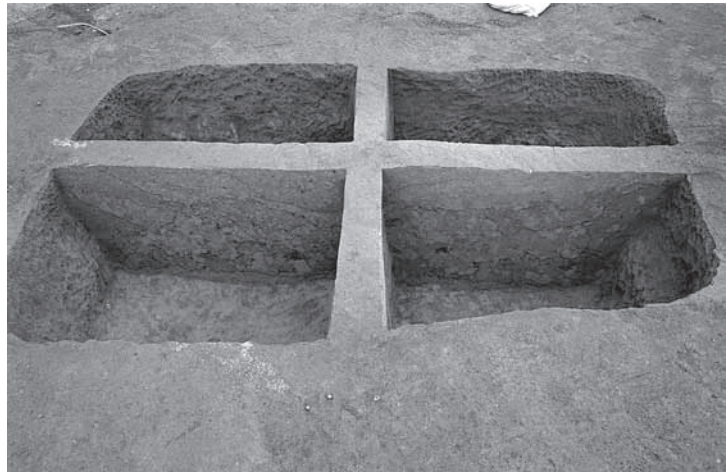


B区 3号墳周堀出土遺物 (西から)





B区 3号墳主体部検出状況(西から)



B区 3号墳主体部土層断面G(北から)



B区 3号墳主体部全景(西から)



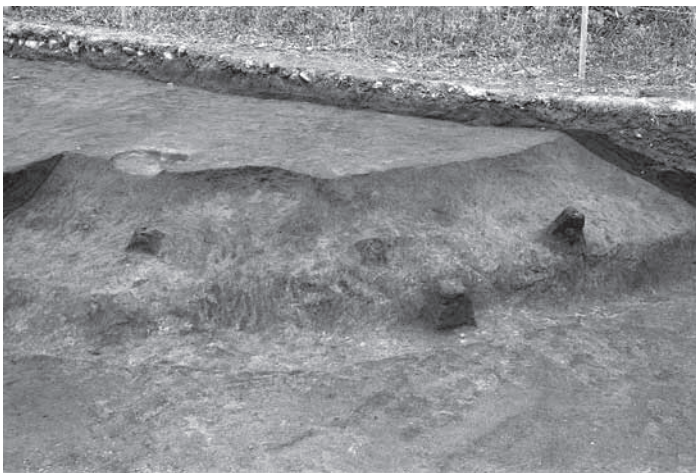
B区 3号墳全景(北から)



B区 4号墳周堀土層断面A(西から)



B区 4号墳周堀(北から)



B区 4号墳周堀(北から)



B区 4号墳全景(北から)





B区 遠景(北から)



B区 遠景(南から)



C区 1号墳周堀土層断面A(東から)



C区 1号墳周堀土層断面C(南から)



C区 1号墳周堀遺物出土状況(西から)



C区 1号墳周堀出土遺物(南から)





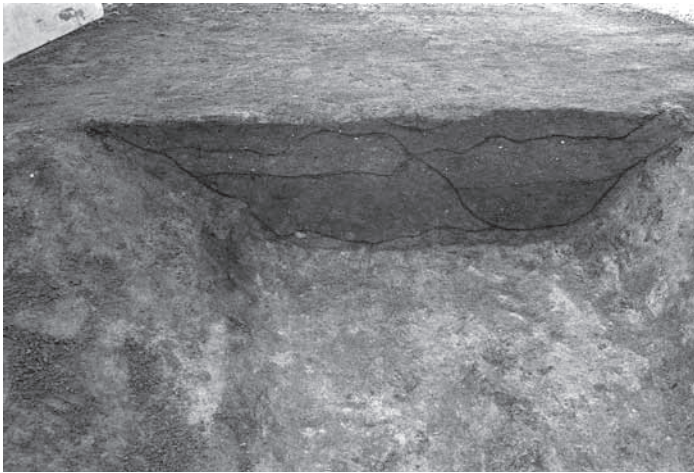
C区 1号墳周堀出土遺物(西から)



C区 1号墳全景(北から)



C区 1号墳全景(北から)



C区 2号墳周堀土層断面A(北から)



C区 2号墳周堀土層断面B(北から)

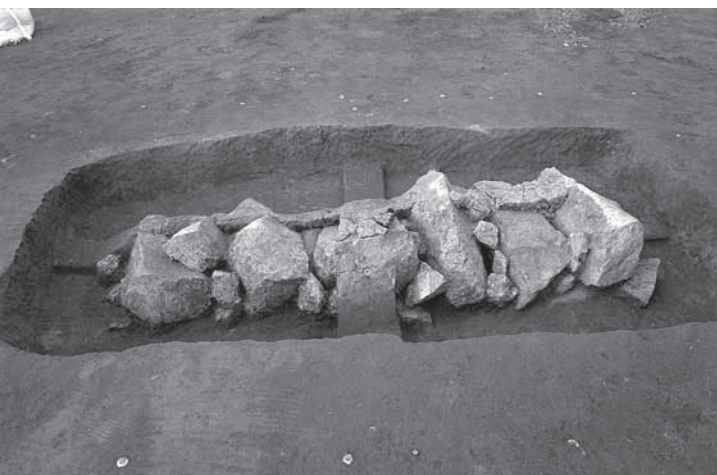


C区 2号墳主体部検出状況(西から)



C区 2号墳主体部天井石検出状況(西から)





C区 2号墳主体部天井石検出状況(南から)



C区 2号墳主体部全景(南から)



C区 2号墳主体部全景(西から)



C区 2号墳主体部全景(南西から)



C区 2号墳主体部「赤玉」出土状況(西から)



C区 2号墳主体部掘方全景(西から)

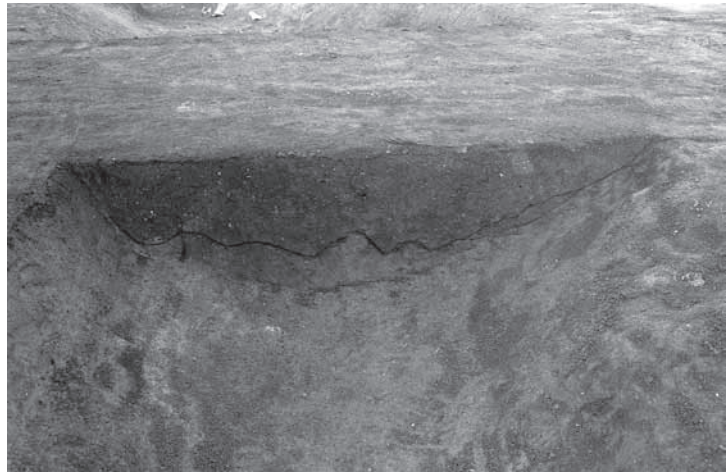


C区 2号墳全景(北から)

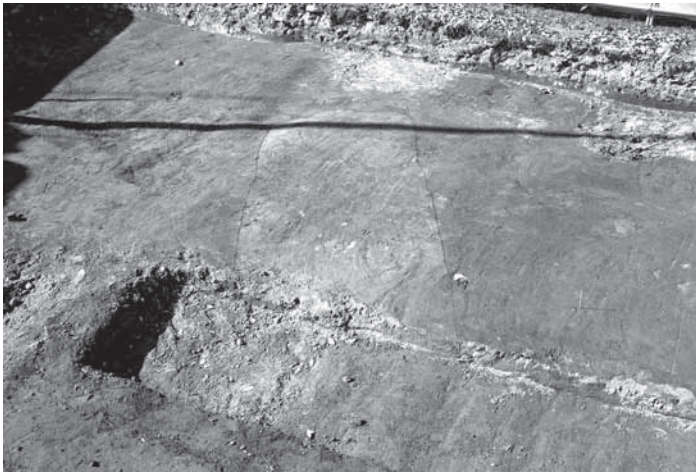




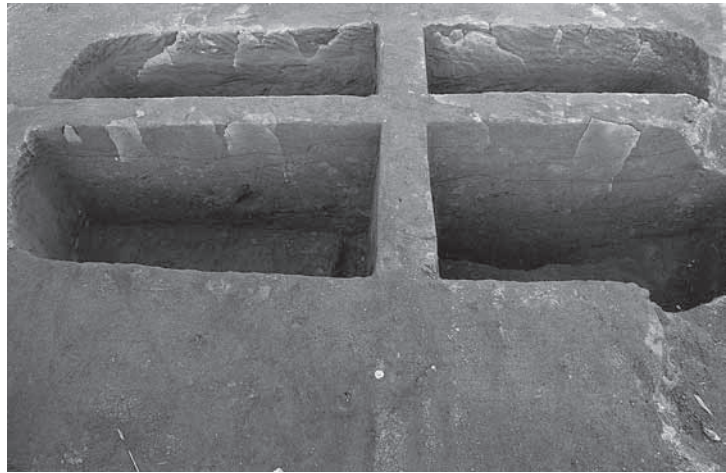
C区 3号墳周堀土層断面A (東から)



C区 3号墳周堀土層断面B (南から)



C区 3号墳主体部検出状況 (東から)



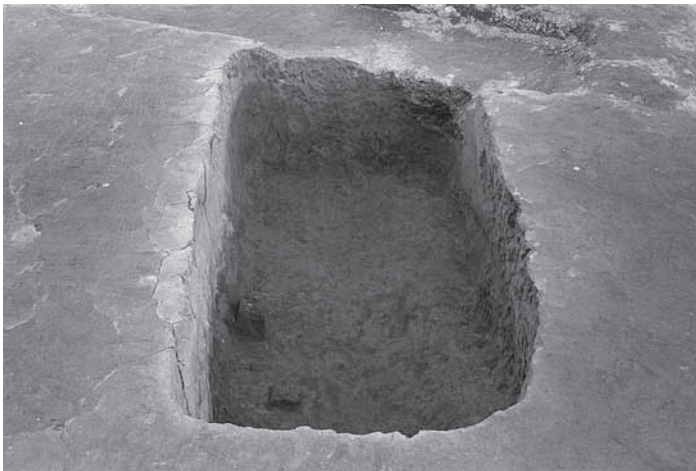
C区 3号墳主体部土層断面E (南から)



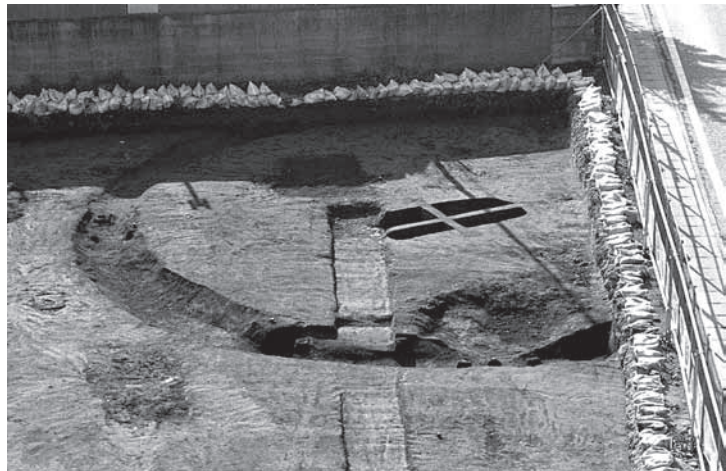
C区 3号墳主体部粘土床検出状況 (西から)



C区 3号墳主体部全景 (西から)



C区 3号墳主体部掘方全景 (西から)



C区 3号墳全景 (北から)





C区 遠景(北から)



C区 4号墳周堀土層断面A(南から)



C区 4号墳周堀土層断面(西から)

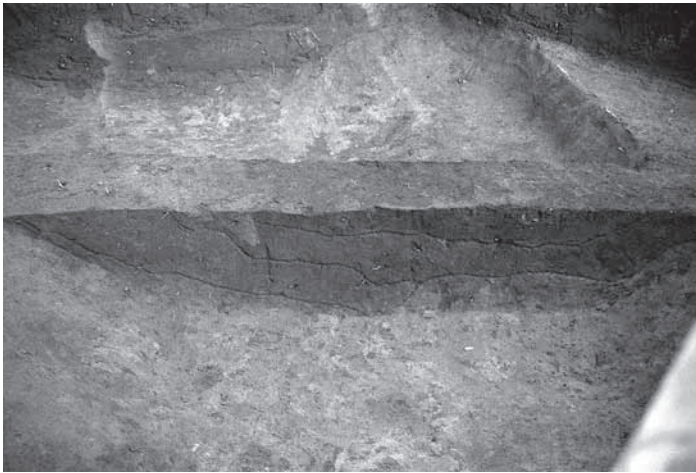


C区 4号墳全景(北西から)



C区 4号墳全景(北から)





D区 1号墳周堀土層断面A (南から)



D区 1号墳全景 (東から)



D区 2号墳土層断面C (東から)



D区 2号墳周堀土層断面B (南から)



D区 2号墳全景 (東から)



D区 2号墳周堀土層断面C (東から)

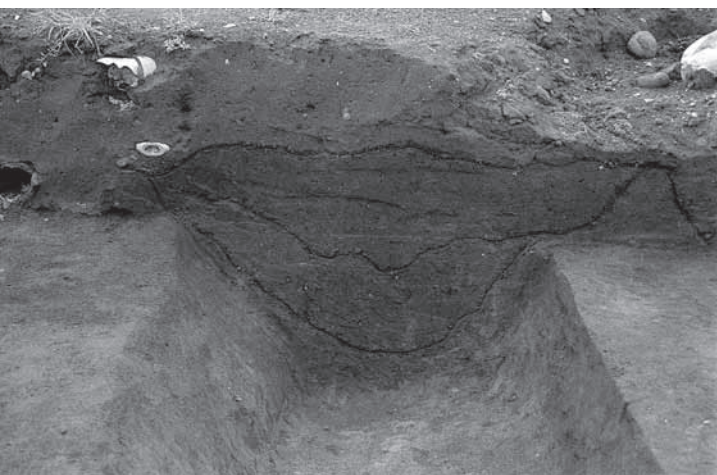


D区 2号墳全景 (南から)



D区 2号墳周堀土層断面C (南から)





E区 1号墳周堀土層断面A (東から)



E区 1号墳主体部全景 (東から)



E区 1号墳主体部 (南から)



E区 1号墳全景 (東から)



E区 2号墳周堀土層断面A (西から)



E区 2号墳全景 (西から)



E区 3号墳周堀土層断面B (東から)

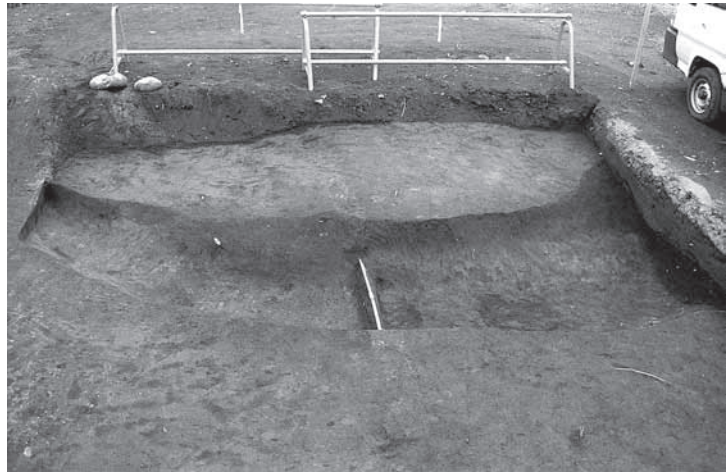


E区 3号墳周堀土層断面A (南から)





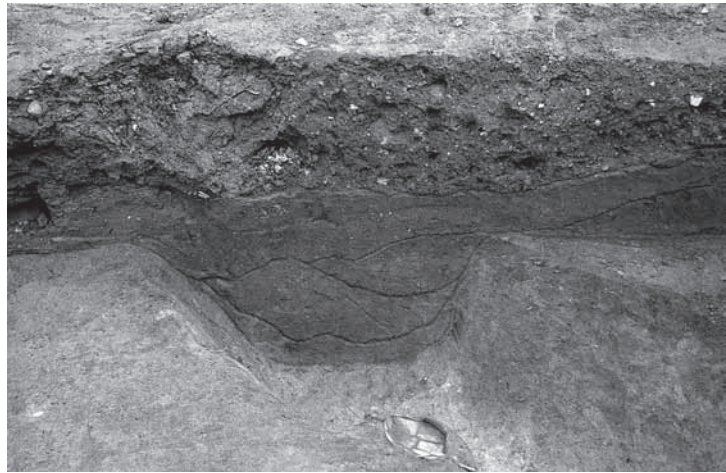
E区 3号墳周堀南辺(南から)



E区 3号墳周堀北辺(北から)



E区 4号墳周堀土層断面A(東から)



E区 4号墳周堀土層断面A(東から)



E区 4号墳周堀遺物出土状況(西から)



E区 4号墳全景(東から)



E区 5号墳周堀土層断面A(西から)



E区 5号墳主体部土層断面B(西から)





E区 5号墳全景(西から)



E区 5号墳全景(西から)



E区 6号墳全景(西から)



E区 遠景(南から)



E区 遠景(北から)



発掘調査中の一ノ関古墳(南から, 伊勢崎市教育委員会)



発掘調査中の一ノ関古墳(北から, 伊勢崎市教育委員会)

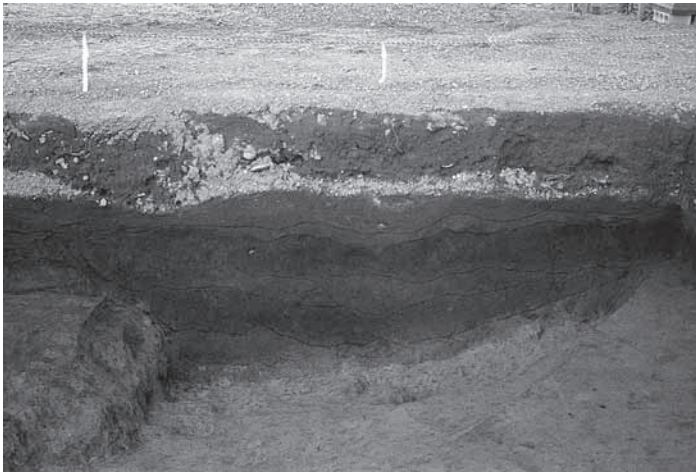




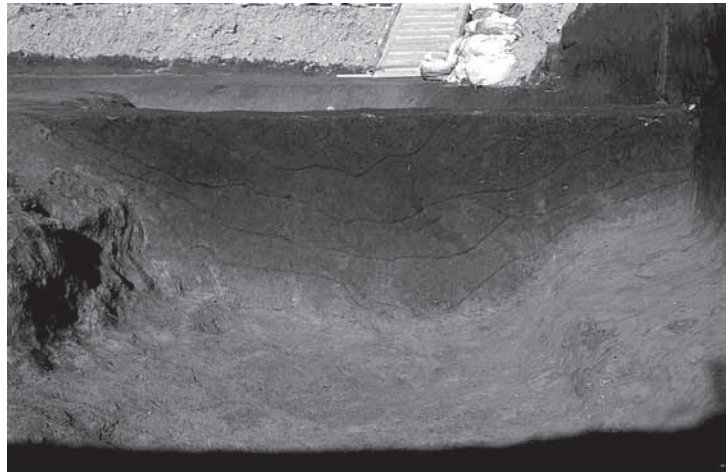
A区 1号方形周溝墓土層帯配置(北から)



A区 1号方形周溝墓溝土層断面B(東から)



A区 1号方形周溝墓溝土層断面A(南から)



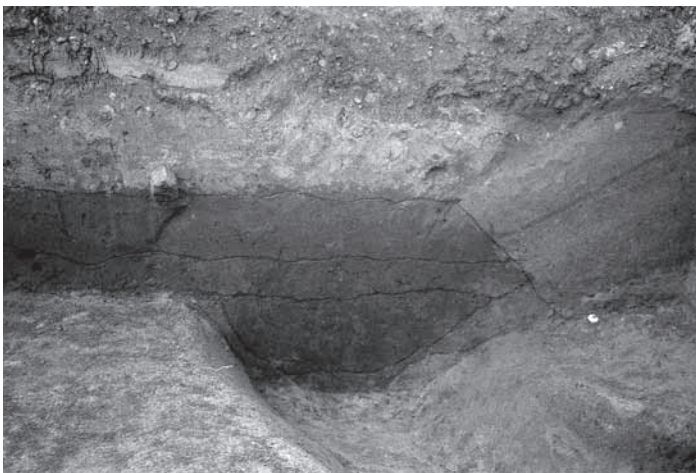
A区 1号方形周溝墓溝土層断面C(南から)



A区 1号方形周溝墓全景(南から)



A区 1号方形周溝墓調査風景(北から)



A区 2号方形周溝墓溝土層断面A(北から)



A区 2号方形周溝墓全景(北から)





D区 1号方形周溝墓溝土層断面A(南から)



D区 1号方形周溝墓全景(西から)



D区 2号方形周溝墓土層帯配置(東から)



D区 2号方形周溝墓溝土層断面A(南から)



D区 2号方形周溝墓溝土層断面B(東から)



D区 2号方形周溝墓遺物出土状況(西から)



D区 2号方形周溝墓遺物出土状況(西から)

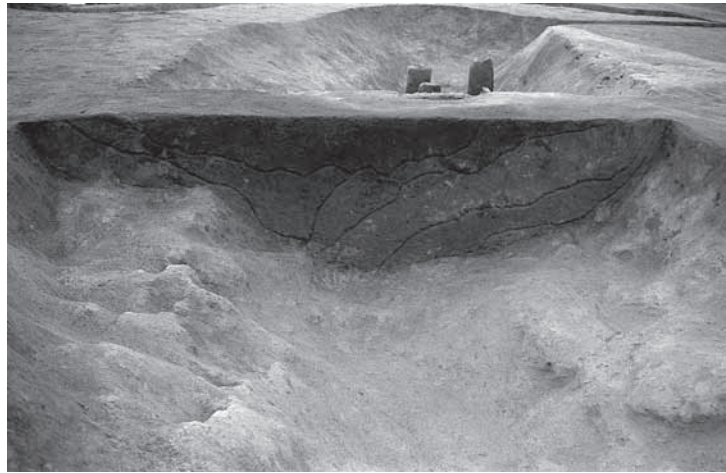


D区 2号方形周溝墓全景(東から)





D区 3号方形周溝墓土層帯配置(東から)



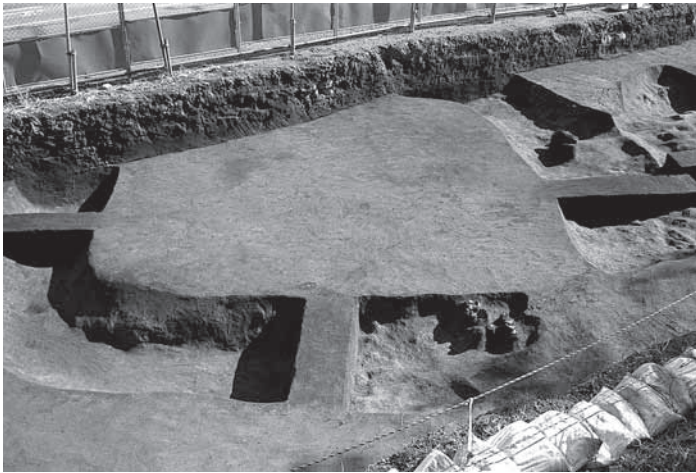
D区 3号方形周溝墓溝土層断面B(北から)



D区 3号方形周溝墓遺物出土状況(南から)



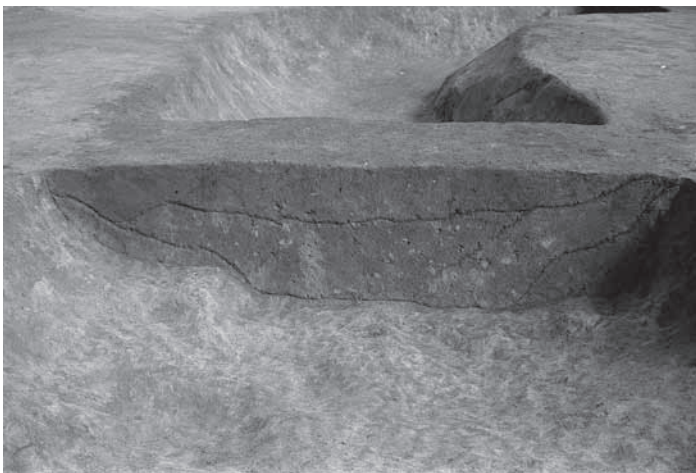
D区 3号方形周溝墓全景(東から)



D区 4号方形周溝墓土層帯配置(西から)



D区 4号方形周溝墓溝土層断面A(東から)



D区 4号方形周溝墓溝土層断面B(南から)



D区 4号方形周溝墓遺物出土状況(南から)





D区 4号方形周溝墓遺物出土状況(南から)



D区 4号方形周溝墓遺物出土状況(西から)



D区 4号方形周溝墓出土遺物(北から)

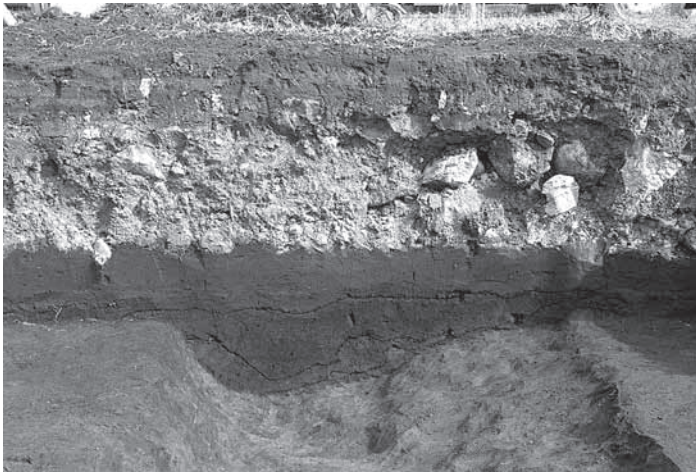


D区 4号方形周溝墓全景(西から)



D区 遠景(北から)





A区 1号溝土層断面A (南から)



A区 1号溝全景 (南から)



A区 1号溝全景 (東から)



A区 2号溝土層断面B (北から)

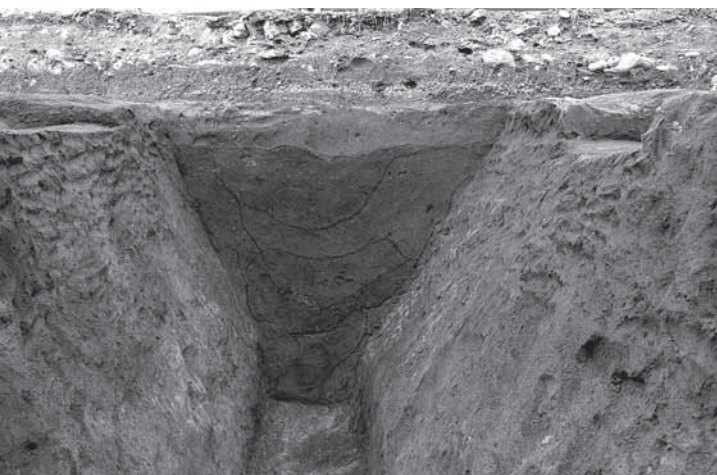


A区 遠景 (南から)



A区 2号溝全景 (南から)





B区 1号溝土層断面C (東から)



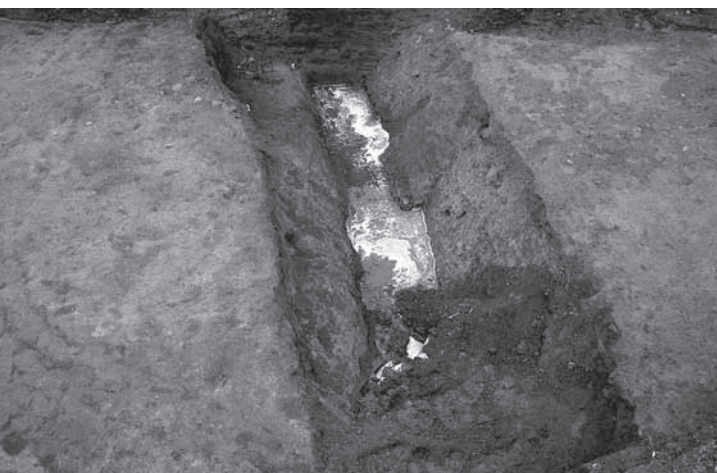
B区 遠景 (南から)



B区 1号溝全景 (西から)



E区 1号溝全景 (南から)

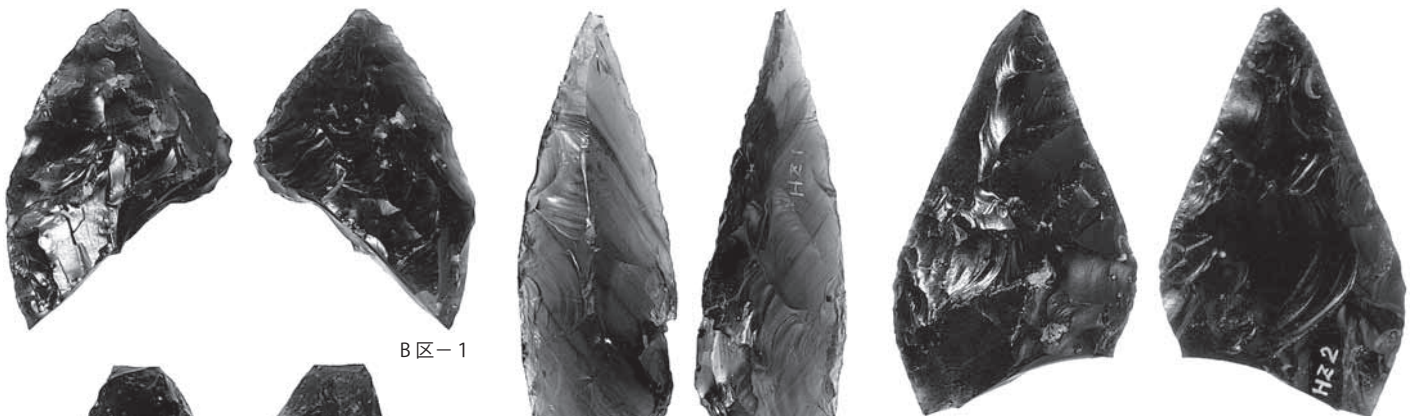


E区 1号溝全景 (東から)



E区 遠景 (北から)





B区-1

C区-3



C区-5

C区-1



C区-6



C区-7



C区-2



C区-8



C区-9



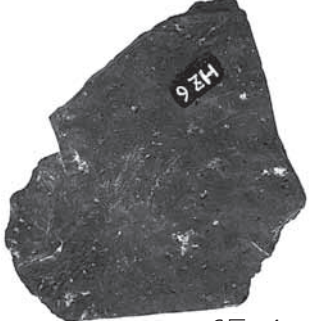
C区-11



C区-10



C区-12



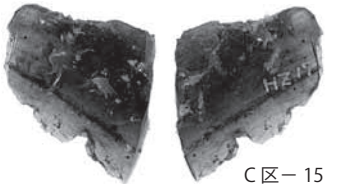
C区-4



C区-13



C区-14



C区-15



E区-1



E区-4



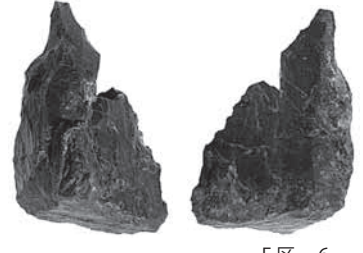
E区-2



E区-3

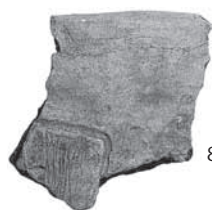
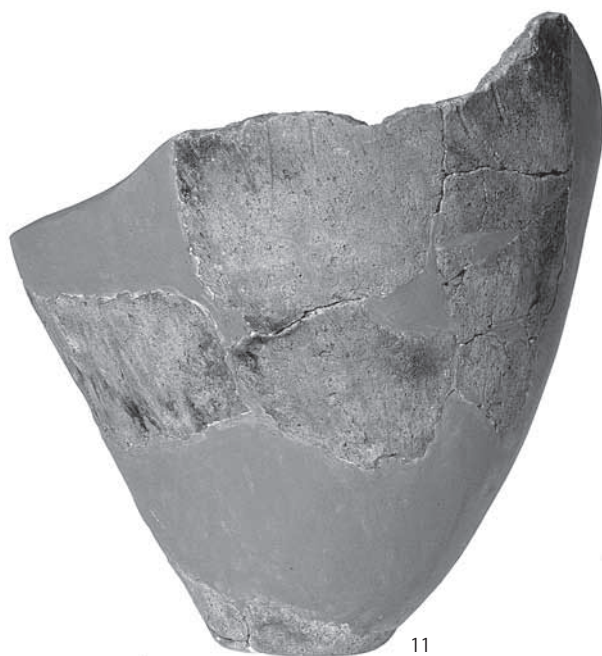
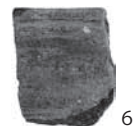
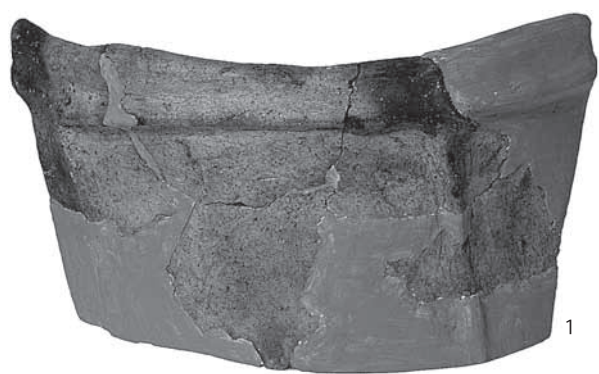


E区-5



E区-6









17

18

19



20

21

22



23

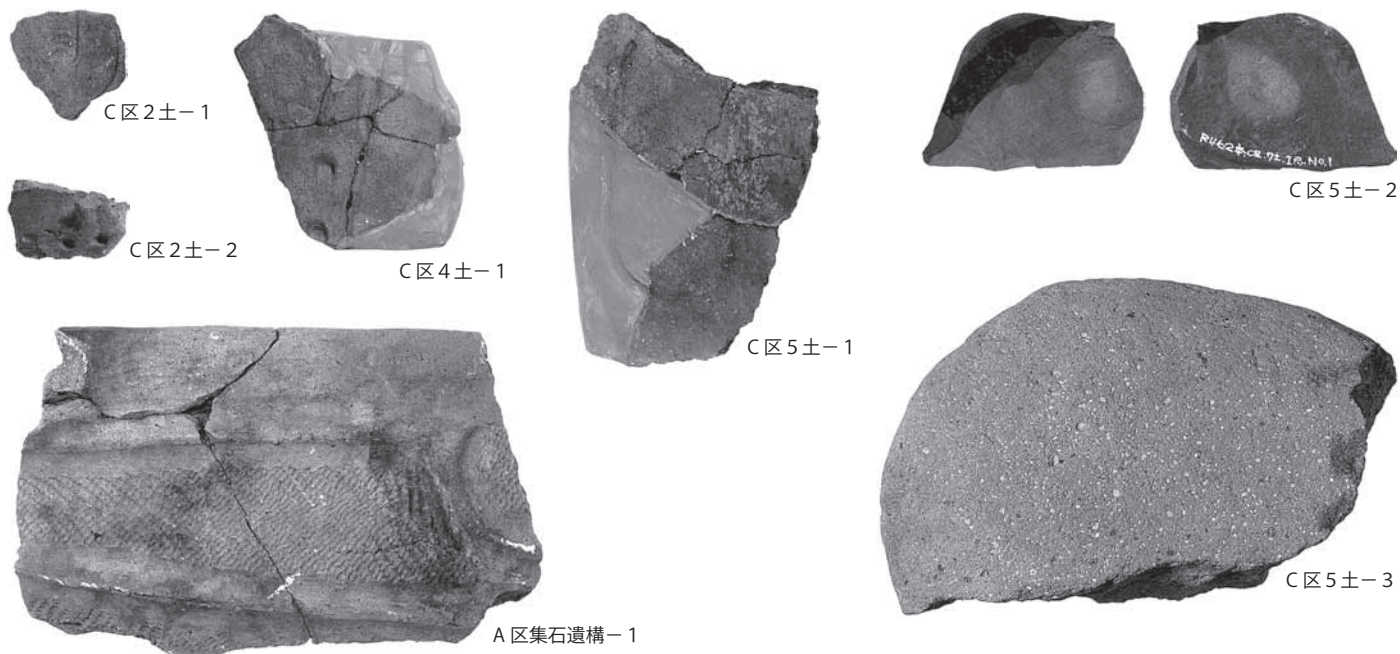
24



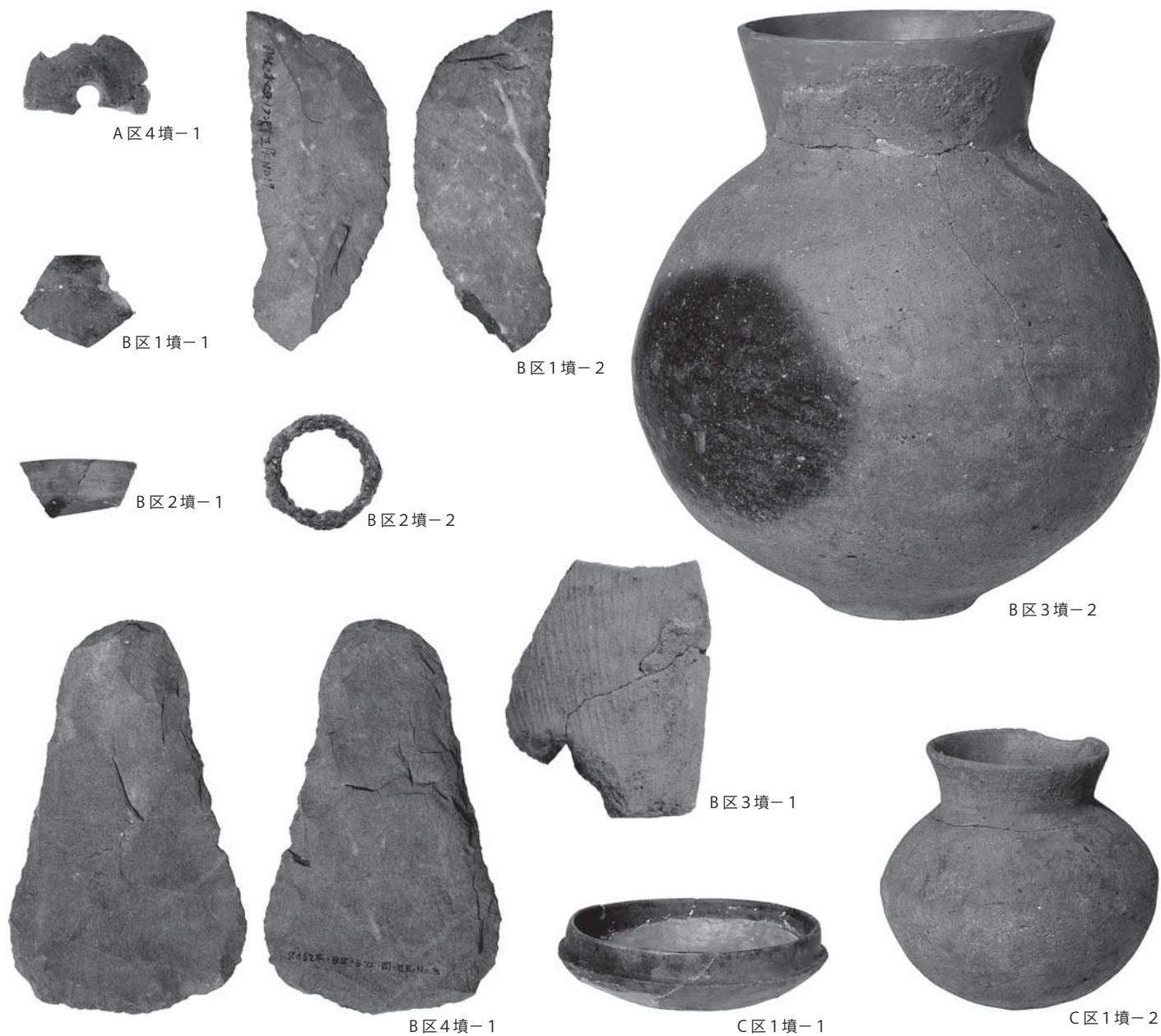
25



PL.32



土坑・集石遺構出土遺物

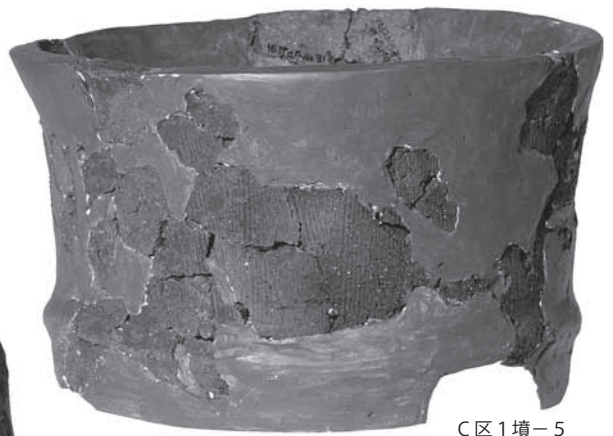


古墳出土遺物 1





C区1墳-3



C区1墳-5



C区1墳-9



C区1墳-6



C区1墳-10



C区1墳-8



C区1墳-7



C区2墳-1~15



C区1墳-4



C区3墳-1



E区3墳-1



E区4墳-1

古墳出土遺物 3



A区1方周-1



A区1方周-2



A区1方周-3



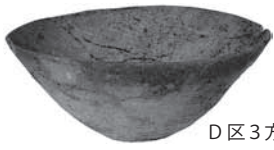
D区2方周-1



D区2方周-2

方形周溝墓出土遺物 1





D区3方周-1



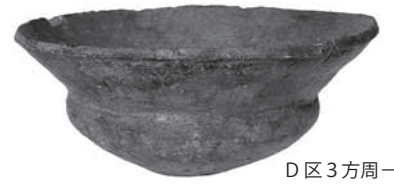
D区3方周-2



D区3方周-5



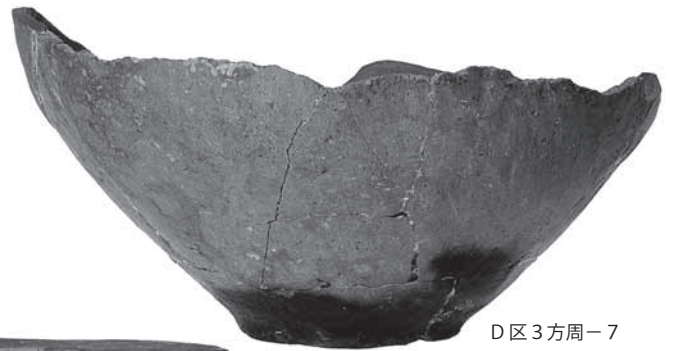
D区3方周-6



D区3方周-3



D区3方周-4



D区3方周-7



D区4方周-1



D区4方周-2



A区2溝-1







11



12



13



14



17



15



18



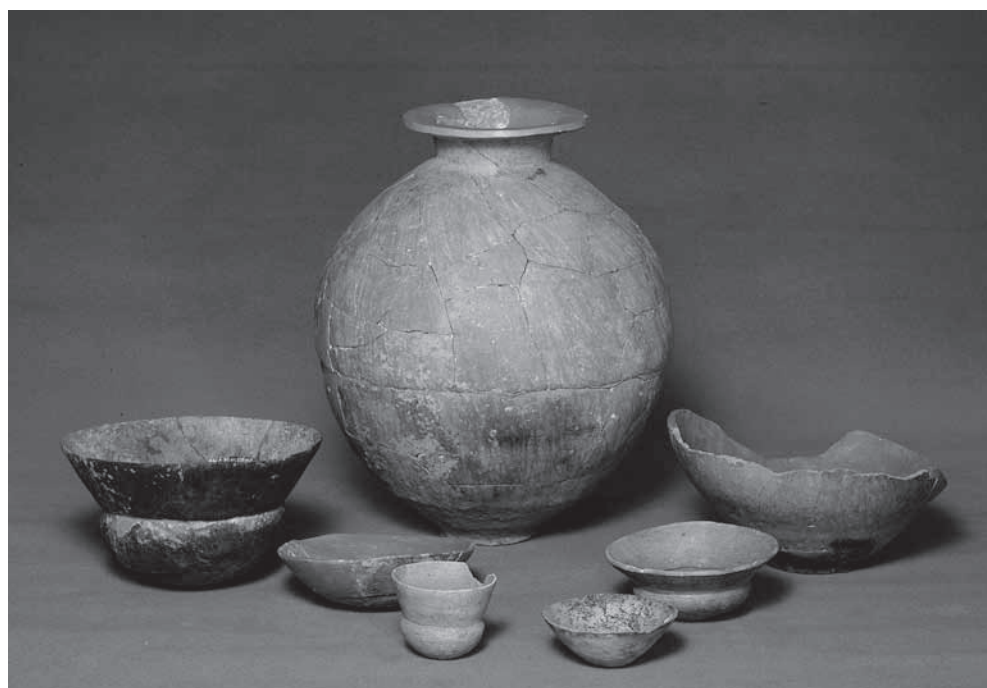
16



19



C区1号墳出土遺物



D区3号方形周溝墓出土遺物



D区4号方形周溝墓出土遺物



## 報 告 書 抄 録

書名ふりがな	ほんせきちょうこふんぐん
書名	本関町古墳群
副書名	国道462号道路改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	1
シリーズ名	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書
シリーズ番号	452
編著者名	坂口 一 右島和夫
編集機関	財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行機関	財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行年月日	2008年12月24日
作成法人ID	21005
郵便番号	377-8555
電話番号	0279-52-2511
住所	群馬県渋川市北橋町下箱田784-2
遺跡名ふりがな	ほんせきちょうこふんぐん
遺跡名	本関町古墳群
所在地ふりがな	ぐんまけんいせさきしほんせきちょう
遺跡所在地	群馬県伊勢崎市本関町
市町村コード	10204
遺跡番号	IS 125
北緯(日本測地系)	36° 21' 02"
東経(日本測地系)	139° 12' 56"
北緯(世界測地系)	36° 21' 13"
東経(世界測地系)	139° 12' 44"
調査期間	2003年11月01日 - 2004年01月31日 / 2004年09月01日 - 2004年11月30日
調査面積	4,850㎡
調査原因	道路建設
種別	集落・墳墓
主な時代	旧石器・縄文・古墳
遺跡概要	旧石器 - 石器22点 / 集落 - 縄文時代 - 竪穴住居1 + 土坑8 + 集石遺構1 / 墳墓 - 古墳時代 - 方形周溝墓6 + 古墳20 / テフラ分析 / 赤玉分析等
特記事項	古墳時代後・終末期の古墳群で、主体部から赤色球状未焼成土製品(赤玉)出土。
要約	大間々扇状地I面における、旧石器・縄文・古墳時代の調査。古墳群全体では竪穴式から横穴式への主体部の変遷が確認でき、その距離的な位置関係と継続年代から、対応する主たる集落を周辺の遺跡群に想定することが可能な古墳群。





財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団発掘調査報告書第 452 集

## 本関町古墳群

国道 462 号道路改築事業に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書

---

---

平成 20 年(2008)12 月 22 日 印刷  
平成 20 年(2008)12 月 24 日 発行

編集・発行／財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団  
〒 377-8555 群馬県渋川市北橋町下箱田 784 番地の 2  
電話(0279)52 - 2511(代表)  
ホームページアドレス <http://www.gunmaibun.org/>

---

---

印刷／杉浦印刷株式会社